

豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第1分冊)

2006



中世大友府内町跡第12次調査区全景

序 文

本書は、大分県教育委員会が国道10号古国府拡幅事業に伴い、国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した中世大友城下町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市には、中世に九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていました。近年の発掘調査により、この大友氏の守護所である大友氏館を中心に、万寿寺をはじめとした寺社や町屋のにぎわいにあふれた府内の町の様子が、次第に明らかになってきました。

本書に収録した第9・12・18・22・28・48次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」で見れば、中世府内にあった40余りの町のひとつである「桜町」の一面にあたり、大友氏館跡とは府内のメインストリートであった第2南北街路を挟んで東側の地点に相当します。

この調査区からは、火災によって焼失した2棟の礎石建物や欄列などの柱穴をはじめ、ゴミ捨て穴と考えられる土坑、街路、井戸など当時の町屋の景観をうかがい知ることができる遺構群や、韓半島から中国・東南アジアにかけて、広くアジア全域からもたらされた陶磁器をはじめ、数多くの遺物が出土しています。また、出土遺物の中には青銅製品の製作や鋳造に関係する遺物とともに、キリスト教の関連遺物と考えられるメダイや大友氏の領国内で使用された分銅なども多数出土していることから、これらの金属製品が今回の調査区の周辺で製作された可能性が考えられるようになりました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、ここから感謝申し上げます。

平成18年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長 渋谷 忠章

例 言

1. 本書は大分県大分市錦町に所在する中世大友府内町跡第9・12・18・22・28・48次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 各調査区の発掘調査期間および調査担当者については、本書第1分冊第1章第1節を参照されたい。
4. 現地での写真撮影・造構の実測は大分県教育庁文化課の職員のほか、発掘支援会社の職員が担当した。
5. 遺物実測・トレスなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する造構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、
SA：柵列および柵列状遺構、ST：墓、SH：竪穴住居跡、SP：柱穴および小穴
SX：その他の造構（不明造構・築石遺構・整地層など）
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前系陶器 乗岡実「中世備前焼（壺）の編年案」、「備前焼鉢鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）乗岡実「近世備前焼鉢鉢の編年案」（『岡山城三之由輪跡—表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査—』岡山市教育委員会 2002年）
中国南部産焼締陶器 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）
京都系土師器および土師質土器
埴地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）
埴地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）
吉備系土師器 山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡—第5次調査—（医学部および同付属病院管理棟新設予定地）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）
瓦 森田克「厘瓦」（『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）
10. 本書の執筆は第1分冊第1章を坂本嘉弘、第2章を坂本・幡上敬一（愛媛県北町教育委員会）・吉田寛・後藤晃一、第3章を後藤、第2分冊第4章を原田昭一、第5章を友岡信彦、第6章を吉田、第3分冊第7章を植島隆二、第8章を原田、第9章を魯繩球・平尾良光（別府大学文化財研究所）、第10章を坂本・後藤が担当した。なお、執筆分担は目次にも明記している。
11. 本書の編集は、調査員で協議して行った。

総目次

第1分冊	第1章	はじめに (坂本嘉弘)	
	第2章	中世大友府内町跡第12次調査区 (坂本嘉弘・幡上敬一・吉田寛・後藤晃一)	
	第3章	中世大友府内町跡第48次調査区 (後藤晃一)	
第2分冊	第4章	中世大友府内町跡第18次西調査区 (原田昭一)	
	第5章	中世大友府内町跡第18次東調査区 (友岡信彦)	
	第6章	中世大友府内町跡第28次調査区 (吉田寛)	
第3分冊	第7章	中世大友府内町跡第22次調査区 (槇島隆二)	
	第8章	中世大友府内町跡第9次調査区 (原田昭一)	
	第9章	自然科学的分析 (魯観玆・平尾良光)	
	第10章	総括 (坂本嘉弘・後藤晃一)	

目次

第1章	はじめに (坂本嘉弘)	
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡の立地と環境	4
第3節	報告書作成にあたって	6
第2章	中世大友府内町跡第12次調査区 (坂本嘉弘・幡上敬一・吉田寛・後藤晃一)	
第1節	調査の概要	11
第2節	遺構と遺物	22
第3節	小結	160
第3章	中世大友府内町跡第48次調査区 (後藤晃一)	
第1節	調査の概要	165
第2節	遺構と遺物	
	Ⅰ 48次-1 調査区の調査	173
	Ⅱ 48次-2 調査区の調査	193
	Ⅲ 48次-3 調査区の調査	196
第3節	小結	198

図版目次

第1章	はじめに		
第1図	中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡 (1/75,000)	第2図	大分平野の地形と主要遺跡 (1/32,500) … 5
	2		
第3図	中世大友城下町跡の調査と大分駅周辺総合整備事業 … 7	第4図	「府内古図」と街路名称の設定 … 10
第5図	第12次調査区的位置 (1/800) … 11		

第2章 中世大友府内町跡第12次調査区

第6図	中世大友府内町跡第12・48次 調査区全体図(1/100)……………	15・16	第7図	第12次調査区東及び西側 土層断面図(1/40)……………	17・18
第8図	第12次調査区南側土層断面 実測図(1/40)……………	19・20	第9図	SX03出土遺物実測図(1/3)……………	22
第10図	SX03青銅製品製造関連遺構実測図(1/30)……………	22	第11図	SB01・SB02・SX01・SX03 遺構配置図(1/80)……………	23・24
第12図	炭化材出土状況実測図(1/40)……………	25	第13図	SB01・SB02の礎石間の間尺(1/100)……………	25
第14図	SB01周辺出土遺物実測図①(1/3)……………	27	第15図	SB01周辺出土遺物実測図②(1/3)……………	28
第16図	SB01周辺出土遺物実測図③(1/3)……………	29	第17図	SB01周辺出土遺物実測図④(1/3)……………	30
第18図	SB01周辺出土遺物実測図⑤(1/3)……………	31	第19図	SB01周辺出土遺物実測図⑥(1/3)……………	32
第20図	SB02周辺出土遺物実測図①(1/3)……………	34	第21図	SB02周辺出土遺物実測図②(1/3)……………	35
第22図	SB02周辺出土遺物実測図③(1/3)……………	36	第23図	SB02周辺出土遺物実測図④(1/3)……………	37
第24図	SB02周辺出土遺物実測図⑤(1/3)……………	38	第25図	SB02周辺出土遺物実測図⑥ (1~4は1/3、5は1/1)……………	38
第26図	SB01周辺出土遺物実測図⑦(1/1)……………	39	第27図	焼土層出土遺物実測図①(1/3)……………	40
第28図	焼土層出土遺物実測図②(1/3)……………	41	第29図	焼土層出土遺物実測図③(1/3)……………	42
第30図	焼土層出土遺物実測図④(1/3)……………	43	第31図	焼土層出土遺物実測図⑤(1/3)……………	44
第32図	焼土層出土遺物実測図⑥(1/3)……………	45	第33図	焼土層出土遺物実測図⑦(1/3)……………	46
第34図	焼土層出土遺物実測図⑧(1/3)……………	47	第35図	焼土層出土遺物実測図⑨(1/3)……………	48
第36図	焼土層出土遺物実測図⑩(1/3)……………	49	第37図	焼土層出土遺物実測図⑪(1/3)……………	51
第38図	焼土層出土遺物実測図⑫(1/3)……………	51	第39図	焼土層出土遺物実測図⑬(1/1)……………	52
第40図	焼土層出土遺物実測図⑭(1/1)……………	53	第41図	SX01実測図(1/40)……………	54
第42図	SX01出土遺物実測図①(1/3)……………	57	第43図	SX01出土遺物実測図②(1/3)……………	58
第44図	SX01出土遺物実測図③(1/3)……………	59	第45図	SX01出土遺物実測図④(1/3)……………	60
第46図	SX01出土遺物実測図⑤(1/3)……………	61	第47図	SX01出土遺物実測図⑥(1/3)……………	62
第48図	SX01出土遺物実測図⑦(1/3)……………	63	第49図	SX01出土遺物実測図⑧(1/6)……………	64
第50図	SX01出土遺物実測図⑨(1/3)……………	65	第51図	SX01出土遺物実測図⑩(1/3)……………	66
第52図	SX01出土遺物実測図⑪(1/3)……………	67	第53図	SX01出土遺物実測図⑫ (112は1/4、113は1/3)……………	68
第54図	SX01出土遺物実測図⑬(1/3)……………	69	第55図	SX01出土遺物実測図⑭(1/3)……………	70
第56図	SX01出土遺物実測図⑮(1・2・5~9は1/3、 3は1/1、4は1/2)……………	71	第57図	SX01出土遺物実測図⑯(1/1)……………	71
第58図	SE01実測図(1/40)……………	72	第59図	SE01出土遺物実測図①(1/3)……………	73
第60図	SE01出土遺物実測図②(1/1)……………	73	第61図	SE03実測図(1/40)……………	74
第62図	SE03出土遺物実測図(1/3)……………	74	第63図	街路及び銅溝・緑石状石組 位置図(1/200)……………	75
第64図	第2南北街路出土遺物実測図① (街路面2① 1/3)……………	77	第65図	第2南北街路出土遺物実測図② (街路面2② 1/3)……………	78
第66図	第2南北街路出土遺物実測図③ (街路面2③ 1/3)……………	79	第67図	第2南北街路出土遺物実測図④ (街路面2④ 1/1)……………	79
第68図	第2南北街路出土遺物実測図⑤ (1~6は1/3、7~9は1/1)……………	80	第69図	名々小路出土遺物実測図(1/3)……………	81

第70図	SD01緑石状石組 2 実測図 (1/40) ……………	82	第71図	SD01緑石状石組 1 実測図 (1/40) ……………	82
第72図	SD02緑石状石組 2 実測図 (1/40) ……………	83	第73図	SD02緑石状石組 3 実測図 (1/40) ……………	83
第74図	SD03緑石状石組実測図 (1/40) ……………	83	第75図	SD06緑石状石組実測図 (1/40) ……………	84
第76図	SD14緑石状石組実測図 (1/40) ……………	86	第77図	SD01出土遺物実測図① (1/3) ……………	87
第78図	SD01出土遺物実測図② (1/3) ……………	88	第79図	SD02出土遺物実測図① (1/3) ……………	89
第80図	SD02出土遺物実測図② (1/3) ……………	90	第81図	SD02出土遺物実測図③ (1/1) ……………	91
第82図	SD03出土遺物実測図① (1/3) ……………	93	第83図	SD03出土遺物実測図② (1~8は1/3, 9は1/2, 10~13は1/1) ……………	93
第84図	SD04・SD06 出土遺物実測図① (1/3) (1はSD04, 2~5はSD06) ……………	94	第85図	SD07出土遺物実測図 (1は1/3, 2は1/1) ……………	94
第86図	SD09出土遺物実測図 (1/3) ……………	95	第87図	SD10・SD14出土遺物実測図 (1/3) (1はSD01, 2はSD14) ……………	95
第88図	木戸遺構と付帯施設 (1/50) ……………	96	第89図	木戸遺構出土遺物実測図 (1/3) ……………	97
第90図	SD08実測図 (1/40) ……………	98	第91図	SD08出土遺物実測図① (1/3) ……………	99
第92図	SD08出土遺物実測図② ……………	100	第93図	SD08出土遺物実測図③ (46~48は1/3, 49は1/1) ……………	101
第94図	SB03実測図 (1/60) ……………	103	第95図	SB04実測図 (1/60) ……………	103
第96図	SP33・38・39・50・58・59・62 実測図 (1/20) ……………	107	第97図	SP121・122・155・157・161・166・170・178 実測図 (1/20) ……………	108
第98図	SP182・186・187・251・203・222・223・224・ 225実測図 (1/20) ……………	109	第99図	SP231・241・276・275・298・302・315・333・ 334・393実測図 (1/20) ……………	110
第100図	ビット出土遺物実測図① (1/3) ……………	111	第101図	ビット出土遺物実測図② (1/3) ……………	112
第102図	ビット出土遺物実測図③ (1/3) ……………	113	第103図	ビット出土遺物実測図④ (1/3) ……………	114
第104図	ビット出土遺物実測図⑤ (1/3) ……………	115	第105図	ビット出土遺物実測図⑥ (1~27は1/3, 28・29は1/1) ……………	116
第106図	SK01実測図 (1/20) ……………	118	第107図	SK01出土遺物実測図 (1/3) ……………	118
第108図	SK02実測図 (1/20) ……………	119	第109図	SK02出土遺物実測図 (1~4は1/3, 5は1/1) ……………	119
第110図	SK03実測図 (1/20) ……………	120	第111図	SK03出土遺物実測図 (1/3) ……………	120
第112図	SK04実測図 (1/20) ……………	121	第113図	SK04出土遺物実測図 (1~4は1/3, 5は1/1) ……………	121
第114図	SK05出土遺物実測図 (1/3) ……………	122	第115図	SK07実測図 (1/20) ……………	122
第116図	SK09実測図 (1/20) ……………	122	第117図	SK12実測図 (1/20) ……………	123
第118図	SK13実測図 (1/20) ……………	123	第119図	SK13出土遺物実測図 (1/3) ……………	124
第120図	SK14実測図 (1/20) ……………	124	第121図	SK15実測図 (1/20) ……………	125
第122図	SK15出土遺物実測図 (1/3) ……………	125	第123図	SK16実測図 (1/20) ……………	126
第124図	SK16出土遺物実測図① (1/3) ……………	127	第125図	SK16出土遺物実測図② (1/1) ……………	127
第126図	SX02調査状況 ……………	128	第127図	SX02出土遺物実測図① (1/3) ……………	129
第128図	SX02出土遺物実測図② (1/3) ……………	130	第129図	SX02出土遺物実測図③ (1/3) ……………	131
第130図	SX02出土遺物実測図④ (1/3) ……………	132	第131図	SX02出土遺物実測図⑤ (1/3) ……………	133
第132図	SX02出土遺物実測図⑥ (1/3) ……………	134	第133図	SX02出土遺物実測図⑦ (1/3) ……………	135
第134図	SX02出土遺物実測図⑧ (1/3) ……………	136	第135図	SX02出土遺物実測図⑧ (1/3) ……………	137

第136図	SX02出土遺物実測図⑩(1/3) ……………	138	第137図	SX02出土遺物実測図⑩(1/3)……………	139
第138図	包含層・整地層出土遺物実測図① (土師質土器混りの整地層 1/3) ……	141	第139図	包含層・整地層出土遺物実測図② (土師質土器混りの整地層 2/3) ……	142
第140図	包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3) ……………	143	第141図	包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/3) ……………	144
第142図	包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3) ……………	145	第143図	包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3)……………	147
第144図	包含層・整地層出土遺物実測図⑦ (1/3) ……………	148	第145図	包含層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)……………	149
第146図	包含層・整地層出土遺物実測図⑨ (1/3) ……………	150	第147図	包含層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/3)……………	151
第148図	包含層・整地層出土遺物実測図⑪ (1/3) ……………	151	第149図	包含層・整地層出土遺物実測図⑫ (1/3)……………	152
第150図	包含層・整地層出土遺物実測図⑬ (1～7・9～11は1/3、8は1/1) ……	153	第151図	包含層・整地層出土遺物実測図⑭ (1/1)……………	154
第152図	包含層・整地層出土遺物実測図⑮ (1/1) ……………	155	第153図	包含層・整地層出土遺物実測図⑯ (1/1)……………	156
第154図	包含層・整地層出土遺物実測図⑰ (1～41は1/1、42・43は1/3、44～52は1/2) ……	157	第155図	包含層・整地層出土遺物実測図⑳ (1/1)……………	158
第156図	包含層・整地層出土遺物実測図⑱ (1/1) ……………	159	第157図	第12次調査区遺構変遷図① (1/250) ……………	162
第158図	第12次調査区遺構変遷図遺構変遷図② (1/250) ……………	163			
第3章	中世大友府内町跡第48次調査区				
第159図	第48次調査区的位置(1/800) ……………	165	第160図	第48次-1調査区遺構分布図 (1/100) ……………	167・168
第161図	第48次-1調査区土層模式図……………	167・168	第162図	第48次-1調査区遺構変遷図 (1/100) ……………	169・170
第163図	第48次-1調査区土層断面図 (1/40) ……………	171・172	第164図	SF001出土遺物実測図①(1/3)……………	174
第165図	SF001出土遺物実測図②(1/3) ……………	175	第166図	SF001出土遺物実測図③(1/3)……………	176
第167図	SF001出土遺物実測図④(1/1) ……………	177	第168図	SF011出土遺物実測図①(1/3)……………	177
第169図	SF011出土遺物実測図②(1/3) ……………	178	第170図	SF017出土遺物実測図(1/3)……………	179
第171図	SF016出土遺物実測図(1/3) ……………	180	第172図	大友氏館跡北側焼土層内出土遺物実測図 (1/3)……………	181
第173図	SF005出土遺物実測図 (1・2は1/3、3は1/1) ……………	181	第174図	SF010出土遺物実測図 (1は1/1、2～6は1/3) ……………	182
第175図	SF020出土遺物実測図(1/3) ……………	182	第176図	SF019出土遺物実測図 (1は1/1、2～4は3/1) ……………	183
第177図	SF021出土遺物実測図(1/3) ……………	184	第178図	SF023出土遺物実測図 (1は1/1、2～5は1/3) ……………	184
第179図	SD002・SD003・SD006・SD007 実測図(1/30)……………	186	第180図	SD002・SD003・SD006・SD007 出土遺物実測図(1/3)……………	187

第181図	SP005出土遺物実測図(1/1)……………	188	第182図	SK008実測図(1/30)……………	188
第183図	SK008出土遺物実測図(1/3)……………	189	第184図	SE032実測図(1/40)……………	190
第185図	SE032土層断面図(1/40)……………	190	第186図	SE032出土遺物実測図①(1/3)……………	191
第187図	SE032出土遺物実測図②(1/3)……………	192	第188図	第48次-2調査区遺構分布図・土層断面図(1/40)……………	193
第189図	第48次-2調査区出土遺物実測図①(1/1)……………	194	第190図	第48次-2調査区出土遺物実測図②(1/3)……………	195
第191図	第48次-3調査区遺構分布図(1/50)……………	196	第192図	第48次-3調査区(北)土層断面図(1/80)……………	196
第193図	第48次-3調査区(南)土層断面図(1/80)……………	197	第194図	第48次-3調査区出土遺物実測図(1~5は1/3、6・7は1/1)……………	197

表 目 次

第1表	中世大友府内町跡発掘調査一覧表①……………	8	第2表	中世大友府内町跡発掘調査一覧表②……………	9
第3表	第12次調査区遺構一覧表①……………	12	第4表	第12次調査区遺構一覧表②……………	13
第5表	第48次-1調査区遺構一覧表……………	166	第6表	第48次-2調査区遺構一覧表……………	166
第7表	第48次-3調査区遺構一覧表……………	166			

遺物観察表目次

遺物観察表1	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)……………	201	遺物観察表2	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)……………	202
遺物観察表3	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)……………	203	遺物観察表4	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)……………	204
遺物観察表5	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)……………	205	遺物観察表6	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑥)……………	206
遺物観察表7	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑦)……………	207	遺物観察表8	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑧)……………	208
遺物観察表9	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑨)……………	209	遺物観察表10	第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑩)……………	210
遺物観察表11	第12次調査区遺物観察表(土製品①)……………	211	遺物観察表12	第12次調査区遺物観察表(土製品②)……………	212
遺物観察表13	第12次調査区遺物観察表(土製品③)……………	213	遺物観察表14	第12次調査区遺物観察表(土製品④)……………	214
遺物観察表15	第12次調査区遺物観察表(瓦)……………	215	遺物観察表16	第12次調査区遺物観察表(石製品)……………	216
	第12次調査区遺物観察表(木製品・骨製品)……………	215		第12次調査区遺物観察表(金属製品)……………	216
遺物観察表17	第12次調査区遺物観察表(ガラス製品)……………	217	遺物観察表18	第12次調査区遺物観察表(銅銭②)……………	218
	第12次調査区遺物観察表(銅銭①)……………	217			

遺物観察表19	第48次-1調査区遺物観察表 (土器・陶磁器) …………… 219
	第48次-1調査区遺物観察表 (土製品・金属製品・ガラス製品) …… 219

遺物観察表20	第48次-1調査区遺物観察表 (瓦) …………… 220
	第48次-1調査区遺物観察表 (銅銭) …………… 220
	第48次-2調査区遺物観察表 (土器・陶磁器) …………… 220
	第48次-2調査区遺物観察表 (土製品・金属製品・ガラス製品) …… 220
	第48次-3調査区遺物観察表 (銅銭) …………… 220
	第48次-3調査区遺物観察表 (土器・陶磁器) …………… 220
	第48次-3調査区遺物観察表 (土製品・金属製品・ガラス製品) …… 220

写真図版目次

巻頭図版 中世大友府内町跡第12次調査区全景

写真図版1	中世大友府内町跡第12次・18次西 調査区全景……………223
写真図版3	SD01 緑石状石組(礎石建物入口?)…225
	SX03 青銅製品鋳造関連遺構①……………225
	SX03 青銅製品鋳造関連遺構②……………225
写真図版5	SD05・SD15 (木戸付常施設) ……………227
	SE08 (井戸) と SD08 …………… 227
	SK16 …………… 227
写真図版7	包含層・層整地層出土遺物…………… 229
写真図版9	第48次-1調査区……………231
写真図版11	SF001出土遺物……………233
	SF011出土遺物……………233
	SF017出土遺物……………233
写真図版13	SK008出土遺物……………235
	SE032出土遺物……………235

写真図版2	第12次調査区全景(東から)……………224
	SB01 近景……………224
	SX01 近景……………224
写真図版4	第2南北街路中央上の1対のピットは木戸)…226
	SD14 緑石状石組……………226
	SX02 検出状況……………226
写真図版6	SB02周辺出土遺物……………228
	SD03出土遺物……………228
	SX01出土遺物……………228
	SP155・SP152出土遺物……………228
	SK015出土遺物……………228
	焼土層出土遺物……………228
	包含層・層整地層出土遺物……………228
写真図版8	メダイ様金属製品……………230
写真図版10	第48次-1調査区……………232
	第48次-2調査区……………232
	第48次-3調査区……………232
写真図版12	大友氏館跡北側焼土層内出土遺物 ……234
	SF005出土遺物……………234
	SF010出土遺物……………234
	SF020・SF019・SF021・SF023 出土遺物……………234
	SD002・SD003・SD006・SD007 出土遺物……………234
写真図版14	第48次-2調査区出土遺物……………236
	第48次-3調査区出土遺物……………236

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省ではこれに併せ、道路幅を拡幅し、頭徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

キリシタン
南蛮貿易

一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが古絵図から知られていた。この古絵図には、大友氏館・萬寿寺など当時の主要な建物の位置や街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友氏館や萬寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知道跡となった。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友氏館跡の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この道跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。また、前年度から「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う調査も開始されており、同じ道跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、道跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査回数を重ねることとした。

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡第9次調査」が、開始された。そして、平成13年度から「府内町跡第11次調査」・「府内町跡第12次調査」・「府内町跡第13次調査」・「府内町跡第18次調査」が加わり、平成14年度には「府内町跡第20次調査」・「府内町跡第21次調査」・「府内町跡第22次調査」を実施しており、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁理蔵文化財センターが調査を担当し、平成17年度現在もこの事業に伴う発掘調査を継続している。

3 調査の体制

「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の西側に隣接して「大友氏館跡」が想定されており、この道跡に対して平成11年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要道跡に近接して実施されることとなり、土木事業と道跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、平成12年度は、大分駅付近連続立体交差事業の一部として開催した。平成13年度以降は本格的に開始された、国土交通省の国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

本書に報告する平成13・14・15・16年度に発掘調査した府内町跡第9・12・18・22・28・48次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

平成13年度

調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
文化課長	工藤正徳
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
受託事業担当主幹	栗田勝弘
主 査	山本恭弘（府内町跡第11次調査担当）



1. 中世大友城下町跡 2. 沖ノ浜（推定） 3. 高崎山城跡 4. 大友上原館 5. 金谷迫城跡 6. 賀来氏館跡
7. 尼ヶ城跡 8. 雄城城跡 9. 石明道跡 10. 町口道跡 11. 岩屋寺道跡 12. 東大道道跡 13. 守岡城跡
14. 津守道跡 15. 片島道跡 16. 下部道跡 17. 横尾道跡群 18. 猪野中原道跡 19. 猪野新土井道跡 20. 千歳城跡

第1図 中世大友城下町跡と周辺の戦国時代道跡（1/75,000）

主 査	原田昭一（府内町第9次・18次西調査担当 本書掲載）
主 任	松本康弘（府内町跡第13次調査担当 平成16年度報告）
主 事	恒賀健太郎（府内町跡第12次調査担当 本書掲載）
囑 託	幡上敬一
囑 託	橋丈太郎
囑 託	山村芳貴
囑 託	山本哲也

平成14年度

調査指導者	河原純之（川村学園女子大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
文化課長	岩男康晴
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
受託事業担当主幹	坂本嘉弘（府内町跡第20次調査担当）
副 主 幹	友网信彦（府内町第18次東調査担当 本書掲載）
主 査	山本恭弘（府内町跡第20次B調査担当）
主 査	槇島隆二（府内町跡第22次調査担当 本書掲載）
主 査	後藤晃一（府内町跡第20次C調査担当・府内町跡21次調査担当 平成16年度報告）
主 事	恒賀健太郎（府内町跡第20次A調査担当）
囑 託	加藤美成子
囑 託	阿比留史郎
囑 託	井上崇裕
囑 託	畔津宏幸

平成15年度

調査指導者	河原純之（川村学園女子大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官）
文化課長	今永一成
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
受託事業担当主幹	坂本嘉弘（府内町跡第35次調査担当）
副 主 幹	友网信彦（府内町跡第34次調査担当）
主 査	吉田 寛（府内町跡第28次調査担当 本書掲載）
主 査	矢部勝徳（府内町跡第35次調査担当）
主 査	後藤晃一（府内町跡第29次調査担当）
主 事	恒賀健太郎（府内町跡第30次調査担当）
囑 託	加藤美成子
囑 託	服部 真知

第2節 調査の立地と環境

囑託	井上素裕
囑託	畔津宏幸
平成16年度	
調査指導者	河原純之（川村学園女子大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官）
埋蔵文化財センター所長	伊藤正行
調査第二課長	坂本嘉弘（府内町跡第43・49次調査担当）
主査	後藤晃一（府内町跡第42次調査 府内町跡第48次調査担当 本書掲載）
囑託	加藤美成子
囑託	畔津宏幸

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山（628m）へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした、地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

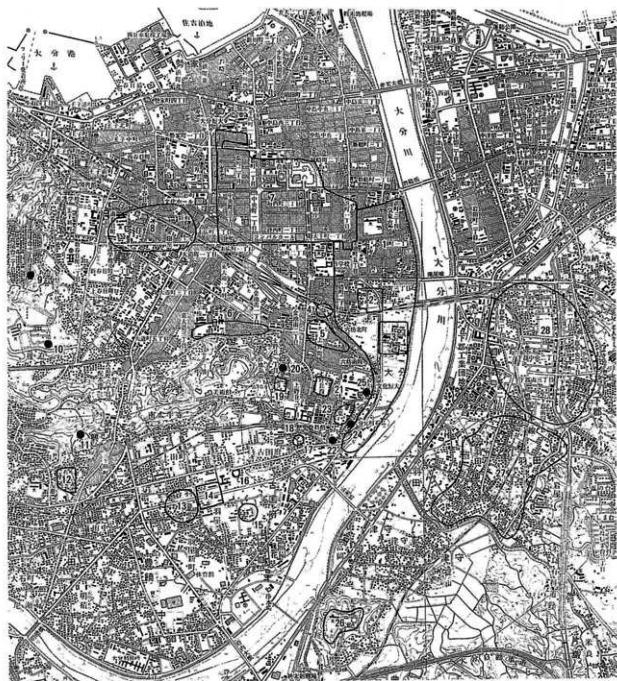
2 歴史的環境

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱（672年）で大真人皇子（天武天皇）側について活躍した大分君恵尺（えさか）・稚臣（わかみ）の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の堀形をもつ大型獨立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

古宮古墳
壬申の乱
大分君

羽屋井戸遺跡
竜王堀遺跡

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された竜王堀遺跡で



1. 中世大友城下町跡 2. 大友氏館跡 3. 荷山万寿寺跡 4. 上野町・顕徳寺道跡 5. 若宮八幡道跡
 6. 東大道道跡 7. 府内城城下町 8. 東田室道跡 9. 亀甲山古墳 10. 古宮古墳 11. 千人塚古墳 12. 永興道跡
 13. 羽原園道跡 14. 金剛宝戒寺跡 15. 石明道跡 16. 町口道跡 17. 岩屋寺道跡 18. 円寿寺 19. 金剛宝戒寺
 20. 上野庵寺 21. 大友上原館跡 22. 岩屋寺石仏 23. 竜王畑道跡 24. 元町石仏 25. 大臣塚古墳 26. 守岡道跡
 27. 羽田道跡 28. 下郡道跡群

第2図 大分平野の地形と主要遺跡 (1/32,500)

第3節 報告書作成にあたって

岩屋寺石仏
元町石仏

は9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地崩跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

勝津留

高国府

新御成敗状

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)に「勝津留置四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友氏館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留置」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東隈北廻り、ニ方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す。

府中

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留置」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に下向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

萬壽寺

14世紀代になると、徳治元年(1306)に萬壽寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

大友上原館

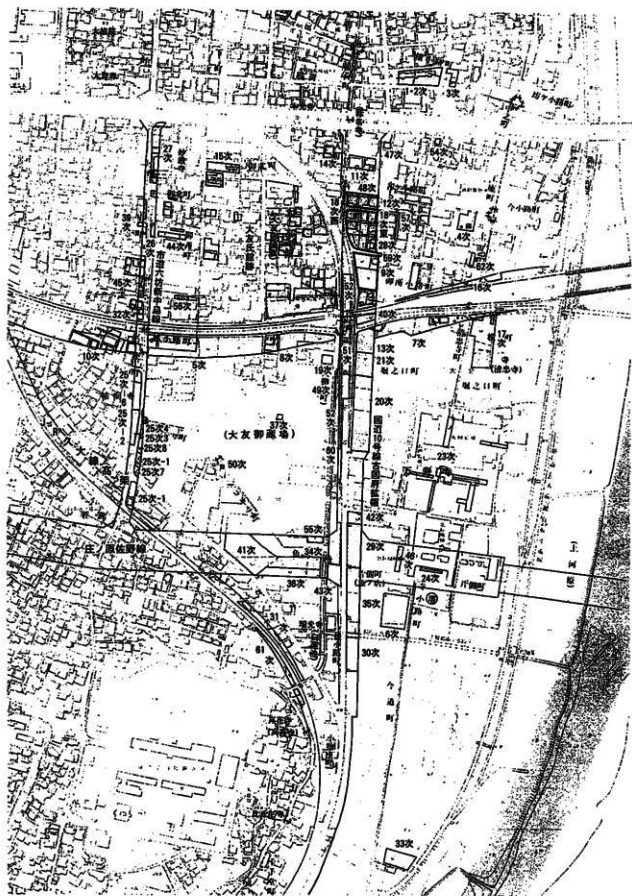
この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵上にも栗研堀の溝や柵列が検出されており山城的存在である。一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす大友上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。

第3節 報告書作成にあたって

1 報告書の刊行順序

中世大友城下町跡の発掘調査は、土地収用状況に合わせて、国土交通省から委託を受け実施している。このため、連続して隣接地を発掘調査することは稀である。そこで、報告書を作成するにあたっては、遺構の連続性を考慮し、平成16年度は、調査がほぼ完了した御所小路町～萬壽寺跡間の御内町にあたる「府内町跡第9・13・21次調査」の成果を報告した。

平成17年度の本報告書はその北側で平成13年度から平成16年度にかけて調査した名ヶ小路町～御所小路町間の桜町にあたる「府内町跡第9・12・18・22・28・48次調査」の成果を報告する。



第3図 中世大友城下町跡の調査と大分駅周辺総合整備事業

第3節 報告書作成にあたって

第1表 中世大友城下町跡 発掘調査一覧表(1)

平成17年12月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書発行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町		幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町		
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成15年3月	10基の備前塚の埋設費
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上市町	平成14年3月	名々小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11~13年度	J R日豊・豊肥線高架	御蔵場	平成17年3月	御蔵場の土塁
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	J A 葬祭場	寺小路町・萬寿寺		萬寿寺の南限の確認?
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	J R日豊・豊肥線高架	清忠寺町	平成18年3月	第1南北街路・屋敷瓦
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	J R日豊・豊肥線高架	柳町・大友氏館跡の南側	平成17年3月	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	平成17年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	J R日豊・豊肥線高架	上町・キリシタン墓地		キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	称名寺		称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友氏館跡・板町・名々小路町	平成18年3月	大友氏館跡の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	平成17年3月	ヴェロニカメダ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	唐人町	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	御北町		
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	J R日豊・豊肥線高架	上市町	平成18年3月	短冊形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺		横町の街路・殿治屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友氏館跡・街路	平成18年3月	大友氏館跡と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	板町	平成18年3月	大友氏館跡の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	国庫補助 範囲確認	柳町?		陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	萬寿寺		礎石建物・北垣の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	平成17年3月	府内産メダ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	板町・御所小路町	平成18年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	萬寿寺		
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	萬寿寺・寺小路町		萬寿寺の塔の確認
府内町跡25-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	ノコギリ町		
府内町跡25-2次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐向寺		16世紀代の掘立柱建物群
府内町跡25-3次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		
府内町跡25-4次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外		
府内町跡25-6次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	祐向寺		
府内町跡26-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・テウス堂付近		
府内町跡27-1次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	妙嚴寺		
府内町跡27-2次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	御北町		
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	板町	平成18年3月	
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	萬寿寺		萬寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	横小路町		14世紀代の町屋

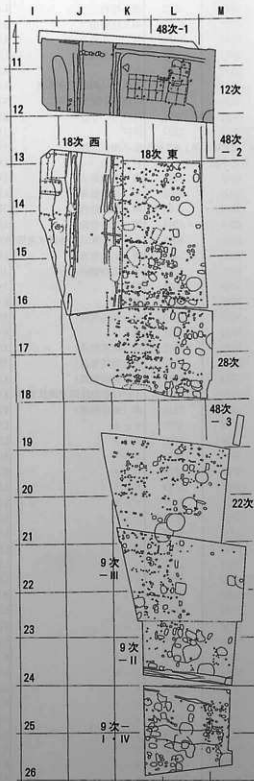
第2章 中世大友府内町跡第12次調査区

第1節 調査の概要

1 遺構の概要

中世大友府内町跡第12次調査区は大大分市錦町に所在し、北側に第11次調査区、南側に第18次調査区との中間地にあたる。遺構検出面は標高約4.2mで、調査面積は約700㎡である。調査区の西端は、大友氏館跡の東北部に該当し、館の東側正面の第2南北街路と、北側を区切る街路に続く名ヶ小路が交差する地点で、極めて重要な地点と理解される。調査では、それと推測される道路状遺構と側溝とみられる溝状遺構(SD01～SD14)を検出した。また、道路によって区画される南東部の区域では礎石建物(SB01、SB02)、掘立柱建物(SB03、SB04)、井戸(SE01)、性格不明遺構(SX01～05)や450余りを数えるピットなどが確認され、それに伴う遺物も多数検出されている。調査区内では、ほぼ全面に及ぶ焼土層が検出されており、遺構の遺存状態も良く、16世紀中葉～近世初頭の町屋の様相を窺い知ることができる極めて貴重な調査地区となった。そのため、街路や礎石建物については遺構検出後、保存を前提としたものに調査の方針を切り替え、これらの位置する範囲については下層の状況を把握するための部分的な深掘りを行う程度に留めた。保存対象地区以外のM11～13区については、下層の状況を知るために地山層までの完掘を行っている。

重機による掘削当初、調査区全体は近世水田の床土層で、その下層に形成されたマンガン沈着層や灰褐色砂質土層であった。まず検出されたのは道路状遺構で、南北を主軸とする第2南北街路と東西を主軸とする名ヶ小路が交差する部分を含むものである。それぞれの道路状遺構には、幅80cm程度の側溝(SD01～03)がみられ、第2南北街路大型の柱穴(SP01・02)とそれに付属する溝状遺構(SD05・15)を検出した。これは古絵図にも描かれている木戸に該当するものと考えられる。この検出された道路状遺構を基準として古絵図と照合するならば、第2南北街路を境として東側には「桜町」の町屋範囲、西側は大友氏館跡の東北部に当たることが理解できる。



第5図 第12次調査区の位置 (1/800)

第1節 調査の概要

第3表 道構一覧表①

本報告での 道構番号	旧道構番号	道構の性格	道構の位置	道構の時期	特記事項	掲載 頁
SB01	SB01	礎石建物	K・L12区	16世紀後葉～末葉	焼土層に覆われ、焼失家屋としての性格が強い。	22
SB02	SB02	礎石建物	L11・12区	16世紀後葉～末葉	S B 0 1と一連をなす建物。	22
SB03	未設定	掘立柱建物?	M12区	16世紀後葉～末葉	焼土面以降。	102
SB04	未設定	掘立柱建物?	K12区	16世紀末葉～近世初葉	S B 0 1焼失以後に建てられたもの。	102
SX01	SX01	井戸状道構	L13区	16世紀後葉～末葉	大災焼土層時に廃焼。	51
SX02	SX02	惣地割	L11～13区	16世紀末葉～近世初葉	大災焼土層後に～西津までの間。	128
SX03	SX03	古銅製品鋳造関連道構	K12区	16世紀後葉～末葉		72
SX05	SX05	性格不明段状道構	M12・13区	16世紀後葉		128
SE01	SE01	井戸	M13区	16世紀後葉～末葉		73
SE03	SE03	井戸	J12区	16世紀中葉以前	S D 0 8によって切られる。	74
第2南北新路 名々小路	第2南北新路 名々小路	第2南北新路 名々小路	J・K11～13区 K・L・M11区	16世紀中葉～近世初葉 16世紀中葉～近世初葉		75 76
SD01	SD01	溝(街路側溝)	K・L・M11・12区	16世紀末葉～近世初葉	焼土面を切る。	82
SD02	SD02	溝(街路側溝)	K11～13区	16世紀末葉～近世初葉	焼土面を切る。	82
SD03	SD03	溝(街路側溝)	J11～13区	16世紀末葉～近世初葉	焼土面を切る。	83
SD04	SD04	溝(街路側溝)	J11区	16世紀末葉		84
SD05	SD05	木付帯施設関連溝状道構	K11区	16世紀後葉～末葉		84
SD06	SD06	溝(街路側溝)	K11～13区	16世紀後葉～末葉		84
SD07	SD07	溝(街路側溝)	J11～13区	16世紀後葉～末葉		84
SD08	SD08	堀	J・J11～13区	16世紀前葉～中葉?		98
SD09	SD09	溝	K・L13区	16世紀後葉～末葉		84
SD10	SD10	溝(街路側溝)	J11・12区	16世紀後葉～末葉		85
SD11	SD11	溝	K・L12・13区	16世紀後葉～末葉		85
SD12	SD12	溝(街路側溝)	J12・13区	16世紀後葉		85
SD13	SD13	溝(街路側溝)	J12・13区	16世紀後葉		85
SD14	SD14	溝(街路側溝)	K12・13区	16世紀後葉		85
SD15	SD15	木付帯施設関連溝状道構	K11区	16世紀後葉		95
SD16	SD16	溝(街路側溝)	M11区	16世紀中葉～後葉		86
SP03	SP03	ヒット	L13区	16世紀後葉～末葉		104
SP06	SP06	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP12	SP12	ビット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP14	SP14	ビット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP24	SP24	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP28	SP28	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP32	SP32	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP33	SP33	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP35	SP35	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP37	SP37	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP38	SP38	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP39	SP39	ビット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP47	SP47	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP49	SP49	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP50	SP50	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP51	SP51	ビット	K・L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP59	SP59	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP62	SP62	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP71	SP71	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP77	SP77	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP78	SP78	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP88	SP88	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP89	SP89	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP91	SP91	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP96	SP96	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP121	SP121	ビット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP122	SP122	ビット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP124	SP124	ビット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP125	SP125	ビット	M12区	16世紀後葉～末葉		104

第4表 遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載 頁
SP140	SP140	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP142	SP142	ピット	M13区	16世紀後葉～末葉		104
SP147	SP147	ピット	L11・12区	16世紀後葉～末葉		104
SP152	SP152	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP155	SP155	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP156	SP156	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP157	SP157	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP158	SP158	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP170	SP170	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP178	SP178	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP182	SP182	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP186	SP186	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP187	SP187	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP203	SP203	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP222	SP222	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP223	SP223	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP224	SP224	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP225	SP225	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP226	SP226	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP227	SP227	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP230	SP230	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SP231	SP231	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP241	SP241	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP251	SP251	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP272	SP272	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP275	SP275	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP279	SP279	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP295	SP295	ピット	L11区	16世紀後葉～末葉		104
SP298	SP298	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP302	SP302	ピット	K11区	16世紀後葉～末葉		104
SP315	SP315	ピット	J12区	16世紀後葉～末葉		104
SP332	SP332	ピット	K11区	16世紀後葉～末葉		104
SP333	SP333	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP334	SP334	ピット	J11区	16世紀後葉～末葉		104
SP335	SP335	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP346	SP346	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP351	SP351	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP377	SP377	ピット	K12区	16世紀後葉～末葉		104
SP378	SP378	ピット	K13区	16世紀後葉～末葉		104
SP385	SP385	ピット	L11区	16世紀後葉～末葉		104
SP393	SP393	ピット	M12区	16世紀後葉～末葉		104
SP398	SP398	ピット	L12区	16世紀後葉～末葉		104
SK01	SK01	土坑	L12区	16世紀末葉～近世初頭	焼土面を切る。	118
SK02	SK02	土坑	L12区	16世紀末葉～近世初頭	焼土面を切る。	119
SK03	SK03	土坑	L・M12区	16世紀末葉～近世初頭	焼土面を切る。	120
SK04	SK04	土坑	K12区	16世紀末葉～近世初頭?		121
SK05	SK05	土坑	L13区	16世紀末葉～近世初頭	焼土面を切る。	122
SK07	SK07	土坑	M12区	16世紀後葉～末葉		122
SK09	SK09	土坑	K12区	16世紀末葉～近世初頭?		123
SK12	SK12	土坑	M13区	16世紀後葉～末葉	SE01に切られる。集石土坑。	123
SK13	SK13	土坑	L11・12区	16世紀後葉～末葉		124
SK14	SK14	土坑	K12区	16世紀後葉		124
SK15	SK15	土坑	M13区	16世紀後葉	SE01切られる。	125
SK16	SK16	土坑	M13区	16世紀後葉～末葉		126

第1節 調査の概要

木戸

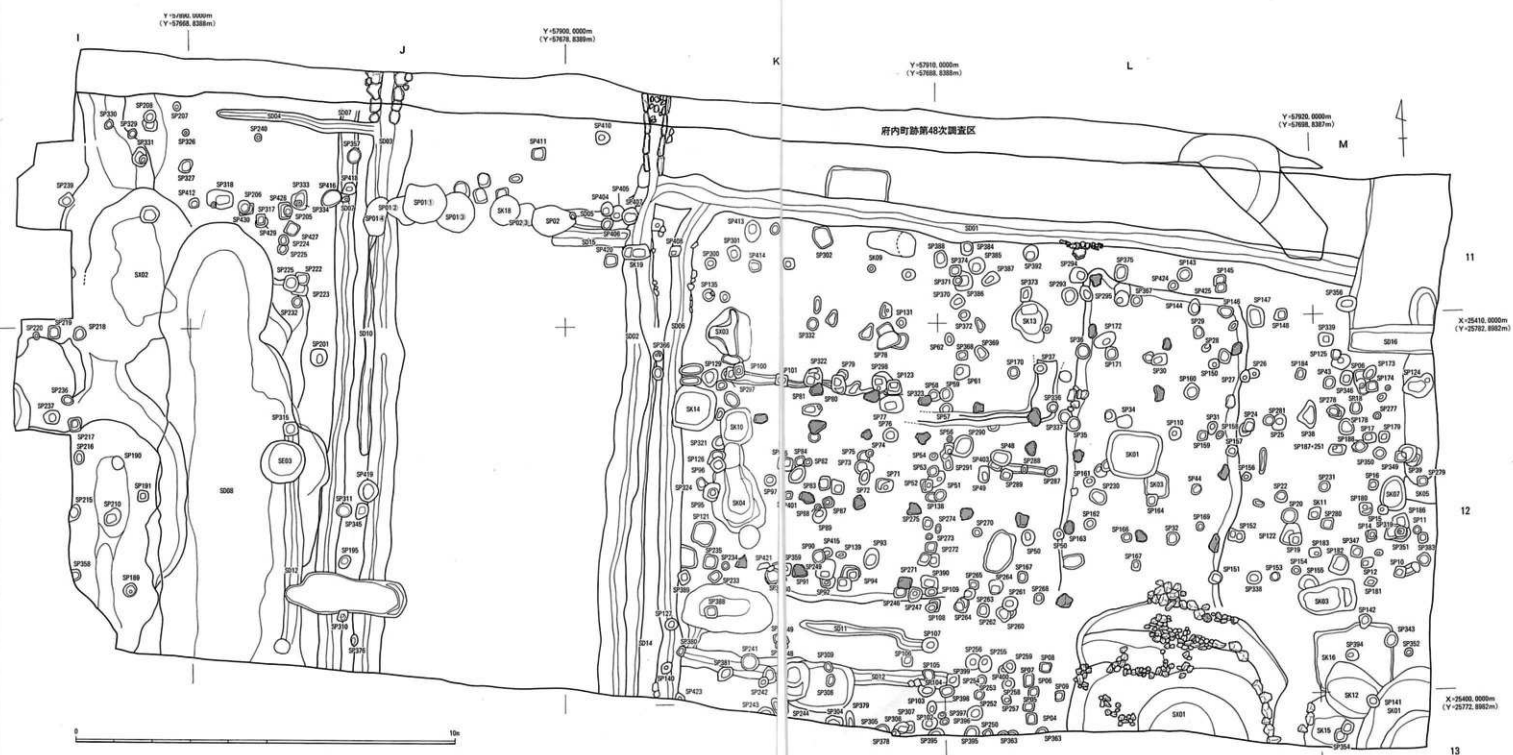
16世紀前半～中葉の遺構としては大友氏館東端を示すと考えられる堀（SD08）があるが、この段階で時期が確定できる遺構はこれのみである。また、このSD08によって切られる井戸（SE03）を検出しており、SD08以前として確認される唯一の遺構である。その位置等を考慮すれば大友氏館の東端が及んでなかった段階とも考えられ、時期は16世紀を遡るものであるかもしれない。この堀より東側の範囲は第18次調査区等でも検出されている巨大な掘り込みが検出されている。また、第2南北街路との関係では、SD08が埋没した直後に街路面に砂を敷き始めたものと見られ、その開始時期は16世紀後半と見られる。名小路・第2南北街路ともに、地山を削平してその上面に砂・砂利を敷き詰める補修を繰り返しながら嵩上げを行って形成されており、交差点部分の土層断面では、大きくみて前者がおおよそ7面、後者が6面程度の単位で補修が行われていることが読み取れた。街路面の各面は、桜町として形成される南東側の区域の整地と不可分の関係にあることが土層の観察からも読み取ることができ、街路面と町屋の形成が一体であったことが窺われた。また、交差点部の調査においては第2南北街路に面して木戸と見られる柱穴とその付帯施設と考えられるSD05・SD15を検出した。これらは検出面や切り合い関係などから少なくとも2～3段階の変遷を確認することができ、道路の変遷とともに木戸も作り変えられている様相が窺われた。第2南北街路以西は大友氏館の東北部隅に当たると解されるところで、SD08が埋没した後は、大方の範囲が空地と化し、第2南北街路沿いにはSD08に変わってSD13が掘られ、堀から小規模な側溝へと変化している。側溝はSD13からSD12→SD07と変遷し、火災後にSD03が掘られている。この側溝に平行して沿うように僅かな段差（段状遺構）がみられ、それに沿って小規模なピットが列を成している。段より下面はフラットに成形していたものと見られ、それを切って土取りによるものと見られる不定形の土坑状凹部が調査区西壁に沿って形成されていた。また、西壁にかけて地山の高まりを確認し、それに沿うようにピット列が並んでいる状況が看取された。こうした状況から大友氏館東側の土塁の可能性が考えられたが、明確な証拠は見えてきなかった。落ち込みについてはSX02と同様の不定形土坑と見られ、埋土に焼土粒を多く含むものである。土坑状凹部の上面には大規模火災後にSX02が形成され、こうした凹部が火災処理に利用されたものと考えられる。

街路面第2面と町屋全体には多数の瓦礫や焼土層が覆っており、火災後に街路面に廃物を敷き詰めて道路復旧を図ったものと考えられる。その焼土層に覆われた範囲では、礎石建物（SB01・02）や付帯する施設として井戸状遺構（SX01）、井戸（SE01）、青銅製品鋳造関連遺構のSX03などが検出された。町屋範囲では、その後の調査により町屋範囲で検出された400基を超える柱穴の埋土についてのチェックを行ったところ、大多数が焼土を多く含むものであることが確認でき、それらはほぼ大規模火災以後に掘り込まれたものと考えられる。焼土層については、天正14～15年（1586～1587）の島津氏の府内侵攻によるものと考えられ、火災直前の礎石建物に代表される最盛期を迎えていた府内町と、掘立柱建物と小規模区画となる火災以後とは町屋の様相が大きく変化していることが窺われるが、道路及び町屋ともに直ちに復興を遂げている様相が確認できた。

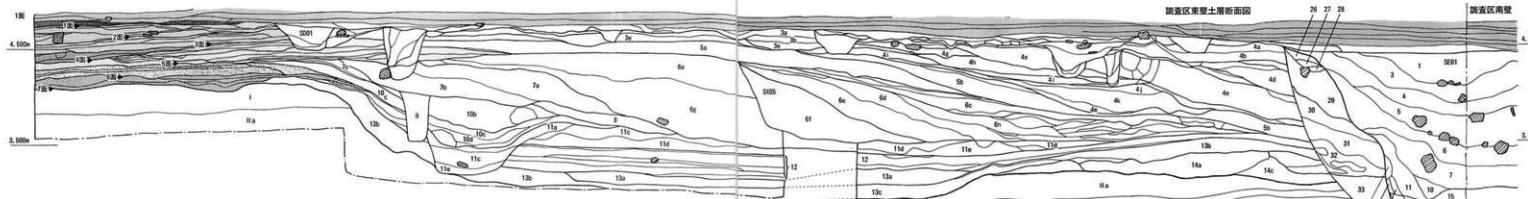
2 土層

第12次調査区は、昭和30年代からこの地域で繰り返されてきた宅地化のため、1 m近く客土が乗っている。その下部は約50 cmの水田層が観察される。慶長7年（1602）、現在大分市荷揚町にある近世府内を中心に城下町が完成し、「府内」はそこに移転する。この水田層の形成は、その後、17世紀中頃に初瀬井路が通じ、この地域が水田化し、以後近代までに形成されたものである。すなわち、大友家が支配した豊後の「府内」はこの水田層の下に残されていた。

ここでは、第7・8図に図示した、調査区の東・南・西の土層断面を観察することで、確認された主要な遺構の時間的な経緯や、前後関係の説明を行う。



第6图 中世大友府内町跡第12・48次調査区全体图 (1/100)



- 上部アミかけ部は近隣の地質断面
名を参照する
- 1 褐色砂質土 100R (A/3) 硬化している
 - 2 アミかけ部砂質土 100R (A/4) 硬化している
 - 3 褐色砂質土 100R (A/4) 硬化している
 - 4 褐色砂質土 100R (A/3) 硬化している
 - 5 褐色砂質土 100R (A/4) 硬化している
 - 6 褐色砂質土 100R (A/3) 硬化している
 - 7 アミかけ部砂質土 100R (A/2) 硬化し砂と礫が互層となり硬化している

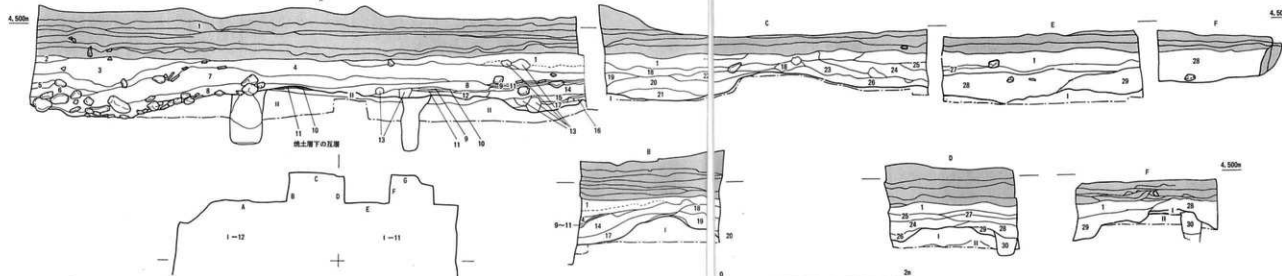
- 1 褐色砂質土 100R (A/4) 地盤
- 10a 褐色砂質土 100R (A/4) 地盤
- 10b 褐色砂質土 100R (A/4) 地盤
- 10c 褐色砂質土 100R (A/4) 地盤

- 3a 褐色砂質土 100R (A/3) 粘土を多く含む、砂質が強い
- 3b 褐色砂質土 100R (A/2) 粘土を多く含む、砂質が強い
- 3c アミかけ部砂質土 100R (A/2) 粘土を多く含む、砂質が強い
- 3d 褐色砂質土 100R (A/2) 粘土を多く含む
- 4a 褐色砂質土 100R (A/3) 中質粘土が強い
- 4b アミかけ部砂質土 100R (A/2) 硬く砂質に大粒の砂粒を含む
- 4c 褐色砂質土 100R (A/2) 砂を多く含む、奥にかけて砂層になる
- 4d 褐色砂質土 100R (A/2) 砂を多く含む、奥にかけて砂層になる
- 4e 褐色砂質土 100R (A/2) 砂を多く含む
- 4f アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4g アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4h アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4i アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4j アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4k アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4l アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4m アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4n アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4o アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4p アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4q アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4r アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4s アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4t アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4u アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4v アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4w アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4x アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4y アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い
- 4z アミかけ部砂質土 100R (A/2) 褐色粘土が強い

- 10a 褐色砂質土 100R (A/2) 粘土を多く含む
- 10b 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10c 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10d 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10e 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10f 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10g 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10h 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10i 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10j 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10k 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10l 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10m 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10n 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10o 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10p 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10q 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10r 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10s 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10t 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10u 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10v 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10w 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10x 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10y 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質
- 10z 褐色砂質土 100R (A/2) シルト質

- 80R
- 1 褐色砂質土 100R (A/3)
 - 2 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 3 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 4 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 5 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 6 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 7 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 8 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 9 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 10 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 11 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 12 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 13 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 14 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 15 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 16 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 17 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 18 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 19 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 20 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 21 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 22 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 23 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 24 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 25 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 26 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 27 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 28 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 29 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 30 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 31 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 32 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 33 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 34 褐色砂質土 100R (A/4)
 - 35 褐色砂質土 100R (A/4)

調査区西部土層断面図



アミかけ部は近隣の地質断面

- 1 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、砂質が強い
- 2 褐色砂質土 100R (A/4) 1に比較すると粘土は少ない
- 3 褐色砂質土 100R (A/4) 1に比較するとシルトが強い、粘土層が多い
- 4 褐色砂質土 100R (A/4) 下部シルト質プロックを多く含む層が広がる
- 5 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 6 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 7 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 8 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 9 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 10 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 11 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルトが強い
- 12 アミかけ部砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルト質が強い粘質土

- 13 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 14 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 15 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 16 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 17 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 18 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 19 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 20 アミかけ部砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 21 アミかけ部砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 22 アミかけ部砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 23 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 24 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 25 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 26 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 27 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 28 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 29 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 30 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む

- 27 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 28 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 29 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む
- 30 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む

- I 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルト質が強い
II 褐色砂質土 100R (A/4) 粘土を多く含む、シルト質が強い

- III (A/2) 粘土を多く含む
IV (A/4) 粘土を多く含む、シルト質が強い (地盤)

7 図 第 12 次調査区東及び西側土層断面図 (1/40)

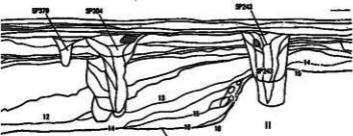


図3 圃土別種調査の
掘込み図



圃土 (10794/2)

圃土立上の
圃土

- 1 灰黄褐色砂質土 (10796/2)
- 2 灰黄褐色砂質土 (10796/4)
- 3 灰褐色砂質土 (10795/1) S002の圃土

- 4 暗褐色砂層 (10795/3)
- 5 黄褐色砂質土層 (10795/6)
- 6 黄褐色砂層 (C. 576/1)
- 7 暗黄褐色砂質土層 (C. 574/2)
- 8 灰黄褐色砂層 (10795/2)
- 9 暗黄褐色砂質層 (C. 575/2)
- 10 灰黄褐色砂層 (C. 576/2)
- 11 灰褐色砂層 (S75/1)
- 12 灰黄褐色砂質土 (10795/2)
- 13 暗褐色砂層 (10794/1)
- 14 灰褐色砂層 (S6/圃)
- 15 灰黄褐色砂層 (C. 575/2)

調査区東側土層 (第7図)

第12次調査区の東壁には、名ヶ小路部を残し、約70cmの法面を形成して地山を北から南にかけて大規模に掘り込まれた跡が観察される。その規模は、最深部で水田層下面から約1.8mある。名ヶ小路と街路側溝(SD01)・井戸(SE01)・土坑などの遺構は、この大規模な掘り込み部を埋め立てながら構築されている。

まず、名ヶ小路については、掘り込み開始部が、名ヶ小路にあたる部分を選んでいる。そして、新しい順に1～7面の硬化面が観察されるものの初期の5・6・7面が形成された時点では、東側の掘り込みは完全には埋まっておらず、掘り込み部に向かい街路を形成する土層が流れ込んでいる。また、4・5面においても、完全には埋まりきっていない。完全に埋まった状態で街路が形成されたのは2面の段階で、その上面には薄い焼土層が認められる。さらに、調査区南隅で検出された井戸は、この広範囲にわたる大規模な土坑が完全に埋め立てられた跡に、再度掘削されている。

この大規模な掘り込みを埋め立てる際にも、幾度かの掘り返しが認められる。

調査区西側土層 (第7図)

西側の土層は、調査時に「府内古図」に描かれる土塀や土塁など大友氏館東側の区画施設が存在する可能性が考えられたため、西壁を部分的に掘り込んで拡張区を設けて確認調査を行った。その結果、西壁の一部で、焼土を含む層の下層で、わずかにシルトや砂が互層になった整地層が確認された。この焼土は天正14年(1586)の島津氏侵攻時のものを整地したと考え、互層はそれ以前のものとなる。しかし、この層は広範囲に及ぶものでなく、館の区画施設である土塀や土塁の存在を確証することはできなかった。

調査区南側土層 (第8図)

調査区南側の土層断面では、東側断面と同様、第2南北街路部を避けるように、大規模な掘り込みがある。その断面は、最初は緩やかであるが、約60度で法面が約60cmで掘り込まれている。街路とこの掘り込みの関係は、両者が重複する部分がないため不明である。

また、第2南北街路は、新しい順に1～6面の硬化面が確認され、最初の面は、地山を浅く掘り込み、その幅は約11mあり、大友氏館跡の東側を区画する位置に掘り込まれた堀であるSD08の東側の縁に接する。このSD08の堀と街路との関係は、掘を埋め立てた直後に、街路が敷設されており、4・5面を形成する土砂が、その上面に乗っている。以後、3面を形成する層が東の端に乗っている。そして、街路側溝が形成され、時を経るに従い、その側溝は東へと付け替えられ、2面の街路は狭くなり、最終段階の街路幅は約5.8mになっている。

一方街路の東側は、大規模な掘り込みが完全に埋め立てられた後に、礎石建物・井戸、SX01とした特殊な竪穴遺構などが構築されていることが、土層や検出位置からでも明瞭である。

天正14年(1586)の島津氏侵攻時の焼土層は、街路2面の上面で確認され、この層は、調査区のほぼ全面にみられ、礎石建物などを覆っていた。

第2節 遺構と遺物

SB01・02 (第11圖)

礎石建物 (SB01・02) は焼土層に覆われた状態で検出され、長方形の建物2棟がL字状に組み合う平面プランで、調査区内の約140㎡の範囲を占めている。焼土層は、道路状遺構ならびにその東側の範囲を含めた調査区内のほぼ全面にて面的に広がっており、かなりの大規模な火災によるものであることが看取された。建物は、大規模火災で焼失した家屋とみられ、保存状態は極めて良好であった。それは町屋が大規模火災後に復興する過程において、排出された焼土や瓦礫を土で覆い整地していたことと、後世のカクランが極めて少なかったことによるとみられる。

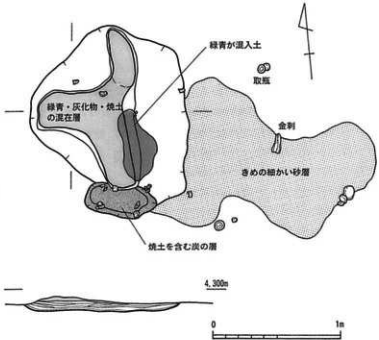
調査では、直接的に被熱を受けて変色したものと判断される部分を残しつつ、段階的な掘り下げを行った。礎石建物の周辺では、井戸状遺構 (SX01)、井戸 (SE01)、青銅製品鋳造関連遺構 (SX03) などが検出され、焼土に覆われる直前に併存していたものと考えられる。

SB01

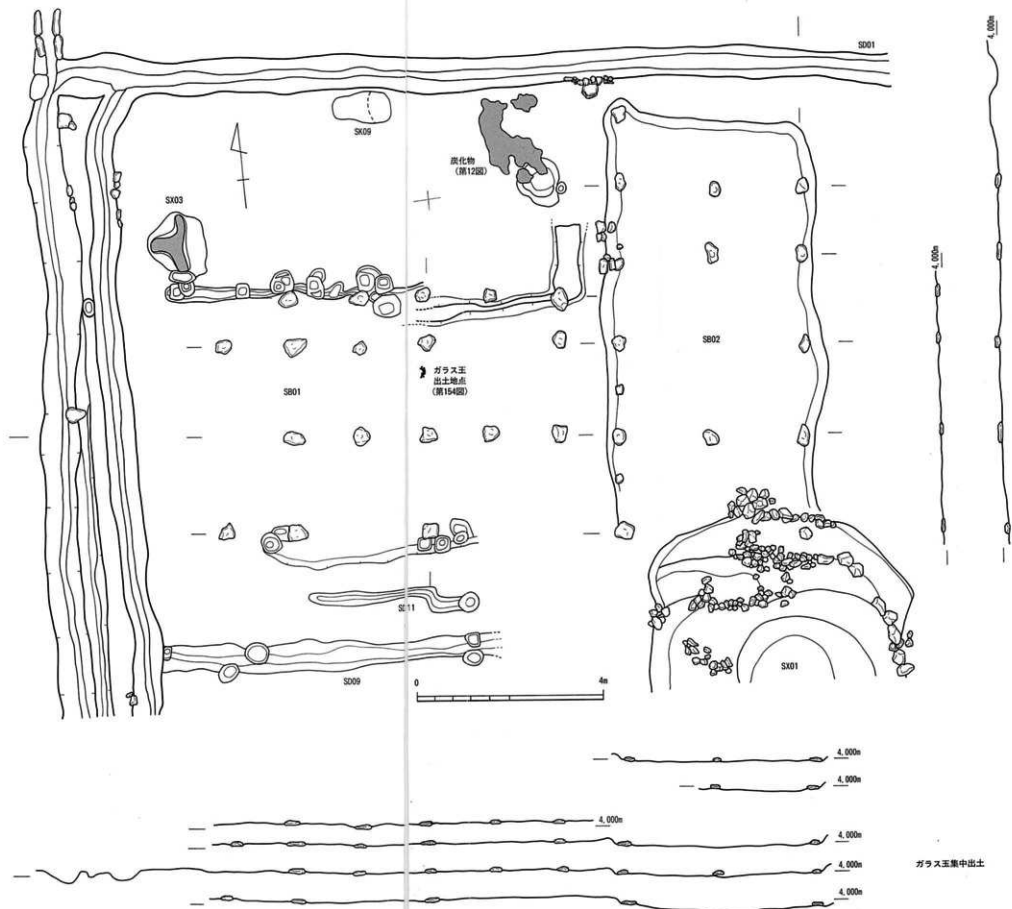
SB01は桁行5間、梁間2間+半間の配列で、桁行きが144~148cm、梁間が192~200cm、梁間側の半間は94~98cmとなっている。北側の半間には雨落ちとみられる溝状遺構と家屋の床下への水の流入を防ぐためと見られる低い土盛りが確認された。ただし、溝状遺構は礎石のすぐ脇に位置し、人為的に配されたものかどうかは不明であるが、この半間は庇であった可能性が高い。家屋の向きは桁行き方向がN82度Eで、第2南北街路というよりは名々小路と平行した配置となる。SB01の西端からSD06までの間では、部分的に貝殻などを混ぜた整地層が広がっている状況が確認された。家屋の建坪範囲はその外縁よりも若干低く、南側に低い段がみられた。こうした僅かな段差は、焼土の一次堆積によって覆われていたため、比較的明瞭に検出することができた。SB01の北側ではこの焼土の一次堆積を示すように土壁の一部が倒壊したものと見られるササ竹を編んだ状態のものが焼土塊の間で確認されている。礎石は幅約30~40cm大のものが多く、床面を10~15cmほど掘り込んでその中に据えられていることが確認できた。また、SX01の西側に顕著であった土師質土器混りの整地層と呼んでいた京都系土師器を多量に含む黒色砂質土層が確認されたが、SB01南端礎石の掘方上面を覆っていたことから、少なくとも土師質土器混りの整地層の上層にあたる部分はSB01が立てられ



第9図 SX03出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SX03青銅製品鋳造関連遺構 (1/30)



第11図 SB01・SB02・SX01・SX03 配置図 (1/80)

SB02

SB02は桁行き5間、梁間2間の桁行き方向が南北方向を示す家屋で、南側2間でSB01と接している。SB02はSB01の基底面よりも建坪範囲を全体約10～15cm掘り込み、SB01とは段差をもって接する形となっている。一間の長さを見てみると、桁行きがSB01と接している南側3間分が192～204cm、残りの2間は142～144cm、梁間は188～200cmとなっている。また、SB01とSB02間の礎石一間の長さは124～128cmとなっている。桁行き側の北から2間目の部分には石列がみられ、その西側には土盛りがみられる。この土盛りについてはSB01の礎石の上面に作られていることから、SB01が立てられた後に造られたものである。こうした構造や、SD01の肩部に付された縁石の位置等からみても、通用口の可能性が高い。南端の礎石は井戸状遺構(SX01)に通らされた縁石と組み合っていることから、SX01の整備とともにSB02が建てられたことが分かる。

SB01とSB02で共通するのは梁間6尺5寸、桁行き4尺8寸とする間取りで、SB02は北側の2間分が該当する。しかし、南側の3間はどちらも6尺5寸を基準とした間取りとなっており、SB01に列をあわせたものと考えられる。また、建物の基底面全体を掘り込んで礎石を掘えるという工法はSB01とは異なっており、礎石上面のレベルもSB02の方が僅かに低い。SB02は基底部から建てられているため、その前段階でこれに替わるような建物があったかどうか不明で、SB01についても同時に建替えが行われた可能性も考慮される。SB01より1段階後に付設されたこと、火災により同時に焼失しているという点から、SB01単独の時期→SB01・SB02付設時期という変遷が読み取れる。

この礎石建物の周囲や床面および被っていた焼土中からさまざまな遺物が検出されている。最も多量に出土しているのが瓦であり、漆喰と考えられる簾入りの焼土塊である。建物跡の建坪の一角で炭化した蘆竹が良好な状態で検出されており、こうした壁体構造をもったものであったことがわかる。出土遺物には京都系土師器や瀬戸美濃の天目碗、中国南部や東南アジア産輸入陶磁器などがみられる。こうした遺物から推定するに16世紀後半から末頃(16世紀第3四半期)のものであるといえる。注目できる遺物としては曲形分銅や太鼓形分銅などの分銅類やメダイ様金銀製品が多く出土しており、出土点数は他の調査区と比較しても圧倒的に多い。また、飾り金具や錠前などの青銅製品も数多く出土しており、当建物の付帯施設であろう青銅炉跡(SX03)との関連性が窺われる。珍しい遺物として犬形土製品が6点出土しているが、これについては堺や大阪城など近畿地方を中心に分布するものであるため、そうした地域との関係性をもつ可能性が想定される。

さて、中世末の府内町を表したときされる「府内古図」による復元によれば、当調査区は「桜町」にあたる範囲であると見られ、この礎石建物はその一角にあたるものであろう。大友氏館跡からは東側の第2南北街路を挟んで北東の角地に位置する。

建物は増改築が行われ、最終的には火災に遭って廃絶している。この火災面は、その後の瓦礫を片付けた後の範囲を含めて考えると、調査区内の全域に及んでおりかなり大規模なものであったことがうかがわれる。こうした状況を文献と照らし合わせて考えると、天正14年(1586)の島津氏府内侵攻によるものであった可能性が高い。

メダイ様金銀
製品
曲形分銅
太鼓形分銅

SB01・SB02 出土遺物 (第14~40図)

礎石建物周辺から出土した遺物は、「SB01焼土層」、「SB02焼土層」、「焼土層」等の単位で取り上げられており、それぞれに接合資料が存在する。出土遺物は、遺物に記された出土地点を重視して提示を行うが、「SB01焼土層」関連のものとして「SB02焼土層」関連のものが接合したものは、一括して「焼土層」出土としてまとめている。



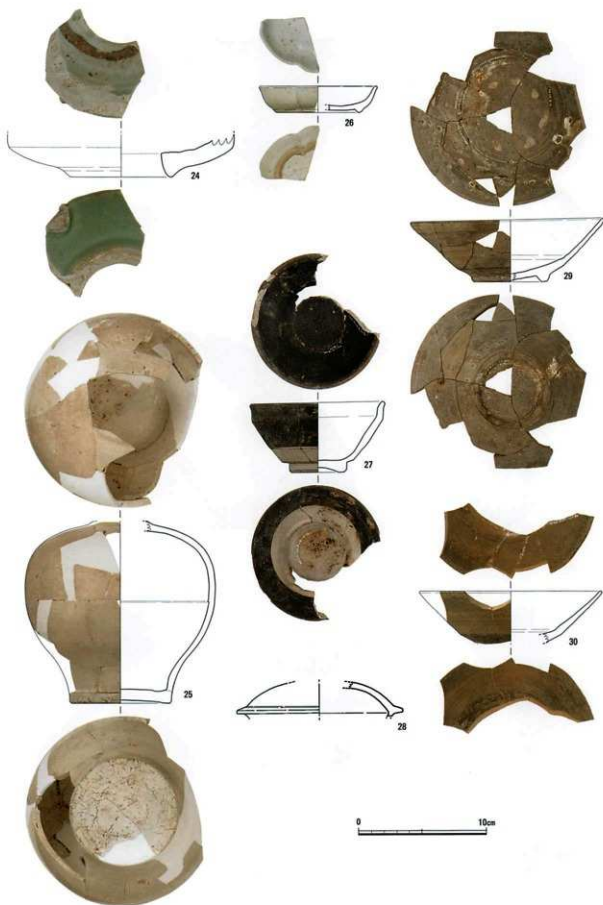
第14図 SB01 周辺出土遺物実測図① (1/3)



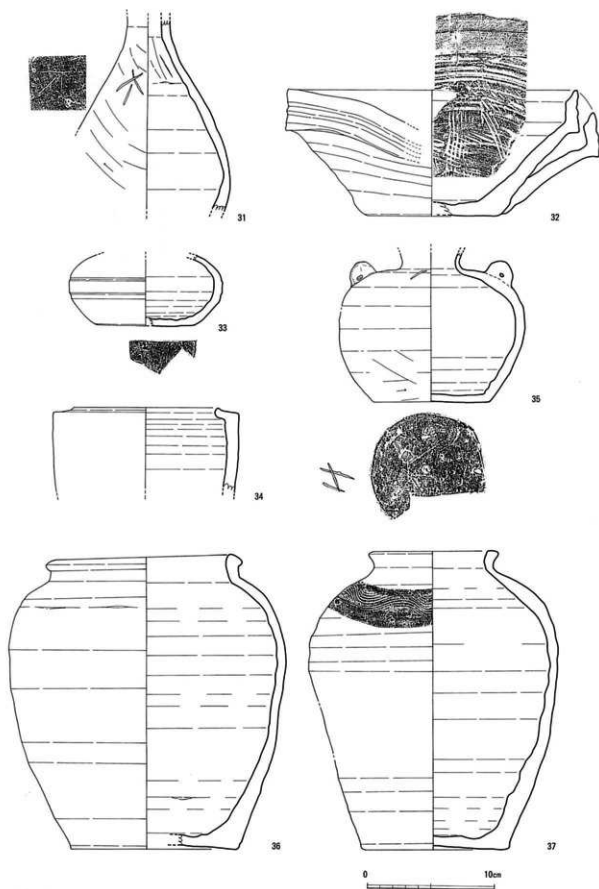
第15図 SB01周辺出土遺物実測図② (1/3)



第16図 SB01 周辺出土遺物実測図③ (1/3)

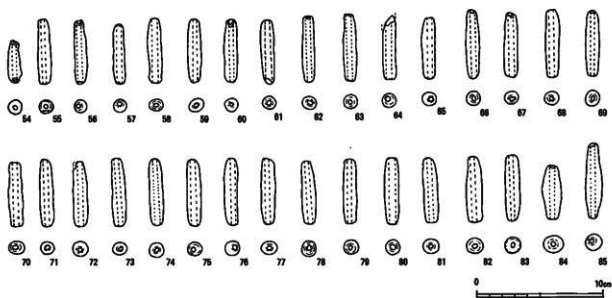
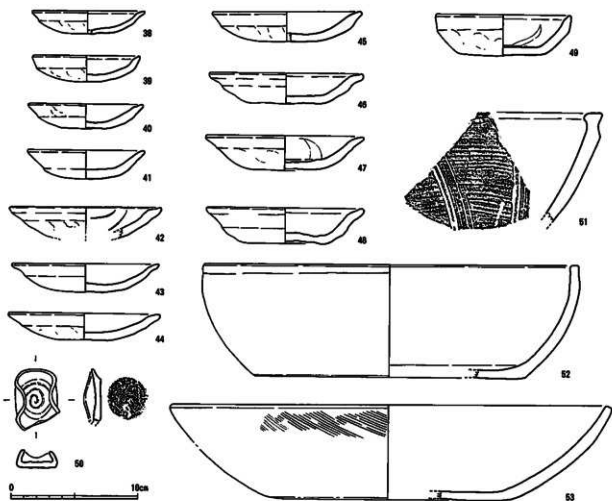


第17図 SB01 周辺出土遺物実測図④ (1/3)



第18図 S801 周辺出土遺物実測図⑤ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第19圖 SB01 周辺出土遺物実測図⑥ (1/3)

SB01 周辺出土遺物 (第14~19図)

第14・15図1~19には、中国景德鎮窯系青花を提示した。第14図1~9は小野分類のE群青花碗である。このうち、1~3は外面に龍文を描く同一規格同一文様の製品で、粗物として使用された可能性がある。外底部の銘款は4が異体字、5が「萬福収同」、8が「精製」¹⁾であり、9は「富貴佳器」の可能性が高いが、文字が退化しており、正確には判読できない。第15図10~17は青花皿で、このうち10~12はB1群、13はC群、14~17はE群に分類される製品である。外底部の銘款は14~16が異体字、17が「天下太平」である。第16図18は口縁部が輪花となり、外面にラマ式連弁文を描いている。19は小壺で、底部内面の一部を除いて、外底部と内面は露胎となる。20は五彩の大皿(盤)で、火災による二次的な被熱を強く受けて変色している。外底部には銘款が認められるが、破損のため判読できない。21・22は中国漳州窯系青花で、前者が碗、後者が皿である。23は青磁碗で、内外面および見込みとも無文で、外底部は露胎となる。第17図24は青磁香炉の底部破片で、底部は貫通しており、外面には支脚が剥落した痕跡が認められる。龍泉窯系の製品であろう。25は口縁部を欠損する白磁壺で、胴部外面のみに施釉され、その他の部位は露胎となる。口縁部と胴部の境となる胴部外面にはわずかな段を有する。底部は円盤貼り付けによって製作されており、胴部中位付近には胴轡ぎの痕跡が認められる。26は木瓜形を呈する白磁皿で、型打ち成形によって製作されている。27は中国産の天目碗で、内外面に二次的な被熱を受けている。28は中国産の黒軸陶器の蓋で、外面に黒軸を施し、内面は露胎となる。29・30は朝鮮王朝産の陶器碗で、前者には内面と高台端部に目跡が認められる。第18図31~37には、備前系陶器を提示した。31は瓶(徳利)で胴部外面にヘラ記号が認められる。32は挿鉢で内面には放射状摺目と斜め摺目が交差して施されており、乗岡編年による近世1期bの製品である。33~37は壺類で、33・34の底部外面にヘラ記号が認められる。また、37については胴部外面に櫛歯き波状文が施されている。第19図38~49は京都系土師器で、38~48が皿、49は坏である。50は土師質土器の耳皿で、赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロロ目を残す在地系土師質土器皿の両端を折り曲げて製作している。51~53は瓦質土器である。51は挿鉢で内面にカキ目状の調整を施し、5本を一単位とする摺目が認められる。52は瓦質土器の鉢で、内外面にミガキが施される在地系の製品である。53も瓦質土器の鉢で、外面には刷毛目調整が行われている。これも在地系の製品であろう。54~85は管状土鍾である。

SB02 周辺出土遺物 (第20~26図)

第20図1~7は中国景德鎮窯系青花で、1・2はE群青花碗、3はB1群青花皿、4はC群青花皿、5~7はE群青花皿である。このうち、銘款がみられるものは、2が「富貴佳器」、5が「福」である。8・9は中国漳州窯系青花皿で、C群青花皿の模倣品であろう。10・11は中国産の青磁で、前者が蓋、後者は合子である。第21図12は焼締陶器の壺で、中国産の製品であろう。13は中国産の黒軸陶器壺で、底部付近を除く外面に黒軸を施し、底部内外面と内面は露胎となる。胴部中位付近には、胴轡ぎの痕跡がみられる。当該資料については、天正8年(1580)または同14年(1586)の一括資料とされている福岡県博多遺跡群第40次調査4号土坑²⁾に類例がみられる。14~17は北部ベ

木瓜形の
白磁皿

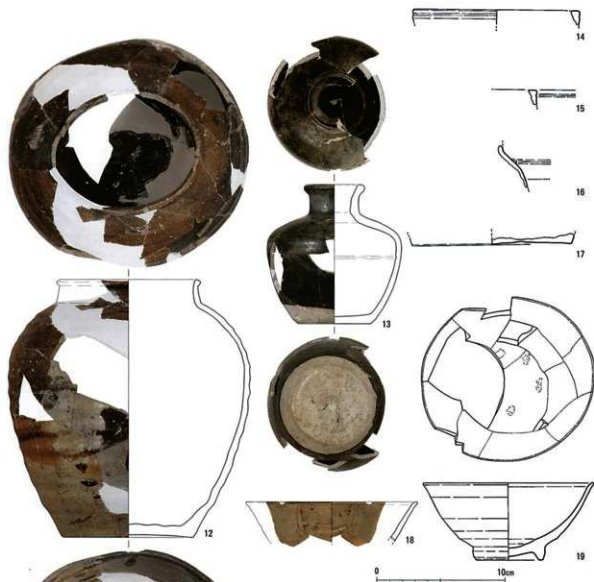
黒軸陶器壺

- (1) 外底部銘款の判読に関しては、富永樹の「出土品にみる景德鎮窯青花の底裏銘」(『青山考古』第15号1998年)を参考にした。
- (2) 福岡市教育委員会「博多」15(福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集1990年)28頁Fig. 25-1 大庭康時「博多遺跡群第40次調査4号土坑」(『季刊考古学』第75号 特集・基準資料としての貿易陶磁器2001年)68・69頁

第2節 遺構と遺物



第20図 SB02周辺出土遺物実測図① (1/3)

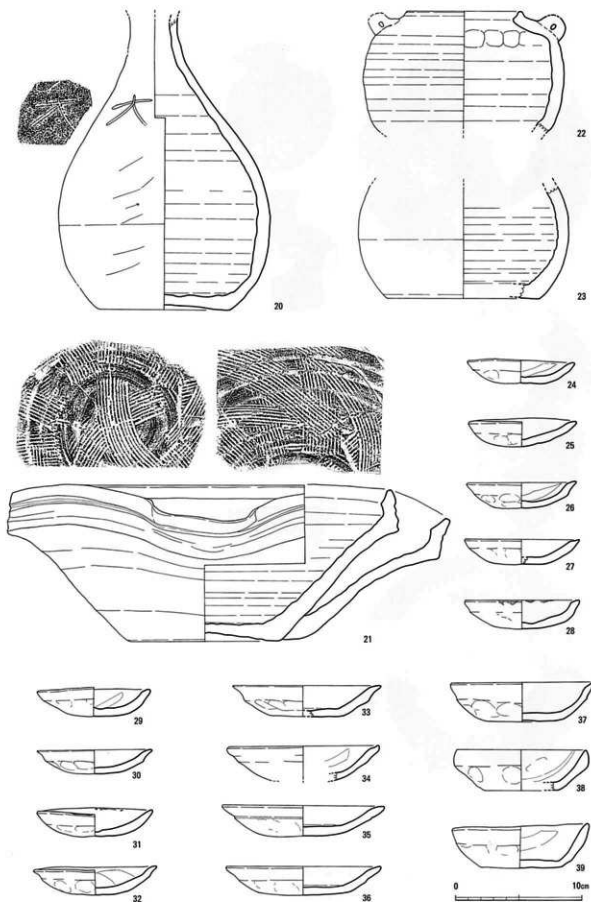


第21図 SB02周辺出土遺物実測図②(1/3)

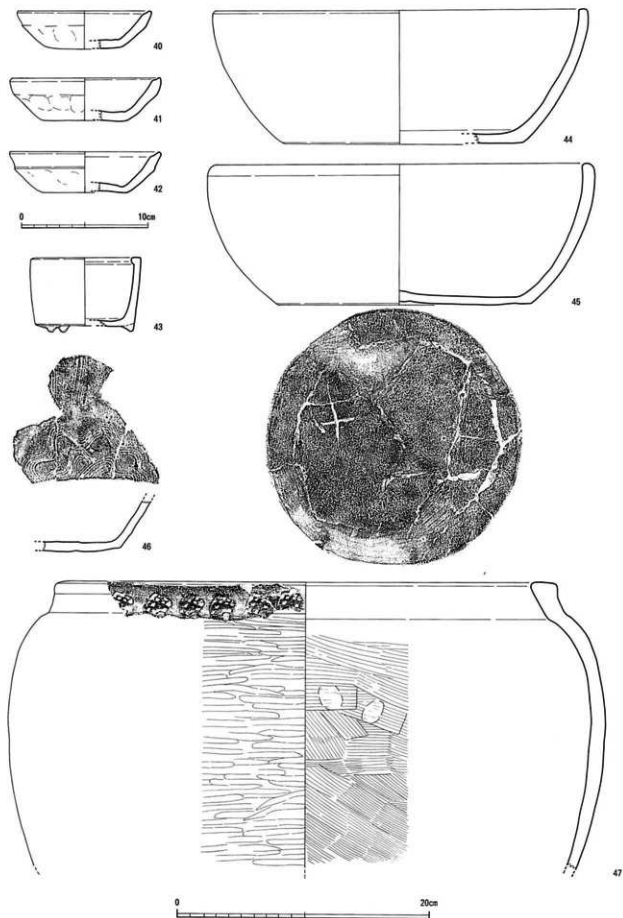
トナム産の長胴壺で、同一個体と推定される資料である。色調は内外面とも青灰褐色を呈する。二次的の被熱を強く受け、細片の状態で出土しており、同一個体と思われる破片がSK02でも出土している(第109図3・4参照)。18・19は朝鮮王朝産の陶器碗で、19の見込みと高台付近には目跡が認められる。第22図20～23は備前系陶器である。20は瓶(徳利)で、肩部外面に「大」字状のヘラ記号がみられる。21は播鉢で、内面播目の特徴から近世1期bに比定される製品である。22は広口壺で、肩部に小さな貫通孔をもつ耳(把

ベトナム産
長胴壺

手)を有する。23も壺と思われる、頸部以上と底部を欠損する胴部破片である。24～39、第22図40～42は京都系土師器で、24～36は皿、37～42は坏である。43は土師質土器の香炉で、外面に丁寧なミガキが施されている。44・45は瓦質土器の鉢で、45の底部外面には「キ」字状のヘラ記号が認められる。46は瓦質土器播鉢で、見込みに波状播目、胴部内面に放射状播目が施されている。47は壺で、口縁外面には四ツ菱を単位文様とした刻印が押捺されている。44～47の瓦質土器は、いずれも在地

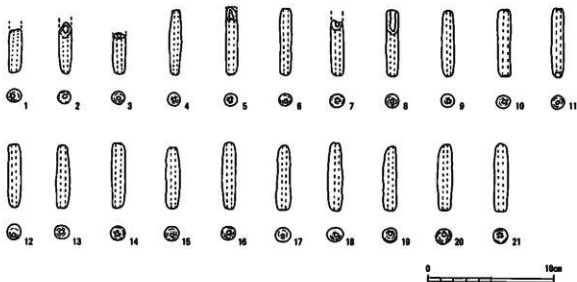


第22図 SB02周辺出土遺物実測図③ (1/3)



第23図 SB02周辺出土遺物実測図④ (1/3)

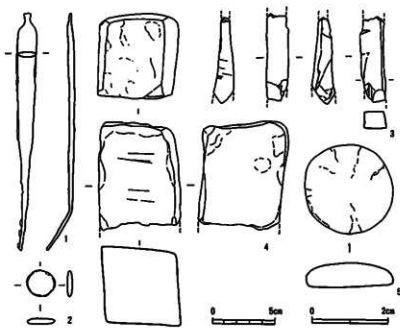
第2節 遺構と遺物



第24図 SB02周辺出土遺物実測図⑤ (1/3)

系の製品と推定される。第24図1～21は管状土錘である。第25図には金属製品、石製品、ガラス製品を提示した。1は青銅を素材とした簪である。2は黒色の石材を使用した小型の石製品で、碁石である可能性が考えられる。3・4は砥石である。5は青色を呈するボタン状のガラス製品である。用途は不明であるが、裏面の平坦面には接着

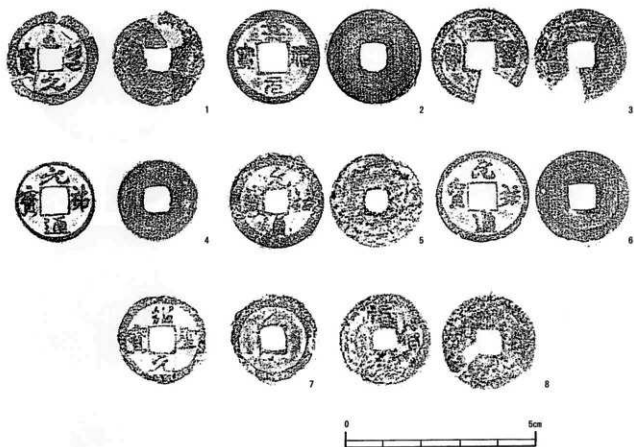
ボタン状の
ガラス製品



第25図 SB02周辺出土遺物実測図⑥ (1～4は1/3, 5は1/1)

痕跡がみられる。近年、中世府内町中世大友府内町跡やその周辺で出土事例が増加しており、色調が青色を呈するものと白色を呈するものの2種が存在することが判明している³⁾。第26図には銅銭の拓影図を提示している。初鋳造年・径・重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。

(3) 本報告資料に類似した青色および白色のガラス製品は、第7次調査区で1例(白)、第12次調査区で1例(青)、第14次調査区で2例(青・白)、府内城・城下町跡12次で1例(青)が出土している。大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内3-中世大友府内町跡第7次・16次調査区-』(2006年刊行予定) 大分市教育委員会『大友府内6-中世大友府内町跡第14次発掘調査発掘調査報告書-』(2003年)74頁 第75図478・479 大分市教育委員会『府内城・城下町跡 第12次調査報告書』(2003年)32頁第35図27



第26図 SB02周辺出土遺物実測図⑦ (1/1)

焼土層出土遺物 (第27～40図)

第27・28図1～13には、中国景德鎮窯系青花を提示した。第27図1～6は小野分類のE群青花碗で、外底部に銘款を有するものとしては、1が「清製」、3が異体字、5が「萬福収同」、6が「永保長春」である。7・8はB1群青花皿、9と第28図10・11はE群青花皿である。12・13は口縁部が外反する器形を呈する青花皿で、両者は同一規格の製品であることから、本来組物として使用されていた可能性が考えられる資料である。いずれも内底部に銘款があり、12は「富貴佳器」で、13は欠損のため不明であるが、文字の一部が確認できる。また、同一規格のものが、SX01からも出土している(第43図20)。14は脚部が貼り付けられていることから、香炉の一部である可能性が考えられる。15はE群青花皿の破片を利用した円盤状の加工品である。裏面には二重圏線内に銘款の文字の一部が確認できるが、判読不能である。16～21、第29図22～30は中国漳州窯系青花である。このうち、16～21は碗、22～28は皿、29・30は大皿(盤)である。碗や皿には見込みが露胎となるタイプのもの(19・21・23・25～28)が存在し、特に皿の23・26・27については、蛇の目状に釉剥ぎしている。31は中国産の焼締陶器壺の口縁部で、口縁端部がやや肥厚する形態を呈する。32は五彩の碗であるが、二次的な被熱により、本来の色彩を失っている。現状では内面のみに文様が認められる。中国景德鎮窯系の製品であろう。

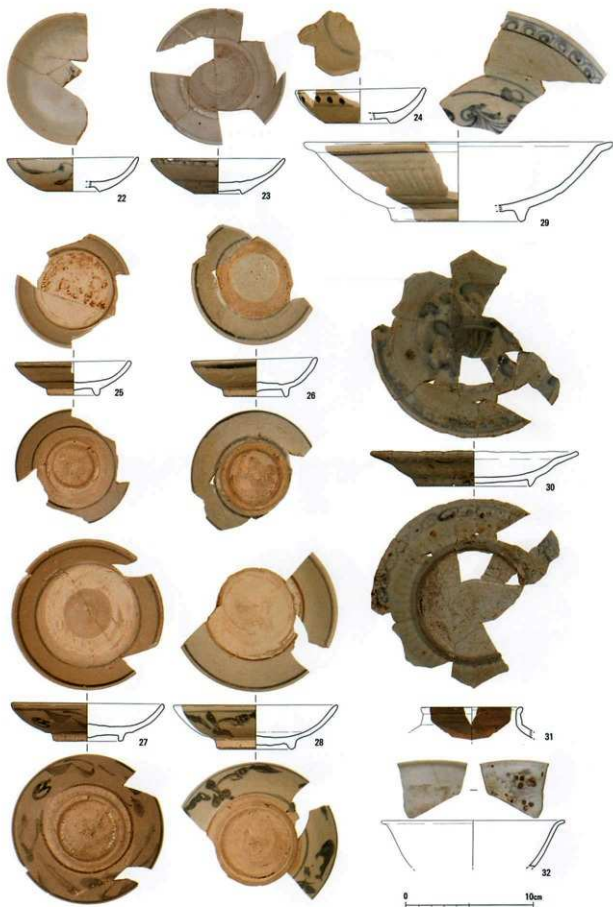
第30図23は華南三彩の小破片で、外面のみに緑釉が施され、型押しによる波状文(青海波文か?)が認められる。小破片であるため、断定はできないが、鶴形水注などの台部の一部である可能性が考えられる。34は馬形水滴で、型合わせによって製作されており、口の部分に注口部が残存して



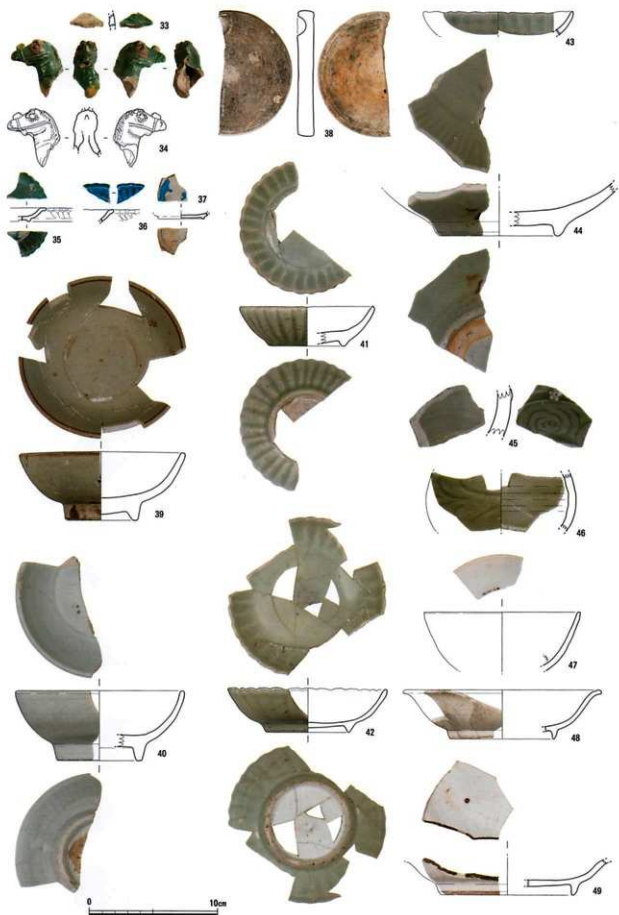
第27図 焼土層出土遺物実測図① (1/3)



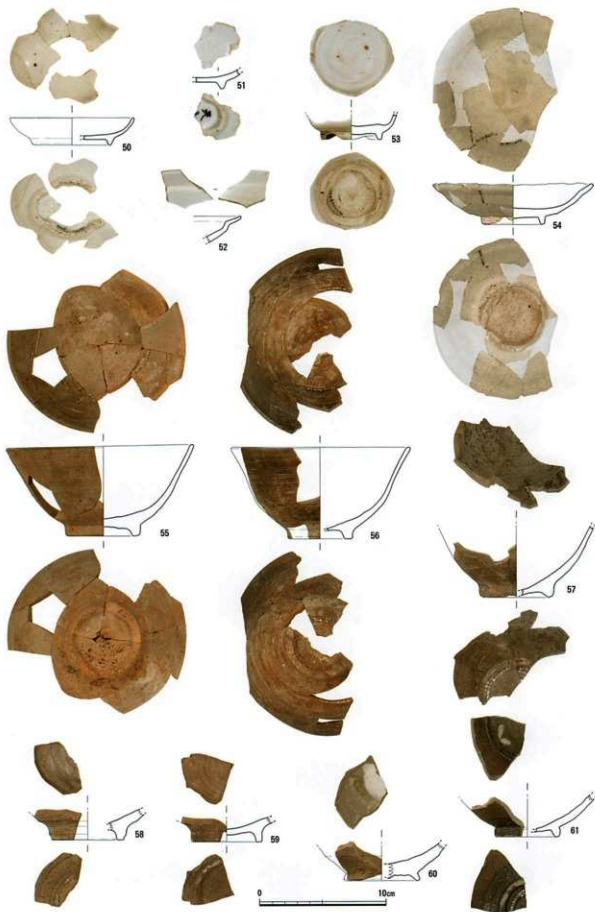
第28図 焼土層出土遺物実測図② (1/3)



第29図 焼土層出土遺物実測図③ (1/3)



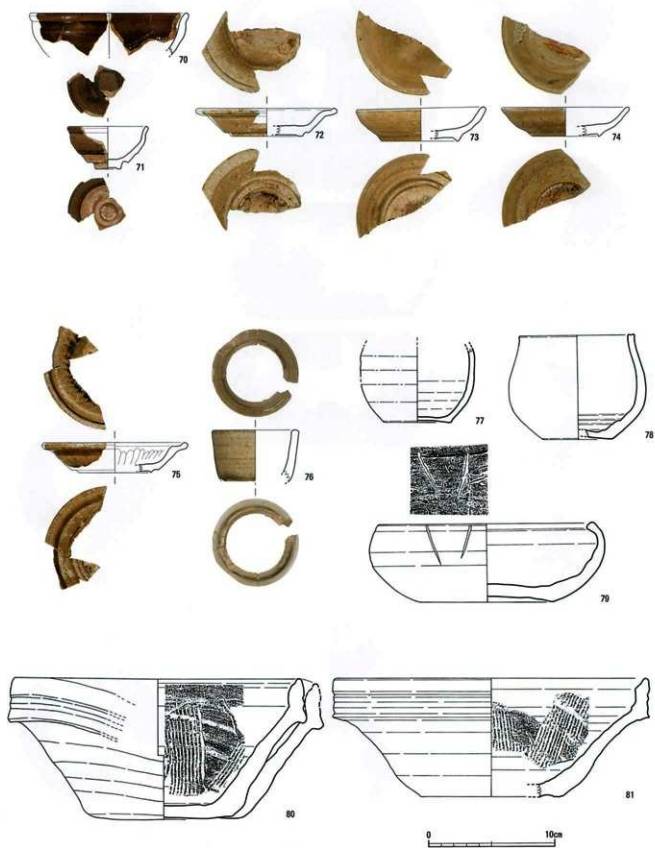
第30図 焼土層出土遺物実測図④ (1/3)



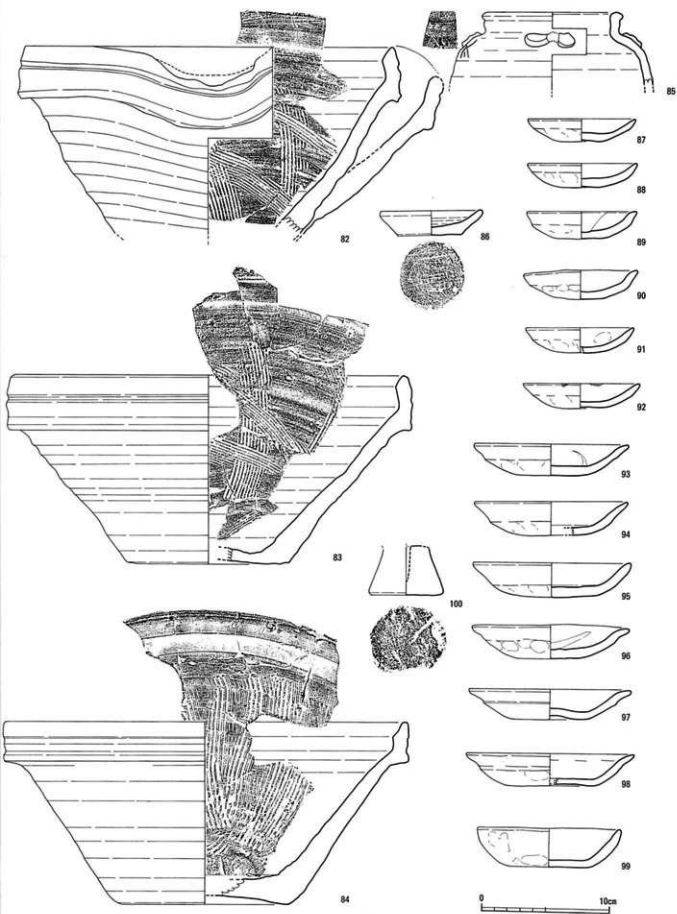
第31図 焼土層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第32図 焼土層出土遺物実測図⑥ (1/3)

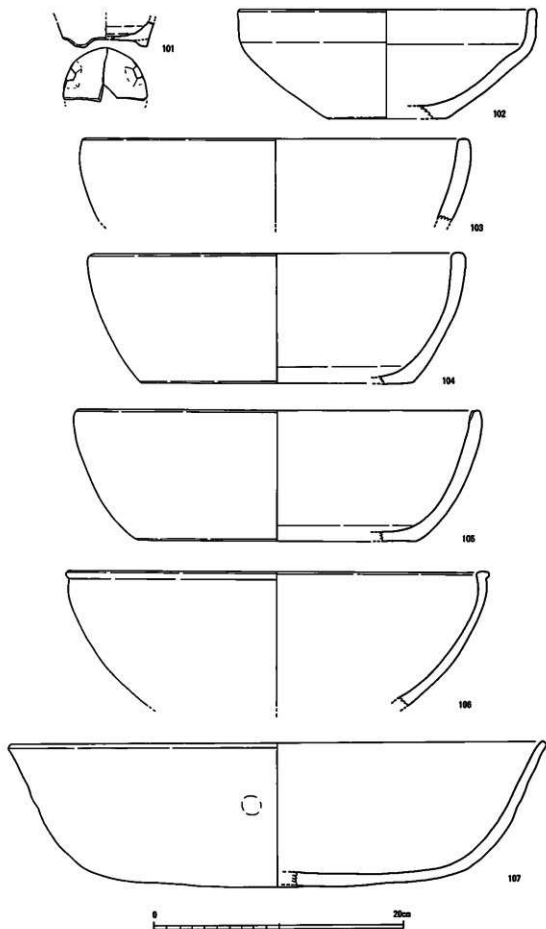


第33図 焼土層出土遺物実測図⑦ (1/3)

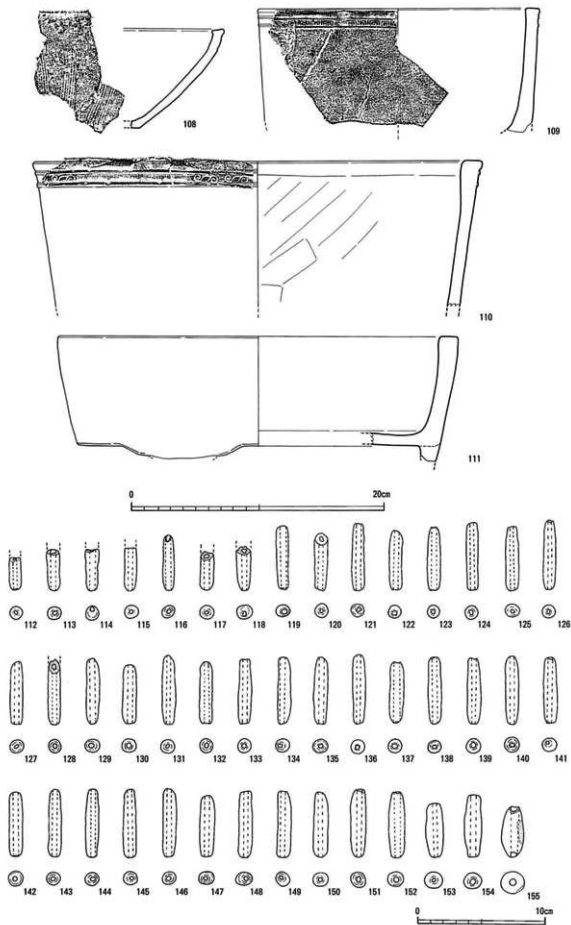


第34図 焼土層出土遺物実測図⑧ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第35圖 焼土層出土遺物実測図⑨ (1/3)



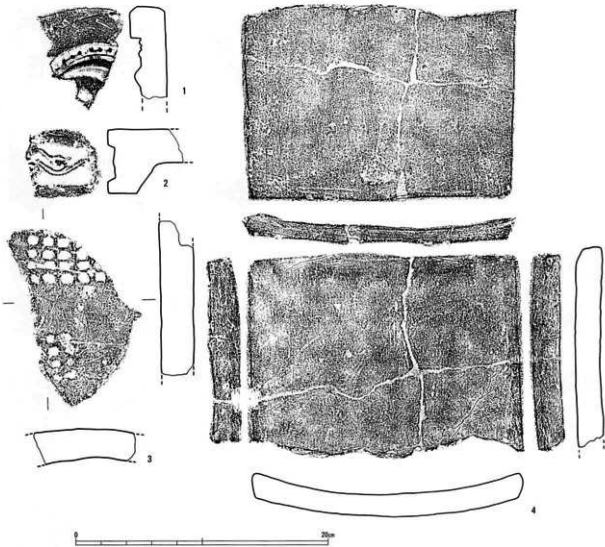
第36図 焼土層出土遺物実測図⑩ (1/3)

第2節 遺構と遺物

いる。馬は手綱を装着した状態で表現されており、緑釉を基調としながら、目の部分に褐釉、手綱の一部に黄釉が施されている。管見の限りでは、類例が発掘資料および伝世品にも見当たらず、華南三彩の馬形水滴としては、現状で本例が唯一の資料である。35～37は青釉小皿の破片で、内外面に鮮やかなコバルトブルーの青釉が施されている。38は円盤状の製品で、用途不明の資料である。端部付近に未貫通の窪みが1箇所認められている。胎土は磁胎のものが使用されている。39～46は中国産の青磁である。39・40は碗で、前者の口縁部は口鎔となり、後者の胴部には退化した蓮弁文が施されている。41～43は輪花皿で、このうち42については内底部に透明釉が施された裏白となっており、景德鎮窯系の青磁皿と推定される。44は大皿（盤）で、胴部内面に銘文を有し、内底部は蛇の目状に釉剥ぎする。龍泉窯系の製品である。45・46は壺または瓶類の破片である。45については、外面に片彫り文様とともに貼花による梅花文が認められ、46については片彫り文様のみが認められる。これらも龍泉窯系の製品である。49～49および第31図50～54は、中国産の白磁である。47は碗、48・49は森田分類D群に分類される皿である。49については破断面に黒漆が認められ、漆継ぎによる補修が行われたことが確認できる。第31図50・51は木瓜形の皿で、後者の内底部には呉須による「天」字が認められる。当該文字は「天文年造」銘の一部と推定され、日本側から中国への注作品と評価されている製品である。「天文年造」銘は1行で描かれている可能性が高いと考える。52も中国産白磁皿の口縁部である。53は白磁で、口縁部と胴部を欠損している資料である。底部に三足を有することから、香炉である可能性が高い。54は口縁部が輪花となる白磁皿で、高台部周辺と外底部は露胎となる。55～61、第32図62～66は朝鮮王朝産陶器である。55～66は灰青釉碗で、器高が深く、見込みが高台内に窪むような断面形態を有するもの（55～61）と器高がやや浅く、見込みの部位に段を有するもの（62・63）の2形態に大別される。64は片口で、内外面ともに灰青釉が施されている。65・66は瓶（舟徳利）で、内面が露胎となり、当該部位に当具の痕跡が認められる資料が存在する。67～69、第33図70～76には瀬戸美濃系陶器を提示した。67～70は天目碗、71は小型の天目碗、72～74は皿、75は折縁ソギ皿、76は香炉である。このうち、72～74は大窯3期に分類される資料である。また、75の折縁ソギ皿は大窯4期に編年される資料であるため、やや新しい様相をもつ遺物である。この折縁ソギ皿は第2南北街路の島津進軍以降の復興面と解釈されている層から出土した破片とも接合しているため、混入品である可能性も考えられる。77～81、第34図82～84は備前系陶器である。77は壺の破片で、胴部以上を欠損する。78は器高がやや高く、丸味をもった胴部に内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ鉢である。79は浅めの器高と内湾する口縁を有するもので、口縁部外面にヘラ記号が認められる。80～84は擂鉢で、内面描目や口縁部形態の特徴から、80・81・84は中世6期、82・83は近世1期bの特徴を示す資料である。85は壺で、胴部に耳（把手）を有し、胴部外面にヘラ記号が認められる。86は土師質土器皿で、赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロ目目を有する在地系の製品である。87～99は京都系土師器で、87～93は皿、99は坏である。100は土師質土器燗台で、赤褐色系の胎土を使用し、底部には糸切り痕が認められる。中心部の孔は貫通していない。第35図101は土師質土器香炉で、内外面に丁寧なナゲが行われている。102～106は土師質土器または瓦質土器の鉢で、在地系の製品である。107は瓦質土器の鍋で、外面には指頭痕が認められる。第36図108は瓦質土器の擂鉢で、口縁上端に平坦面をもつ。109は口縁外面に二条の突帯を有し、突帯間に二連雷文を挿する瓦質土器火鉢である。器高がやや低く、小型の製品である。111は長胴形の瓦質土器火鉢で、突帯間に双頭蹠手唐草文を挿する。108・109はいずれも在地性のつよい瓦質土器製品と考えている。111も瓦質土器火鉢で、器高がやや低く、底部に板状の脚部を有する資料である。当該資料も在地系の製品であろう。112～115に提示したものは管伏土鍾である。法や重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。

木瓜形の
白磁皿
（「天文年造」
銘）

折縁ソギ皿
（混入？）



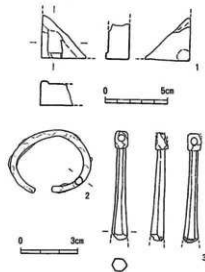
第37図 焼土層出土遺物実測図⑪ (1/3)

第37図には、瓦を提示した。このうち、1は軒丸瓦、2は軒平瓦、3・4は平瓦である。1の瓦当文様は巴文、2の瓦当文様は均整唐草文と推定される。1・2・4は中世末までの所産と考えられるが、3については外面に格子目叩き、内面に布目痕を有することから、古代瓦である可能性が高い。

赤間硯
鍵

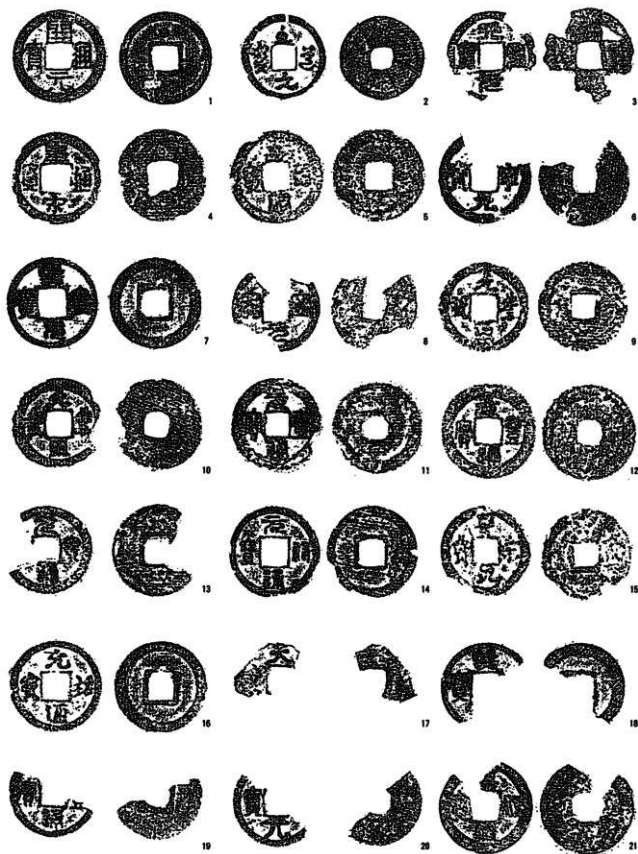
第38図1は、赤間硯の破片で、輝緑凝灰岩が素材として使用されている。2は銅製の環付金具で、用途は不明である。3は青銅製の鍵の破片で、柄部および柄環部が残存している。

第39・40図には、銅銭の拓影図を呈示した。初鋳造年や径、重さ等のデータについては、遺物観察表を参照されたい。

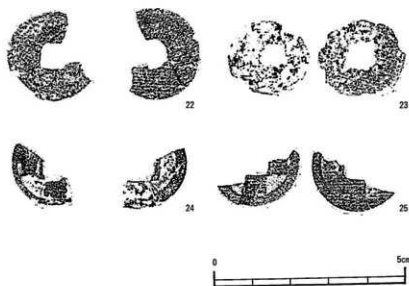


第38図 焼土層出土遺物実測図⑫

(1は1/3、2・3は1/2)



第30圖 鏡土層出土遺物実測図③ (1/1)



第40図 焼土層出土遺物実測図⑩ (1/1)

SX01 (第41図)

焼土層が被覆

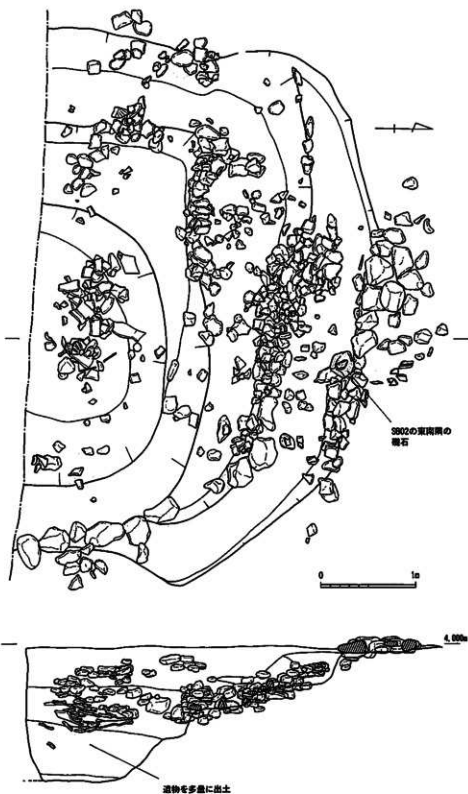
L13区にて検出された井戸状遺構である。東西は約580cm、南北は調査区南壁から約400cmで、市道の関係で、北半分のみを調査した。深さは約100~120cmで、遺構上面は大規模火災時の部厚い焼土層や炭層が遺構のほぼ全体を被覆しており、火災後に埋め立てられたことが分かる。掘形の東側は傾斜が強く、反対に西側では緩やかに落ち込む状況となる。竪穴遺構の外縁には幅40~50cmのやや大きめの石を緑石として一列廻らせ、SB02の礎石を組み込んだ形で石列を形成している。外縁の緑石のうち西側は東側ほど残存状況が良くないが、やや小ぶりな石を用いて東側同様に外縁に廻らされていたものと考えられる。中央部分では東西に直線的に三列の石列を配しており、底部にかけて階段状になっている。これらは西側の緑石同様にやや小ぶりな石を用いて石積状に積み重ねている。最も低くなる中心部分はやや東側寄りで、その西側の肩部にも石列が施されている。また、この中心の落込み内部からは備前焼の大甕の破片が折り重なって多数検出されているが、状況から見て、ここに据えられていたものというよりはまとめて廃棄された可能性が高い。また、埋土中からは瑠璃釉瓶や軟質施釉陶器碗などの優品も出土している。このような特別な遺物が周辺に存在し、礎石建物に伴い構築されたこの遺構は、石段沿い底に降りることができ、湧水などを直接汲むこともできる施設であったと想定される。

瑠璃釉瓶や軟質施釉陶器碗の出土

このように緑石や内部に石段状の石列等による装飾を施した井戸状の竪穴遺構であるが、土砂の堆積状況から、こうした石列の形成にもいくつかの段階が在ったことが分かる。南壁沿いトレンチによって周囲の状況を確認したところ、西側は土師質土器を多量に含んだ整地層がSX01の西側肩部を構成する造成土よりも下層に潜り込むことが明らかとなった。この土師質土器混りの整地層はSD09やSD11を覆い、部分的ではあるがSB01の礎石掘形の上面を覆っている一連の黒褐色粘質土層であるため、SX01はSB01が創建された段階ではさらに西側に広がっていたものと考えられる。また、SD09は第2南北街路東側側溝であるSD06に接続しており、道路からSX01への排水溝と考えられるため、SX01の初期段階はこうした排水を意図した施設であった可能性がある。土層断面のみでの確認だが、この段階でのSX01は緑石や石列等を廻らせたような姿は想定できず、輪郭もつかめないために、広さや深さなどの規模は判断できない。次の段階には西側を整地によって埋め立てられ、その際にSD09やSD11が埋没する。SD09の機能の喪失は道路側からの排水処理に変化があったものと考えられ、その一つにSD02の整備が想定される。SD02は名々小路を横断して称名寺の堀へと排水したも

第2節 遺構と遺物

のと考えられ、SX01への道路排水機能の喪失は排水ラインの変化として捉えられる。SX01はSB01にSB02が付設される段階で緑石や石列を廻らせたものへと変化している。



第41図 SX01実測図 (1/40)

SX01 出土遺物 (第42~57図)

「大明隆慶年
造」銘

第42図1~10、第43図11~21には、中国景德鎮窯系青花を提示した。1~6はE群青花碗、7はF群青花碗である。外底部に銘款を有するものとしては、1は「萬福収同」、2は欠損により不明、3・5は「精製」、6は「大明年造」である。また、7は「大明隆慶年造」と判読できる可能性が高く、生産年代が中国明代の隆慶年間(1567~1572)に限定できる資料である。8~10は小杯で、口縁部が外反する器形を呈する。11~13はB1群青花皿、14~19はE群青花皿である。外底部に銘款を有するものとしては、15・16・18・19があるが、18が「福」と判読できる他は、欠損のため不明である。また、17の見込みの文字は「壽」である。20は口縁部が外反する器形を呈する青花皿で、外底部に「富貴佳器」銘が認められる。焼土層出土資料(第28図12・13)に同一規格の製品がある。21は大皿(盤)で、外底部の二重圏線内に銘款を有するが、欠損のため判読不可能である。第44図22は外面に琉璃釉を施す瓶で、外底部および内面には透明釉を施し、高台登付部は露胎となる。胴部の横断面の形態は正円形とならず、仙臺瓶などの器形に復元される可能性が考えられる資料である。中国景德鎮窯系の製品であろう。23は大振りの黒釉陶器碗で、口縁部、高台周辺、見込みが露胎となる。また、見込みの露胎の部位には窯道具が置かれた痕跡があり、窯結みに際して重ね焼きが行われていたことが確認できる。伝世品・出土品ともに他に類例が認められない資料であるが、胎土や釉の状況から、中国産の製品と推定しておきたい。24~26は中国漳州窯系青花皿である。24については、C群青花皿の模倣品と思われる、見込みに「春」字が描かれている。27~29は中国産の白磁で、27・28は口縁部が輪花となる皿、29は器種不明であるが、鉢あるいは瓶の底部であろうか。30は皿の底部で、磁胎の胎土が使用されている。内外面に青釉、内底部に黄釉が施されている。これも中国産の製品である。31は中国産の青磁で、合子の口縁部と推定される資料である。第45図32~35は北部ベトナム産と推定される白磁碗で、内面に印花による唐草文が認められる。このうち、32・33の破断面には黒漆が認められ、漆継ぎによる補修が行われたことが窺える。34については、二次的被熱を強く受け、器表面が荒れている。36はタイ産の焼締陶器で、メナムノイ窯で生産された四耳壺である。これについても、二次的被熱によって、器表面が荒れている。37~40は朝鮮王朝産陶器碗である。37は枇杷色の釉を施し、見込みと高台端部に目跡が認められる。38~40は灰青釉が施された製品である。40については、見込みと高台端部に目跡が認められる。41は瀬戸美濃系陶器の折縁皿で、大窯3期に分類される資料である。42は軟質施釉陶器碗で、手捏成形によって製作された黒楽系の茶碗である。内外面の色調は「引き出し黒」と呼ばれる独特の黒色を呈する。胎土は暗褐色で、微細な白色粒子が混在する。J12区整地層(焼土混)、J12区第2南北街路硬化面直上、L12区SB02周辺、I12区整地層、SX01から同一個体と思われる破片が出土しており、すべてが接合するわけではないが、底部から口縁部までの破片が揃っている。SX01からの出土破片は土層観察用ベルトの「焼土混整地層」から取り上げられた記録があることから、天正14年(1586)の島津侵攻時かその直後のきわめて近い時期に廃棄された資料である可能性が高い。黒楽系の軟質施釉陶器としては、古い年代を示す資料として注目しておきたい。43は焼締陶器の小型壺で、胴部に竹管による円形文を押捺する。産地としては中国あるいは備前の可能性が考えられるが、前者の製品である可能性が高いと考えている。整地層・包含層出土資料として提示したものの中にも、同一個体あるいは類似の製品と思われる資料が存在する(第143図47~49)。44~46は備前系陶器で、44は瓶(徳利)の口縁部、45は無頸壺、46は鉢である。46の底部には小さな貫通孔が認められる。47は焼締陶器の高台付碗と推定される資料で、外面にナデ、内面にヘラミガキ状の調整を施し、外底部には静止糸切り痕が認められる。二次的被熱を受けており、最終的にSX01の埋土中に廃棄された資料であるが、産地・時期ともに現状では不明である。中世大友府内町跡第28次調査区の柱穴のひとつから、類似の資料が出土している(本書第2分冊第289図16参照)。48~51、第47図52・53、第48

埋土層

軟質施釉陶器
碗

第2節 遺構と遺物

図54～56、第49図57～60も備前系陶器である。48・49は壺、50～56は搦鉢、57～60は大甕である。搦鉢については内面摺目の特徴や口縁部形態から、51・54が中世6期、52・53・55・56が近世1期b、大甕については口縁部形態から、いずれも近世1期の特徴を有する資料である。第50図61～92は京都系土師器で、61～86は皿、87～92は坏である。このうち、61については、1期に編年されるもので、器壁が薄く、やや古い様相をもつ資料である。他は2期ないし3期に属する製品である。92も明らかに京都系土師器の坏を基本にして成形が行われたものであるが、口縁の平面形態が正円形とならず、一部を意図的に歪めて製作している。93は在地系の土師質土器小皿で、底部に糸切り痕を有する。この種の土師質土器皿の中では、口径が最も小さい規格に属する。94は耳皿の破片で、赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロロ目を有する在地系の土師質土器皿で製作されている。95～98は内面にクロロ目を有する在地系の土師質土器皿で、外底部に糸切り痕が認められるもの(95・97)と糸切り痕とともに板状瓦痕が認められるもの(96・98)が存在する。第50～55図には土師質土器または瓦質土器の製品を提示した。第51図99・100は土師質土器の香炉でいずれも口縁部を欠損する。内外面には丁寧なヘラミガキがなされている。類似の製品が、SB02周辺や焼土層からも出土しており(第23図43・第35図101)、在地系の製品と思われる。同一規格の製品が多数出土していることから、「開香炉」としての機能を有する資料であることも考慮しておきたい。101～104は土師質土器の鉢で、101・102は高台をもたず、内湾気味に立ち上がる口縁部を有するもの、103・104は高台を有し、口縁端部が大きく外反するものである。いずれも内外面にミガキが施されている。105・106は土師質土器の鉢あるいは皿で、いずれも広い平底をもち、105の内外面には刷毛目状の調整が認められ、106の内外面にはミガキが行われている。第52図107～111は土師質土器または瓦質土器の鍋である。107は底部外面に特徴的な叩き目が認められる。108は大きく外反する口縁部を有し、内外面には指頭瓦痕が認められる。109～111は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上方向つまみ上げるタイプの器形をもつ資料である。第53図112は土師質土器の井筒である。外面に刷毛目状の調整、内面には削りが施されている。SX01の性格を反映するものとして、注目しておきたい出土遺物である⁴⁾。113は瓦質土器の風炉である。脚部は欠損して存在しないが、底部の一部に脚部が剥落した痕跡が2箇所存在している。当該部位にはヘラ状工具で雑多な沈線を施し、底部と脚部の接着を強固にする工夫がなされている。第54図114～116は瓦質土器の鉢で、内外面にミガキが施されている。117・118は長胴形の器形を呈する瓦質土器の製品で、火鉢の可能性が高いと考える。119は瓦質土器火鉢の胴部破片で、在地系の製品である。底部付近の外面に2条の突帯を有し、突帯間に双頭線手流雲文を挿捺する。板状の脚部の一部が残存している。第55図120は瓦質土器の風炉または火鉢で、口縁外面には円形文を挿捺し、貼付けによる突起を有する。121は瓦質土器火鉢で、外面に突帯がなく、L字状に屈曲する口縁部を有する。前述した119とは異なる形態の資料であるが、これも在地系の製品である。122・123も瓦質土器の火鉢で、こちらは器高が低く、浅鉢形の形態を有する。

開香炉か？

土師質土器
井筒

(4) 中世大友府内町跡では、土師質土器の井筒をもつ井戸が、少数であるが検出されている。報告済みの遺構としては、第3次調査SE120・第14次調査SE270(SE312)・第19次調査SE006がある。いずれも16世紀後葉から末葉に比定される井戸である。

大分市教育委員会『大友府内5 中世大友府内町跡第3次調査報告』(2003年)45頁、第37図14

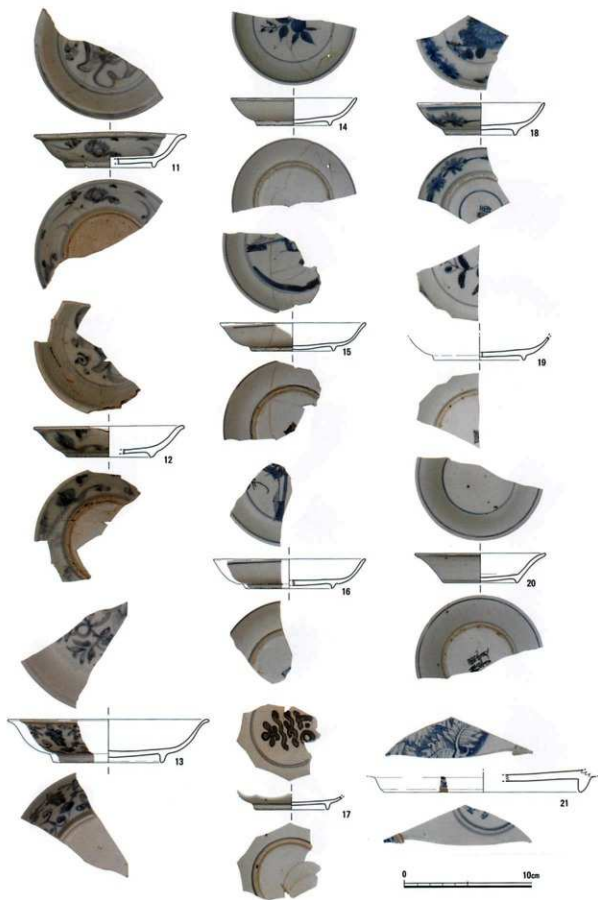
大分市教育委員会『大友府内6 中世大友府内町跡第14次調査報告』(2003年)36頁、第28図244

大分市教育委員会「中世大友府内町跡第19次調査」(『国指定史跡大友氏館跡一発掘調査概報Ⅲ-1』

(『大分市市内遺跡確認調査概報-2001年度-』所収 2002年)21頁、第26図



第42図 SX01 出土遺物実測図① (1/3)



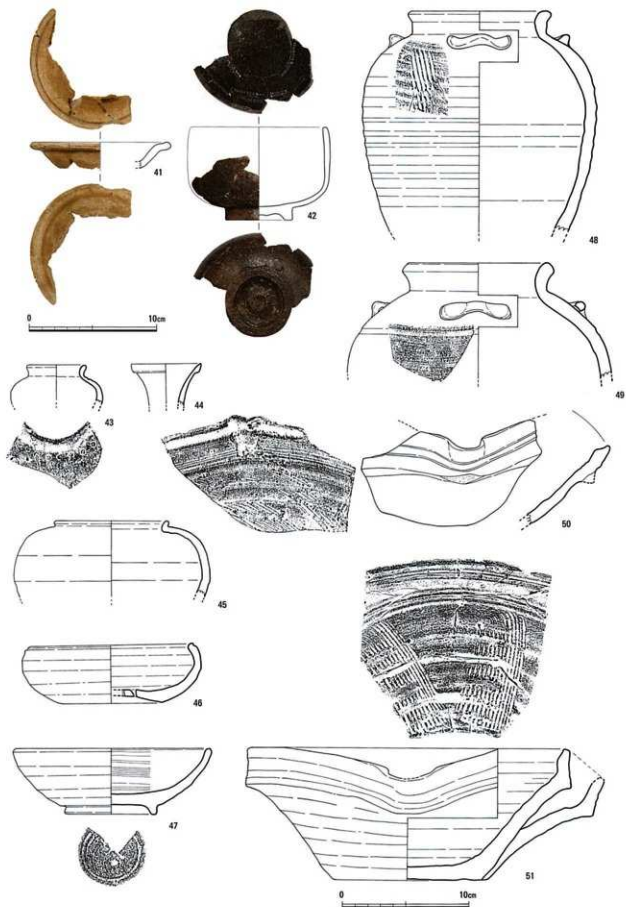
第43図 SX01 出土遺物実測図② (1/3)



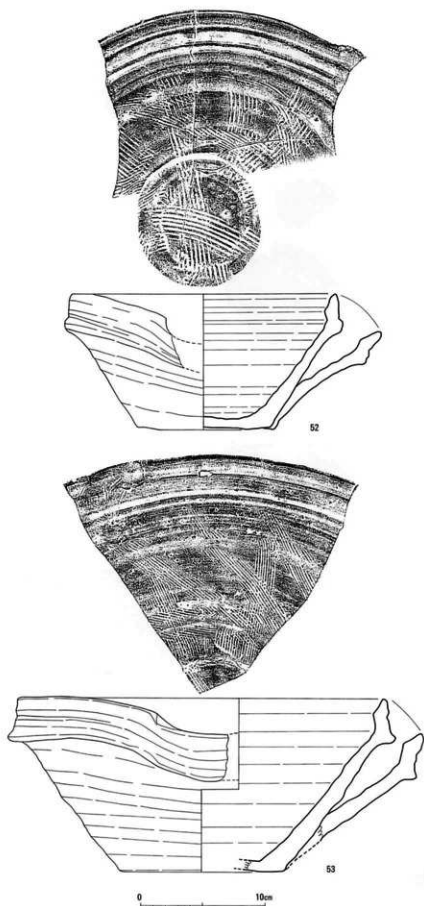
第44図 SX01 出土遺物実測図③ (1/3)



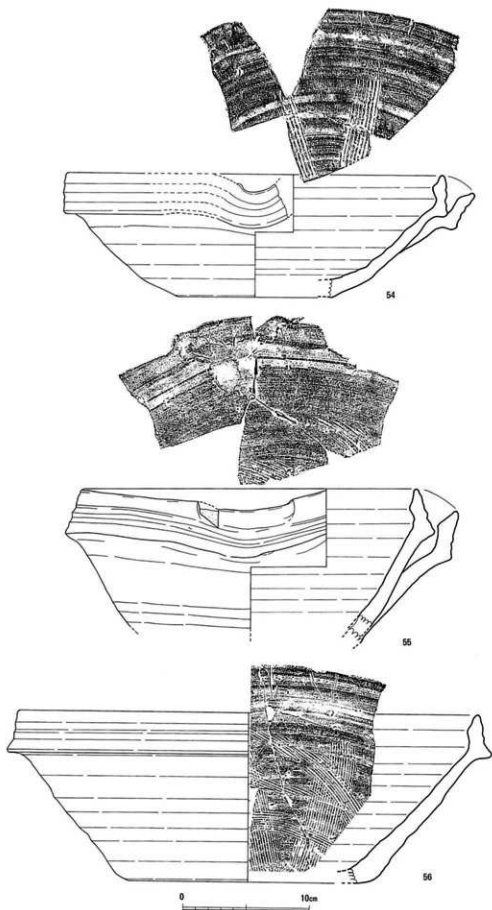
第46図 SX01 出土遺物実測図④ (1/3)



第46図 SX01 出土遺物実測図⑤ (1/3)

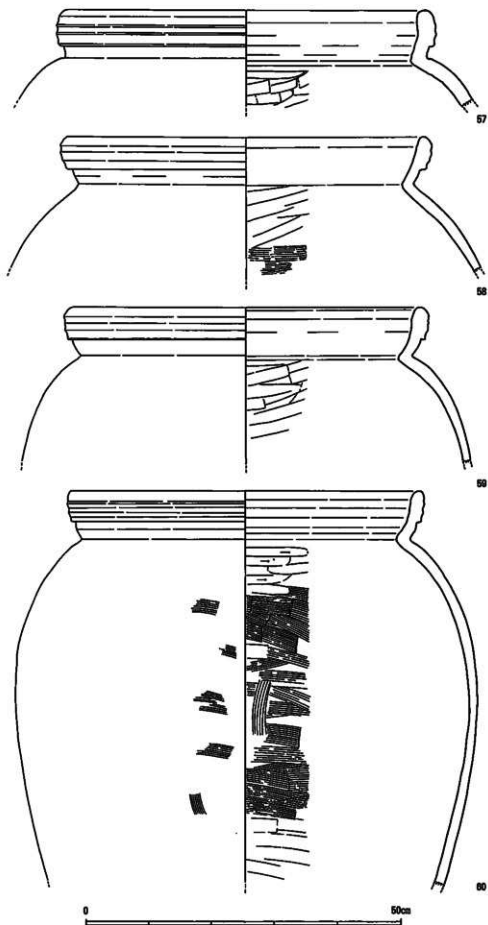


第47図 SX01 出土遺物実測図⑥ (1/3)

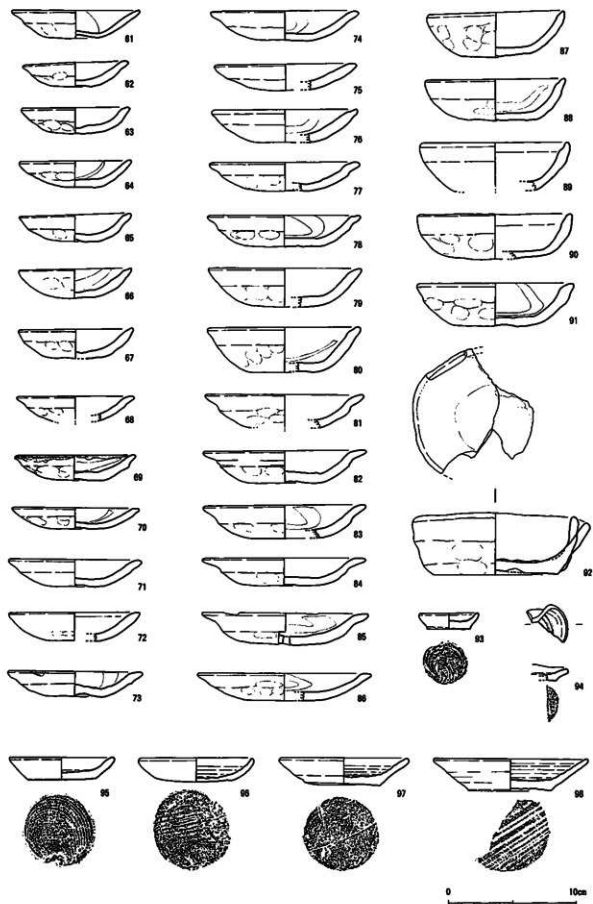


第48図 SX01 出土遺物実測図⑦ (1/3)

第2節 遺構と遺物

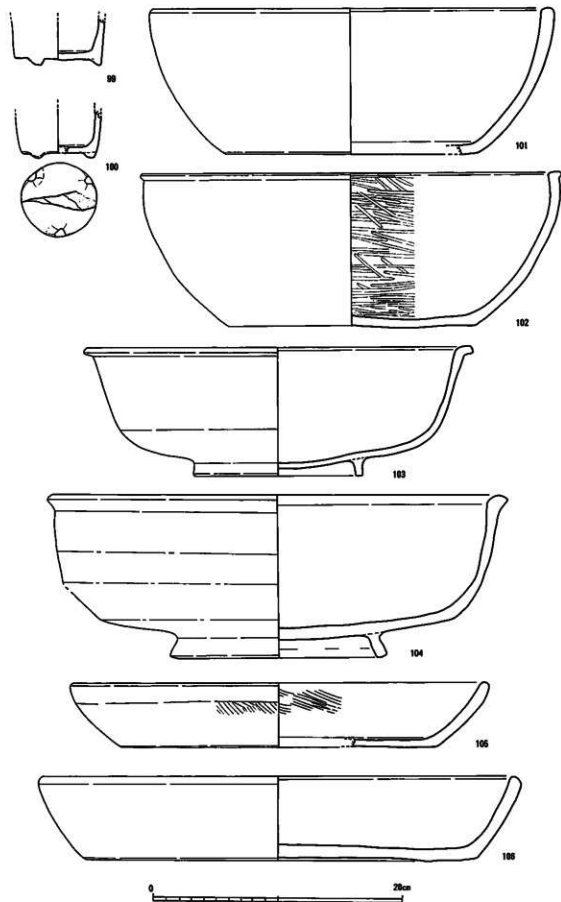


第49図 SX01 出土遺物実測図③ (1/6)

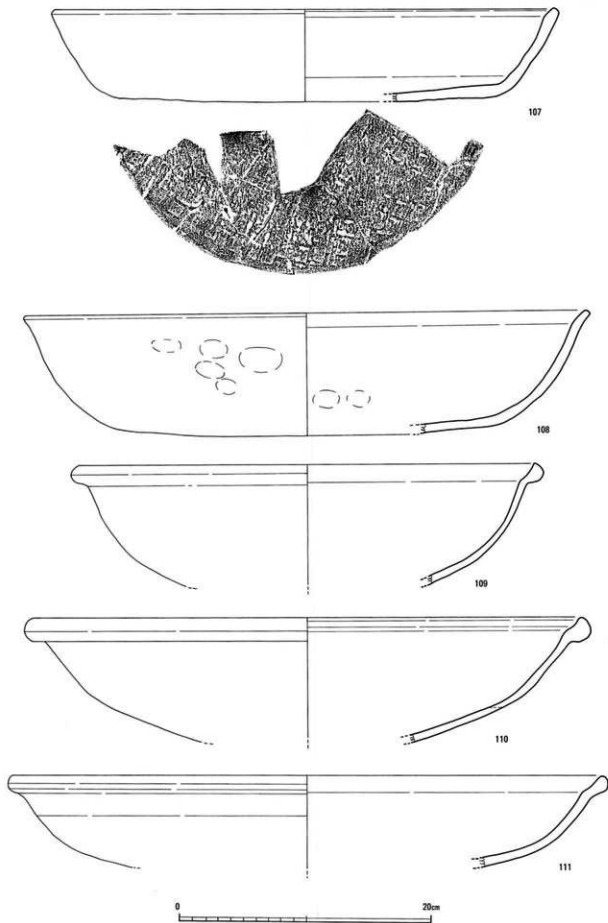


第50图 SX01 出土物実測图⑨ (1/3)

第2節 造構と遺物

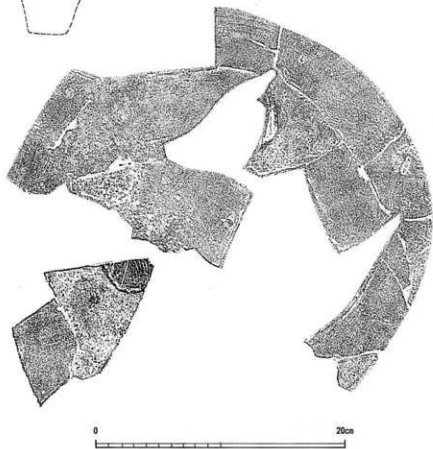
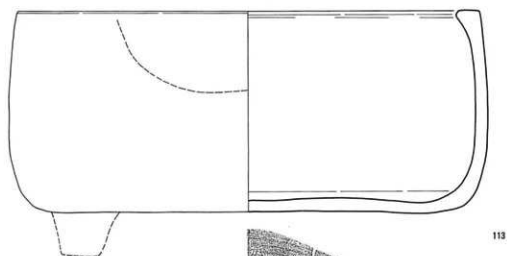
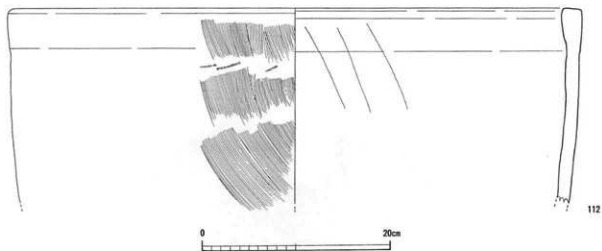


第51図 SX01 出土遺物実測図⑨ (1/3)

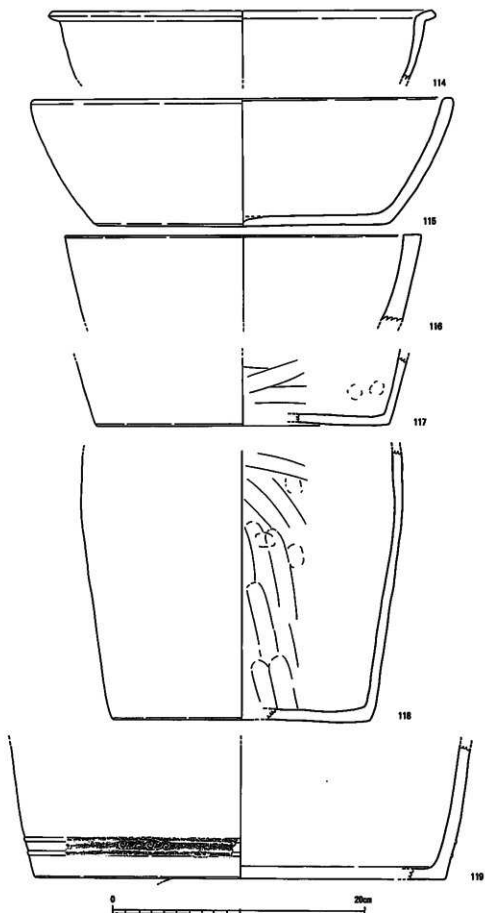


第52図 SX01 出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物

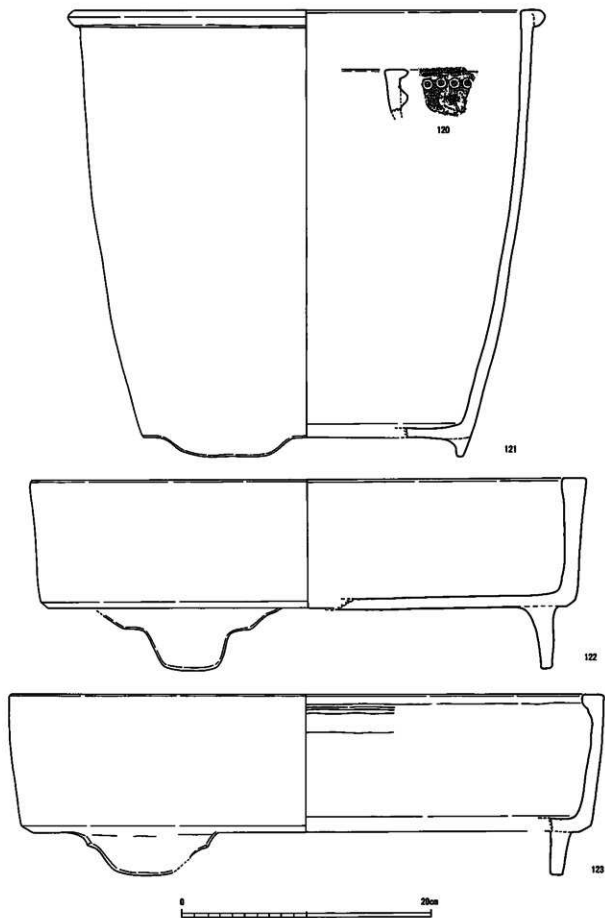


第53図 SX01 出土遺物実測図② (112は1/4、113は1/3)

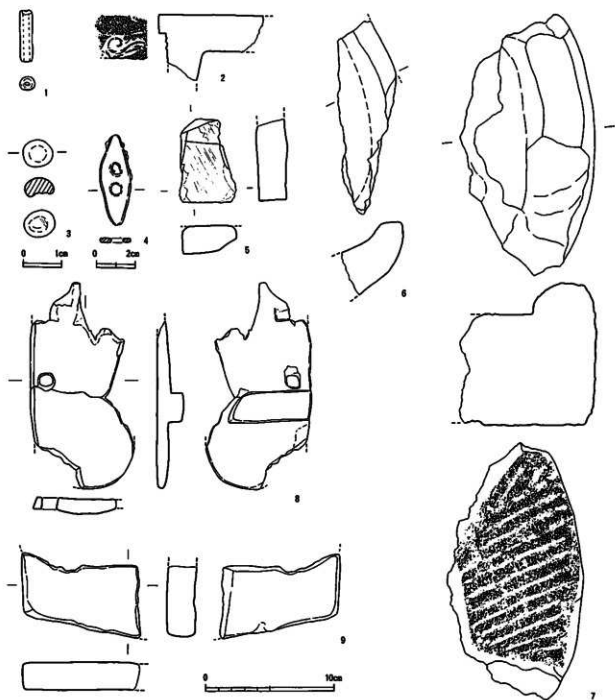


第54図 SX01出土遺物実測図④ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第56圖 SX01 出土遺物実測図④ (1/3)



第56図 SX01 出土遺物実測図㊦ (1・2・5～9は1/3、3は1/1、4は1/2)

第56図1は管状土鍾で、重さは5.2gを測る。
2は軒平瓦の破片で、瓦当文様の一部が残存している。
3は水晶製の小玉であるが、用途は不明である。
4は青銅製の幹である。5～7は石製品で、5は砥石、6は茶臼の鈎部、7は石臼の上臼である。
8は下駄、9は下駄の歯部である。第57図は銅銭であるが、銭文は錆出のため、判読不明である。



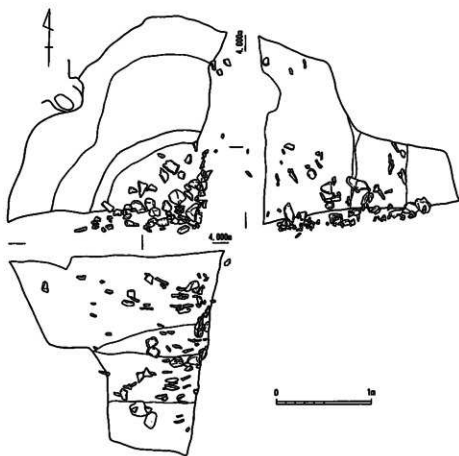
第57図 SX01 出土遺物実測図㊦ (1/1)

SX03 (第10回)

青銅製品
鋳造関連遺構

SX03はSB01の北西隅に接し検出された、青銅製品の鋳造等を行った炉跡と見られる遺構である。東西約80cm、南北約120cmで平面形が「Y」字状を呈し、緑青の混ざる炭が広がっている状況で検出された。遺構の西側は5cm程度の低い土盛りが見られ、東側にかけて緩やかな傾斜で下っている。土盛りの上面は厚さ約3cmの炭層が覆い、そこから東側へと押し上げたかのごとく、厚さ1cmに満たないほどの薄い炭層が南北へと広がる様相が確認できた。また、その南側では浅い窪みに厚さ約2cmの炭層が堆積しており、その内部からは数点の取瓶がまとめて検出されている。さらに、平面的な観察から、遺構の基盤層となっている灰色砂とは異なり、遺構の周囲の東西約120cm、南北約140cmの範囲は非常にきめの細かい灰白色シルトが広がっていることが確認された。

そこで、遺構の下部構造について調査したところ、盛土の下部は10cmに満たない深さで皿状に窪んでおり、非常に薄い灰白色や灰色シルト層、灰褐色砂層などの互層からなっていることが確認できた。その下層の灰色砂はより東側への広がり方が確認できたが、その北側では褐灰色砂質土、南側では砂礫を多く含む黄褐色粘質土がそれぞれ灰色砂の上面を覆う状況が見られたため、基盤の整地層であろうと考えられた。また、周囲に被熱した様相が観察できなかったことから比較的低温の操業であったものと考えられ、さらに広範囲に及ぶ基部構造の構築の可能性は低いものとみられる。少なくとも、先に確認した皿状の窪みが遺構の下部構造として築かれたものとして理解される範囲のものである。遺構の周囲からは緑青の付着した取瓶や鉄製の金挟等も検出しており、この一画が工房であった可能性が高い。しかし、上屋があったかどうかについては、それに該当するような柱穴等の並びは確認できず不明である。



第58図 SE01実測図 (1/40)

SE01 (第58図)

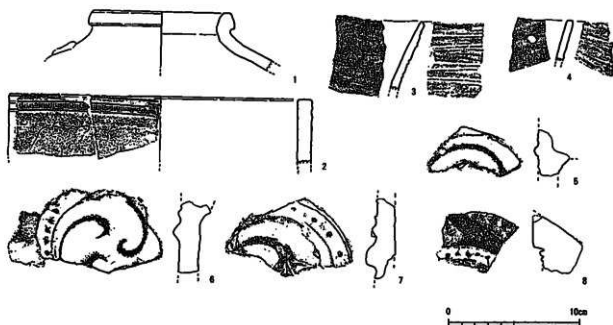
調査区南東隅にて検出した井戸で、掘形の約4分の1が検出された。掘形は2段となっており、1段目は復元的にみて直径4～5mと考えられ、深さ約1mを測る。2段目は直径約2mで、深さは約1.5mまでは掘り下げを行ったが危険性を伴うとの判断から未完掘で終了した。土層の堆積状況を確認したが、井筒部分は見られず、瓦礫の流入状況から見ても大きく抜き取られた可能性が高い。掘形の1段目上面に焼土層が覆っている状況からそれ以前に形成され、大規模火災後に井戸枠を抜き取り廃棄されたものであろう。以上のことから16世紀後葉から末にかけて機能したものと見ることができ、礎石建物に伴う井戸と考える。

SE01 出土遺物 (第59・60図)

第59図1は中国製の黒釉陶器である。2は口縁部外面に2条の並行する細い粘土を貼り付け、その間に雷文のスタンプを連続して押している在地系の瓦質の火鉢である。3・4は外面に横方向の条痕文で器面調整した縄文晩期の深鉢形土器である。5～8は巴文のある軒丸瓦である。この調査区の北側にある称名寺との関連が伺われる。

星孔銭

第60図は井戸の裏込め部から出土した銅銭である。「元豊通寶」の可能性が高い、星孔銭である。



第59図 SE01出土遺物実測図① (1/3)



第60図 SE01出土遺物実測図② (1/1)

第2節 遺構と遺物

SE03 (第61圖)

J12区にて検出した井戸で、西側の約3分の2の範囲がSD08によって切られている。掘形は2段となっており、1段目の直径2m前後とみられ、深さは約1mを測る。2段目は直径約0.9m、深さは約1.3mを確認した。井筒中に多量の礫が詰った状態で枠を組んだ様相はなく、井戸を廃棄する段階で枠組を破壊したか、投げ込まれたものであろうと考えられる。ただ、井筒の最下部がわずかに遺存しており、桶の可能性が強い。

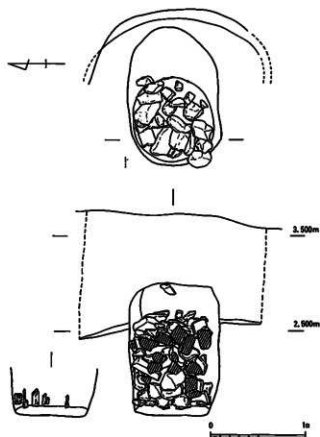
SD08に
切られる

SD08により切られることから、この調査区内で検出した遺構のうちで最も古い段階の遺構であるといえる。

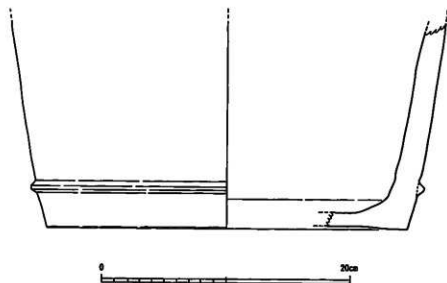
遺物は、井筒中の多量の礫に混じり、瓦質土器の火鉢が出土している。

SE03出土遺物 (第62圖)

図示した遺物は瓦質土器火鉢で、底部付近の胴部外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。



第61圖 SE03実測図 (1/40)

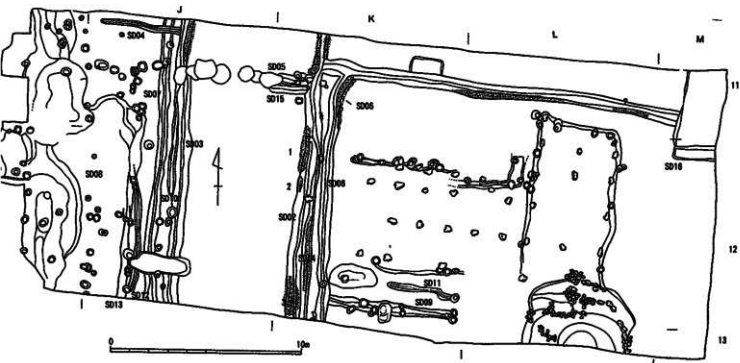


第62圖 SE03出土遺物実測図 (1/3)

第2 南北街路

J・K区で南北方向に検出された道路状遺構で、第2南北街路と考えられるものである。検出当初、街路面からSD01の上面にかけては多数の瓦礫により覆われている状況であったが、この瓦礫層の下面にて薄い焼土面を検出した。その下層は薄い褐灰色砂層や灰黄褐色シルト層などが互層となり、それらの間に薄くマンガンを鉄分が沈着した間層がみられたため、これを硬化面と判断した。調査では、各面ごとに段階的に下げていったが、全面検出したのは第2～3面までである。その他の面的な繋がり、調査区北壁沿いとJ・K区南北ベルト沿いに両道路を縦断するトレンチを設け、またそれぞれ横断するトレンチを部分的に設定することで確認した。第2南北街路では、およそ6面程度の硬化面が確認できた。ただし、さらに細かな単位で砂層が重なっていることから、実際は随時補修を行っていたものと見られる。道路の両サイドには側溝が配されており、東側はSD06・SD14・SD02、西側ではSD08・SD13・SD12・SD07・(SD10)・SD03が確認できた。道路のそれぞれのレベルについて比較すると、第2南北街路の調査区南端では地山面(削平面)が標高3.8m、街路面第1面は標高4.25mと街路面の度重なる補修で約45cmの高まりをもつ。それに対して調査区北端の交差点部では地山面が標高3.7m、街路面第1面が標高4.3mで約60cmの厚みで、地山面では交差点部が約10cm低い。調査区東壁の名ヶ小路では地山面が標高3.6m、街路面第1面が標高4.35mで約75cmの厚みをもち、最も嵩上げが行われていることが分かる。各面と町屋範囲の変遷状況、及び側溝の有無について各段階をおってみていくこととする。

街路面第6面では、西側SD08の埋土上面に街路面の砂が覆っていることから、SD08はすでに埋没しているものと考えられ、それに替わってSD13が掘られている。東側の道路区画を示すような遺構は特に確認できなかったが、街路面の砂は約11m東側まで確認された。また、街路面の中央では土師質土器片が多量に含まれた土を街路面に敷いている状況が確認された。SD13は街路面第5面の段階では埋没しており、街路面第4～3面で同位置にSD12が掘り直されている。西側は面的な対応関係が明確ではないが、町屋側が道のレベルよりも若干高くなっており、この段階以降に西側の範囲



第63図 第12次調査区街路及び側溝・緑石状石組位置図 (1/200)
※アミかけ部が緑石状石組

の造成がなされ、SD06などの側溝が巡らされるようになったものと考えられる。こうした状況は名ヶ小路の街路面第5面以降の横相と対応するものと見られ、西側低位部の積極的な開発利用が進んだ状況と読み取ることができる。また、交差点部では街路面第4～3面にかけて土嚢状のブロックによる街路面の嵩上げが行われている。その上面に形成された街路面第3面ではSD07が確認でき、交差点部では木戸が付設されている。街路面3～2面ではSD10・SD06へと変遷し、それぞれ焼土面に覆われて以降、掘り直されて利用されており、最終的には唐津を含む近世初期までは機能していたものと見られる。

街路幅の変遷について整理すると、SD08では街路幅の明確な標示がないために不明で、SD13では街路幅約11mであった可能性がある。SD12・SD14の区画では約8.6m、SD07・SD06が約8.4m、SD03とSD02が約6.0mとなる。このことから第2南北街路の街路幅は、竣工当時約11mであるが、最終的には6m幅の道路へと変遷していくことが分かる。街路面第2面上面には、名ヶ小路と同様に瓦礫や薄い焼土層に覆われており、名ヶ小路と同様に街路面第2面以降にSD03・SD02の掘り直しと街路面補修を行って復興している横相が窺える。

名ヶ小路

調査区の北端を東西に延びる道路状遺構で、南側に側溝（SD01）をもつ。検出当初、街路面からSD01の上面にかけては多数の瓦礫により覆われている状況であったが、この瓦礫層の下面にて薄い焼土面を検出した。その下層は薄い褐色砂層や灰黄褐色シルト層などが互層となり、それらの間々に薄くマンガンや鉄分が沈着した間層がみられたため、これを硬化面と判断した。こうした硬化面は最下層までの間、大きく分けておよそ7面程度の単位が確認できた。道路の幅は側溝などの区画により判断されるが、各面において側溝の有無に違いがある。各面と町屋範囲の変遷状況、及び側溝の有無について各段階をおってみていくこととする。

街路面第7面は南側低位部との比高は約1mで、街路面第6～5面では法面直下にSD16を伴っている。街路面第7面を交差点部まで確認していくと、名ヶ小路側が匙面状に窪んでおり、第2南北街路の最下面の下面になることが確認できた。東壁土層断面では、SD16は街路面第5面にほぼ対応する層から掘り込まれ、いく度かの掘り直しが行われたものと考えられる。この段階でM12・13区の南側範囲は街路面よりも50cm程下がって平坦面を形成している。また、第5面段階には南側低位部の段階的な造成がなされており、同面上にてSX05（段状遺構?）が形成されている。これに対応する面を交差点部まで確認していくと、K・L区では表面に砂利が多く、交差点部では鉄滓が多量に入る硬化面として形成されていた。鉄滓はごく一部であるが、砂利敷きの街路面を形成していた可能性がある。また、K・L区の街路面は匙面状を呈し、南にかけて反り上がっており、町屋側が街路面よりも10～15cmほど高まっている状況がみられた。特に交差点部は低まっていたと見られ、街路面第4面を挟んだ後に土嚢状のブロックによる街路面の嵩上げが確認されている。この嵩上げによって街路面と町屋のレベルがほぼ水平になっていることが確認できた。この街路面第3面までの段階には東壁付近では側溝と推測される掘り込みは見られず、調査区東壁では街路面からの整地土が南側へと水平に広がっている状況が確認できる。側溝が確実に掘り込まれているのは街路面第3～1面に対応するもので、SD01が平面的に確認できたのは1～2面の段階である。このことから街路面第3面までは連続した道路側溝は築かれていなかった可能性が高いと推測され、街路側溝が完成したのは第3～2面の段階と考えられる。第2面の上面には薄い焼土層と瓦礫や焼土を多く含む街路面整地層が確認でき、これを街路面第1面とした。こうした状況から、街路面第2面で大規模火災に合い、その後の街路面上には火災により産出された瓦礫を敷き込むことで、街路面の復興を図ったものと考えられる。このことは第2南北街路や町屋の横相とも一致している。名ヶ小路で

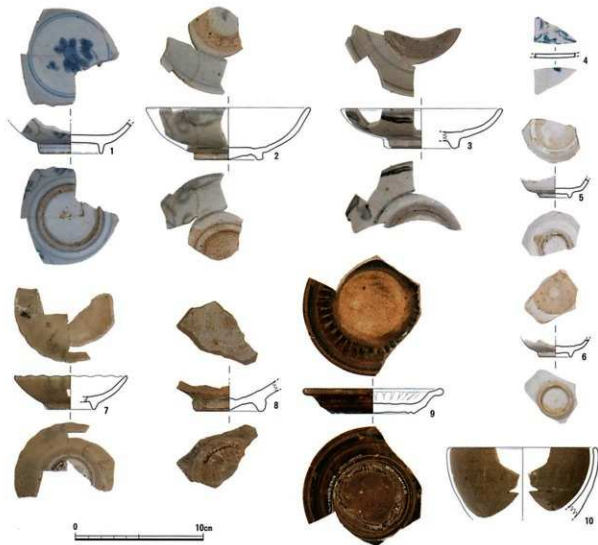
は街路幅の変遷があったかどうかは不明だが、少なくとも名ヶ小路南端を確認した限りでは第2南北街路のような側溝の位置的な変化は見られなかった。

第2南北街路出土遺物（第64～68図）

第64～67図は、第2南北街路の出土遺物の中でも、「街路面2」として取り上げられた遺物である。

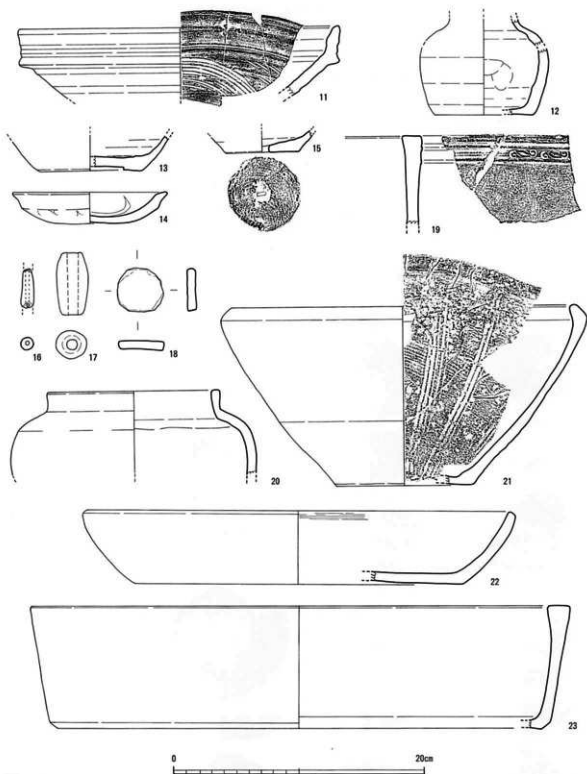
第64図1は中国景徳鎮窯系青花碗で、内底部は平坦になることから、F群青花碗に分類される製品である。2・3は中国漳州窯系青花で、3は碗、4は皿である。いずれも内底部は蛇の目状に釉剥ぎとなる。4は小片であるが、中国産の五彩皿で、見込み部分の破片と思われる。5・6は中国産の白磁小杯で、見込みが露胎となる。7は菊花形を呈する青磁皿で、これも中国産の製品である。8は朝鮮王朝産陶器碗で、見込みと高台端部に目跡が認められる。9は瀬戸美濃系陶器折縁ソギ皿で、見込みを除いた内外面に鉄釉を施す製品である。外底部には輪ドチ痕が認められる。大窯4期に比定され、16世紀末から17世紀初頭（1590～1610年代）の製品である。10は肥前（唐津）系陶器の碗で、内外面に土灰釉と呼称される深緑色の灰釉を施す。16世紀末から17世紀初頭（1590～1600年代）の所産となる製品である。

肥前（唐津）
系陶器



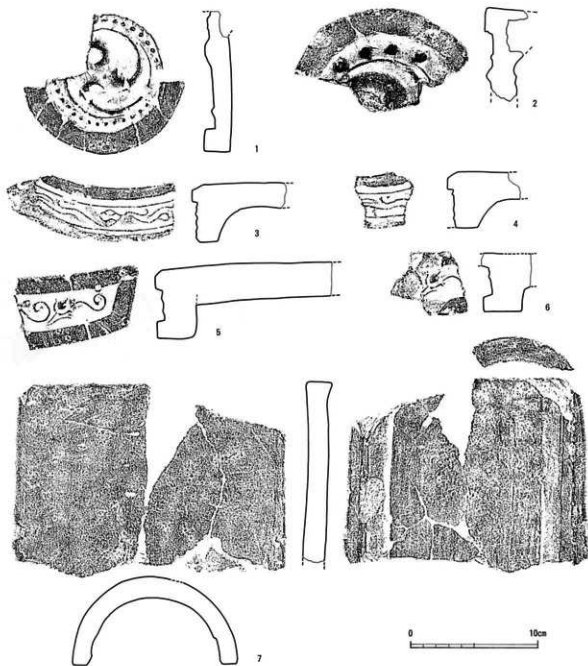
第64図 第2南北街路出土遺物実測図①（街路面2①、1/3）

第2節 遺構と遺物



第65図 第2南北街路出土遺物実測図②(街路面2②、1/3)

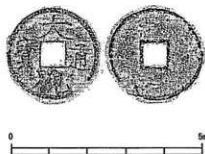
第65図11・12・13は備前系陶器で、11は近世1期bに比定される擂鉢、12は壺、13は瓶または徳利である。14は京都系土師器の皿で、2期ないし3期に比定される製品である。15は赤褐色系の胎土を使用した在地系の土師質土器皿で、底部に貫通孔が存在する。16・17は管状土錘で、法量等のデータは遺物観察表を参照されたい。18は瓦質土器を再加工した円盤状土製品である。19は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面に2条の突帯を貼付け、突帯間に双頭蕨手流雲文を押捺する。20は瓦質土



第66図 第2南北街路出土遺物実測図③ (街路面2③、1/3)

器壺で、胴部下半部から底部を欠損する。21は瓦質土器の掃鉢で、内面に刷毛目状の調整を施し、6条を1単位とする掃目が施されている。22、23も瓦質土器の製品で、22は皿、23は火鉢である。

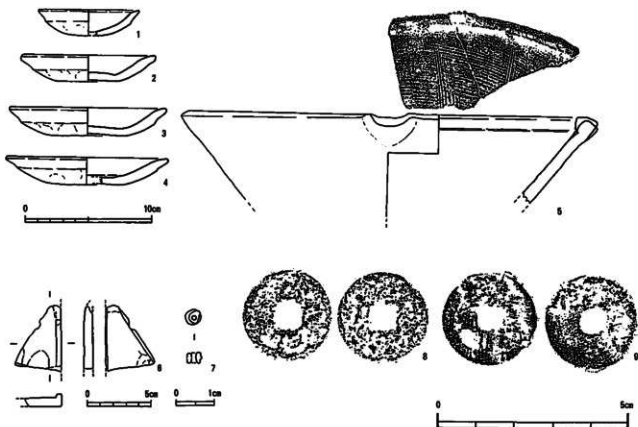
第66図1・2は軒平瓦で、いずれも互当文様は巴文である。3～6は軒平瓦で、均整唐草文を互当文様とする。このうち、3については大分県臼杵市臼杵石仏群地域遺跡軒平瓦IV類・大分市天面山城跡・上野遺跡・大友氏館跡第1次調査池状遺構・中世大友府内町跡第



第67図 第2南北街路出土遺物実測図④ (街路面2④、1/3)

軒平瓦

第2節 遺構と遺物



第68図 第2南北街路出土遺物実測図⑤ (1～6は1/3、7～9は1/1)

6次調査(旧萬壽寺)などで同范瓦が確認されている¹³⁾。7は丸瓦の大形破片である。8は北条銭で、初鋳造年1107年の「大観通寶」である。書体は真書である。

第68図には、第2南北街路の各層から取り上げられた遺物を一括して示している。1～4は京都系土師器皿で、いずれも2期から3期に比定される資料である。5は瓦質土器播鉢で、内面に刷毛目状の調整と掃目が認められる。6は輝緑凝灰岩を素材とした赤間硯の破片である。7はガラス小玉で、断面形態を観察すると、巻き上げ技法による製作の痕跡が認められる。8・9は銅銭であるが、錆出のため、銭文は判読不明である。

名ヶ小路出土遺物(第69図)

名ヶ小路出土遺物の中で、図示可能な資料を第69図に示した。1・2は軒平瓦で、いずれも均整唐草文を瓦当文様とする。このうち、2の中心飾りは四ツ菱文である。3は軒平瓦で、巴文を瓦当文様とする。4は道具瓦であると推定されるが、詳細な用途は不明である。5は丸瓦で、凸面には縄目叩きがスリ消された痕跡が認められる。6は甕状土鍾である。

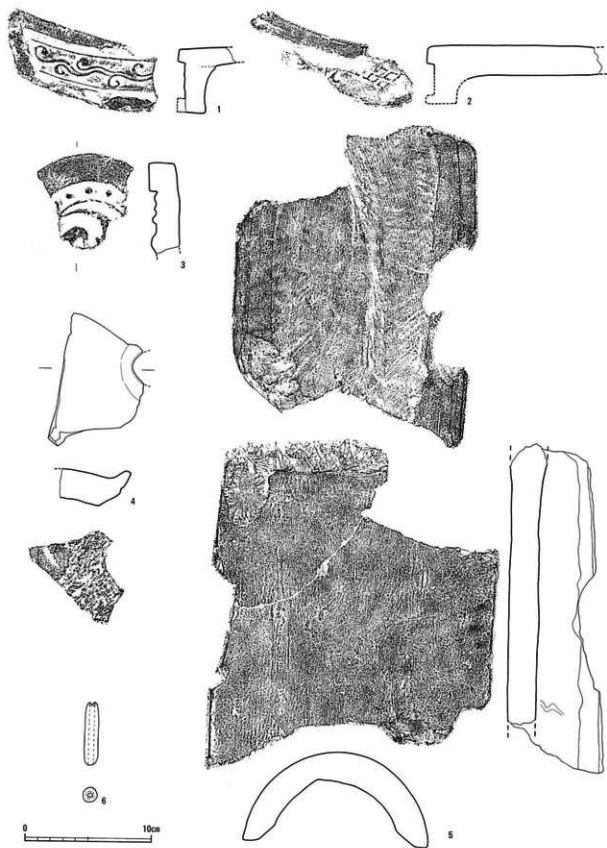
(5) 白杵市教育委員会『白杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』(1982年)

大分市教育委員会『上野遺跡』(1990年)17頁

河野史郎「第1・3次調査(大友氏館跡)」(『南蛮都市・豊後府内一都市と交易—大友氏館跡国史跡指定記念事業・中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年)

中世大友府内町跡第6次調査現地説明会資料および坪根伸也氏のご教示による。

吉田寛「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年的研究」(『山口大学考古学論集—近藤喬一先生退官記念論文集—』2003年)



第69図 名ヶ小路出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

SD01 (第70・71図)

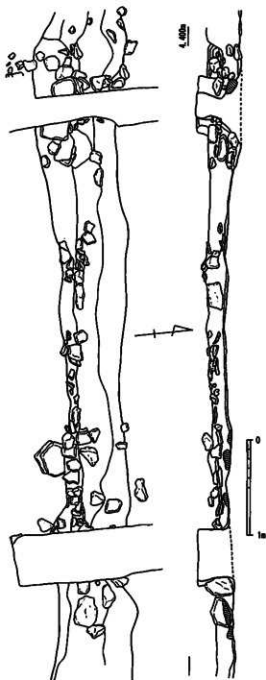
名々小路南側沿いに設けられた側溝で、幅約80cmを測る。第2南北街路との交差点部で、SD02、SD06と直交して接続する。SD06との接続段階ではL字状に連続しており、SD02段階では第2南北街路の幅が狭まるのと同じ、SD02が名々小路を横断して暗渠を形成し、それに対してSD01がT字状に接続する形態へと変化している。

SD01は3回以上の掘り直しが確認でき、SD01の南側(町屋側)にはL11区の約6m幅に部分的に縁石が巡らされている。縁石には30~40cm大の石を2~3石並べた所や10~20cm大の小ぶりな石を2~3段積み重ねた石積み状を呈する所、互敷枚を重ね並べた箇所が確認できる。これらは町屋側の礎石建物(SB01・02)と関係が深いものと考えられる。掘り直しの行われた各段階での規模についてはほぼ変化はないとみられるが、深さについては火災復興後には非常に浅いものになっている。最終的には瓦礫が投入され、近世初期には埋没してその機能を失ったものとみられる。

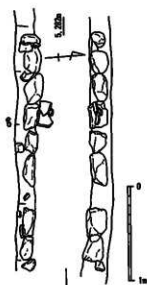
近世初期に埋没

SD02 (第72・73図)

K区にて検出した第2南北街路の東端を示す側溝である。第2南北街路の街路面第1・2面からの掘込みが確認でき、焼土層を切っている。幅約60cm、深さ約35cmで、埋土は大きく上・下2層に分層できる。下層については焼土を含まないことから、火災後に構築されているものと見られSD03と同様である。交差点部においては名々小路のSD01とT字状に接続しているため、



第71図 SD01 縁石状石組1
実測図 (1/40)

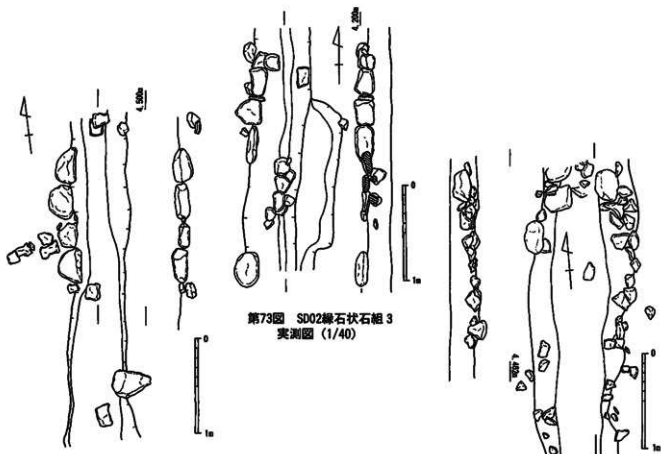


第70図 SD01 縁石状石組2
実測図 (1/40)

名々小路を切って横断する形となる。その横断面所には道路下に板石を丁寧に組んで側壁とした暗渠状の石組を形成している。その延長線上には称名寺の堀が通っていると考えられ、恐らくはその堀に接続し、廃水処理していたと推測される。検出時には石組の上面に瓦礫が集積し、その一部が落ち込む状況であったため、石組上面には板のようなもので覆っていたものと考えられる。SD02の町屋に面する辺りでは部分的に緑石状石組が配されており、特にSB01の西側正面に位置するため、その関係性が窺われる配置となっている。また、緑石状石組の配置について、SD01では町屋側のみ見られたが、SD02では西側の街路側にも配されており、SB01との関係性も含めてこうした違いにも注目できる。

SD03 (第74図)

J区にて検出した第2南北街路の西端を示す側溝である。第2南北街路の街路面第1・2面からの掘り込みが確認でき、焼土層を切っている。幅約60cm、深さ約20cmで、埋土が上・下2層に分層できる。下層については焼土を含まないことから、火災後に構築されているものと見られる。こうした状況は東端のSD02と同様である。第2南北街路との交差点においては名々小路を横断し、緑石状石組を配していることから、SD02同様に暗渠を形成していたものと見られ、恐らくは称名寺の堀へと排水していたものと推測される。この暗渠状の石組はSD02の板状石材を組むものとは異なり、加工されていない自然石を石積状に積むことで形成されている。こうした違いが何に起因するかは定かでないが、時期としては大規模火災による焼土面の直後から近世初期にかけて機能したものと見ることができ、SD02と同時期のものと考えられる。



第73図 SD02緑石状石組3
実測図 (1/40)

第72図 SD02 緑石状石組2
実測図 (1/40)

第74図 SD03緑石状石組
実測図 (1/40)

SD04

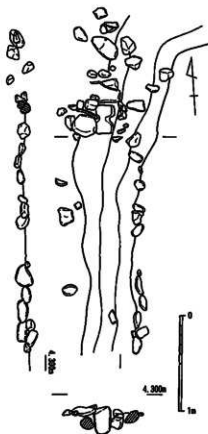
J11区にて検出された小規模な溝で、第2南北街路を挟んで名々小路南側沿いに設けられた側溝とみられる。第2南北街路の西端に配されたSD10にT字状に接続し、約4.5m西にて収束している。SD04はSD03に接続するものの、SD03に切られているため火災後の掘り直しはなかったものと考えられる。

SD06 (第75図)

K区にて検出した第2南北街路の東端を示す側溝で、名々小路側溝のSD01に切られているが、緩やかにカーブして接続するため、SD06とL字状に接続していたものと見られる。その接続部付近には町屋側に緑石状石積が確認され、道路側には石造物を転用した石組が確認できる。また、その上面には礎石の様に据えられた上面平滑な石やその下面にも地輪と見られる石造物が据えられた状態で検出されており、木戸に関連する可能性がある。SD06は幅約60cm、深さ約30cmを測り、断面U字形を呈する。1回以上の掘り直しが行われているとみられ、調査区南壁の土層断面でそれを確認できる。第2南北街路西端を示すSD07と対応するものと考えられる。

SD07

J区にて検出した第2南北街路の西端を示す溝である。第2南北街路の街路面第3面からの掘り込みが確認できる。溝の掘形は幅約60cm、深さ約20cmを測る。南から直線的に北側へと延びており、調査区の北端までの連続が確認できる。このことから、名々小路を横断して配置されていたものと考えられる。また、SD04に切られている。第2南北街路の街路面の繋がりからは東端のSD06と対応する可能性が高いと考えられる。また、木戸跡と考えられる柱穴の形成についても街路面第3面に相当しており、関連性が窺われる。



第75図 SD06 緑石状石組実測図 (1/40)

SD09

K13区にて検出した東西に延びる溝で、幅約40cm、深さは西端で約20cmを測る。土師質土器混りの整地層と呼ぶ京都系土師器を多量に含む整地層の下層にて検出された。第2南北街路沿いのSD06に切られるが掘り直しも考慮されるため、これに接続していたものと見てよいと思われる。
第2南北街路とは直角とならず、若干角度の振れる名々小路筋とほぼ併行する。東側のSX01へと向かうように真っ直ぐ延び、東にいくにつれて徐々に浅くなり、L13区に入った辺りで消滅する。これはSX01の初期段階と関係していたものとみられ、道路側溝からSX01へと排水するための溝であったものと考えられる。また、SB01の礎石列とも併行するため、地割の境界を示している可能性も考慮される。こうしたことから、SD06の付設とSB01の創建、SX01初期段階と同時期に形成された可能性が高いものと考えられる。

SD10

J12・13区、SD03の西側肩部にて検出された溝で、SD03により大幅に切られているために部分的な検出である。幅約30cm、深さ約10cmと他の側溝に比較して小規模である。また、埋土には厚い焼土とその下層に薄い炭屑が木樋状に入っていることが確認された。焼土・炭の検出状況からみて、その場で焼かれて形成された一次堆積のものとみられる。こうした他の側溝とは異なった様相を持つことから何らかの施設の下部構造の可能性もあるが、他の測溝と同じ位置で同じ方向に掘り込まれており、一応、溝の一部と理解し、位置関係からSD04と接続し、大友氏館跡の東北隅を位置づける。

大友氏館跡

SD11

K13区にて検出された東西方向に延びる幅20cm、深さ10cmほどの小規模な溝である。SD09同様、土師質土器混りの整地層の下層にて検出された。検出できたのは全長約3.2mで、西端が丸く収束し、東側で彎形に屈曲している。東側にて途中で消滅する状況はSD09と同様であり、時期的にもほぼ同じである可能性が高い。また、SB01南端の礎石列から約1.2m南でほぼ併行に配されるため、何らかの関連を持つものと思われる。

SD12

J12・13区にて検出した第2南北街路の西端を示す溝で、SD13と同様のものである。第2南北街路の街路面第4～3面を掘り込んで形成されている。幅約60cm、深さ約20cmとSD13に酷似するが、若干東側に寄った配置となっている。こうした平面的な位置関係やその規模からみて、街路面の補修・整備とともにSD13の掘り直しとして築かれたものであろう。平面的にはSD13同様に北端部分が明確に検出できなかったが、途中で収束あるいは西側の低位部外縁を巡っていた可能性が高いものと考えられる。第2南北街路の街路面の繋がりで見れば東端のSD14あるいはSD07に対応していた可能性がある。

SD13

J12・13区にて検出した第2南北街路の西端を示す溝である。第2南北街路の街路面第5面を掘り込んで形成されている。幅約60cm、深さ約20cmと小規模な溝である。平面では南から直線的に北側へと延び、SD08の東側掘形との切り合いを確認したが、SD08埋土との平面的な区別がつかず明確に検出できていない。しかし、第2南北街路の交差点までは至っておらず、途中で収束していた可能性が高いと考えられる。第2南北街路初期段階の側溝と考えられるが、東側ではこれに対応する側溝を確認することができなかった。

SD14 (第76図)

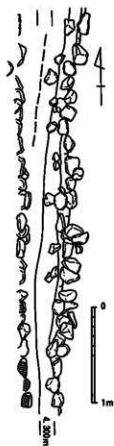
K区にて検出した第2南北街路の東端を示す溝である。SD02とSD06のほぼ中間に位置しており、SD02・SD06より下層にて検出した。掘形の西側はSD02によって切られるが、復元的にみて幅約60cmで、深さは約22cmを測る断面U字形を呈するものである。SD14東側肩部にはK12区南端から北へ約4mの幅に緑石状石組が付されている。第2南北街路東端で確認できた側溝としては最も古い段階のものである。SD02により切られているために街路面との直接的な対応は確認できなかったが、掘り込まれた面の高さからみて街路面第4面あるいは第3面に対応するとみられ、SD12もしくはSD07と対応する可能性がある。それぞれで街路幅を比較すると、SD14とSD12では約8.6m、SD07とは約7.6mとなる。SD14の次の段階ではSD06が掘られているが、SD06とSD07では約8.4mである。SD07はSD06

第2節 遺構と遺物

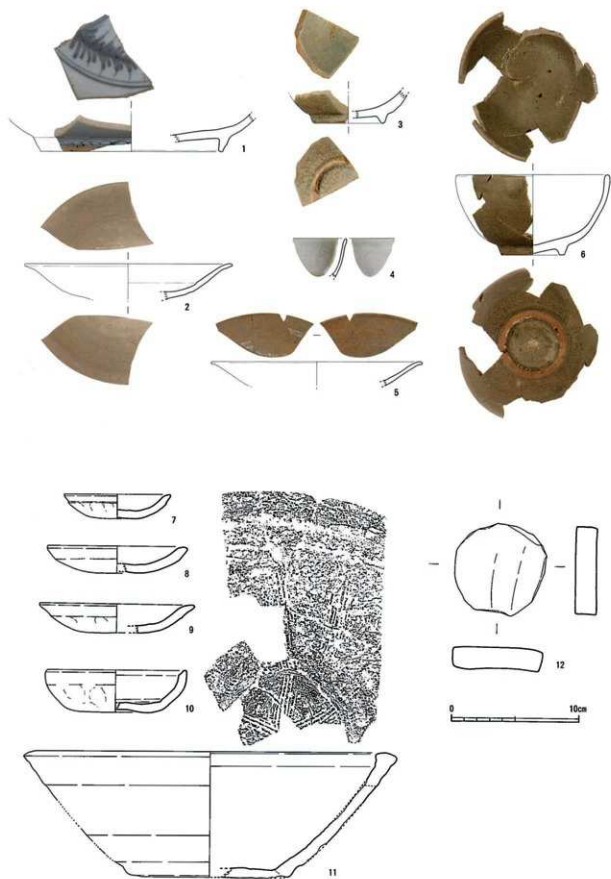
とのレベルがほぼ同じであり、面的な対応関係にあるためのエリアがこの段階では町屋として形成されていた可能性を示すものと考えられる。

SD16

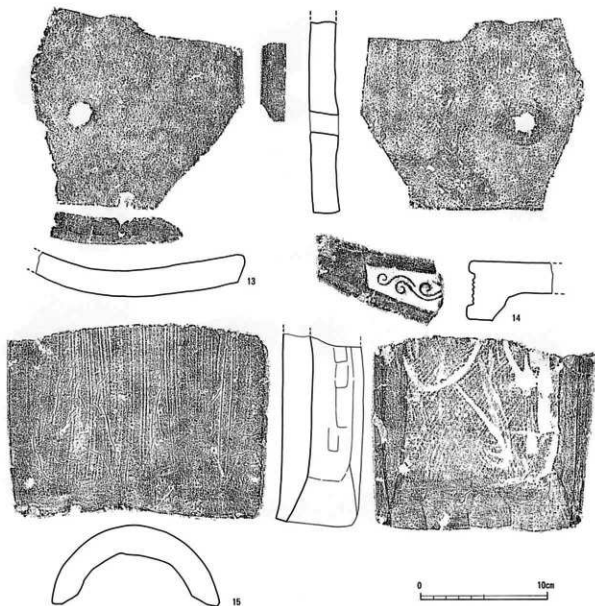
M12区にて確認した名ヶ小路の南側沿いに設けられた溝である。道路南側は路面よりも約50cm下がっているが、その境となる街路法面に沿って築かれている。溝の幅は約100cmを測り、街路面と溝底面との比高は約100cm、溝の掘形南側では約50cmを測る。溝底面の幅は約60cmで、比較的規模の大きな溝であるといえる。調査区東壁の土層断面にて確認すると、掘形は街路面第6～5面にほぼ対応するものと見られ、少なくとも2度の掘り直しがあったものと見られる。また、第5面段階の南側造成の際に埋没したものと見られる。



第76図 SD14 線石状石相実測図 (1/40)



第77図 SD01 出土遺物実測図① (1/3)



第78図 SD01出土遺物実測図② (1/3)

SD01出土遺物 (第77・78図)

第77図1は中国景徳鎮窯青花大皿(盤)で、16世紀後葉の所産である。2は中国産の白磁皿で、森田分類のD群に分類される。3・4も中国産の白磁製品で、3は碗の底部、4は小杯の口縁部である。5は朝鮮王朝産陶器で、口縁部の破片である。6は肥前(唐津)系陶器碗で、土灰軸と呼称される深緑色の軸を施軸しており、高台畳付部を除いて、高台内面まで施軸されている。見込み、内面ともに目跡は認められず、16世紀末葉から17世紀初頭(1590~1600年代)の所産である。SD01の所産年代を示唆する遺物である。7~10は京都系土師器で、7~9は皿、10は坏である。11は瓦質土器の播鉢である。12は瓦質土器を再加工した円盤状の加工品である。第78図13は平瓦で、釘孔と思われる貫通孔を有する。14は軒平瓦で、瓦当文様は均整唐草文と推定される。15は丸瓦で、凸面にカキメ状の調整痕、凹面に布目痕・吊り紐痕・内叩き痕が認められる資料である。内叩き痕については丸瓦の成形時に生ずる痕跡であるが、中世大友府内町跡においても、このような痕跡を有する丸瓦が少量出土している¹⁰⁾。

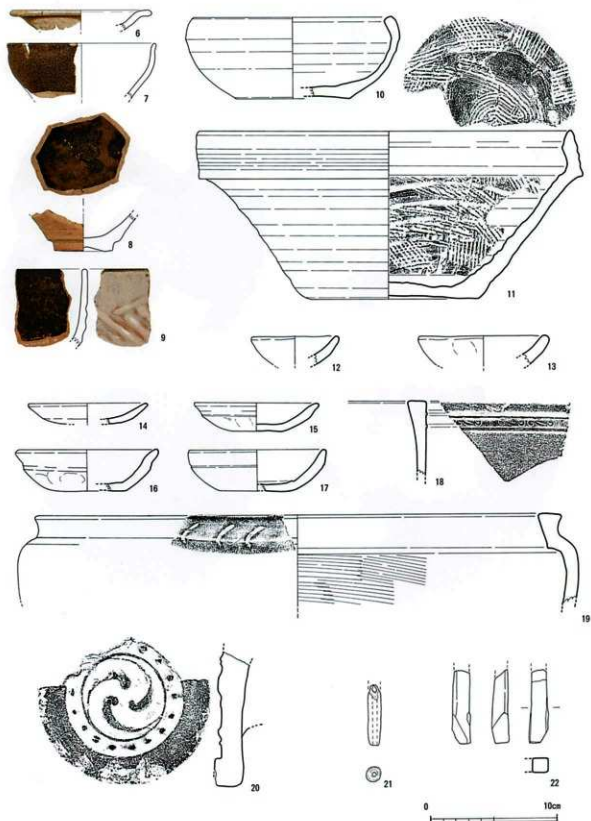
肥前(唐津)
系陶器

内叩き痕



第79図 SD02 出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物

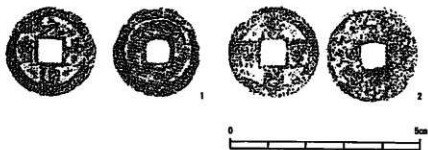


第80図 SD02 出土遺物実測図② (1/3)

SD02 出土遺物 (第79~81図)

第79図1・2は中国景德鎮窯系青花碗で、E群青花碗に分類される製品である。1・2ともに外底部に銘款が存在するが、1は欠損により一重圏線が認められるのみで、2は異体字銘となる。3は中国景德鎮窯系青花の壺または瓶で、外面に牡丹文が描かれ、内面は露胎となる。上端部の破断面は、胴継ぎの部位で破損している。4は朝鮮王朝産陶器で、灰青釉碗の口縁部である。なお、2・3はSD02とSD14からの出土破片が、遺構間接合している。5は中国産の褐釉陶器壺で、肩部に注口部と把手を有する。口縁内外面と胴部外面中位以上に薄い褐釉が施され、胴部外面下位および底部内外面と胴部内面は露胎となる。第80図6~8は瀬戸美濃系陶器で、6は折縁皿、7・8は天目碗である。9は軟質施釉陶器碗で、外面に白濁釉、内面に黒釉を施し、外面には幅広の沈線文を施文する。胎土は赤褐色を呈し、微細な白色粒子の混入が認められる。慶長年間(1596~1614)以降に京都あるいは大坂で生産された軟質施釉陶器碗の特徴を有し、類例が平安京左京北辺四坊(公家町)F区土壇F1605¹⁾で出土している。SD02の所産時期を示唆する遺物として、注目しておきたい。10・11は備前系陶器で、11は鉢、12は搦鉢である。12の搦鉢は、内面搦目が放射状搦目と斜め搦目を交差させる特徴から、近世1期bに分類される製品である。12・13は土師質土器の取瓶で、内面には銅銹滓が付着している。14~16は京都系土師器で、14・15は皿、16・17は坏である。いずれも2期ないし3期以降の特徴を有する資料である。18は在地系の瓦質土器火鉢で、外面の突帯間に双頭嵌手流雲文を押捺する。19は瓦質土器の広口壺または火鉢で、口縁部外面に弧状の文様が施されている。これも在地系の製品である。20は軒丸瓦で、瓦当文様は巴文である。21は土鍾で、上端部を欠損する。22は砥石である。第81図1・2は銅銭で、いずれも初鋳造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。書体は前者が行書、後者が篆書となる。

軟質施釉陶器碗



第81図 SD02 出土遺物実測図③ (1/1)

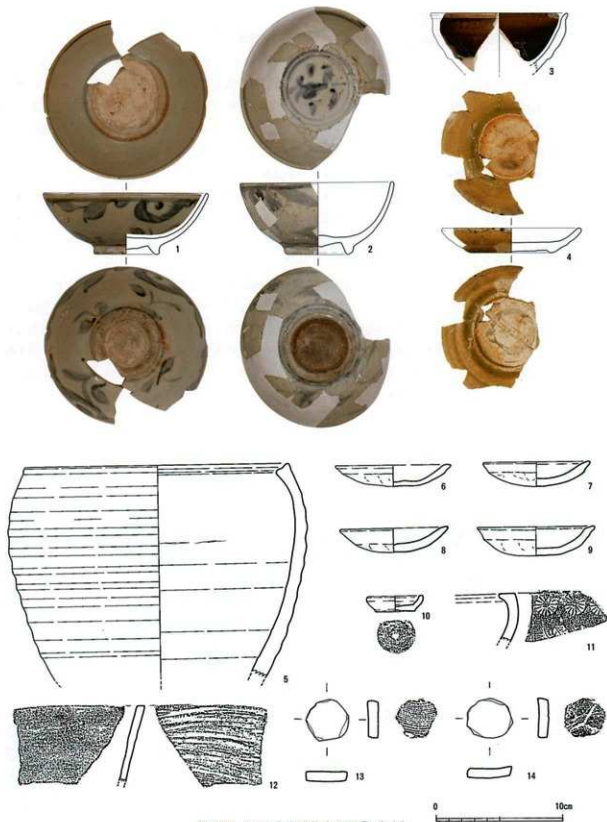
- (6) 例えば、中世大友府内町跡第5次調査B区SX131から、内叩き痕が残る丸瓦が出土している。ただし、中世大友府内町跡において、丸瓦凹面の内叩き痕は16世紀末葉には確実に出現していると思われるが、その初現の時期は、現状では確定できていない。

大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1 中世大友府内町跡第5次・第8次調査区』(2005年) 352頁、第474図5

また、丸瓦凹面の内叩き痕については、下記文献参照。

武内雅人「丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通」(『ヒストリア』173号 大阪歴史学会 2001年)

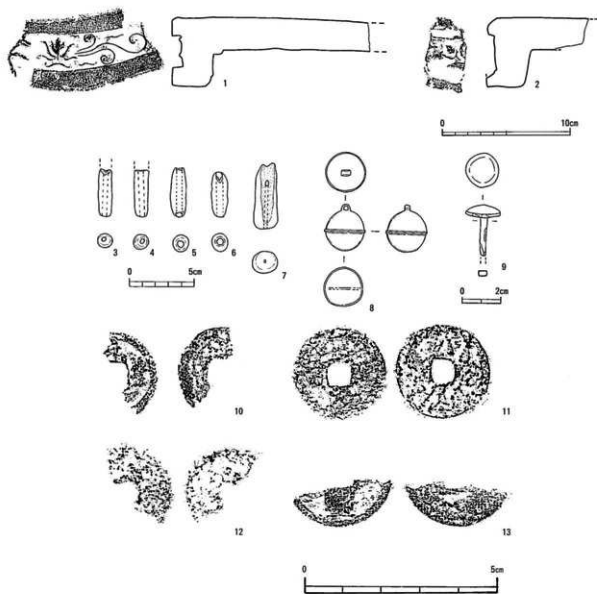
- (7) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊-第2分冊(公家町)-』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 2004年) 図版297-52



第82図 SD03 出土遺物実測図① (1/3)

SD03 出土遺物 (第82・83図)

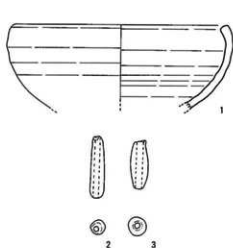
第82図1・2は中国漳州窯系青花碗である。1は高台内と見込みが露胎、2は高台内のみが露胎となる。なお、2についてはSP49・SD06・SD03からの出土破片が、遺構間接合している。3・4は瀬戸美濃系陶器で、3は天目碗、4は皿である。4の皿は内面が露胎となり、外底部には輪ドチ痕



第83図 SD03 出土遺物実測図② (1～8は1/3、9は1/2、10～13は1/1)

が残存している。5は備前系陶器の深鉢で、外面には顕著にロクロ目が残存する。口縁端部にはかえりが存在し、蓋等の付属品を有していたと推定される製品である。見立てにより、「水指」などとして使用された可能性も考えられる。6～9は京都系土師器の皿である。いずれも2期前後の分類されるもので、遺構の所産時期よりはやや古い年代を示す資料である。10は赤褐色系の胎土を使用し、底部に糸切り痕を残す在地系の土師質土器皿である。底部外面には浅い小さな窪みが認められるが、貫通していない。11は瓦質土器で、浅鉢形の火鉢または香炉等に復元される器形を呈する。外面には菊花文および葉文の2種類の刻印を押捺している。12は縄文時代後晩期の深鉢の口縁部破片で、内外面に条痕文を有する。当該資料は混入品である。13・14は瓦質土器を再加工した円盤状の加工品である。13については、現状では製作年代は不明であるが、いずれも瓦当文様は均整唐草文となる。第83図1・2は軒平瓦で、現状では製作年代は不明であるが、いずれも瓦当文様は均整唐草文となる。3～7は管状土師で、法量や重さ等のデータについては遺物観察表を参照されたい。8・9は青銅を素材とする製品で、8は銅鈴、9は鉾状の製品である。9については、詳細な用途は不明である。10～13は銅銭で、いずれも銭文は鋳出のため判読不明である。

第2節 遺構と遺物



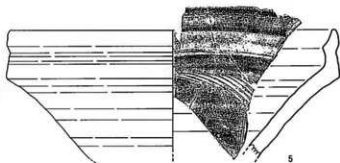
第84図 SD04・SD06 出土遺物実測図 (1/3)
(1はSD04、2～5はSD06)

SD04 出土遺物 (第84図)

第84図1は備前系陶器の鉢である。内湾する口縁部から胴部にかけての破片で、底部は欠損するが、平底になると推定される。SD04出土遺物の中で、図示可能なものは、当該遺物のみである。

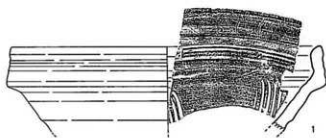
SD06 出土遺物 (第84図)

第84図2・3は管状土睡で、法量・重さ等のデータは遺物観察表を参照されたい。4・5は備前系陶器搗鉢で、近世1期bに編年される製品である。



SD07 出土遺物 (第85図)

第85図1は備前系陶器搗鉢で、中世6期に属する資料である。2は銅銭で、初鑄造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。書体は行書体である。



第85図 SD07 出土遺物実測図 (1は1/3、2は1/1)



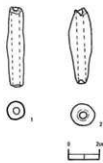
第86図 SD09 出土遺物実測図 (1/3)

SD09 出土遺物 (第86図)

1は中国漳州窯系青花皿で、C群青花皿の模倣品である。外底部が露胎となる。2・3は口縁部が輪花となる白磁皿で、高台登付部を除いて全面に白磁釉を施釉している。型打ち成形によって製作されている。1～3の製作年代は、いずれも16世紀後葉から末葉に比定される。

SD10・SD14 出土遺物 (第87図)

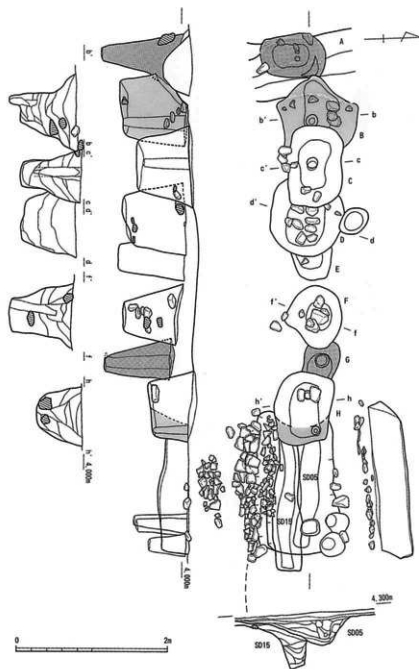
図示した資料はいずれも管状土錘で、1がSD10、2がSD14からの出土である。法量・重さ等のデータは遺物観察表を参照されたい。

第87図 SD10・SD14
出土遺物実測図 (1/3)
(1はSD10、2はSD14)

木戸及び関連遺構 (第88図)

J 11 区の第 2 南北街路側交差点部にて検出された柱穴 2 基 (図中 C・H) とそれに付属する溝 (SD05) から構成されるもので、府内古図に描かれる木戸と思われる遺構である。調査では、第 2 南北街路の街路面を一面ずつ剥がしながら切り合い関係と検出面を確認した。結果的に、図示したように西側で A～E、中央で F～H の柱穴あるいは土坑を検出し、東側では SD05 とそれに切られる SD15、焼土を含む柱穴数基を確認した。街路面でも焼土粒を多く含む層が確認されたが、焼土を含む柱穴以外は焼土面直下から検出されている。

まず、第 2 南北街路西側の A～E について説明する。A～C については埋土状況から柱の抜き取り痕が観察でき、柱穴と考えられるものである。D に関しては、埋土の堆積状況等からは柱穴としての利用がされた痕跡が確認できず、可能性は低いと判断される。E は D によって掘形を大幅に切られるため、柱穴か否かは判別できない。切り合い関係からは西から A→B→C となり、東からは E→D→C という順序が読み取れる。面的な対応関係では、A と E がほぼ同じ面からの掘り込みで



第88図 木戸遺構と付帯施設 (1/50)

あることが確認でき、それより1面上でBとDがほぼ同じレベルで検出されている。次に、中央に位置するF～Hでは、その3基すべてで柱痕を確認しており、柱穴としての利用がなされている。Hは、掘形の西端にて柱の抜き取り痕とみられる空洞化した穴が検出されたが、それとは別に掘形のやや東側で、二つの根石によって挟まれた中央部分にて、柱の抜き取り痕と見られる土層堆積状況を確認した。平面での切り合いは確認できなかったが、2回の掘り直しがあった可能性があることを示している。F～Hを切り合い関係、検出面の上下関係からはG→F→Hという関係にある。以上の柱穴群は、土嚢状のブロックによる街路面の嵩上げが確認されたが、その上面に形成された街路面第3面を切って掘り込まれていることが確認できている。このことから、同面に形成されているSD07と、それに対応すると考えられるSD06の段階以降に形成されたものと見てよいと考えられる。

土嚢状のブロックによる街路面の嵩上げ

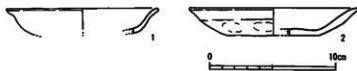
道路の東側、HとSD02の間では、SD05・SD15とした東西方向を示す溝状遺構が検出された。SD05の掘形は南側が約1mで浅く緩やかな肩部をもつ、断面形が2段掘りの形状となる。また、この掘形の南側に沿って互が規則的に並べられている状況が確認でき、SD05とこの互列が何らかの関係があるものと考えられた。SD05の底面には流水の痕跡はなく、埋土は中央部分に抜き取り痕と見られるような堆積状況が観察され、溝として機能したものではなく何らかの建造物を構築するための下部施設ではないかと考えられた。SD15についても基本的にはSD05と同じような堆積状況で、掘り込まれた面や深さは異なっているものの、ほぼ同じ特徴を観察することができた。また、SD05には南側に互列を確認したが、SD15では薄敷きとなっていた。土層断面での確認ではSD15は街路面第3～2面に該当し、SD05は街路面第2面に伴っており、SD15→SD05とほぼ同じ下部構造を形成したものと見られる。また、Hの関係については、断面にて確認したところ、SD05がHを切っており、SD15はHに切られるという関係にあることが分かった。これはHの二度の掘り直しに対応する可能性が高いものと考えられる。SD05とSD02が接続する地点では、SD05の小口側に対して蓋をするかのようになり石臼が配置されていたが、何らかの意味を持つものと思われる。以上のような状況から、SD05・SD15はSD10・SD06段階の木戸跡とみられるC・Hの東側に付帯する施設の下部構造として築かれたものと考えられる。

さて、第2南北街路は側溝によって区画され、それぞれ対応する側溝によって街路幅が変遷することが明らかとなったが、ここで検出された木戸遺構と考えられる柱穴についても街路幅に応じた変遷があったものと考えられる。街路面第3面、SD06・SD07に対応する可能性が高いのはA・Gである。また、FはGより若干西寄りになるが、確認できた面は街路面第3面であった。AとGの心々距離は約400cmを測り、A・Fでは約360cmである。街路幅に対してF・Gはちょうど中間地点に位置する。続いて、AはBへと変遷する。BはSD03に切られるものの、SD07からは約80cm東へ離れた位置になる。SD07→B→SD03という関係になるため、どちらの溝とも対応する可能性がある。また、面的な対応関係ではBはF・Gとは対応しなかったため、Hとの対応が想定される。B・Hの心々距離は約400cmとなり、A・Gとほぼ同じとなる。C・Hが最終段階と考えられ、心々距離は約320cmと最も短くなっている。また、東側のSD05・SD15はHと関係する。この地点は溝の切り合いや縁石も多かったため、SD05・SD15のような下部構造を持つ付帯施設が存在したのか、あるいは柱穴があったのかは良く分からなかった。SD06西側には五輪塔の地輪が据えられていたが、何らかの関連性があるのかもしれない。

五輪塔

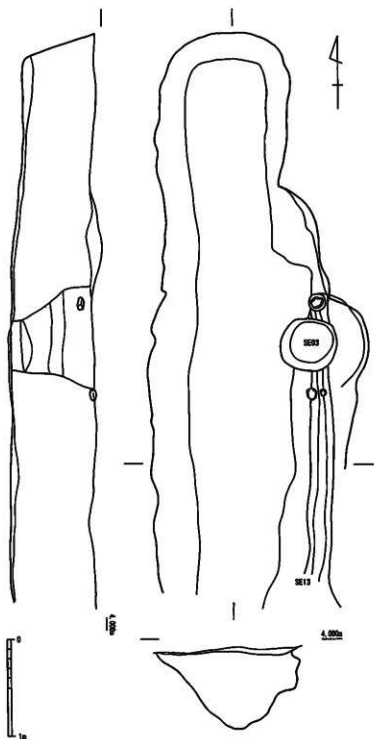
木戸及び関連遺構出土遺物（第89図）

1はSP01出土の口縁部が外反する中国製の白磁である。2はSP02出土の京都系土師器皿である。その形態から、16世紀後葉と考える。



第89図 木戸遺構出土遺物実測図（1/3）

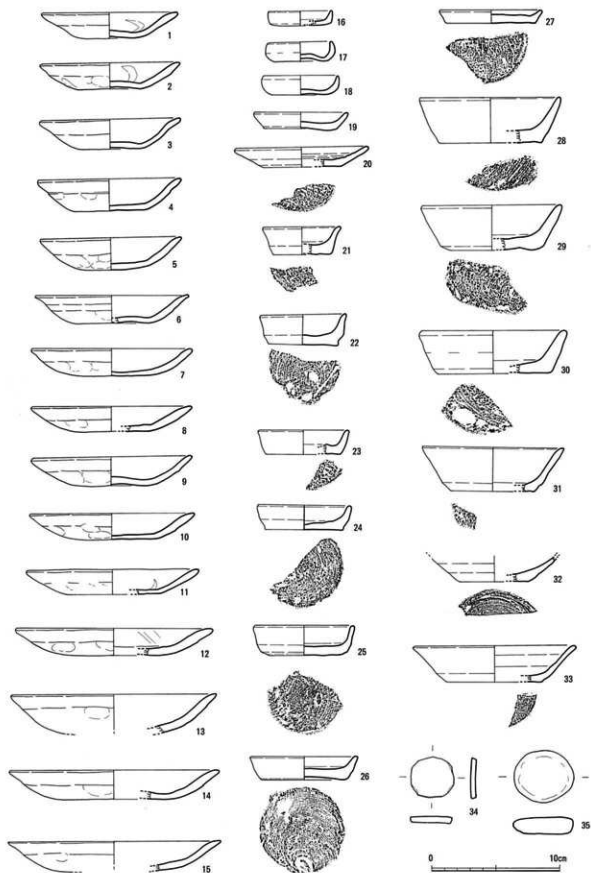
第2節 遺構と遺物



第90図 SD08 実測図 (1/40)

SD08 (第90図)

I・J区に南北方向に延び、I・J11区で収束する堀跡で、幅約3m、深さ約1.6m、横断面形は緩いV字を呈する。堀形の西側は傾斜が強く、東側はやや緩やかであるため段を持っていた可能性がある。堀の埋土は大きく上・下の2層に分けられる。下層は大きい粘質土のブロックを含む砂質の強い埋土で、堀形東側の肩部でも確認できることから人為的に、もしくは崩落によって大半が埋没したものと見られる。底面には流水の痕跡は見当たらなかった。その後には幅約2.4m、深さ約1m



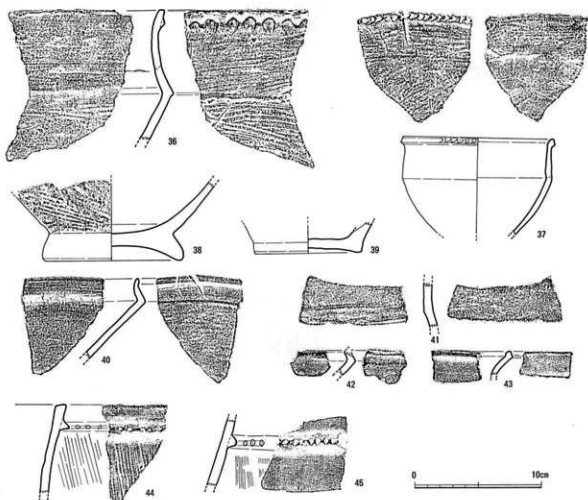
第91図 SD08出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物

の断面U字形の堀として掘り直されたものと考えられ、上層はその埋土である。その底面に当たる部分では砂やシルトの互層が確認できるため、僅かながら流水があったものとみられる。また、埋土は主に褐色シルト土の単純層で、人為的に一気に埋められたものと考えられる。下層からは在地系土師器と京都系土師器が相伴して出土しており、16世紀前～中葉である。上層からは京都系土師器が出土しており、16世紀中葉頃には埋没したものと考えられる。こうした状況から16世紀前～中葉の断面V字の堀段階と16世紀中葉～後葉にかけて埋没する断面U字の堀段階の2段階あることが読み取れる。

第2南北街路との関係では、街路面第6面(最下面)砂層が薬研堀の埋土を覆っていることがSD08東側肩部にて確認でき、薬研堀段階には砂を敷いた道路としての整備はなされていなかったことがわかる。また、箱堀段階は街路面との直接的な切り合いを確認することができなかったが、SD08上層の上面から約15cm下、街路面よりも若干低い位置で、薄く広がる砂層が間層として確認できる。街路との関係は、街路面整備がなされた段階にはすでにSD08は完全に埋没していた可能性が高い。この堀の位置や時間的な関係からすれば16世紀中葉以前の大夫氏館跡の東を区切る堀とみて間違いないと考えられる。

16世紀中葉以前の
大夫氏館跡

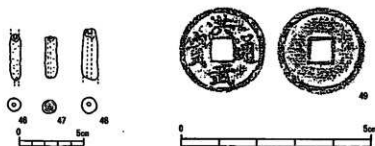


第92図 SD08出土遺物実測図② (1/3)

SD08 出土遺物 (第91・93図)

第91図1～15は非ロクロ系の京都系土師器である。器壁は薄く、口縁部はあまり外反せず、「府内」出土の京都系土師器の中でも古い様相を呈しており、16世紀前葉から中葉と考える。16～19も京都系土師器と同じ胎土の非ロクロ系土師器である。特に19は在地系土師器に器形は類似するが、手握ねで仕上げられている。20は内面に段を有するロクロ引きの在地系土師器で、16世紀前葉と考えられる。21～30は、ロクロ引きの在地土師器で、口徑よりやや小さい底部から、口縁部が外傾して、直線的に立ち上がる。器壁は、底部近くが厚く、口縁端部に向かい尖るように薄くなる。このような形態は、15世紀前葉と考えることができる。32は小片であるが、精製粘土が使用され、白色系土器に近い。33も21～30の在地系の土師器に比較すると薄手である。34は京都系土師器の底部を円形に加工したものである。35は黒色をした基石状の石である。

第92図の36～45は中世以前の土器で、堀の下部に露出する砂層から出土した。36・37は口縁部に刻目突帯を一条運らす深鉢形土器である。器面は条痕文で調整され、胴部の屈曲部から上位の外面はさらに横撫でで仕上げられている。36の刻目は下方から押し上げるように指先で施文され、爪跡が残る。38・39はやや磨滅しているが、深鉢形土器の底部で、38には条痕文が残る。40～43は器面を磨きした精製土器で、41は深鉢形土器であるが、他は浅鉢形土器である。これらの土器は、縄文時代晩期後半に属するものである。44・45は底部から直線的に口縁部に続く甕形土器である。口縁部の外面に小さい刻目がある断面三角形の突帯が一条運る。器面は縦方向の刷毛目で調整され、突帯部から口縁部にかけては横方向の撫で仕上げである。これらの土器は、弥生時代前期から中期に、東九州を中心に分布し、下城式土器と呼ばれている。第93図46～48は管状土錘である。3点とも完全なものはないが、46は1.6g、47は2.7g、48は3.6gである。49は、中国銭の「洪武通寶」である。



第93図 SD08出土遺物③ (46～48は1/3、49は1/1)

SB03 (第94図)

M12区で検出された掘立柱建物である。この周囲からは切り合いを持った柱穴が多数検出され、柱穴には平面形が円形を呈するものと方形もしくは隅丸方形を呈するものが確認できた。また、それぞれの柱穴には空洞化した穴がみられ、柱の抜き取り痕もしくは柱痕であろうと考えられた。その穴にも円形と方形の2種類が確認でき、幅10～12cmを測るものが多かった。柱の抜き取り痕とすれば、空洞が圧縮することも考えられるために柱そのものの太さを示すものではなく、方形か円形かの見極めも残存状況によるため、すべてを網羅的に検証することはできなかった。しかし、少なくとも円形と方形の2種類が存在することは明らかである。それぞれの柱穴では灰褐色砂質土に焼土粒を含むものが多かったが、焼土を含まないきめの細かい褐色砂質土を埋土とする柱穴があることが確認された。SB03は後者に当たるもので、埋土中に焼土を含まない焼土面以前のものである。

SB03は、図示したように東西1間、南北2間の規模をもつものであるが、さらに東側の調査区外に展開するものと見られる。また、北側にも対応する可能性を持つ柱穴（SP356）があり、名々小路SD01までの間で1間分広がる可能性がある。柱穴の平面形は一辺約30cmの方形を呈するものが多く、埋土は焼土を含まない褐色砂質土であった。柱痕と見られる穴を持つものがほとんどのもので見つけたが、その平面形は直径10～11cmの円形を呈するものであった。柱穴の心々距離はほぼ200cmとなっており、6尺5寸を基準としたものに近いことが分かる。それぞれの柱穴の深さについては一定していないように見受けられるが、調査では柱穴の掘形底面よりも柱痕のほうが深く入る例が多数見つかっているために注意が必要である。これは柱を立てる際に通常とは違った工法が取られた可能性もあり重要である。柱穴のうち、南東隅に当たるSP319からは分銅が出土しているため、SB01・02と同時期のものと考えられる。

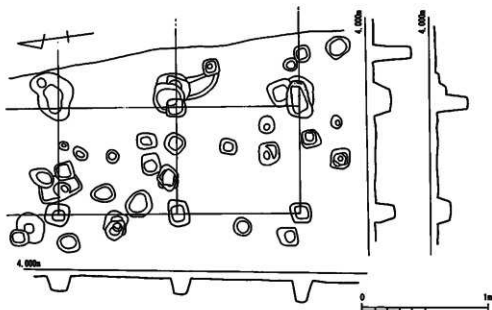
SB04 (第95図)

K12区にて検出された掘立柱建物(?)で、礎石建物SB01の直上に位置している。この周囲には埋土中に焼土を含む柱穴約80基が集中しており、多数の切り合いを確認した。結果的に柱穴の配列を読み取ることが難しかったが、その一つの案としてSB04を報告する。

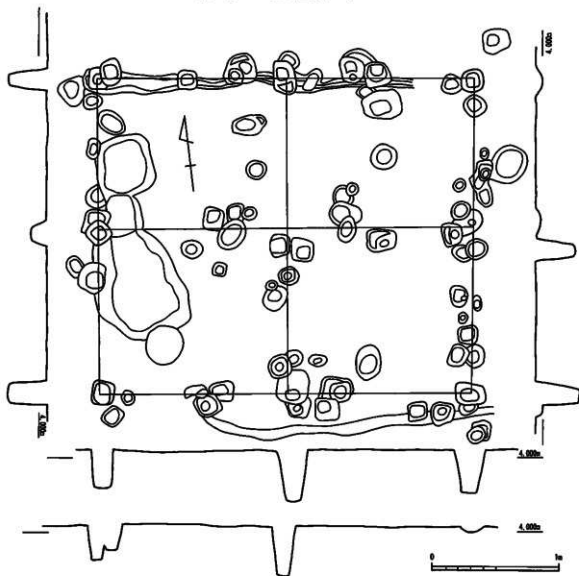
SB04としたものは、柱穴の平面プランが方形または隅丸方形を呈するもので、埋土には灰褐色砂質土の中に褐色粘質土のブロックや焼土粒が含まれていた。それぞれ多数の切り合いを持ち、円形プランの柱穴も確認できるが、何度かの建て直しがあった可能性がある。図示した8基の柱穴では、柱痕が確認されたのが内6基で、柱痕の形状は方形が3基確認され、柱痕の幅は10～12cmであった。柱穴の深さについては一定しないが、柱痕が確認できたものについては深さ80cm前後で揃っている感もある。柱穴の心々距離は狭いところで約240cm、広いところでは約300cmを測り一定していない。

以上のように、SB04はそれぞれの柱穴について、やや不統一感があることは否めないが、埋土はほぼ同じであり、掘形の平面形が方形プランであることや直径10～12cmの柱痕が確認されることで共通項を見出せる。間取りについては、一間が約300cmとすれば5尺を基準としたものと読み取れるが、6尺5寸基準ではない。少なくとも、焼土層以前の建物跡では6尺5寸を基準とする間取りが見られたが、大規模火災以後の建物ではこうした間取りに変化している可能性があるものといえよう。

こうしたSB04は掘立柱建物としての確証はないが参考資料として報告する。



第94図 S803実測図 (1/30)



第95図 S804実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

SP33 (第96図)

L12区で検出したビットで、焼土面を切って掘り込まれたものである。平面円形で、直径36cm、深さ約30cmを測る。

SP38 (第96図)

L12区で検出した不定形のビットである。平面形は角の丸い三角形形状を呈し、深さは約8cmで浅い。埋土中には焼土が混入しており、焼土層以後のものと考えられる。

SP39 (第96図)

M12区にて検出した柱穴で、SP349を切って掘り込まれている。平面形は約50cm四方の隅丸形状を呈し、深さは約25cmである。掘形の底面には直径11cmの丸穴が見られ、柱の抜き取り痕であろうと考えられる。埋土は褐色砂のブロックを含む灰褐色砂質土で、焼土粒を多く含むものであった。また、これに切られるSP349は図示されているものよりもさらに深く掘りこまれていることが判明し、底面に礎盤石を据えたものであることが分かっている。平面方形を呈し、埋土は褐色砂質土で焼土を含まないものであり、焼土面以前のものである。

SP50 (第96図)

L12区にて検出したビットで、直径44cmの円形プランで、深さは約25cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で焼土層を切って掘り込まれている。

SP58・59 (第96図)

SP58はL12区のSB01北側に見られた盛土状遺構の下面にて検出されたもので、直径約30cm、深さ10cm程の浅い円形ビットである。盛土状遺構の形成以前のものである。SP59は、直径35cm程の円形プランの柱穴で、柱痕と見られる直径12cmの穴が確認されている。その穴の周囲には華大の礫が多数みられ、柱の周りを固める意図で入れられたものと考えられた。穴は図よりも深くなっており、その深さについては確認できなかった。埋土は灰褐色砂質土で焼土を含んでおり、焼土面を切って掘り込まれたものである。

SP62 (第96図)

L12区にて検出した円形プランのビットで、直径約24cm、深さは約26cmを測る。焼土面の下面にて検出され、埋土には焼土を含んでいなかった。

SP121 (第97図)

K12区のSD06のすぐ脇で検出した平面台形状を呈する浅いビットである。埋土には焼土は含まれない、きめの細かい灰色砂質土であった。

SP122 (第97図)

L12区にて検出した長径約56cm、短径約42cmを測る楕円形プランのビットで、掘形の南東部をSP19によって切られている。埋土は灰褐色砂質土で焼土粒を多く含むものであった。SP19は一辺が約25cmを測る方形プランの柱穴で、中央部に柱の抜き取りと見られる円形の穴が見られた。埋土は焼土を含む暗褐色砂質土で、SP122とともに焼土面以降に掘り込まれたものとみられる。

SP155 (第97図)

L12区にて検出したビットで、SK03によって南側を切られている。直径約24cmで、深さは約25cmを測る。埋土は焼土粒を含む灰褐色砂質土で、瓦片とともに鏡片(第105図28・29)が出土している。

SP157 (第97図)

L12区にて検出した直径約30cm、深さ約60cmを測る円形のビットで、SB02の基底部の掘り込みによって切られていた。埋土には土師質土器片の細粒を含むものであった。柱痕は確認できていない。

SP161 (第97図)

L12区のSB02床面にて検出したビットで、直径24cm、深さ約22cmの小規模なビットである。埋土

鏡片

には焼土粒は含まれておらず、SB02形成以前のもものと見られる。

SP166 (第97図)

L12区のSB02床面にて検出したビットで、直径28cm、深さ約10cmの小規模なビットである。埋土には焼土粒は含まれておらず、SB02形成以前のもものと見られる。

SP170 (第97図)

L12区のSB02床面にて検出したビットで、直径30cm、深さ約20cmの小規模なビットである。埋土には焼土粒は含まれておらず、SB02形成以前のもものと見られる。

SP178 (第97図)

M12区にて検出されたもので、直径約44cmの平面円形を呈する柱穴である。掘形は深さ約8cmと非常に浅く、その中央に直径11cmの穴が見られた。埋土には灰色砂利を多く含んだ灰黄褐色シルトであった。焼土層以前のものである。

SP182 (第98図)

M12区にて検出した直径約50cmを測る隅丸方形のビットで、深さ約10cmと浅い。埋土は焼土を含む褐灰色砂質土で、焼土層以後のもものと見られる。

SP11・186・319 (第98図)

M12区にて検出したビット群で、SP319の北側をSP186が、南側をSP11が切っている。SP186は、平面形が一辺約40cmを測る方形を呈し、深さは約50cmを測る。埋土は焼土粒を含む灰褐色砂質土である。SP11は平面方形を呈するビットで、埋土は焼土粒を含む灰褐色砂質土である。SP319は一辺が約25cmの方形を呈する柱穴で、中央に直径約10cmの円形の穴が見られ、柱の抜き取り痕と見られる。深さは約34cmを測る。埋土は焼土を含まない褐灰色砂質土で、底面からは分銅が出土している。焼土面以前の柱穴である。

SP187・251 (第98図)

M2区にて検出したビットで、SP251の掘形西側をSP187が切っている。SP187は、直径約38cmの平面円形を呈するビットで、深さ約14cmを測る。埋土は焼土粒を含む灰褐色砂質土で、拳大の礫が数点入っていた。SP251は長径約40cm、短径約34cmを測る隅丸方形を呈する柱穴で、直径約10cmの円形の抜き取り痕が確認できる。掘形の深さは約34cmで、柱痕と見られる穴は約70cmの深さを持つ。埋土は焼土を含まない灰褐色砂質土で、焼土層以前のものである。

SP224・225 (第98図)

J11区にて検出したビットで、図示はできていないが、SP225をSP224が切っている状況で検出した。SP224は長径約36cm、短径約26cmを測る楕円形プランのビットで、深さは約26cmを測る。SP225はほぼ同じ形・大きさで、深さは約30cmと僅かに深く、底面に礎盤と見られる石が据えられている。また、それぞれ柱痕と見られる穴が確認され、形状は方形を呈するものであった。埋土はともに褐灰色砂質土で、焼土層以前のものである。

SP203・222・223 (第98図)

J11区にて検出したビット群で、図示はできていないが、平面方形の柱穴SP223をSP222が切り、それらをさらにSP203が切るという関係で検出している。SP203は直径約30cmの円形プランのビットで、深さは約28cmである。SP222は一辺が約35cmを測る方形の柱穴で、掘形の深さは約28cmを測り、底面には礎盤と見られる石を確認した。SP223は長径40cm、短径30cmの隅丸方形を呈する柱穴で、深さは約46cmである。底面にはSP222同様に石が据えられていた。埋土はSP222とSP223がきめの細かい褐灰色砂質土で、SP203はやや粗い灰褐色砂質土であった。焼土は含まれておらず、すべて焼土面以前のもものと考えられる。

SP230 (第98図)

L12区にSB02床面にて検出した円形プランのピットで、直径約40cm、深さ約50cmを測る。ピット内には多量の礫が詰められた状態で検出された。焼土に覆われており、埋土には焼土は含まれていなかったため、焼土層以前のもものと見られる。

SP231 (第99図)

M12区にて検出した円形プランのピットである。直径約32cm、深さは約10cmを測る。埋土は焼土粒を含む灰褐色砂質土である。

SP241 (第99図)

K13区にて検出した円形ピットで、SD09を切っている。直径約48cm、深さは約16cmと浅い。埋土は焼土を含んだ褐色砂利で、瓦礫が数点含まれていた。焼土層以後に形成されたものと見られる。

SP275 (第99図)

K12区にて検出した一辺が約30cmを測る方形のピットで、深さは約46cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

SP298 (第99図)

K12区にて検出した平面隅丸方形を呈する柱穴である。SB01礎石のすぐ脇にかかって検出された。図示はできていないが、深さ約70cmとなる。柱穴の中央には直径12cmの円形の穴が確認でき、柱の抜き取り痕と見られる。埋土には多量の焼土が含まれ、焼土面を切って掘り込まれたものである。

SP302 (第99図)

K11区にて検出した柱穴で、掘形の平面形は長径約60cm、短径約45cmを測る隅丸方形を呈するものである。掘形は2段となっており、1段目が深さ約20cmで、2段目は直径約30cm、深さ約30cmを測る。一段目には一辺が約30cmを測る板状石材が据えられていたが、その下面には直径12cmの円形の穴が見られ、柱を抜き取った後に塞いだものと見られる。埋土は褐色砂質土で、焼土面以前のものである。

SP315 (第99図)

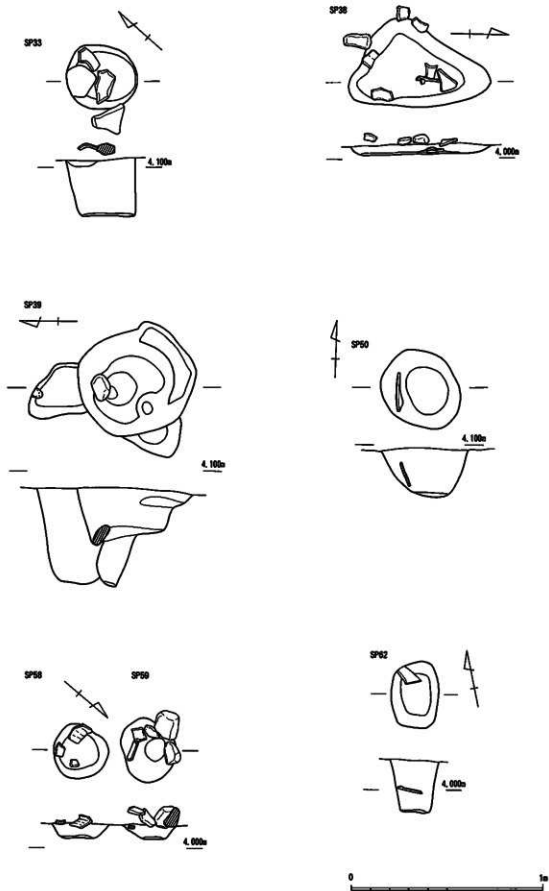
J12区にて検出された柱穴で、一辺約32cmの平面方形を呈するものである。深さは約40cmを測り、底面には幅20cmの板石が据えられており、礎盤としたものと見られる。埋土は灰黄褐色砂質土で、焼土層以前のものである。

SP333・334 (第99図)

J11区にて検出した柱穴で、SP334がSP333を切っている。SP333は直径約50cmを測る平面円形の柱穴で、深さは約56cmである。SP334は一辺が約35cmを測る平面方形の柱穴で、深さは約60cmである。掘形の中央に約12cmの円形の穴があり、柱の抜き取り痕と見られる。どちらも焼土面よりも下層にて検出されたものである。

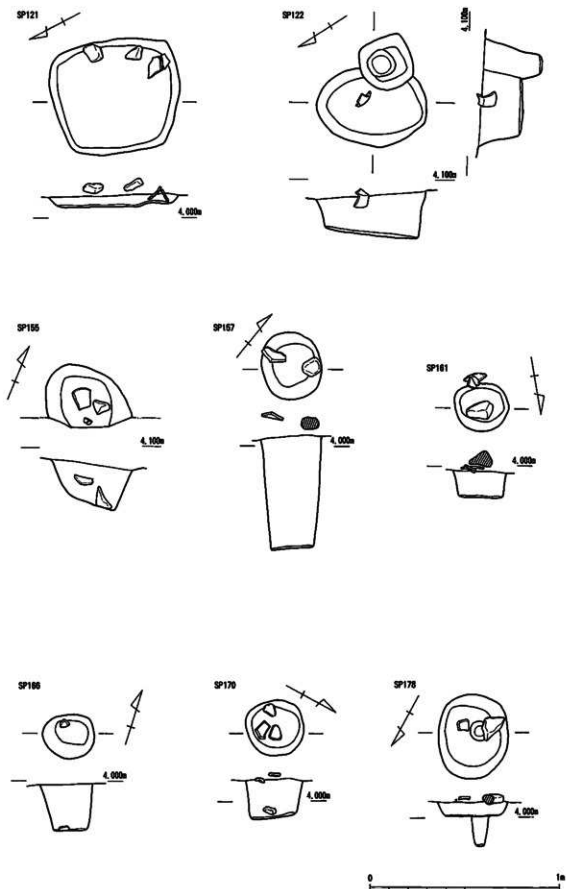
SP393 (第99図)

M13区にて検出した柱穴で、掘形は直径約40cmの円形を呈し、深さは約50cmを測る。掘形の上層部分では幅20cm大の礫がみられ、柱の抜き取り痕と見られる直径8cmの円形の穴に差し込まれるように入れられていた。穴の空洞は掘形の底面よりもさらに深く入り、深さ約70cmとなる。埋土は暗褐色砂質土で、焼土面以前の柱穴である。

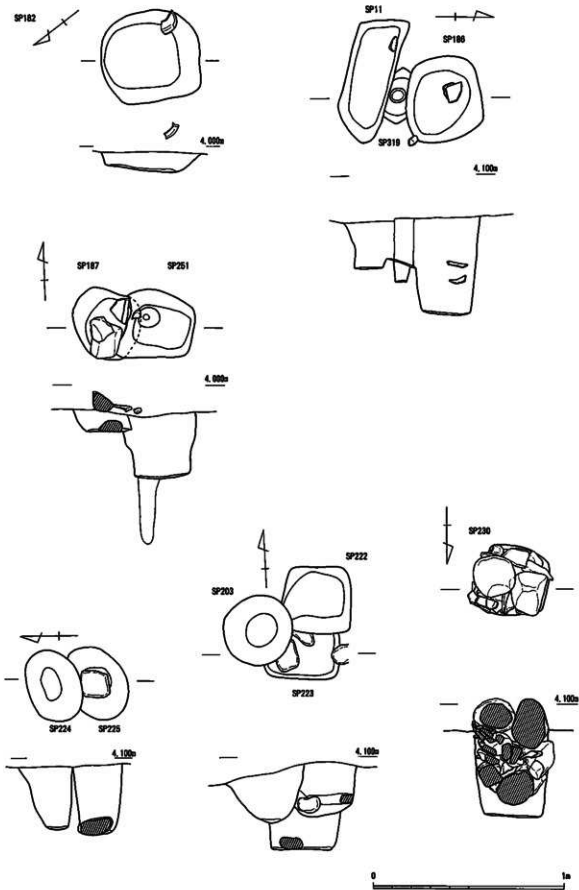


第96図 SP33・38・39・50・58・59・62実測図 (1/20)

第2節 遺構と遺物

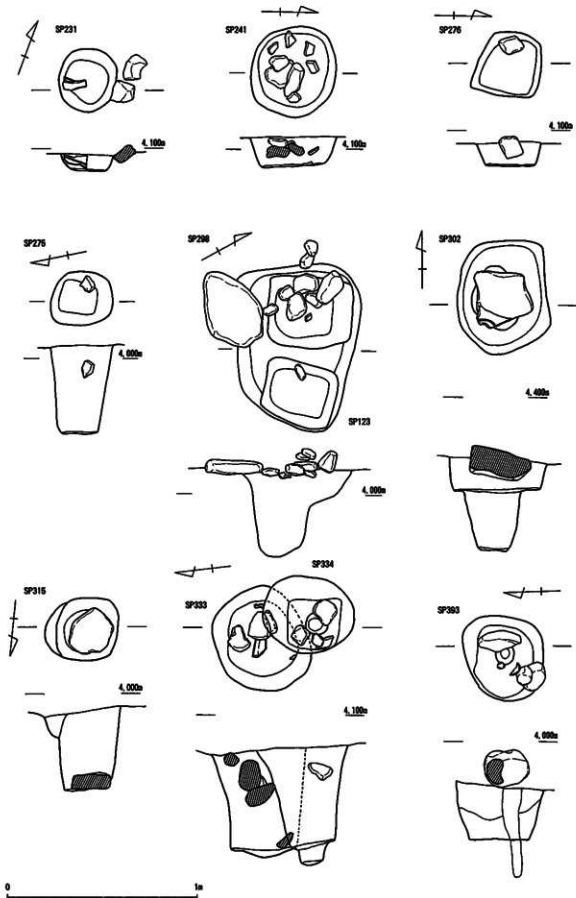


第97図 SP121・122・155・157・161・166・170・178 実測図 (1/20)

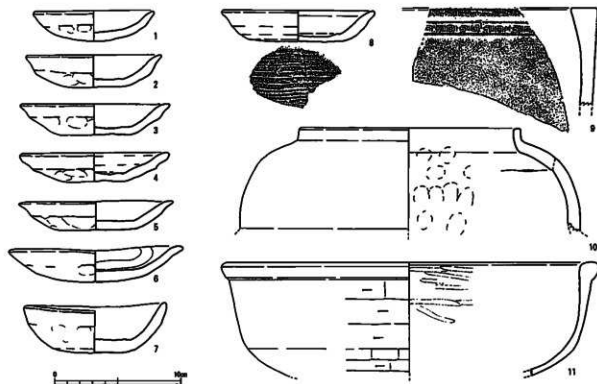


第96図 SP182・186・187・251・203・222・223・224・225・230実測図 (1/20)

第2節 遺構と遺物



第99圖 SP231・241・276・275・298・302・315・333・334・393実測図 (1/20)



第100図 ビット出土遺物実測図① (1/3)

ビット出土遺物 (第100～106図)

ビットから出土した遺物を、以下順不同で提示する。出土遺構については、遺物一覧表を参照されたい。

第100図1～7は京都系土師器で、1～6は皿、7は坏である。いずれも2期あるいは3期の特徴を有する資料である。8は底部に糸切り痕と板状圧痕を有する在地系の土師質土器皿であるが、口縁部のナデや器形の特徴から、京都系土師器皿を模倣したと思われる製品である。9～11は瓦質土器で、いずれも在地系の製品である。9は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に二条の突帯をもち、突帯間に二連雷文を押捺する。10は羽釜で、胴部中位から底部を欠損している。11は鉢で外面に削り、内面にミガキが施こされている。

京都系土師器
皿の模倣品

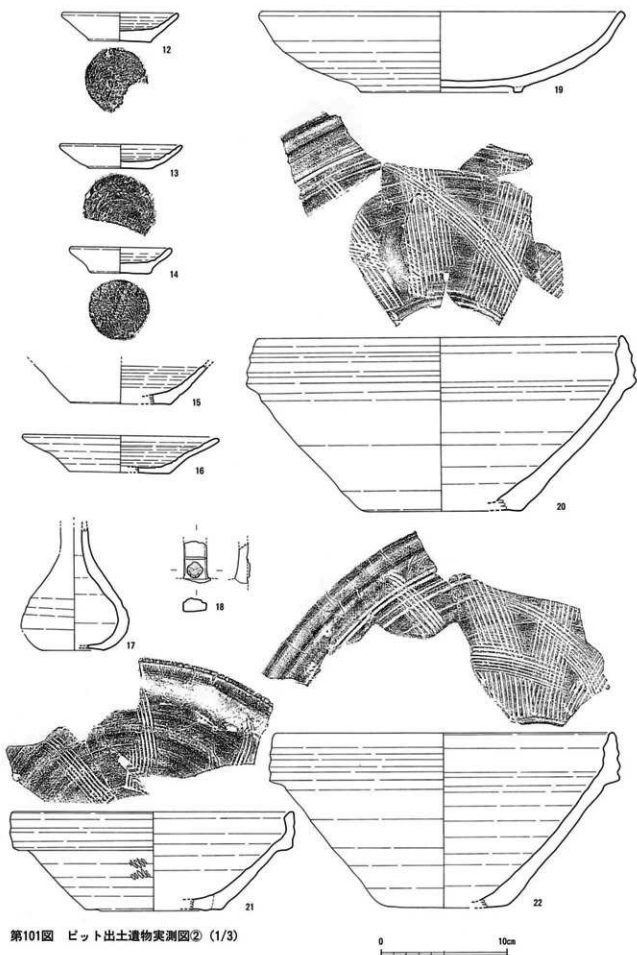
第101図12～16は赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロロ目を顕著に残す在地系の土師質土器皿である。いずれも器高がやや低く、扁平な印象を与えるものである。従って、これらの資料の大半は、この種の土器の中ではやや新しい様相を有するものである可能性が高い。17～22には備前系陶器を提示した。17は瓶で、口縁部と底部の一部を欠損する。18は鉢等の釣手の基部と推定される特殊な製品である。丁寧なミガキ調整がなされており、外面には浮文が剥落した痕跡が認められる。19は高台付きの大皿(盤)で、仕上げの調整も丁寧であることから、上手の製品であるような印象を受けるものである。20～22は搦鉢で、内面搦目や口縁部形態の特徴などから、21は中世6期、20・22は近世1期に分類される製品である。また、21の胴部外面には、内面搦目と同一原体で施された搦目が一部認められるが、これは意図的なものではなく、偶発的なものである可能性が高い。

備前系陶器
把手

第103図23は中国景德鎮窯系青花で、E群青花碗である。外底部には一重圏線内に「大明年造」銘がみられる。24は青磁皿で、上から見た平面形態が八角形になる八角皿である。外底部には青磁軸ではなく、透明軸が施されており、裏白となっていることから、中国景德鎮窯系の青磁皿と断定で

中国景德鎮窯
系青磁皿

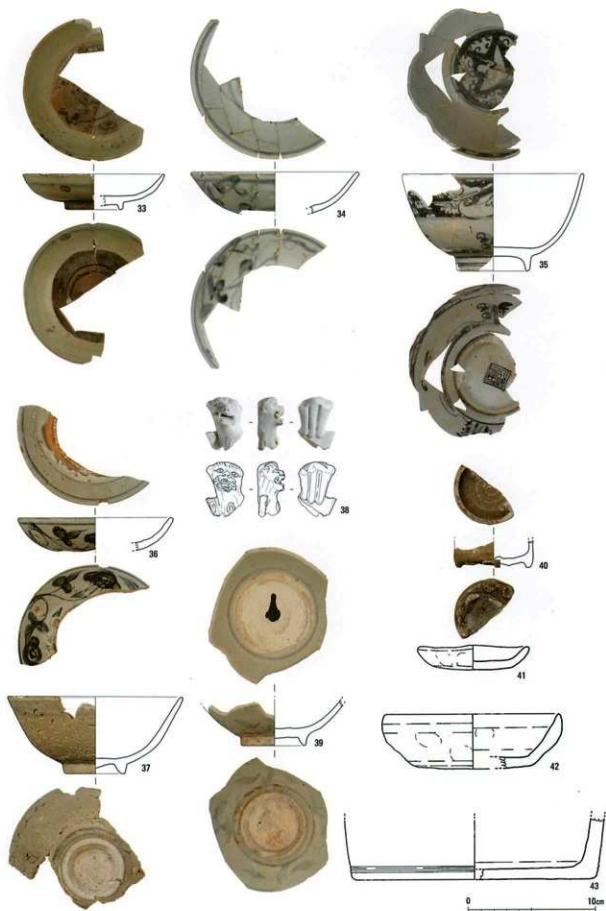
第2節 遺構と遺物



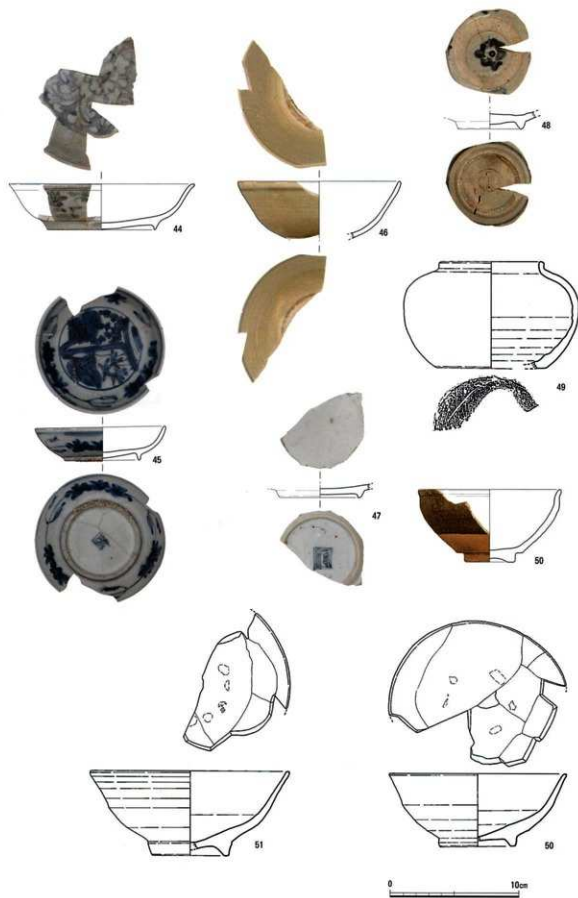
第101図 ビット出土遺物実測図② (1/3)



第102図 ビット出土遺物実測図③ (1/3)

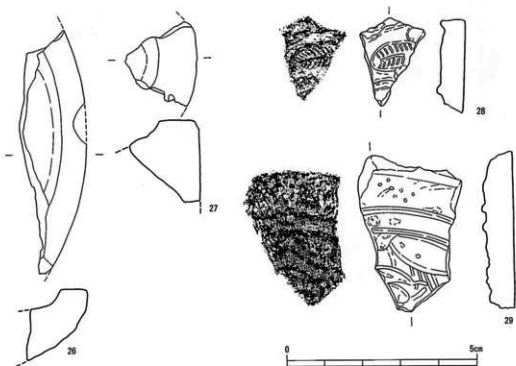
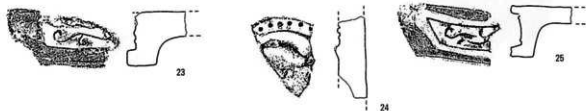
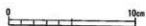
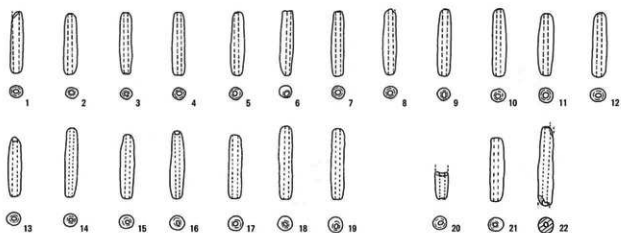


第103図 ビット出土遺物実測図④ (1/3)



第104図 ピット出土遺物実測図⑤ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第105図 ビット出土遺物実測図⑥ (1～27は1/3、28・29は1/1)

きる。25・26は中国漳州窯系青花碗で、見込みと高台部周辺が露胎となる。27は中国景德鎮窯系青花で、E群青花皿である。見込みの鳳凰文は、明代万暦年間(1573~1620)前後に特徴的な形態を示している。外底部の銘款は「大明□□□□」である。銘款の第4字目の一部が残存しているが、欠損により、判読できない。28も中国景德鎮窯系青花で、大皿(盤)と思われる製品である。29・30・32は中国産の白磁で、29・30はD群に分類される皿、32は碗である。31は木瓜形を呈する青磁小皿で、型打ち成形で製作されている。口縁端部の一端が突起する部位も認められる。

第104図33・34・36・37・39は中国漳州窯系青花碗で、33・34・36は皿、37・39は碗である。皿の中で33・36については、見込みと高台部周辺が露胎となる。碗については37は外底部のみが露胎、39は見込みと高台部周辺が露胎となる。35は中国景德鎮窯系E群青花碗で、外底部には「福」銘が認められる。口縁部外面および見込みにはモチーフを同じにする鳥文と流雲文が描かれている。38は中国産の白磁獅子形置物で、頭部付近の破片である。型打ち成形によって、製作されている。中世大友府内町跡では、旧萬壽寺寺域内の調査区である第29次調査区および第34次調査区(いずれも未報告)で同様の製品が出土している。また、天正14年(1586)もしくは天正15年(1587)の一括資料と考えられている熊本県浜の館の土坑出土資料⁸⁾や長崎県三城城跡⁹⁾などでも類似の資料が認められる。40は瀬戸美濃系陶器の香炉で、底部付近の破片である。底部外面には小型の足が貼付けされている。41・42は京都系土師器で、前者は皿、後者は坏である。42については、器壁が厚く、3期以降に位置づけられる製品であろう。43は瓦質土器で、小型の火鉢の底部である。

第105図45・47・48は中国景德鎮窯系青花で、45はB1群青花皿、47・48はE群青花皿である。47・48の外底部には、「福」銘がみられる。46・47は中国漳州窯系青花碗で、いずれも見込みが蛇の目状に釉割きとなる。50は備前系陶器で、底部外面にヘラ記号が認められる。51は瀬戸美濃系陶器の天目碗である。52・53は朝鮮王朝産陶器碗で、器高がやや深く、見込みが高台内に窪むような断面形態を呈する製品である。見込みと高台端部に目跡が認められる。

第106図1~22は管状土鍾である。このうち、1~12はSP298、13~19はSP77から出土しており、前者はひとつの柱穴から12個、後者はひとつの柱穴から7個の土鍾が出土していることになる。法量や重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。23~25は瓦で、23・25は瓦当文様が均整唐草文となる軒平瓦、24は瓦当文様が巴文となる軒丸瓦である。26・27は石製品で、26は茶臼の胴部、27は石臼の上臼である。28・29は青銅製の鏡であるが、周辺部に再加工が加えられ、鏡片の状態となっている。用途は不明である。

白磁獅子形
置物

- (8) 熊本県教育委員会『浜の館』(熊本県文化財調査報告第21集 1977年) 図版⑨
 (9) 長崎県大村市教育委員会『三城城跡範囲確認調査報告書~平成16年度までの総括~』
 (大村市文化財調査報告書第29集 2005年) 37頁、図6-10

SK01 (第106図)

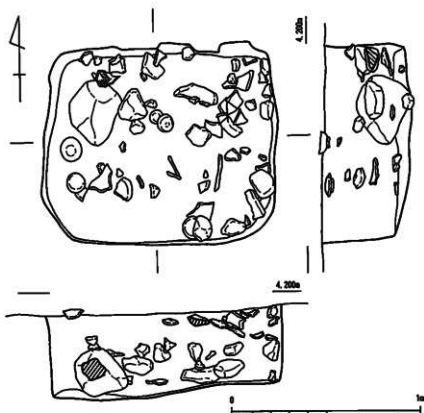
L12区の中央にて検出した東西約1.2m、南北約1.0mを測る平面形が隅丸方形を呈する土坑で、名々小路を基準とした地割と併行する方向に配置されている。掘形は断面箱形を呈し、深さ約40cmではば垂直に掘り込まれ、底面は平らになるように成形されている。

掘形北側の側面

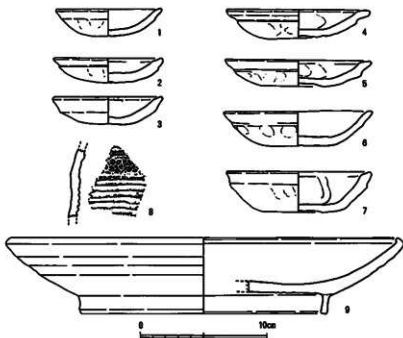
には幅20cm、奥行1cm程度で台形状に僅かに突出した部位がほぼ20cm間隔で3ヶ所あることが確認でき、側面を矢板状に板を廻らせた痕跡かと考えられた。しかし、その他の側面についても注意しながら掘下げを行ったが、北面ほど明瞭には検出できなかったため、全面に覆っていたかどうかは不明である。掘削痕である可能性も否定できないが、いずれにしても単なる土坑ではなく丁寧な成形を施して設置されたものとみられ、貯蔵穴などの性格が考慮される。時期については、焼土面を切って掘り込まれており、埋土には焼土粒が余り含まれていなかったことから、大規模火災から一定期間空けて形成されたものと考えられ、16世紀末葉から近世初期頃とみられる。

SK01 出土遺物 (第107図)

1～7は京都系土師器で、1～6は皿、



第106図 SK01実測図 (1/20)

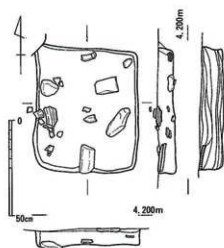


第107図 SK01出土遺物実測図 (1/3)

7は坏である。器壁が厚い資料が存在することから、3期以降に比定される資料群と推定される。8は瓦質土器の火鉢で、外面に梅花文の刻印と多条沈線を施す。9は高台を有する備前系陶器の大皿（盤）である。

SK02（第108図）

L12区の中央にて検出した東西約50cm、南北約60cmを測る平面形方形を呈する土坑で、SK01に切られている。掘形は断面箱形を呈し、深さ約10cmと非常に浅く、底面は平らに成形されている。大規模火災による焼土面を切って掘り込まれており、検出時には土坑表層に薄い炭層が覆っている状況であった。また、埋土は灰褐色砂質土や灰白色粘質土が薄く互層となり、土坑底面の全面に薄い炭層が検出された。その性格については不明である。時期は16世紀末葉から近世初頭頃と考えられる。



第108図 SK02実測図（1/20）

SK02出土遺物（第109図）

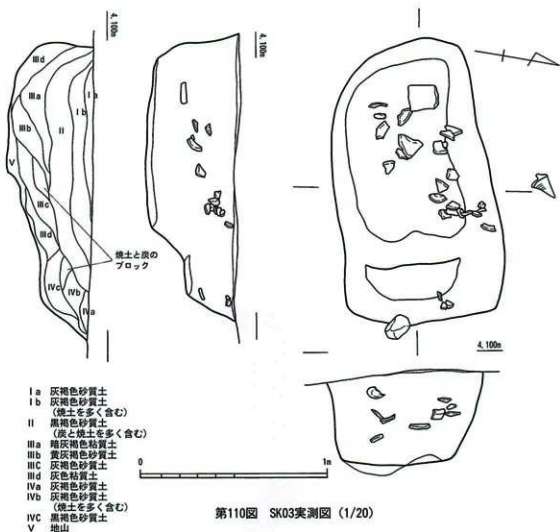
1は灰青軸陶器碗で、朝鮮王朝産の製品である。見込みと高台端部に目跡を有する。2は中国景德鎮窯系青花で、E群青花皿に分類される製品である。3・4は中部ベトナム産の焼締陶器長胴壺で、SB02周辺で出土した破片（第21図14～17）と同一個体と推定される資料である。口縁端部の外面に一条の細い沈線を廻らしている。胎土の色調は青灰褐色を呈する。5は銅銭の破片で、全体の2分の1程度が残存している。中国銭と推定されるが、鑄出のため、銭文の判読は不可能である。



第109図 SK02出土遺物実測図（1～4は1/3、5は1/1）

SK03 (第110図)

L12区にて検出された東西約150cm、南北約80cmを測る平面楕円形を呈する土坑で、深さは約50cmを測る。掘形の東側小口部は二段掘りとなっている。埋土には瓦や土器などの遺物が含まれていたが、主に中層(②層)に含まれており、埋没の過程で廃棄土坑として利用されたものと考えられる。埋土中には焼土や炭が多く含まれており、大規模火災以降の所産であろうと考えられる。



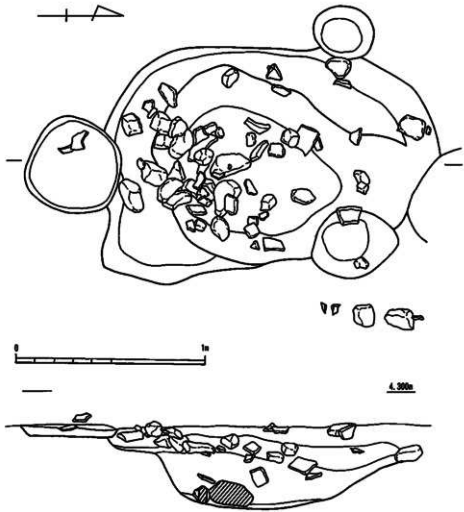
SK03 出土遺物 (第111図)

1は中国産の青釉小皿の底部破片で、外面には型打ち成形によって製作された蓮弁文がみられる。内外面に青釉を施すが、外底部は露胎となる。2~4は、いずれも京都系土師器の皿である。5は管状土鍾で、中型のサイズの製品である。

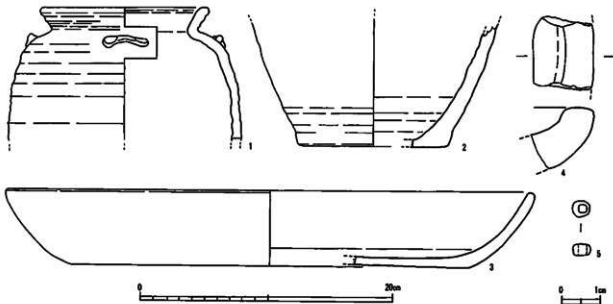


SK04
(第112図)

K12区にて検出された長径約180cm、短径約140cmの楕円形を呈する土坑で深さは約40cmである。掘形の西から南にかけて緩い肩を形成している。坑内からは人頭大～拳大の礫が多数検出され、埋土中には焼土が含まれていた。時期としては16世紀末から近世初期と見られる。



第112図 SK04実測図 (1/20)



第113図 SK04出土遺物実測図 (1~4は1/3、5は1/1)

SK04 出土遺物 (第113図)

1・2は備前系陶器四耳壺で、両者は同一個体である可能性があるが、接合していない。3は土師質土器の皿で、SX01からの出土破片と遺構間接合している。在地系の製品である。4は茶臼の罅部、5はガラス玉である。

SK05

平面的な検出には至らなかったが、13区の南壁にて確認した土坑で焼土面を切って掘り込んでいる。幅は約100cmを測る。

SK05 出土遺物 (第114図)

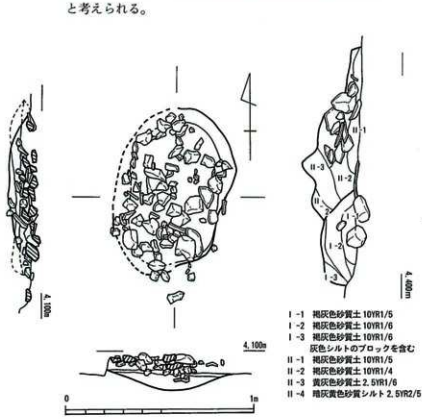
1は中国景德鎮窯系青花の小杯で、口縁部が外反する器形を呈する。2・3は内外面にロクロ目、底部外面に糸切り痕をもつ土師質土器皿で、赤褐色系の胎土を使用した在地系の製品である。

SK07 (第115図)

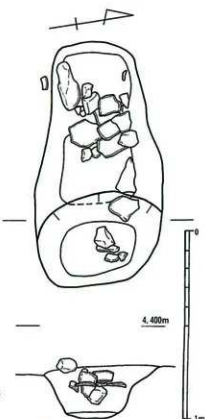
M12区にて検出した浅い土坑状の遺構で、埋土には多量の礫が入っていた。検出できた掘形の深さは、深いところでも10cm程度であったが、実際はさらに上層から掘りこまれていたものと考えられる。集積していた礫群は土坑の底面よりも若干浮いており、埋没する過程で廃棄されたものと考えられる。



第114図 SK05出土遺物実測図 (1/3)



第115図 SK07実測図 (1/20)

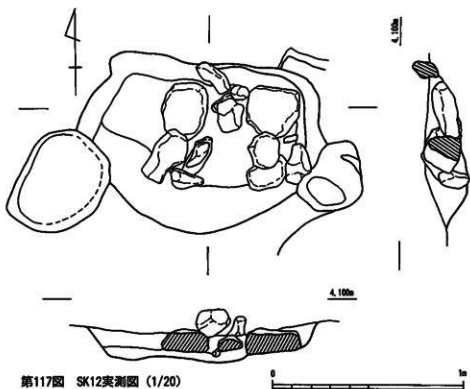


第116図 SK09実測図 (1/20)

SK09 (第116図)

平面形が楕円形を呈する土坑で、調査途中で2基の土坑が切りあったものであることが判明した。

埋土はどちらも褐灰色砂質土で焼土粒を含んでおり、時期的な違いはほとんどないものと見られる。西側には幅25cm程の肩部を形成し、拳大の礫や瓦が流れ込む状況で多数検出されており、廃棄土坑的な性格のものと思われる。

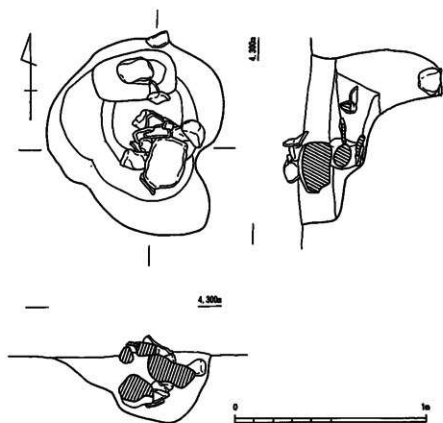


第117図 SK12実測図 (1/20)

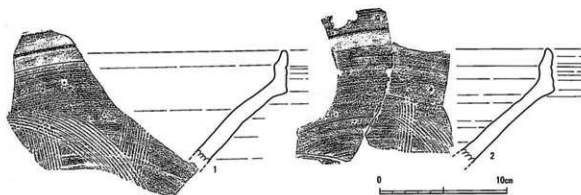
SK12

(第117図)

M13区にて検された土坑状の遺構で、その内部に幅40～50cm大の石が集積した状態で検出された。土坑の掘形は平面上で明確に検出できなかったが、平面楕円形状で南東部をSE01により切られている。廃棄土坑的な性格かと考えられる。



第118図 SK13実測図 (1/20)



第119図 SK13出土遺物実測図 (1/3)

SK13 (第118図)

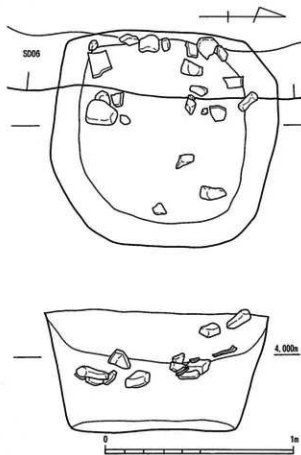
L11区と12区のはぼ中間にて検出した遺構で、平面が不定形の土坑である。平面上での切り合いの確認には至らなかったが、4基程度の土坑や柱穴が切りあって形成されたものと考えられる。外縁部分に浅いビット状の土坑2基、その中央部分で礫が詰った状態のビット状の土坑とその下層に平面形が隅丸方形状を呈する深さ約90cmの柱穴が確認できる。柱穴には柱を支えるための礎盤石が確認できる。柱穴の埋土中には焼土が全く含まれず、大規模火災以前のもので町屋の造成が完成した段階以降のものであるため、16世紀後葉から末葉のものと考えられる。

SK13 出土遺物 (第119図)

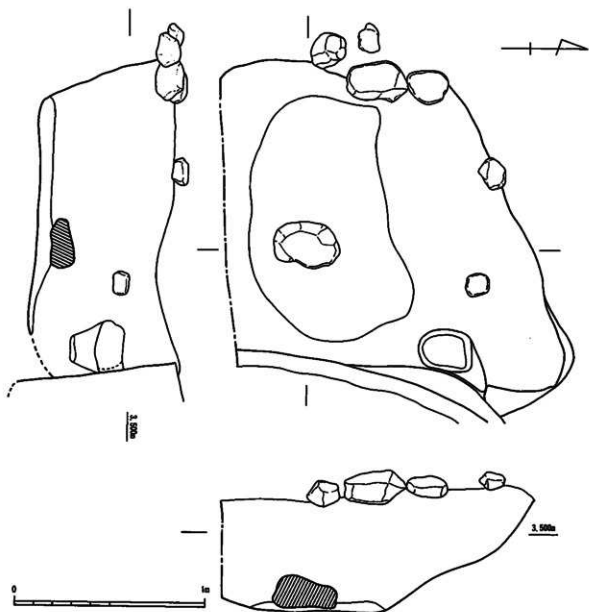
1・2 はいずれも備前系陶器播鉢で、内面に放射状播目と斜め播目を交差させる。乗岡編年による近世1期bに分類される製品である。

SK14 (第120図)

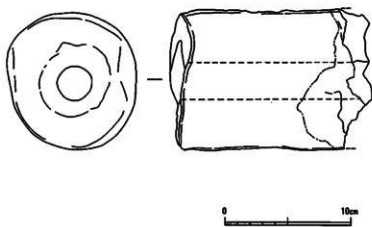
K12区にて検出された平面円形を呈する土坑で、検出当初は井筒の可能性が高いと考えたが、周囲の掘形が検出できなかったために半載したところ、土坑であることが判明した。断面形はU字型を呈し、底面は緩やかに窪む。掘形の上面には大規模火災による焼土層以前の薄い整地層が覆っており、西側はSD06に切られている。この薄い整地層は平面的な確認はできなかったものの、SB01が築かれる段階の整地の可能性があるものと考えられる。底面には薄い灰褐色シルト層が堆積している状況が確認でき、僅かに水が溜まる状況があったものと考えられる。



第120図 SK14実測図 (1/20)



第121図 SK15実測図 (1/20)



第122図 SK15出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

SK15 (第121図)

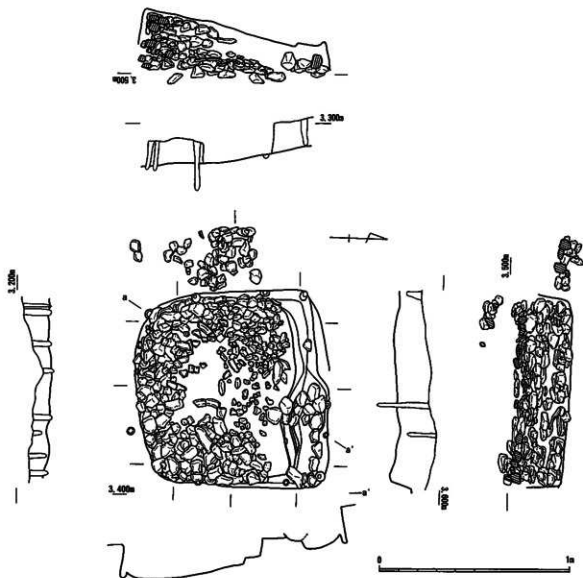
M13区、調査区南壁沿いトレンチ断面にて確認された土坑で、現状で東西約1.5m、南北1.7m、深さ60cmを測る。SK05により西側肩部付近を、SE01によって東側肩部付近を切られており、焼土面よりも下層にて検出した。16世紀後葉のものと考えられる。

SK15 出土遺物 (第122図)

図示した遺物は、凝灰岩製の輪羽口である。近年、中世大友府内町跡やその周辺で出土事例が増加している資料で、河野史郎⁽¹⁰⁾によって集成と考察がなされている遺物である。

SK16 (第123図)

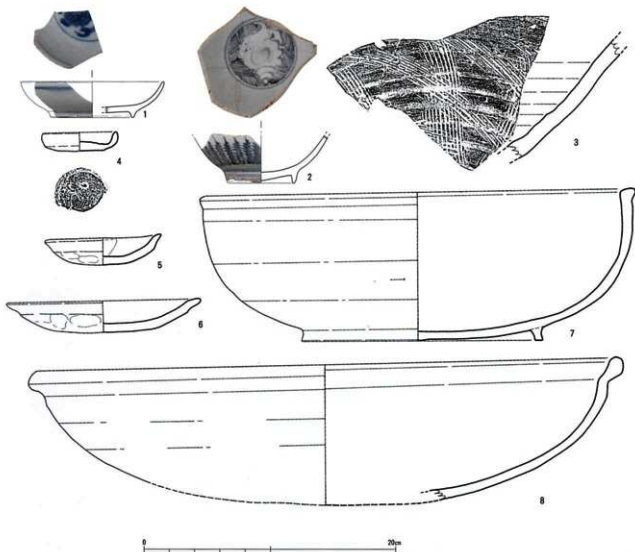
M13区にて検出された土坑で、平面形がほぼ200cm四方の隅丸方形を呈している。内部からは多量の礫が詰め込まれた状態で検出された。掘形はほぼ垂直に掘り込まれ、北側には明確な段が形成され、北側から南にかけて緩やかな傾斜で下っていた。掘形の四隅には5～10cmの杭痕と見られる床



第123図 SK16実測図 (1/20)

註(10) 河野史郎「石製フイゴ羽口について」(『鶴崎町遺跡群(三軒町)』(大分市教育委員会 2005年))

面よりも深い穴が確認され、各壁沿いに4～8箇所に同様の痕跡が検出された。壁には縦方向に溝状の痕跡が残っており、杭が壁に接していたことが分かる。杭痕の間隔は一定ではなく、特に南壁沿いに最も多い。また、北側の段沿いに2箇所の杭痕を検出している。性格等は不明だが、かなり手の込んだ造りであり、何らかの施設であったものと見られる。時期としては16世紀末葉である。



第124図 SK16出土遺物実測図① (1/3)

SK16 出土遺物 (第124・125図)

第124図1・2は中国景德鎮系青花の製品で、1はE群青花皿、2はC群青花碗である。3は備前系陶器播鉢の胴部破片で、内面播目の特徴から、近世1期b分類される。4は口縁部がやや内湾しながら立ち上がる形態の土師質土器皿で、底部外面には回転糸切り痕が認められる。手捏ね成形の土師質土器小皿を模倣した製品である可能性がある。5・6は京都系土師器皿で



第125図 SK16出土遺物実測図② (1/1)

第2節 遺構と遺物

ある。7・8は土師質土器で、前者は鉢、後者は鍋である。7についてはSK16からの出土破片の他、SB02周辺およびSP22からの出土破片が遺構間接合している。第125図は北宋銭の元祐通寶で、初鑄造年は1086年である。書体は篆書体である。

SX05

M12区にて検出された段状遺構と見られる遺構で、調査区東端の深掘りを行っている途中で検出された。部分的な検出のみで全体形を把握することができなかった。東側に向して急角度で法面を形成している。検出状況及び埋土の堆積状況からは溝状遺構の可能性も考えられたが、西側対岸が明確には検出できなかったことや埋土の状況からみて、段状遺構の可能性があると判断した。時期は16世紀後葉である。

SX02（第126図）

I11～13区調査区の西壁に沿って検出された不定形の土坑状凹部で、その埋土には多量の瓦礫や炭・焼土が含まれていた。伴出した遺物には唐津焼も含まれ、大規模火災以後に形成されたもので、16世紀末から近世初期である。西壁拡張区ではさらに西側にも同様の掘り込みの存在を確認している。



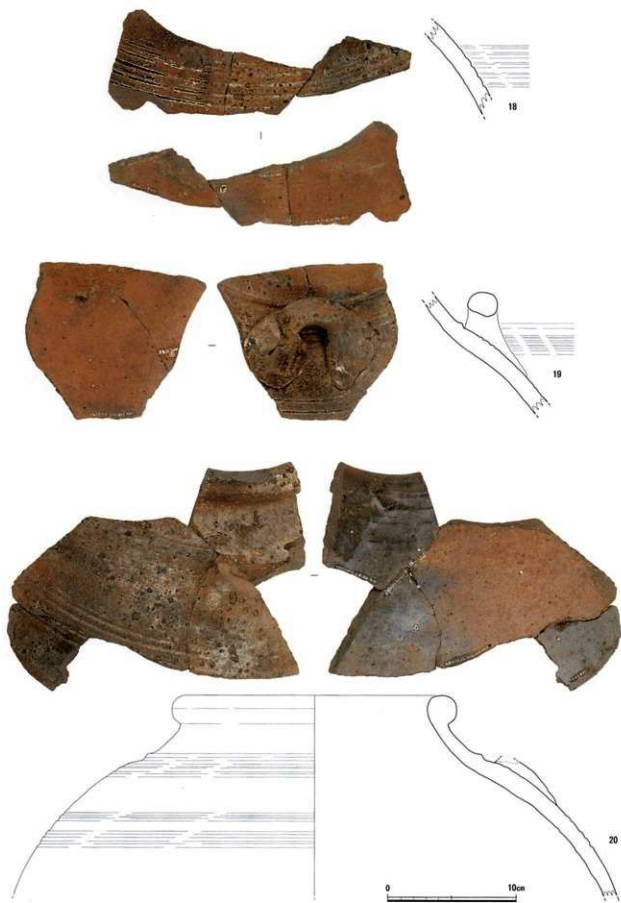
第126図 SX02調査状況



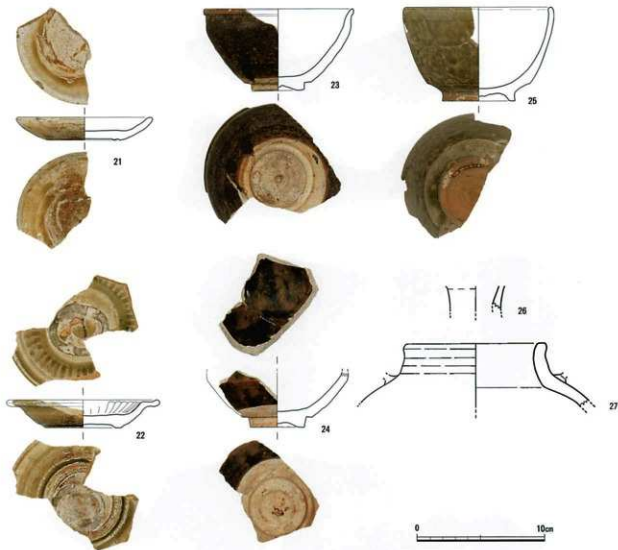
第127図 SX02出土遺物実測図① (1/3)



第128図 SX02出土遺物実測図② (1/3)



第129図 SX02出土遺物実測図③ (1/3)

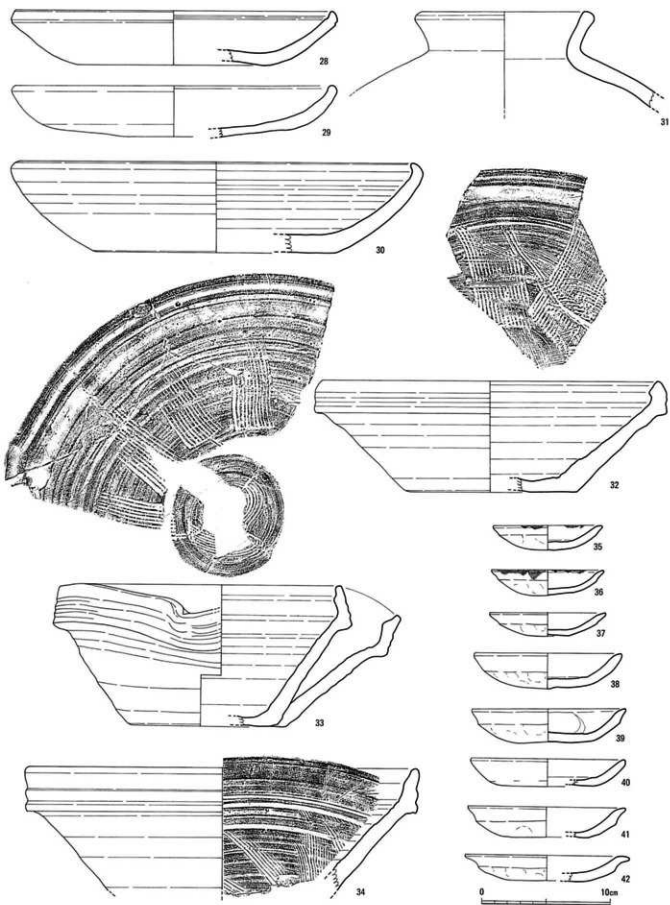


第130図 SX02出土遺物実測図④ (1/3)

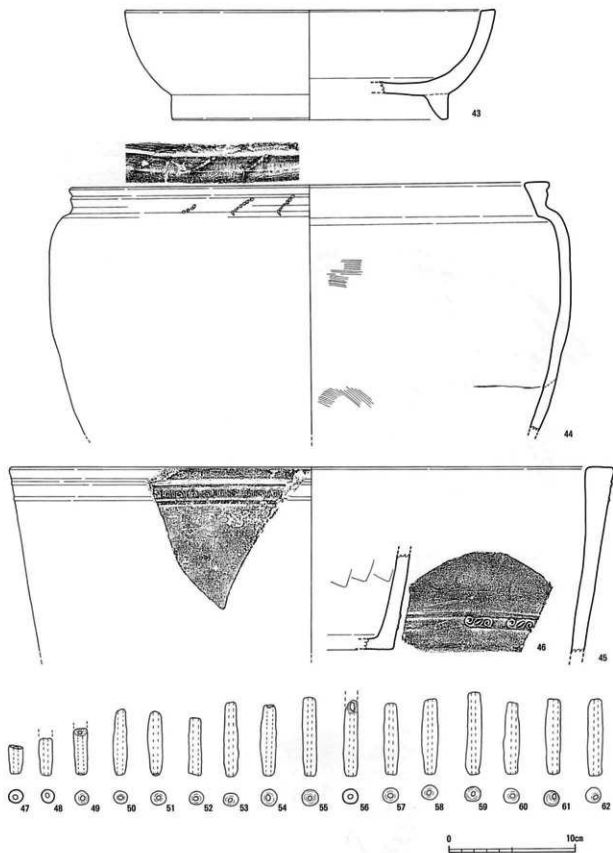
SX02 出土遺物 (第127～137図)

第127図1～8には、中国景德鎮窯系青花を提示した。1はE群青花碗で、外底部の銘款は異体字銘である。2～6は皿で、2はC群青花皿、3～5はE群青花皿、6はF群青花皿に分類される製品である。これらの中で外底部の銘款が判明するものとしては、3の「福」、4の「大明洪武年造」、5「富貴佳器」がある。7・8は小杯で、いずれも口縁部が外反する形態を呈し、7の内底部には「福」銘がある。9は青軸小皿で、二次的な被熱により、コバルトブルーの色軸が暗褐色に変色している。10は中国漳州窯系青花碗で、外底部のみが露胎となる。11・12は中国産の白磁製品である。11は瓶で、高台豊付部と内面が露胎となる。12はD群に分類される皿で、内底部に刃物などによって施された記号が認められる。第128図13は中国産の褐釉陶器五耳壺である。外面に黄色味を帯びた褐釉を施し、内面は露胎となる。「葉茶壺」として使用された可能性が考慮される製品である。14～17は内外面に灰青釉を施す朝鮮王朝産陶器碗で、見込みと高台端部に目跡を有する。第129図18～20はタイ産の焼締陶器四耳壺で、メナムノイ窯の製品である。いずれも二字的な被熱を強く受けており、同一個体である可能性がある。21～24は瀬戸美濃系陶器で、21は皿、22は折縁ソギ皿、23・24は天目碗である。25は肥前(唐津)系陶器碗で、胴部下半の外面に稜を有し、内外面に土灰釉と呼称される深緑色の釉を施す。高台周辺は露胎となる。見込み、高台端部ともに、目跡は認められな

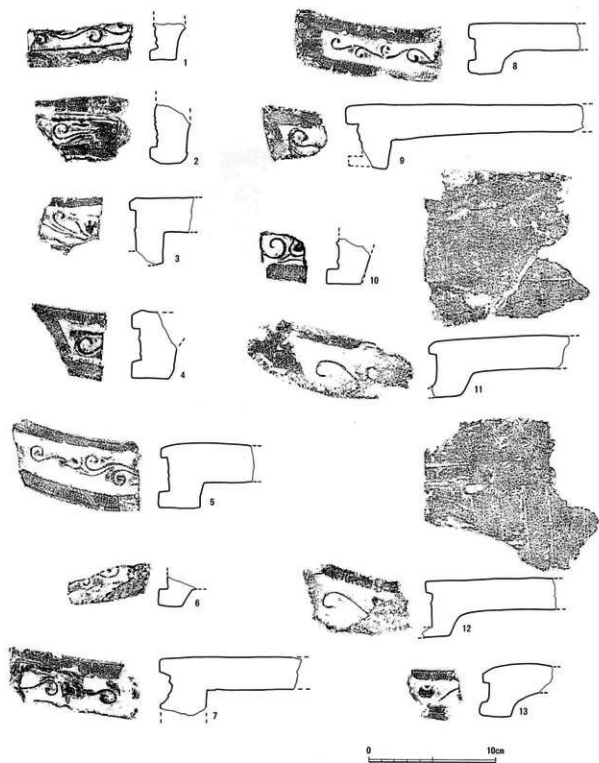
褐釉陶器
五耳壺
(葉茶壺か?)



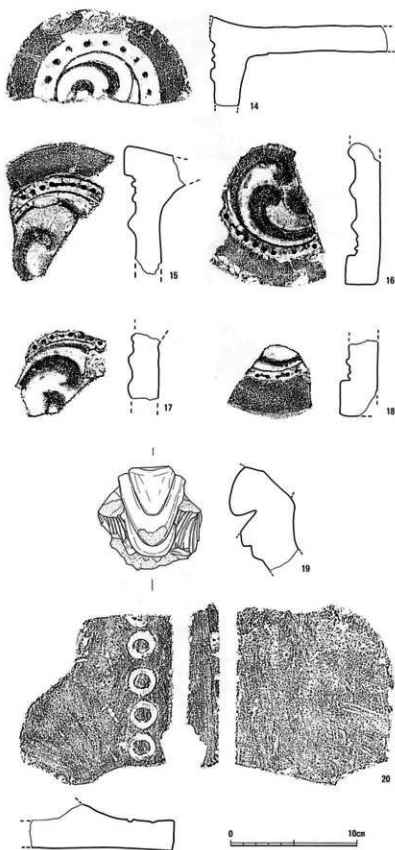
第131図 SX02出土遺物実測図⑤ (1/3)



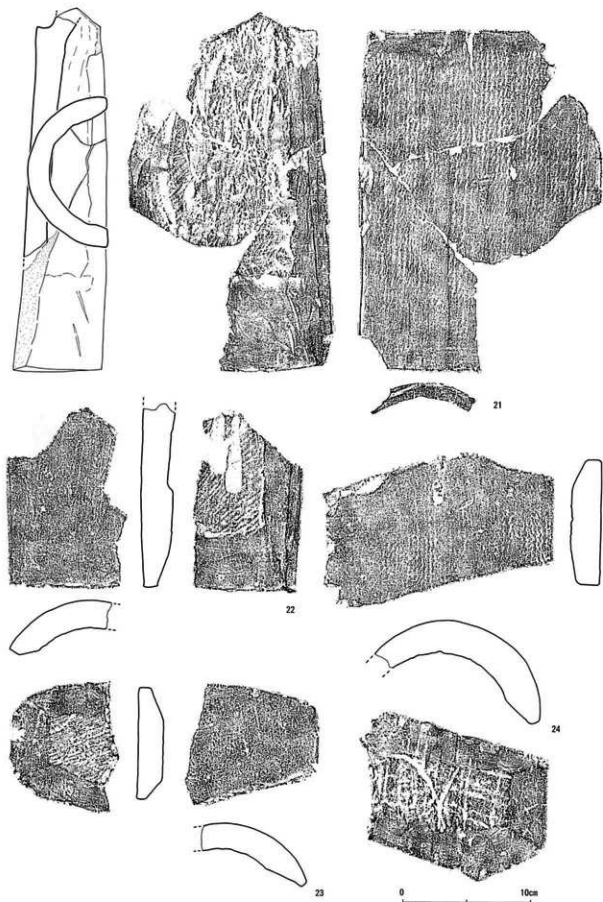
第132図 SX02出土遺物実測図⑥ (1/3)



第133図 SX02出土遺物実測図⑦ (1/3)

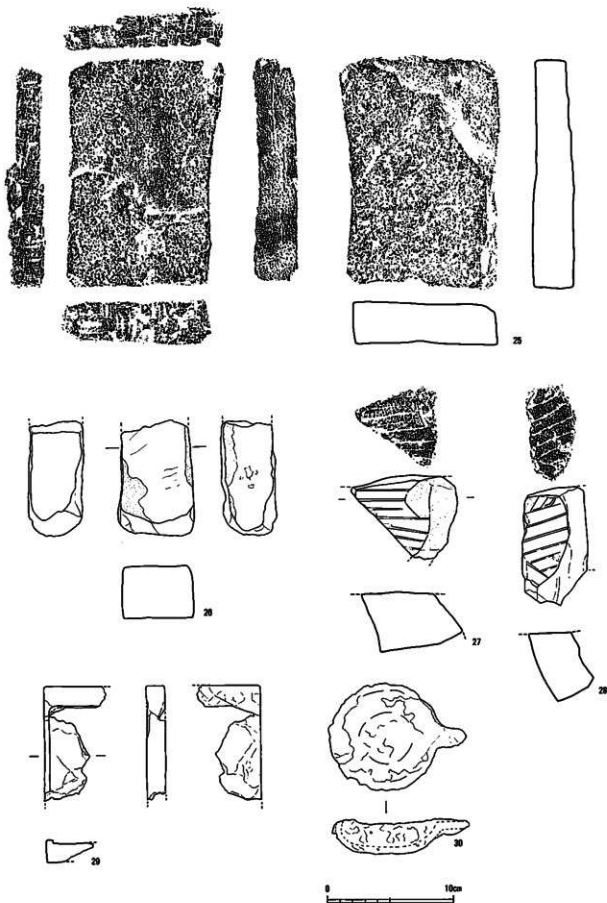


第134図 SX02出土遺物実測図⑧ (1/3)

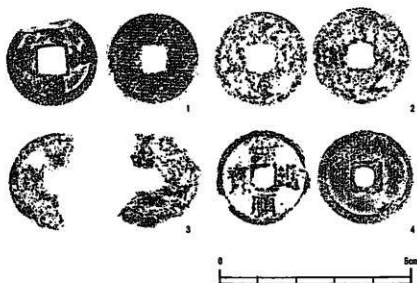


第135図 SX02出土遺物実測図⑨ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第136図 SX02出土遺物実測図⑩ (1/3)



第137図 SX02出土遺物実測図① (1/1)

い。16世紀末葉から17世紀初頭（1590～1600年代）に比定される製品である。26・27は中国産の褐釉陶器壺である。

第131図28～34には備前系陶器を提示した。28～30は鉢、31は壺、32～34は播鉢である。このうち播鉢については、内面播目の特徴から、33が中世6期、32・34が近世1期bに分類される製品である。35～42は京都系土師器皿で、いずれも2期ないし3期以降に比定される。第132図43～46は瓦質土器で、いずれも在地系の製品である。43は高台付きの鉢で、内外面にミガキを施す。44は広口壺または火鉢で、口縁部外面には櫛状工具を使用した列点文が認められる。45・46は火鉢で、外面に2条の突帯を有し、突帯間に二連雷文または双頭獣手流雲文を押し捺す。47～62は管状土甕である。法量や重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。

第133～135図には瓦を提示した。第133図1～13は、軒平瓦である。いずれも破片であるため、瓦当文様の全量が判明するものは少ないが、13については宝珠文の中心飾りの部位が残存している。第134図14～18は軒丸瓦で、いずれも巴文を瓦当文様とする。19・20は鬼瓦の破片である。19は鬼面の髭部と口部が残存している資料と思われる、20は円文が押し捺された周縁部の破片である。第135図21・22は丸瓦で、後者の22の凹面には内叩き痕が認められる。23・24は面戸瓦である。

第136図25は板状の石材を加工したもので、用途不明の製品である。砥石の一種である可能性が考えられる。26は砥石で、砥底と思われるが、およそ半分が欠損している。27・28は石臼の破片である。29は輝緑凝灰岩を素材とした赤間硯である。30は鉄製内子である。

第137図に提示したものは、銅銭の拓影図である。このうち、注目すべきものは4の「洪順通寶」で、初鋳造年1509年の安南銭（ベトナム銭）である。現状では、中世大友府内町跡において安南銭の出土は3例に留まっており、その内訳は「洪順通寶（後黎・1509）」が2例（第12次・第30次）、「紹平通寶（後黎・1434）」が1例（第43次）となっている¹¹⁾。その他の銅銭のデータについては、遺物観察表を参照されたい。

安南銭

(11) 畔津宏幸氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の教示による。なお、安南銭については、第12次調査区以外の資料は未報告である。

包含層・整地層出土遺物（第138～156図）

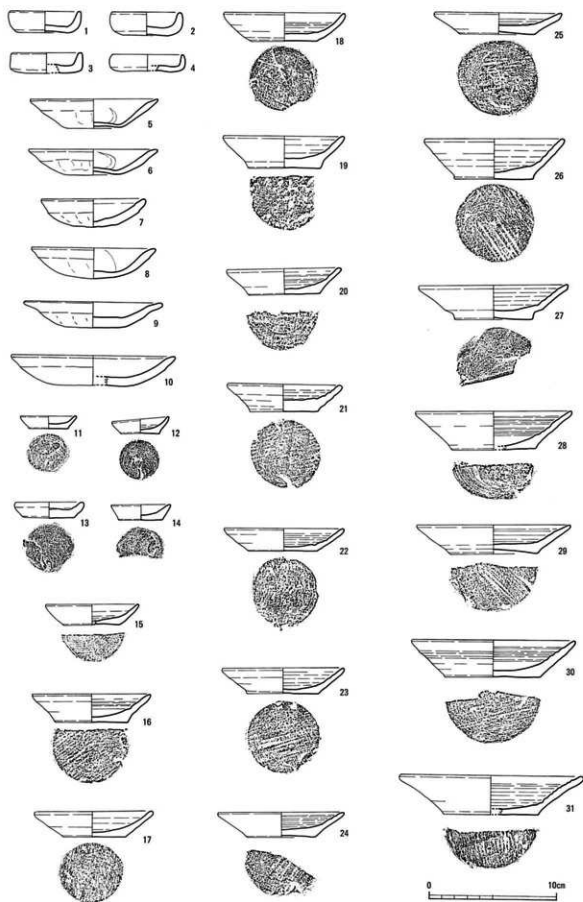
包含層・整地層出土遺物のうち、「土師質土器混りの混整地層」として、取り上げられていたものを第138～139図に提示した。第138図1～4は、手捏ね成形による土師質土器小皿である。当該遺物については、焼塩蓋の蓋として使用された器形のもとと区別ができない資料であるが、単体で小皿としても使用されたことが確認できるものである。5～10は京都系土師器皿で、器壁が薄く、1期に比定されるもの（5・6）と器壁がやや厚く、2期に比定できるもの（7～10）が出土している。11～31は赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロク目を有する在地系の土師質土器皿である。口径が5cm以下の小型のものから、15cmを超える中型のものまで、いくつかの法量が存在するようである。外底部には糸切り痕を有するものと糸切り痕および板状圧痕を有するもの、両者が認められる。第139図32は緑軸小皿で、型打ち成形によって製作された菊花形の口縁部破片である。類似した製品に青軸小皿があるが、緑軸を施すものと青軸を施すものでは器形に違いが認められることに注意を払っておきたい。33～36は備前系陶器で、33・34は壺、35は瓶、36は瓶または鉢である。なお、35の底部外面にはヘラ記号が認められる。37～40は瓦質土器の製品で、37は鉢の底部、38は風炉または火鉢の底部から脚部の大型破片、39・40は火鉢である。39・40については、口縁部外面に低い2条の突帯を巡らし、突帯間に双頭藤手流雲文を押捺する。

第140～156図には、遺構に帰属しない、その他の遺物を提示している。

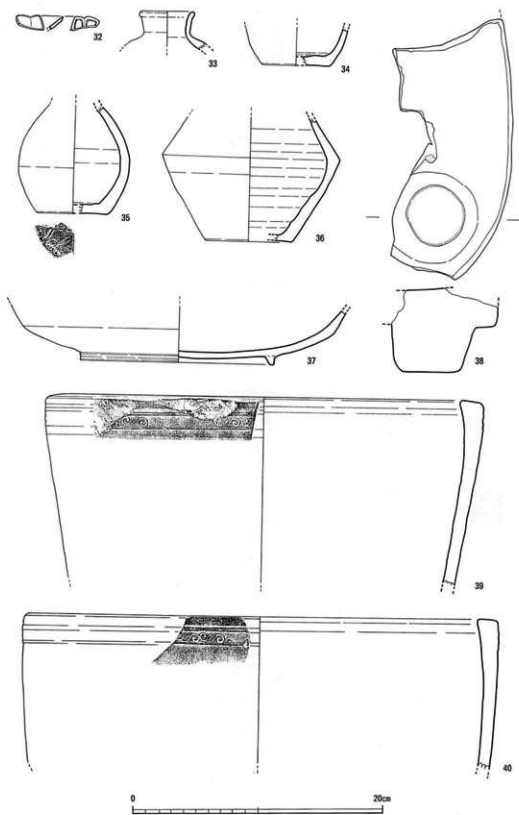
第140図1～12は、中国景德鎮窯系青花である。1はE群青花碗で、外底部の銘款は、一重圏線内に「福」である。2～6はE群青花皿で、2・3がC群皿、4～6がE群皿である。6の外底部には二重圏線が認められ、銘款が存在したと思われるが、欠損のため不明である。7～9は小杯で、7・8は口縁部が外反するもの、9は口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。10は瓶頸などの耳（把手）と推定される破片である。11は磁器片の再加工品で、C群青花皿の底部付近の破片が使用されている。12は外面に緑彩、内面に透明釉を施す製品で、碗などの胴部破片と推定される。13～17は中国漳州窯系青花である。13は瓶の底部破片で、外底部と内面が露胎となる。14・15は碗、前者は見込みが蛇の目状に釉割きされているが、後者は全面に施釉されている。16は皿で、外底部が露胎となる。17は磁器片の再加工品で、胎土や釉薬の状況から、漳州窯の製品の破片を再加工したものと推定される。18は陶器で、把手の一部と思われる。詳細な産地は不明であるが、中国産の製品であろうか。19は中国産の黒軸陶器蓋で、内面が露胎となる。20・21は青軸小皿で、両者とも二次的な被熱によって、釉色が褐色に変色している。

第141図22～24は華南三彩である。22の外面に緑釉が施こされ、貼花による文様が剥落した痕跡が認められる。内面は露胎となるが、残存部の上位には薄い鉄釉が施されている。蓋の肩部付近の破片と推定される。一見した印象では「トラディスカント壺」と呼称される製品に類似した印象を受けるが、トラディスカント壺は内面全体に暗褐色の釉を施すため、提示した破片とは異なるものである。23は蓋で、ツマミと銜部の外面に緑釉が施されている。鳥形水注などの水注頸とセットになる蓋と推定される。24は菊花形の皿で、内外面に緑釉を施す。二次的な被熱によって、内外面が荒れている。25～28は中国龍泉窯系青磁で、25～27は大皿（盤）、28は瓶である。25～27の盤は内面のみに鎊文が認められ、28の外面には片彫りによる花文が施されている。29～33は中国産の白磁である。29は見込みと高台周辺が露胎となる白磁皿で、田中克子による集成図の中に類例がある¹⁰⁰⁾。30は菊花形の皿、31は碗、32は小杯、33は皿で、いずれも森田分類E群に比定される製品である。

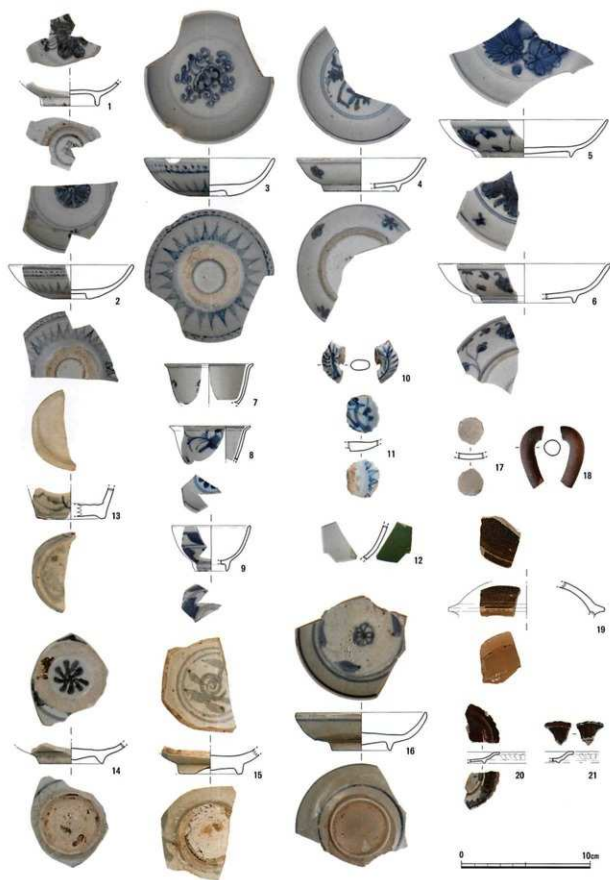
(12) 田中克子「博多遺跡群出土の内底露胎の磁器の一群について」(『博多研究会誌』第4号 1996年)



第138図 包含層・整地層出土遺物実測図① (土師質土器混りの整地層 1 1/3)

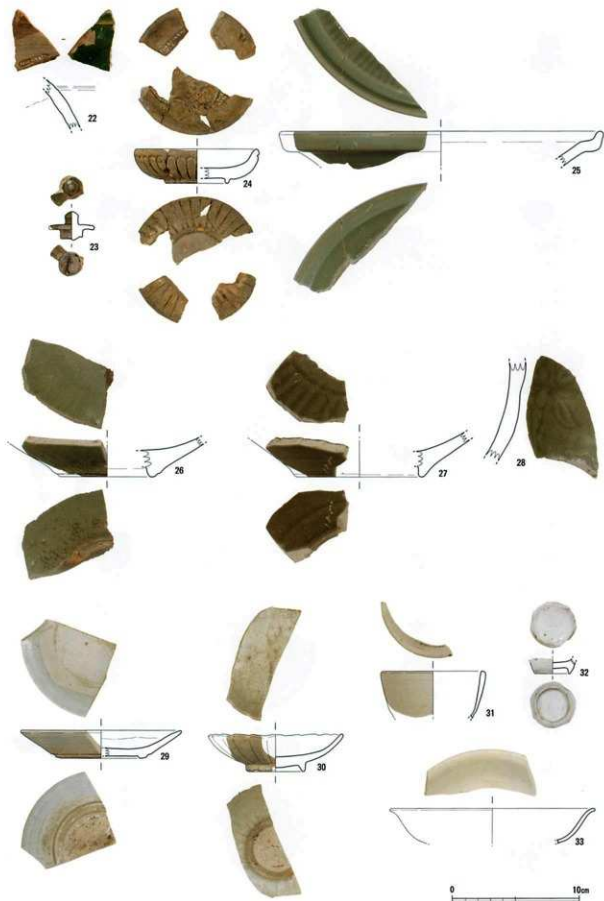


第139図 包含層・整地層出土遺物実測図②（土師質土器混りの整地層 2 1/3）

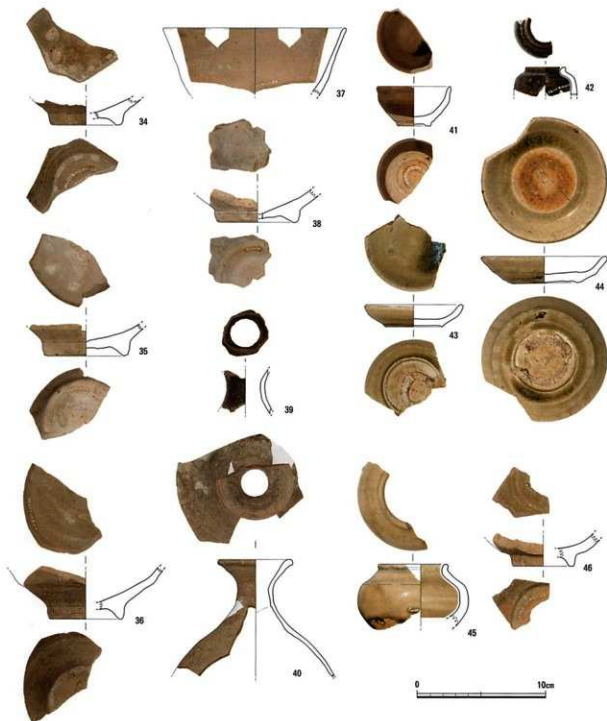


第140図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3)

第2節 遺構と遺物



第141図 包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/3)



第142図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3)

第142図34～40は朝鮮王朝産陶器で、34～38は内外面に灰青釉を施す陶器碗、39・40は瓶（舟徳利）である。41～45は瀬戸美濃系陶器で、41は小型の天目碗、42は茶入、43・44は皿、45は壺である。この中で特に注目すべきものは42の茶入で、中世大友府内町跡において、瀬戸美濃系陶器茶入の出土事例は、現状では当該資料1例のみに留まる。ただし、本資料の出土地点は「近世水田層」と記録されており、本来の出土層位からは遊離したものである可能性が高い。46は肥前（唐津）系陶器碗で、内外面に土灰釉と呼称される深緑色の釉を施す。見込みや高台端部に目跡は認められない。16世紀末葉から17世紀初頭（1590～1600年代）に比定される。

第2節 遺構と遺物

ベトナム産
長胴壺

第143図47～49は肩部に円形文を押捺する焼締陶器の小型壺である。産地としては、中国あるいは備前の可能性が考えられるが、前者の製品である可能性が高いと考えている。SX01出土資料の中に同一個体あるいは類似の製品が認められる（第46図43）。50は中国産褐釉陶器蓋で、外面のみに褐釉が施され、内面は露胎なる。口縁部は研磨によって再生されており、破損品に再加工を加えたものと推定される。51は中国産の黒軸陶器壺の口縁部で、二次的な被熱を強く受け、器表面が荒れている。52・53は中部ベトナム産の焼締陶器長胴壺で、53の外面には浅い沈線文が施されている。前項で長胴壺として提示したSB02周辺およびSK02出土資料（第21図14～17、第109図3・4）が青灰色を呈するのに対して、本資料は明褐色を呈している。54～61は備前系陶器で、54・55は鉢、56は瓶（徳利）、57は壺、58は長胴形の鉢、59～61は播鉢である。54の底部外面と56乃胴部外面には、ヘラ記号が認められる。また、播鉢については、内面播目の特徴などから、59・61が近世1期b、60が中世6期に分類される。

第144図62～94・96・97は京都系土師器で、62～94が皿、96・97が坏である。95は土師質土器の小皿で、京都系土師器と類似した胎土で製作されている。98の耳皿は、このタイプの小皿を変形させて製作したものである。99の土師質土器皿は底部外面に糸切り痕を有しているが、口縁部や胴部の断面形態が京都系土師器と類似する。京都系土師器を模倣して製作された資料である。100は底部に糸切り痕をもつ土師質土器小皿、101は土師質土器の燗台である。102～106は赤褐色系の胎土を使用し、内面にクロロ目をもつ土師質土器皿である。107は在地系の土師質土器皿の破片に再加工をした土器片加工品である。

第145図には、瓦質土器の製品を提示している。108は瓦質土器を再利用した円盤状の加工品で、周辺部には丁寧な研磨がなされている。109・110は瓦質土器播鉢で、口縁部が内側に肥厚する形態を呈することから、防長系の系譜を引くものであろう。11は壺で、外面にミガキを施す。112は鉢で、口縁外面には菊花文が押捺されている。113は香炉と思われる製品で、口縁部外面に双頭燕手流雲文を押捺する。114は火鉢の底部付近の破片で、外面の二条の突帯間に双頭燕手流雲文を押捺している。115は広口壺あるいは火鉢で、口縁部外面に弧線による文様を施している。

第146・147図に提示したものは、管状土鍾である。法量・重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。第148・149図は瓦である。第148図1～4は軒丸瓦で、いずれも巴文を瓦当文様とする。5～7は軒平瓦で、いずれも近世唐草文を瓦当文様とする資料である。5の中心飾りは宝珠文である。第149図8は平瓦で、凸面に縦方向の調整痕、凹面に糸切り痕（コビキA）が残る。なお、端面付近の段は、調整台の痕跡である可能性が高い。9は丸瓦で、凸面に縄目叩き、凹面に布目痕が残る。なお、凸面の縄目叩きは全面に渡ってナデ消そうとした意図が窺える。

犬形土製品

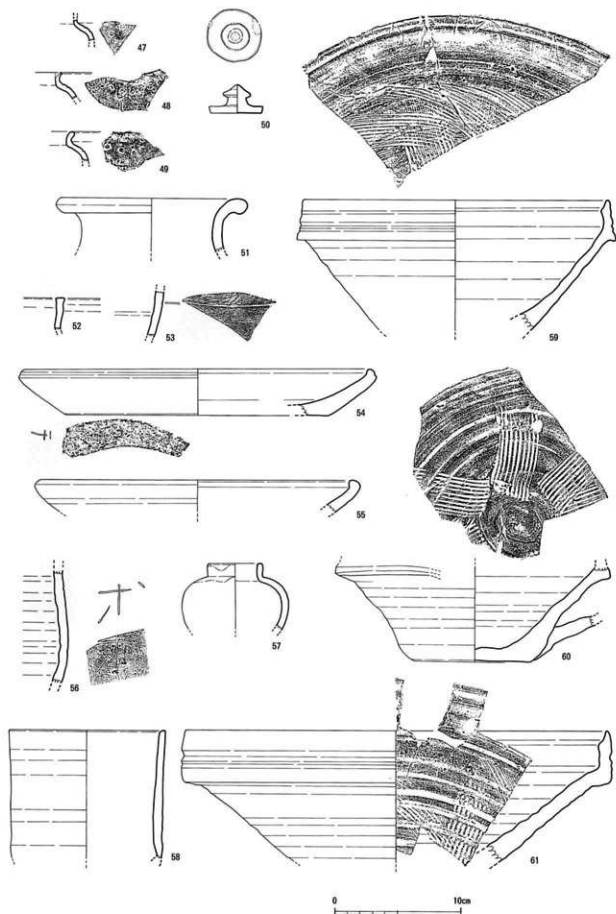
第150図1～7は、犬形土製品¹³⁾である。当該資料については、織豊期の特徴的な遺物として理解されているものであり、大坂地域で製作されたものである可能性が高い¹⁴⁾。中世大友府内町跡でも天正14年（1586）前後の整地層から出土事例が増加しているものである。8は糞子で、骨角を素材とする。9～11は石製品で、7は砂岩系の石材を素材とする砥石、10・11は輝緑凝灰岩を素材とする赤間硯である。

糞子

(13) 犬形土製品については、下記文献を参照した。

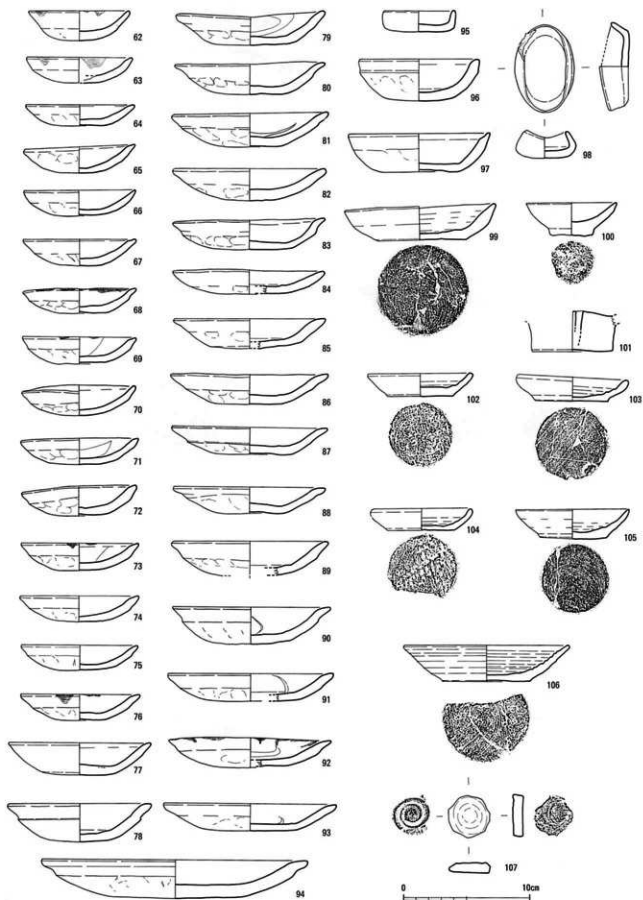
嶋谷和彦「織豊期の犬形土製品」（『関西近世考古学研究』1 1991年）

江浦洋「土製品」（『大阪城址Ⅱ—大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書—』（財）大阪府文化財調査研究センター 2002年）

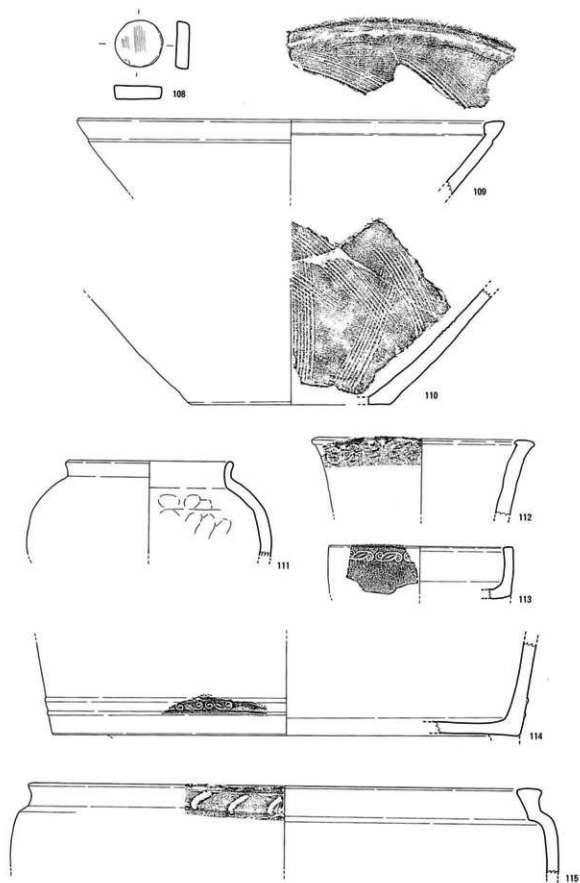


第143図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3)

第2節 遺構と遺物

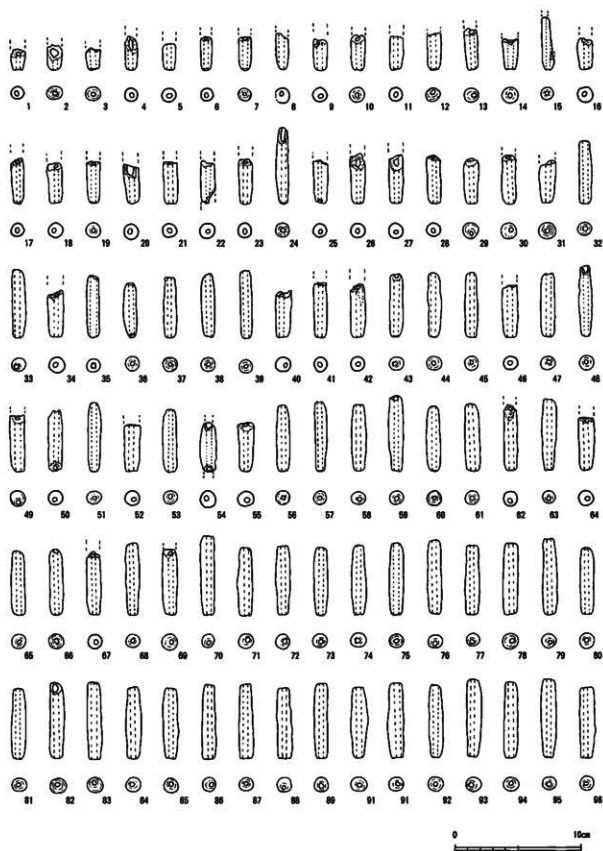


第144図 包含層・整地層出土遺物実測図⑦ (1/3)

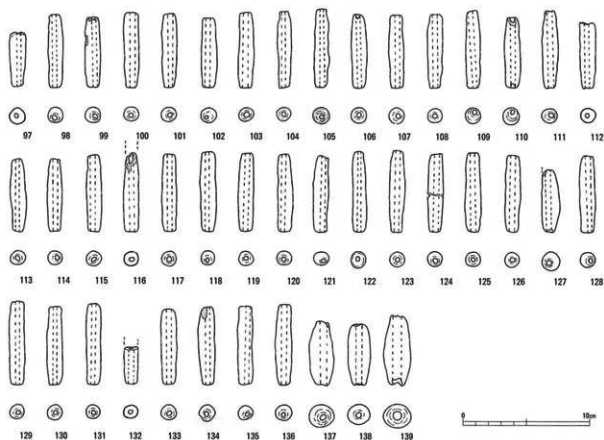


第145図 包含層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)

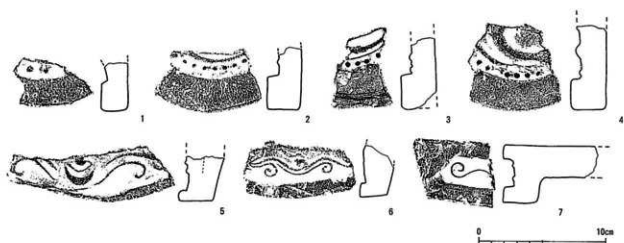
第2節 遺構と遺物



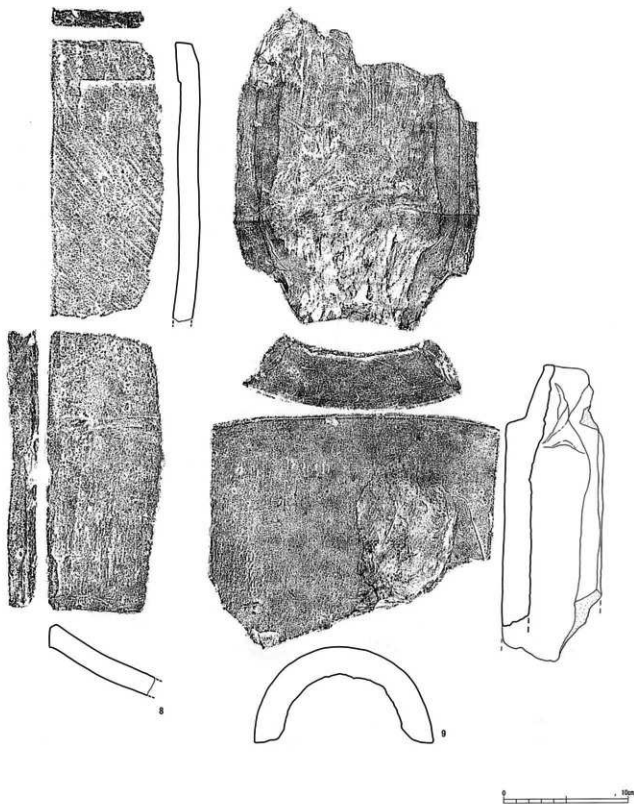
第146図 包含層・整地層出土遺物実測図⑨ (1/3)



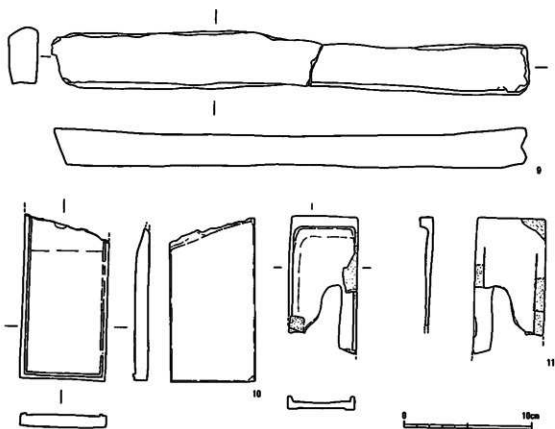
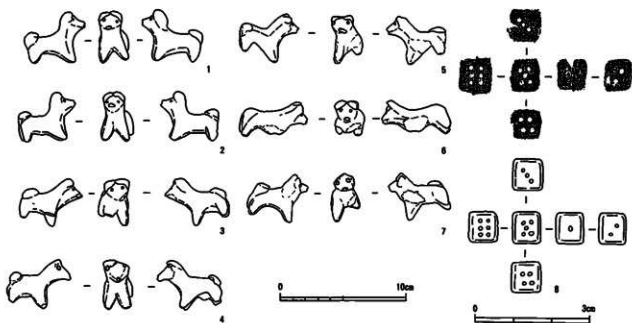
第147図 包含層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/3)



第148図 包含層・整地層出土遺物実測図⑪ (1/3)

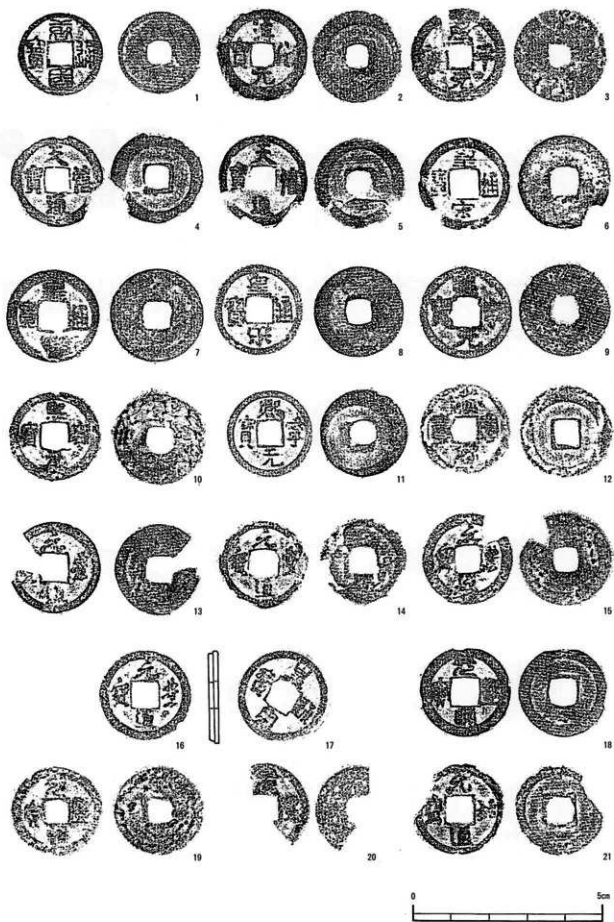


第149図 包含層・整地層出土遺物実測図⑫ (1/3)

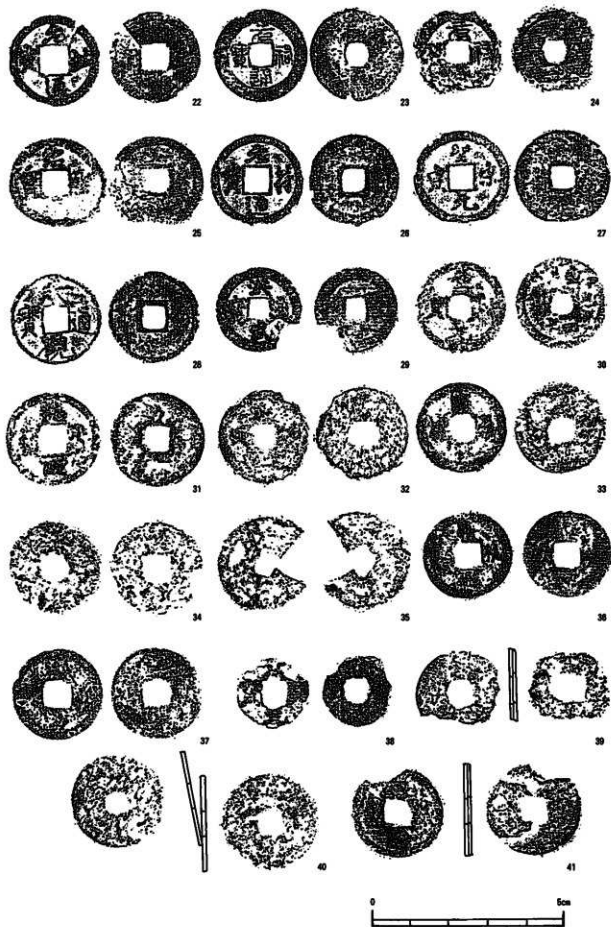


第150図 包含層・整地層出土遺物実測図⑨ (1~7・9~11は1/3、8は1/1)

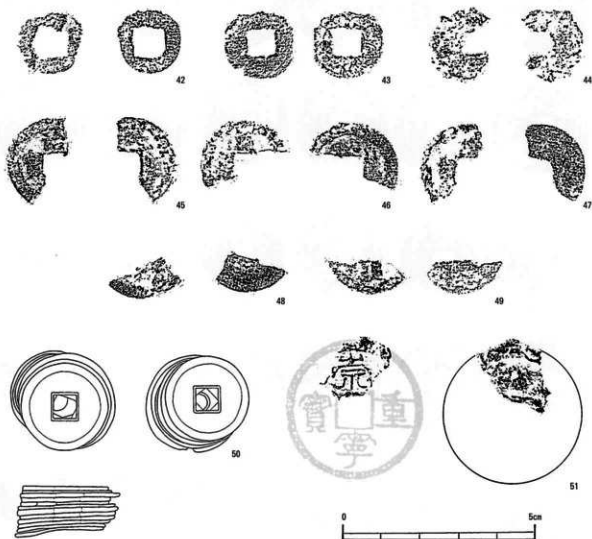
第2節 遺構と遺物



第151図 包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/1)



第152図 包含層・整地層出土遺物実測図㊸ (1/1)



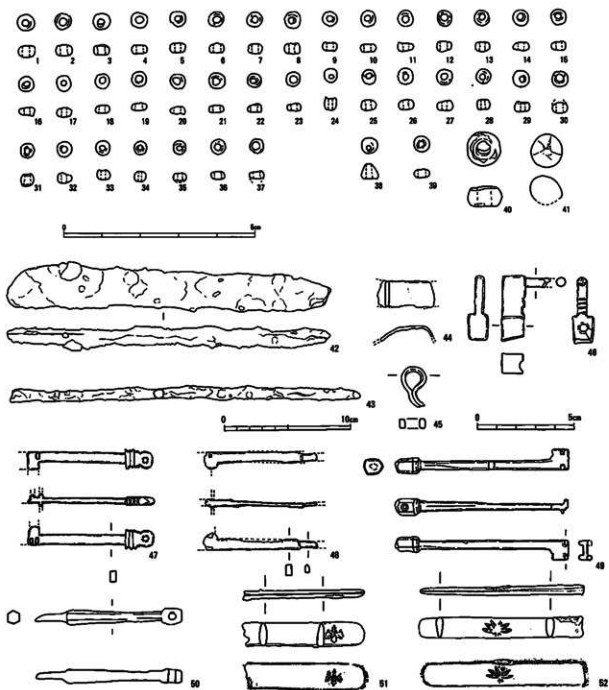
第153図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/1)

第151～153図には、銅銭の拓影図・実測図を提示した。初铸造年や径、重さなどのデータについては、遺物観察表を参照されたい。このうち、50はサシの状態出土した銅銭で、12枚が鑄着している。個々の銭貨については、現状では分解・剥離を行っていない。42・43は、無文銭と思われる資料で、国内で铸造された貨幣である可能製が高い。また、51は「崇寧重寶」で、通常の銅銭より径が大きい「大銭」¹⁰⁾と称される資料である。

大銭

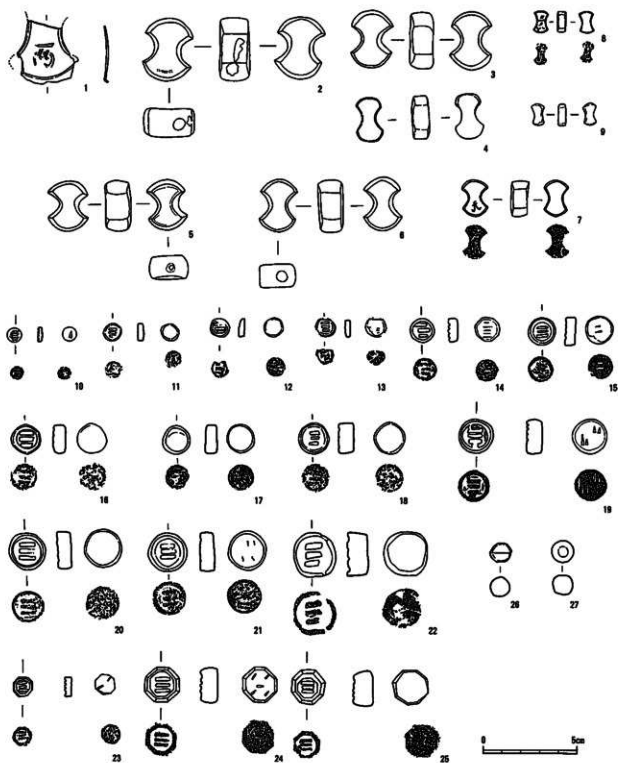
- (14) 畔津宏幸氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の教示によると、大分県下における「大銭」の出土事例は、大分市中世大友府内町跡第12次調査区のほか、第30次調査区（いずれも「崇寧重寶」、第30次調査区については未報告）、同第9次調査区（「熙寧重寶」、本書第3分冊参照）、同第18次調査区（「崇寧通寶」、本書第2分冊参照）日田市塔ノ本古墳（「崇寧通寶」）の5例がある。

日田市教育委員会『平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園園遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次』（日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 2001年）40頁、第29図36



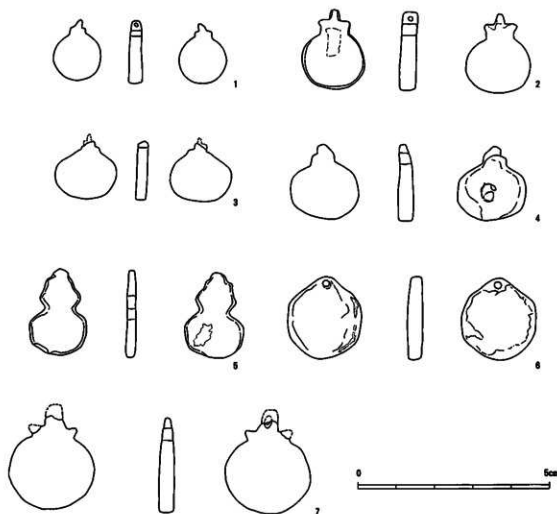
第154図 包含層・整地層出土物実測図⑦(1～41は1/1、42・43は1/3、44～52は1/2)

第154図1～40はガラス玉である。このうち、1～37についてはK-12区の1地点からまとまった状態で出土した。数珠や装飾品、またはキリシタン遺物であるロザリオの玉(コンタツ)として使用された可能性を考えておきたい。また、40についてもダークブルーと黄色を呈する2色のガラスで製作されたガラス玉で、やや特殊な製品であることから、注意を払っておきたい遺物である。41は玉状の金属製品であるが、用途は不明である。42・43は鉄製品で、42は鉄刀の可能製があり、43は用途不明の製品である。44～52は青銅を素材とした製品である。このうち、44・45については用途不明、46は鏡前、47～50は鏝である。51・52は小柄で、51の外面には銅文、52の外面には竹笹文が認められる。



第155図 包含層・整地層出土遺物⑧ (1/2)

第155図 1～25は分銅である。1～9は扁形、10～22は太鼓形、23～25は八角形を呈する。このうち、1・2については欠損のため、正確な重量が測定できていない。個々の資料の法量については、遺物観察表を参照されたい。26・27は鉛玉（鉄砲玉）で、重量については26が6.4g、27が8.8gである。



第156図 包含層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/1)

メダイ様
金属製品

第156図1～7はいずれも扁平で円形もしくは楕円形を呈する金属製品で、本遺跡でメダイ様金属製品と呼称している一群である。円形部分の上部には段を設け、その上に紐等を通すためと思われる穿孔が施される(6のみは例外)。穿孔の形態については正面方向から施されるもの(1・2)と、横方向から施されるもの(6・7)とがある。穿孔が認められない5～7についても、形態的に穿孔部が存在しえる部分が上部には用意されている。現在穿孔が認められないのは、まず3については欠損によるものと考えられ、4・5については、この製品が未製品であったためか、あるいは出土地点近辺に焼土が存在することから、比熱による熔融で消滅した可能性が考えられる。また、これらの金属製品の金属組成については、7のみが銅を主成分とし、他はいずれも鉛を主成分とする。金属組成の詳細については第9章のデータを参照されたい。

第3節 小結

第12次調査区は、N-4°-Eを軸とする第2南北街路とN-9°-Eを軸とする東西街路の名々小路が交差する地点である。その道路によって区画された西側には大友氏館、東側には桜町の町屋とされる範囲にあたる。調査での所見は、街路及び町屋がかなり短期間のうちに掘削や造成・整地を繰り返して行っており整備がなされている。その累積状況を見る限り、それぞれが不可分の関係であったことが読み取れる。こうした遺構面の累積は、出土遺物から推定される年代幅よりもさらに細かな変遷状況を知ることができる。ここではまとめとして、遺構面の累積と切り合い等の情報を基に、この区域の遺構変遷について可能な限り追ってみたいと思う。ただし、調査では焼土層直下の街路、礎石建物や井戸状遺構など大規模かつ重要な遺構が検出され、それらを保存する方向で調査を行ったため、それらの下層部域はトレンチによる断片的な情報を元にした推測となることを一言お断りしておく。

礎石建物

まず、本調査区の遺構の変遷について遺構・遺物の両面からの年代的な位置付けが可能な時期は、I～III期である。I期は16世紀後葉以前、II期は16世紀後葉から末葉、III期は16世紀末から近世初期である。I期からII期にかけては、大友氏館東端の堀と見られるSD08の埋没の年代と、町屋側の掘り込み・埋立ての開始時期を画期としてみる。II期からIII期の画期は調査区内全域で確認された焼土層で、大規模火災による罹災状況そのままの状態を確認することができた。さて、遺構変遷の中心となるのは主にII期で、いわば街路面と町屋の形成から火災による焼失までの間の状況である。この形成開始から廃絶までの間を、整地単位や遺構の切り合いを基準にして、①～④段階に整理した。説明では、大友氏館跡東北部域、第2南北街路と交差点部、名々小路、町屋区域という遺構を基準とした各区画に分けて説明する。

I期【16世紀後葉以前】

主要な遺構は、大友氏館東北部域にSD08とそれに切られるSE03がある。ここでは地山直上面にて焼土を含まないピットが多数見られたが、これらは新旧の区別がつかず時期が不確定である。SE03はその配置から見て、大友氏館東端がSD08により示される以前の段階と推測される。調査区西壁沿いに検出された柱穴列は、SD08と同時期の可能性があると推測する。

大友氏館跡の東側については、この時期の遺構や遺物がほとんど出土しないことから、建物等の施設は存在せず、土地利用されていない可能性が高い。

II期【16世紀中葉～後葉】

①段階（街路面第7～6面）

SD08の埋没後、浅い掘削を伴う第2南北街路面の形成、街路東側の大規模な掘り込みは、ほぼ同時期に行われたものと考えられる。第2南北街路の西端にはSD13が配され、東側はそれから約11m離れた位置から浅い掘込みを行い、初期の街路面形成地帯としている。また、街路面には砂を埋め込み強化しているが、一部には土師質土器片を多量に含んだ暗褐色砂質土が薄く敷かれているのも確認された。交差点部周辺ではこの段階の街路面を掘込んだピットが数基確認でき、何らかの遺構が存在したものと考えられる。

大規模な掘込み

名々小路もほぼ同時期に整備されているが、第2南北街路との交差点部分では、前者を構成する土層が、後者を構成する土層の下部で検出されている。このため、名々小路の方が古く考えられるが、その差は、普請期間中での時間差程度であろう。さらにこの街路は大友氏館跡北側まで延びる。

また、大友氏館跡の東側の大規模な掘込みは、幅約11mの第2南北街路の街路用の掘込み部を避けて、その東側から掘り込まれている。さらに、各所のトレンチで掘込みの法面を築くと、名々小

路も避けて掘り込まれている。このことから、ほぼ同時に、街路と大規模な掘込みが行われたものと理解できる。この掘込みの規模は、落差約80~100cmで落ち込み、下面は砂層に連し、比較的平坦な面をなしている。調査区南東部は深さを増して粘土層が堆積している。

そして名ヶ小路のM区で名ヶ小路の南側法面に沿ってSD16が配されている。SD16の南側は暗褐色シルトを基盤とする平坦面が形成されている。この遺構は西側のK・L区では確認できず、この段階ですでに、すぐに大規模な掘込みは埋没・範囲縮小していることが窺われ、ごく短期間に掘込みと埋め立てが繰り返されたと理解できる。

②段階（街路面第5面）

大友氏館跡東北部域は変化がみられず、第2南北街路はSD12・SD14によって幅約8.6mの街路区画となる。名ヶ小路のこの段階の街路面では、部分的に砂利敷きや鉄滓を敷きこんだ状況が確認できる。L・M区ではSD16の埋没以後の低地帯の埋立てによって、街路面とのレベル差がほとんどない平坦面が形成されており、K区では街路面が窪面状となり、むしろ町屋区域の方が高まっている状況が見られる。町屋区域はこの段階で基盤層が形成されており、SK14やSB01・SB02形成以前のピット等はこの段階の遺構と考えられる。SD12の緑石状石組から見ても、この段階で町屋が形成された可能性が高い。しかし、調査区南東部は依然として低かったようで、造成を繰り返し行った状況が見られた。その過程で段状遺構と見られるSX05やSK16などが形成されている。

なお、変遷図上、側溝を伴う街路が完成し、建設予定の桜町部は更地状態になっている。だが、おそらく、同時に町屋の建設が始まり、その裏手には、まだ埋まり切っていない大規模な掘込みの跡が残っていたものと、想像される。

③段階（街路面第3面）

第2南北街路はSD06・SD07による幅約8.4mの街路区画となる。名ヶ小路ではSD01が配され、SD06とL字状に接続する。SD07は名ヶ小路を横断している。大友氏館跡東北部域は整地等が行われていないため特に変化した様相はないが、街路面各層の累積にともなって街路面とのレベル差が増す。この部分には柱穴が多数検出されており、何らかの建物があった可能性がある。名ヶ小路との交差点部では、厚さ10cm程の土壌状の土境を敷いた特徴的な街路面整地が行われている。これは町屋区域街路面のレベルを揃えるための嵩上げと考えられる。

木戸と見られる柱穴はこの上面で検出しており、SD07の整備と木戸付設の開始時期はほぼ同時であろう。町屋区域ではSD06との関連性から、礎石建物SB01の建設、SD09・SD11・SX01初期段階がほぼ同時期と見られる。この推測の根拠は、SB01南側に広がっていた京都系土師器片を多量に含んだ整地層（以下、土師質土器混りの整地層）の形成より以前であることを一つの基準とできる。さらに東のM区では、SB03とした掘立柱建物がこの段階か、もしくは④段階に築かれている。また、SE01に切られるSK12やSK15もこの時期に形成されたものといえる。

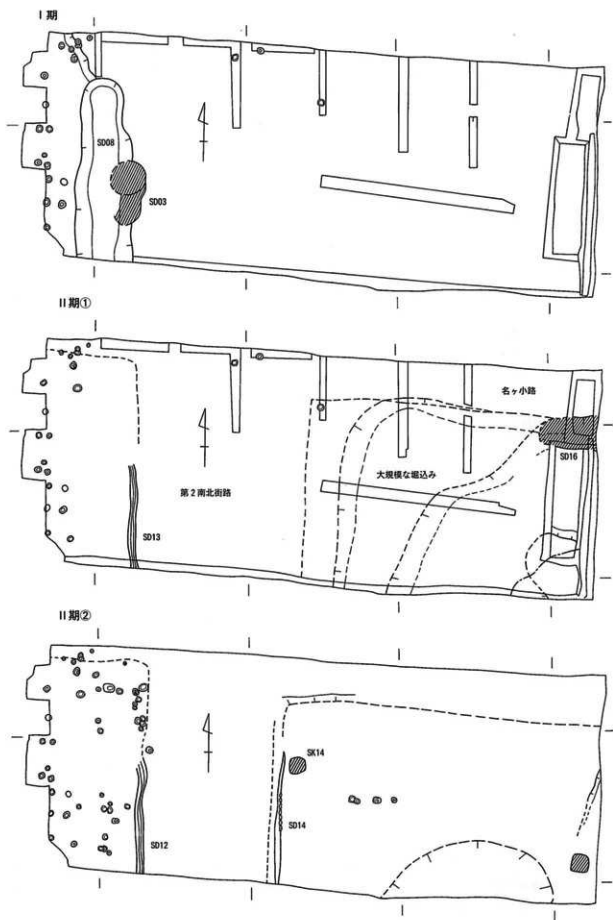
④段階（街路面第2面：焼土層直下）

第2南北街路はSD10・06による幅約8.7mの幅となる。大友氏館跡東北部域は、前段階と同様で変化がない。街路交差点では、木戸が街路の西端と中央で約4m幅であったものから約3.2m幅となる。中央から東端までの間はSD05・SD15に見られる下部構造を持ち、瓦列を伴った付帯施設が形成されている。また大友氏館跡北側の街路に、この時期に側溝が認められる。

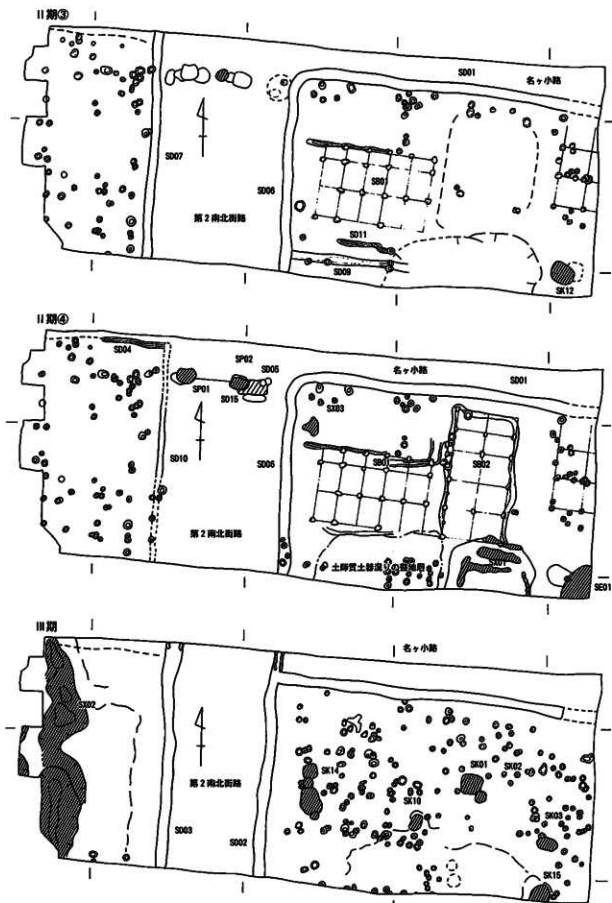
町屋区域ではSB01南側に、土師質土器混りの整地層が形成され、緑石を廻らせたSX01がつくられる。これと同時に、SB01の東側にはSB02が付設される。調査区南東隅のSE01や青銅製品製作関連遺構のSX03もこの時期である。SX03では分銅・メダイなども生産された可能性があり、この桜町が最も繁栄した段階として捉えられる。

木戸

第3節 小結



第157図 第12次調査主要遺構変遷図① (1/250)



第158図 第12次調査主要遺構変遷図② (1/250)

Ⅲ期〔16世紀末～近世初期〕(街路面第1面：焼土面直上面)

第2南北街路はSD02・SD03による幅約6mの街路区画となる。両者とも石垣暗渠を設けて名々小路を横断している。そのため、名々小路のSD01は踏襲されるが、SD02とT字状に接続している大友氏館東北部域はSX02とした不定形土坑状凹部が形成され、焼土や多量の瓦礫が検出されている。

SX02は下層がシルトや粘質土の互層となるため幾度かの滞水期間が想定され、長期間放置された状態であったものと見られる。また、凹部下層は、焼土粒が僅かながら混ざっているため、火災後に廃物を処理する目的で掘られた可能性は高い。第2南北街路・名々小路ともに道路面上を薄い焼土層が覆っていたが、その上層には多量の瓦礫が散在していた。これは火災によって産出された廃物を道路面上に敷き、その上から砂を重ねて街路面としたものと考えられる。名々小路のSD01、第2南北街路のSD02・SD03はすべて掘り直しが確認されたが、場所によっては非常に浅いところも見られた。町屋区域では、焼土層の上を灰褐色砂質土層が覆っており、この焼土を埋める形で整地がなされている。それにより、SB01・SD02・SX01・SE01などの遺構が埋没し、焼土面を切って掘り込まれるSK01～05などの土坑やSB04のような焼土を含む柱穴群が形成され、町屋として復興している状況が見られる。

以上のような遺構変遷が想定されるが、第2南北街路西側の大友氏館では、館東端の堀が埋没するI期以降は整地される様相もない空闲地と化し、II期を通じて余り変化が見られない。一方で、東側の町屋エリアでは礎石建物、掘立柱建物、井戸状遺構、土坑など、街路の交差点部には木戸も検出されるという、まさしく「府内古図」に描かれたとおりの町並みが形成される過程が読み取れる。また、特筆すべきは調査区全面に広がった焼土層で、遺物の年代観からも天正14年(1586)の島津氏侵攻による可能性が高い。さて、現在のところ「府内古図」に描かれる第2南北街路の成立年代は1570年代と見られ、II期の開始時期がこれに当たるとすれば、ごく短期間に計画的な町屋形成が行われたこととなる。町屋区域の基盤が形成されるII期②段階の町屋の様相は把握できなかったが、③段階にはSB01の創建がなされている。④段階のSX01のような井戸状遺構を備えたSB01・02の姿や出土遺物の面からも、この大友氏館東の角地はかなりの有力人物の邸宅であった可能性が推測されている。

島津氏侵攻

この状況は、大友義統が家臣の税所越中守に祇園社の神領として町屋敷の差配権を保証する文書に「府内屋敷 祇園御神領之義、其方可有格御候、然者東之築地至外通者、町人召移、以屋敷料、…」とある「町人召移」事業の一環であったとすれば、II期の初段階は大友義統が家督を継ぐ1573年以後と推測され、③～④段階は10年間程度と極めて存続期間の短いものと考えられる。

祇園社
「府内屋敷」
「町人召移」

このように街路及び町屋の形成は極めて短期間であったと見られるが、その間で街路は幅8m規模から幅6m規模へと縮小し、それに応じて木戸も変遷している。町屋区域では掘立柱建物と礎石建物が同時併存していた可能性も考慮される。また、これらの建物やSD09などの溝は、通じてN-9°-Eの方向を軸としていることが窺われる。

以上のことからまとめると、I期は大友氏館跡が方二町となる以前から成立以後、改修がなされるまでの間を示し、町屋形成以前である。II期は街路・町屋の形成・成立を示し、それは有力商人をはじめ、「屋敷料」を納めなければならない人々の居住地としての桜町成立の過程でもある。III期は島津氏侵攻後の大友氏館跡の廃絶と町屋復興の過程を読み取ることができる。

第3章 中世大友府内町跡第48次調査区

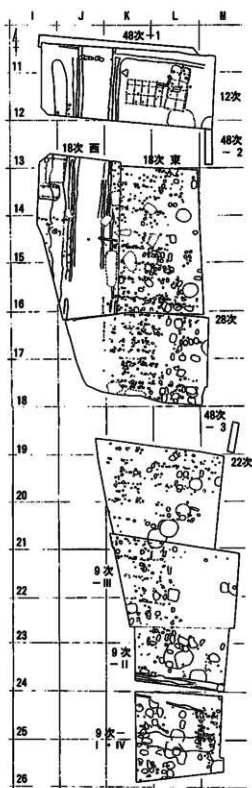
第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第48次調査区は大分県大分市錦町3丁目に所在し、標高約4mの沖積低地上に立地する。本調査は、一般国道10号古国府拡幅事業において既に調査が終了していた第12・18・22・28次調査区から外れていた現道路部分、及び第12次調査区北側の里道部分において、下水道管理設工事が行われることに伴い実施された。したがって、調査区は3カ所が場所を隔てて存在することとなり、それぞれを北から順に第48次-1調査区・第48次-2調査区・第48次-3調査区とした(第159図参照)。

調査は第48次-1調査区を2004年12月中旬から着手し、途中第48次-2調査区・第48次-3調査区を併行して調査を行い、翌2005年3月中旬に終了した。発掘調査面積は、第48次-1調査区が約70㎡、第48次-2調査区が約15㎡、第48次-3調査区が約15㎡におよぶこととなった。

当該調査区は位置的に前述の第12・18・22・28次調査区と隣接していることから、それらの調査区と遺跡の性格自体も関連が深く、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」では、大友氏館跡と第2南北街路を挟んで隣接し、中世府内を構成する40余りの町のひとつである「桜町」の一画、さらには大友氏館跡、桜町、称名寺等を画する第2南北街路と名々小路の交差点に相当する地点である。

なお、一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へA～Z、北から南へ1～30の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本章で報告する第48次調査区については、第48次-1調査区が東西I～M区、南北11～12区、第48次-2調査区が東西M区、南北13区、第48次-3調査区が東西M区、南北19区的位置に相当する(第159図)。



第159図 第48次調査区的位置 (1/800)

第1節 調査の経緯

第5表 第48次-1 調査区遺構一覽表

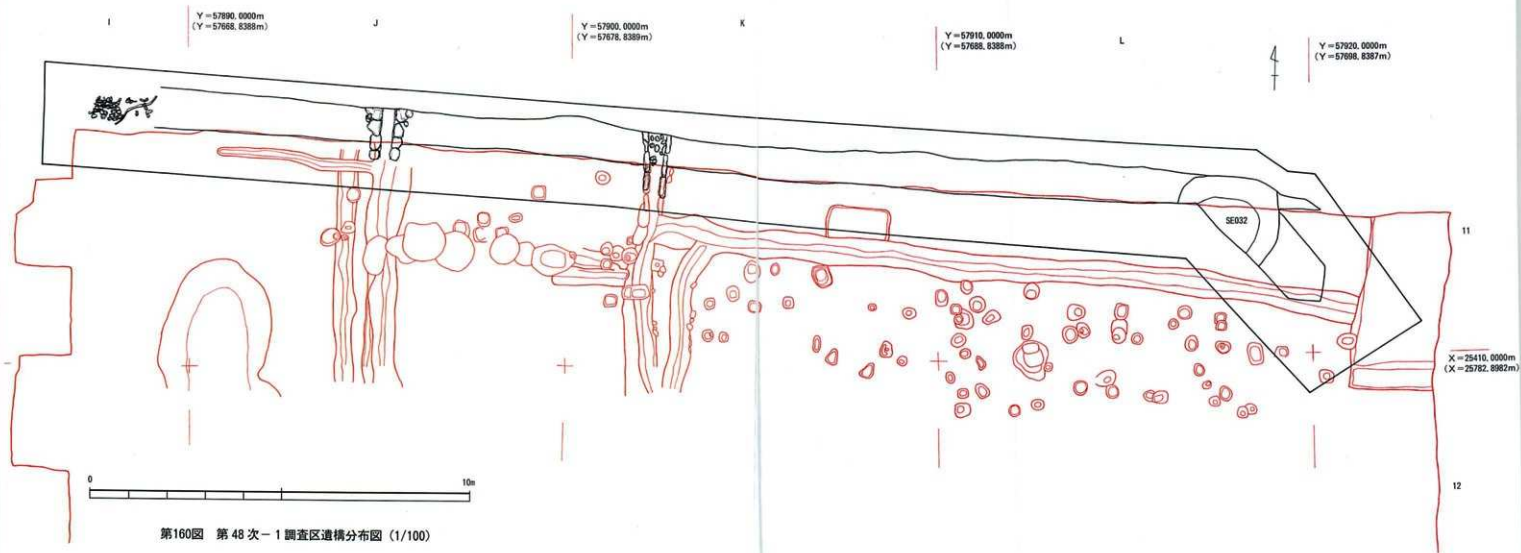
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	記載頁
SF001	S001	瓦敷道路	K11区・L11区	天正18年～	備前搦鉢・京都系土師器3期	174
SD002	S002	側溝	K11区	16世紀末葉～	瀬戸美濃系陶器天目	184
SD003	S003	側溝	J11区	16世紀末葉～	京都系土師器	184
SF005	S005	道路	J11区・K11区	～天正14年	第2南北街路 京都系土師器2期	181
SD006	S006	側溝	K11区	16世紀末葉～	京都系土師器・備前搦鉢・萩置施輪陶器	184
SD007	S007	側溝	J11区	16世紀末葉～	備前搦鉢・白磁陶	184
SK008	S008	土坑	I11区	16世紀末葉～	備前搦鉢・瀬戸美濃系陶器天目	188
SF010	S010	道路	I11区・J11区	～天正14年	京都系土師器・銅製罐・黒輪陶器蓋・ガラス玉	181
SF011	S011	道路	K11区・L11区 M11区	16世紀後葉～	名々小路 瓦質土器火鉢・龍泉系青磁皿・龍泉系青磁碗・景徳鎮系青花皿・瀬戸美濃系陶器天目・肥前系陶器皿・石臼・茶臼	177
SF016	S016	道路	K11区・L11区・M11区	天正14年～	名々小路	180
SF017	S017	道路	J11区・K11区	天正14年～	大友氏館跡北側道路・第2南北街路 備前搦鉢・景徳鎮系青花皿・瀬戸美濃系陶器天目・鬼瓦	180
SF019	S019	道路	I11区・J11区	16世紀中葉～後葉	名々小路 ガラス玉・京都系土師器・備前搦鉢	183
SF020	S020	道路	K11区・L11区 M11区	～天正14年	名々小路 京都系土師器	181
SF021	S021	道路	K11区・L11区 M11区	16世紀中葉～後葉	名々小路 京都系土師器	183
SF022	S022	道路	J11区・K11区	16世紀中葉～後葉	第2南北街路	183
SF023	S023	道路	K11区・L11区 M11区	16世紀中葉～後葉	名々小路 京都系土師器・灯明皿	183
SE032	S032	井戸	L11区	15世紀	瓦質土器鉢・瓦質土器甕・石瀬・須山質土器甕(龜山)・在地系土師質土器小皿・瓦質土器搦鉢・古瀬戸甕子・白磁坏・鉄製刀子	190

第6表 第48次-2 調査区遺構一覽表

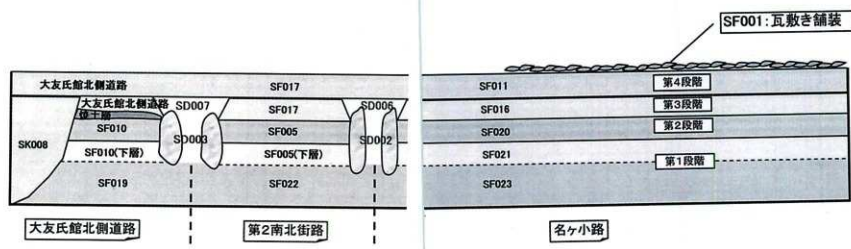
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	記載頁
包含層(北)	包含層(北)	包含層	L13区・M13区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器・土罐・景徳鎮系青花皿	193
包含層(南)	包含層(南)	包含層	L13区・M13区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器・土罐・景徳鎮系青花皿・景徳鎮系青花碗・瓦質土器羽釜・瓦質土器鉢・銅製煙管・巖形分銅	193

第7表 第48次-3 調査区遺構一覽表

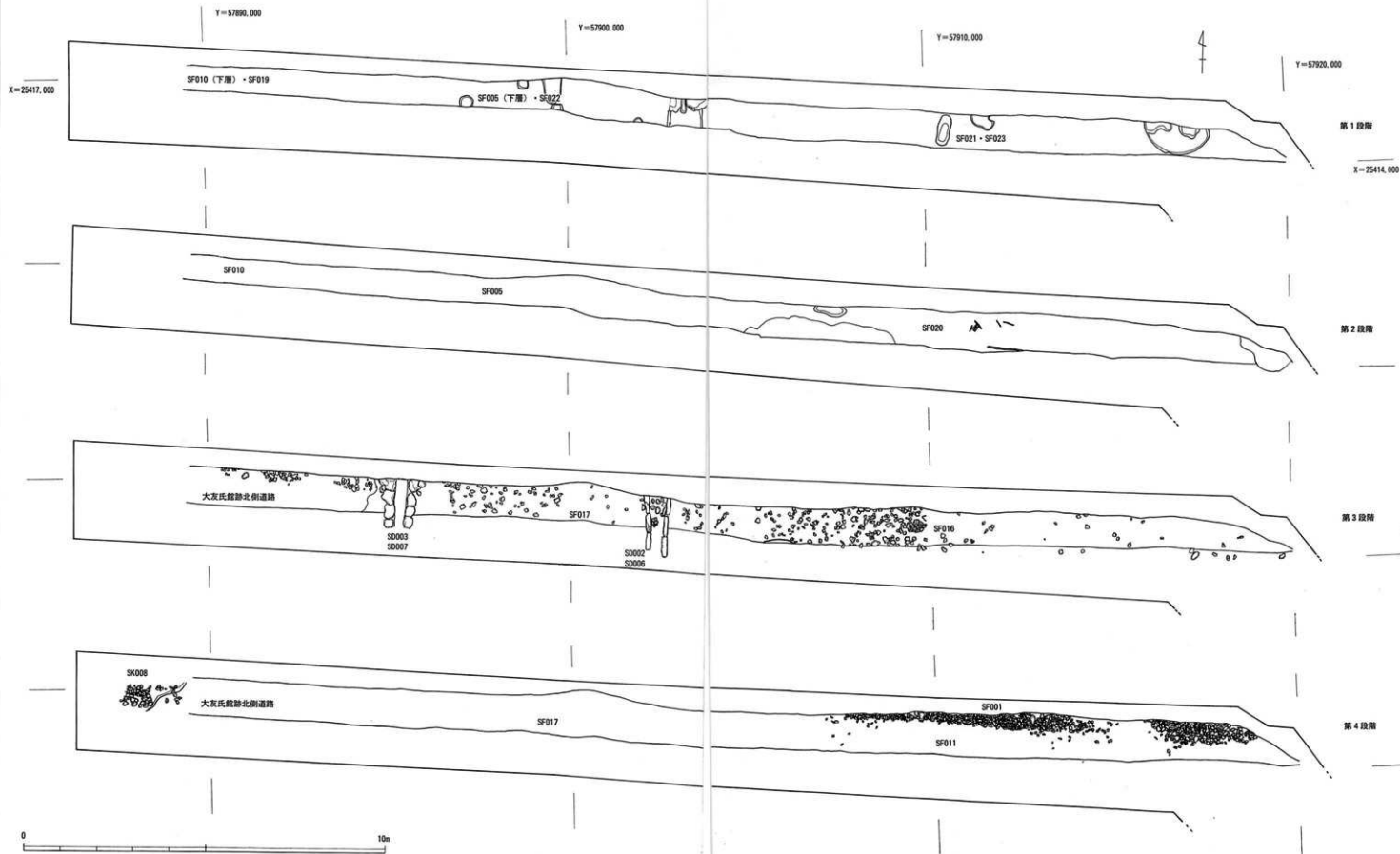
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	記載頁
包含層(北)	包含層(北)	包含層	M19区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器・ガラス玉	196
包含層(南)	包含層(南)	包含層	M19区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器・大鼓形分銅	196



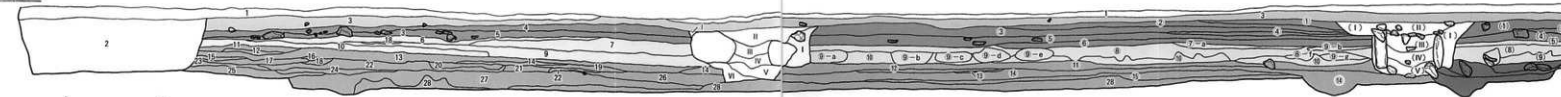
第160図 第48次-1調査区遺構分布図 (1/100)



第161図 第48次-1調査区土層模式図



第162図 第48次-1 区調査遺構変遷図 (1/100)

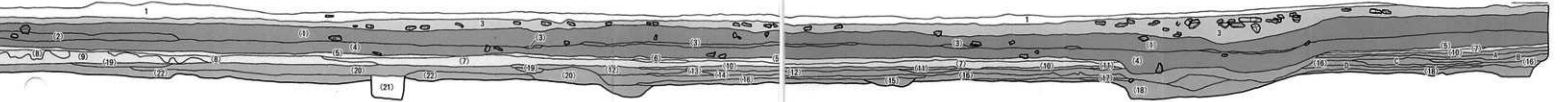


- 1層 10R5/6 黄褐色 砂質土 焼土粒を若干含む。
- 2層 10R 4/3 にぶい黄褐色 弱粘質土 焼土を多く含む。
- 3層 10R 6/1 褐色 砂質土 (ペルト3の1層)
- 4層 10R 3/4 褐色 砂質土
- 5層 2.5Y 4/6 赤褐色 砂質土
- 6層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- 7層 10R 6/6 明黄褐色 砂質土
- 8層 2.5Y 5/2 暗灰黄色 弱粘質土
- 9層 2.5Y 4/1 黄褐色 砂質土
- 10層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 11層 10R 5/1 褐色 砂質土
- 12層 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質土
- 13層 10R 3/3 暗褐色 砂利層
- 14層 10R 5/1 褐色 砂質土
- 15層 7.5R 5/1 褐色 砂質土
- 16層 2.5Y 5/3 黄褐色 砂質土
- 17層 5Y 6/2 灰オリーブ色 砂質土
- 18層 2.5Y 6/1 黄褐色 砂質土
- 19層 10R 5/1 褐色 砂質土
- 20層 2.5Y 4/1 褐色 砂質土
- 21層 5Y 5/1 灰色 砂質土 小礫を多く含む。
- 22層 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 砂質土 小礫を若干含む。
- 23層 10R 6/2 灰黄褐色 砂質土
- 24層 2.5Y 6/1 黄褐色 砂質土
- 25層 10R 4/3 にぶい黄褐色 砂質土 多量の小礫を含む。
- 26層 5Y 4/1 灰色 砂質土 起伏の強い地山を埋めたものと考えられる。
- 27層 10R 4/1 褐色 砂質土
- 28層 10R 6/6 明黄褐色 砂質土 地山に近いブロック。

- I層 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土 石礫の裏込め
- II層 2.5Y 5/4 黄褐色 砂質土 焼土粒を含む。
- III層 2.5Y 5/1 黄褐色 砂質土 焼土粒を含む。
- IV層 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土 焼土を若干含む。
- V層 2.5Y 6/2 灰黄色 砂質土
- VI層 N 5/1 灰色 砂質土 焼土を含む。

- 1層 10R 7/3 にぶい黄褐色 砂質土
- 2層 10R 5/1 褐色 砂質土
- 3層 7.5R 6/4 にぶい暗色 砂質土 焼土を多量に含む。
- 4層 10R 4/4 褐色 弱粘質土 微量の焼土粒を含む。
- 5層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- 6層 N5/ 灰色 砂質土
- 7-a層 5Y4/2 灰オリーブ色 砂質土
- 7-b層 10R4/1 褐色 砂質土
- 8層 5Y4/1 灰色 砂質土
- 9-a層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-b層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-c層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-d層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-e層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-f層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-g層 10R 6/1 褐色 砂質土
- 9-h層 N5/ 灰色 砂質土
- 10層 10R 5/1 褐色 砂質土
- 11層 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂質土
- 12層 10Y 5/1 灰色 砂質土
- 13層 5Y 4/1 灰色 砂質土
- 14層 7.5R5/1 灰色 砂質土

- (I)層 10R5/1 褐色 砂質土 石礫の裏込め
 - (II)層 10R6/2 灰黄褐色 砂質土 多量の瓦を含む。
 - (III)層 10R3/2 黄褐色 砂質土 焼土(島津段状に伴うと思われる)を少量含む。
 - (IV)層 10R4/1 褐色 砂質土 焼土を若干含む。
 - (V)層 10R6/1 褐色 砂質土 焼土を若干含む。
- マンガン粒が若干混入。
- 多量の小礫を含む。



- (1)層 10R5/1 褐色 砂質土 上面が瓦敷き道路面(名っ小)に対応する。
- (2)層 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土
- (3)層 2.5Y7/1 黄褐色 砂質土
- (4)層 10R5/2 灰黄褐色 砂質土 上面が道路面であった可能性がある。そのため(3)層シフト層堆積か。
- (5)層 2.5Y5/1 黄褐色 砂質土 島津段状以前の道路形成層の上面に堆積。
- (6)層 7.5Y 7/3 浅黄色 砂質土
- (7)層 5Y 5/1 灰色 砂質土 小礫を多量に含む。
- (7)-a層 10R5/2 灰黄褐色 砂質土 上面にマンガンが沈着した硬化面が認められる。
- (7)-b層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- (7)-c層 2.5Y5/3 黄褐色 砂質土
- (7)-d層 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 砂質土
- (7)-e層 10R4/1 褐色 砂質土
- (8)層 10R6/2 灰黄褐色 砂質土 小礫を含む。
- (9)層 2.5Y6/1 黄褐色 砂質土
- (10)層 10Y5/1 灰色 砂質土
- (11)層 5Y6/4 オリーブ黄色 砂質土
- (12)層 10R6/1 褐色 砂質土
- (13)層 7.5Y 5/1 灰色 砂質土 上面にマンガン沈着による硬化面が部分的に認められる。
- (14)層 5Y7/3 浅黄色 砂質土
- (15)層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- (16)層 7.5Y 6/1 灰色 砂質土 連続ではなく、焼土の可能性高い。
- (17)層 7.5Y 6/2 オリーブ色 砂質土
- (18)層 5Y 5/1 オリーブ灰色 弱粘質土
- (19)層 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂質土
- (20)層 10Y5/1 灰色 砂質土 上面にマンガン沈着による硬化面がある。
- (21)層 5Y 5/1 灰色 砂質土 黄褐色土ブロック混入。
- (22)層 10R4/1 褐色 砂質土

- A層 10R 4/1 褐色 砂質土 小礫を部分的に多く含む。
- B層 5Y 5/2 灰オリーブ色 砂質土
- C層 5Y 5/1 灰色 砂質土
- D層 7.5Y 5/1 灰色 砂質土

段階順			
第1段階	11層～28層	SF010 下層	SF019
	(10)～(22)層	SF021	SF023
	(1)～28層	SF005 下層	SF022
第2段階	6層～10層	SF010	SF020 対応層
	(5)～(9)層	SF020	
	(7)～(10)層	SF005	SD020 対応層
第3段階	4・5層	大友氏館跡北側道路	SF016 対応層
	(1)～(4)層	SF017	
第4段階	3層	SF001	
		SF011	
		SF017	

第163図 第48次-1調査区土層断面図(1/40)

第2節 遺構と遺物

1. 第48次-1調査区の調査

1. 調査の概要と基本層序

中世大友府内町跡第48次-1調査区で検出された主要遺構は、道路遺構（第2南北街路・名ヶ小路）、溝（石組側溝）2条、土坑1基、井戸1基である。この内井戸は15世紀代に比定されるが、他のすべての遺構は16世紀代の戦国時代の所産である。

道路遺構

まず、道路遺構については、大友氏館跡東正面を南北に走る第2南北街路の一部、名ヶ小路の一部、さらに両者の交差点部分が検出された。道路の形成過程を模式的に表したが（第161・162図参照）、道路は何段階かの形成段階を踏んでいることが判明した⁽¹⁾。まず、道路形成の初現は、名ヶ小路の最下層（地山の直上）より京都系土師器2期の皿が検出されていることから、それ以降（16世紀後半以降）の形成である。地山がかなり不定形であるため、初段階の道路はそれらの凹凸を盛土によって補正している（SF010下層・SF019〔11層～28層〕、SF021・SF023〔(10)～(22)層〕、SF005下層・SF022〔⑩～⑮・28層〕）。その後、大きな土のかたまりと砂を混ぜさせて道路を一気に20cmほど盛り上げており、この段階に大きな道路の造成工事が営まれた可能性がある（SF010〔6～10層〕、SF020〔(5)～(9)層〕・SF005〔⑦～⑩層〕）。この道路は島津侵攻の天正14年まで使用されていたものと考えられ、調査区西側隅（SF010直上）の道路面直上においては、かなりの厚さで焼土が堆積し、さらにSF020の直上でも焼土の散布と瓦の多量の出土が確認されている。この焼土は天正14年の島津侵攻の火災処理に伴うものと考えられ、さらに大量に散在する瓦は北側に存在した称名寺の廃墟に伴うものであろう。なお土層を見る限り、この造成工事に伴う第2南北街路の幅は約10mほどと考えられ、後に触れるがこの道路幅は町屋の張り出しに伴い縮小していく。

天正14年の島津侵攻

次に焼土の上にも道路の整備が確認されており、（大友氏館跡北側SF016対応層〔4・5層〕、SF016〔(1)～(4)層〕、SF017〔①～⑥層〕）、この道路面は島津侵攻後に復興した道路と考えられる。さらにもう一段階道路の復興事業が認められ（SF001・SF011・SF017・大友氏館跡北側道路〔3層〕）、特に調査区の東側ではこの道路面上に大量の瓦が敷き詰められている（SF001）。こうした島津侵攻後の復興事業については、他の調査区でも複数回行われていることが認められており⁽²⁾、当該調査区の所見と相応している。

瓦敷道路

石組側溝

なお、第2南北街路が交差する部分においては、石組側溝（SD002・SD003・SD006・SD007）が認められるが、この石組の下から焼土が検出される点などを勘案すると、この石組側溝は復興後に造られたとするのが自然である。そうすると、側溝間が約6mとなり、第2南北街路は当初の10mからその幅を狭めていったことが分かる。

土坑・井戸

道路に関連するもの以外の遺構としては、土坑1基と井戸1基が確認されるが、まず土坑（SK008）については前述の焼土層さらには瓦敷道路を形成する層を切って掘られていることから、島津侵攻後復興時に掘られ、埋められている。また、井戸（SD032）については15世紀代の所産であり、他の遺構とは時期を隔絶している。特に名ヶ小路の直下から検出される点等を勘案すると、15世紀以前は16世紀の戦国期とは異なった都市空間構造が想定される。

注(1) 道路遺構については、道路面を形成するために造成された層（場合によっては複数の層）の1単位を一つの遺構として遺構名を与える。例えば道路遺構SF016については、当時使用された道路面はSF016の上面（第163図土層図の(1)層上面）が該当し、土層図(1)層～(4)層までが遺構の形成層となる。SF016の出土遺物はこの形成層の中に含まれるものを指すため、その遺物自体が示す時期は直下のSF020の道路使用時、あるいはSF016形成時を指すものである。したがってSF016の道路面が使用されていた時期は、SF016の上に形成されるSF011出土遺物、特にその中でもSF016直上の層で検出される遺物をもって認定すべきである。

(2) まだ未報告であるが、平成17年度調査の中世大友府内町跡第51次調査区（大友氏館跡南方部・御内町西方部）で第2南北街路の形成層が確認されており、そこでは復興後に最低二度の道路整備が行われている。

2. 遺構と遺物

道路遺構

第4段階：島津侵攻後復興期（2段階）

SF001・SF011・SF017・大友氏館跡北側道路（第162図）

大友氏館跡北側の道路、第2南北街路及び名々小路の道路形成層である。本調査区で確認できる道路面では最も新しい段階のもので、近世まで使用されていた可能性が高い。この内大友氏館跡北側の道路形成層の直下には焼土が厚く堆積しており、その厚さは5cmに及ぶ。中世大友府内町跡では各調査区において、天正14年の島津侵攻に伴う焼土の堆積が見られており、この厚く堆積する焼土層も同様の性格のものである可能性が高い。したがってこの上に道路形成層が認められることは、島津侵攻後のこの一帯が復興されたことを物語っている。なお、SF017（第2南北街路）、SF011・SF016（名々小路）の直下でも、大友氏館跡北側ほどの厚い焼土の堆積は認められないものの、焼土が点在している。

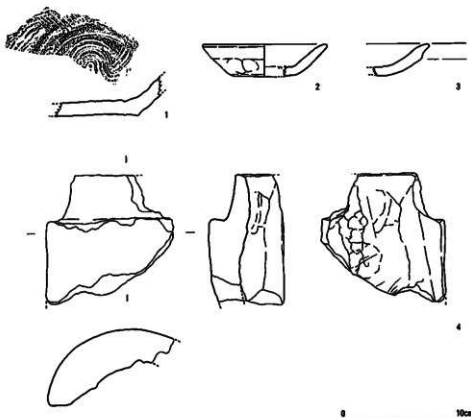
天正14年の
焼土層

府内古図

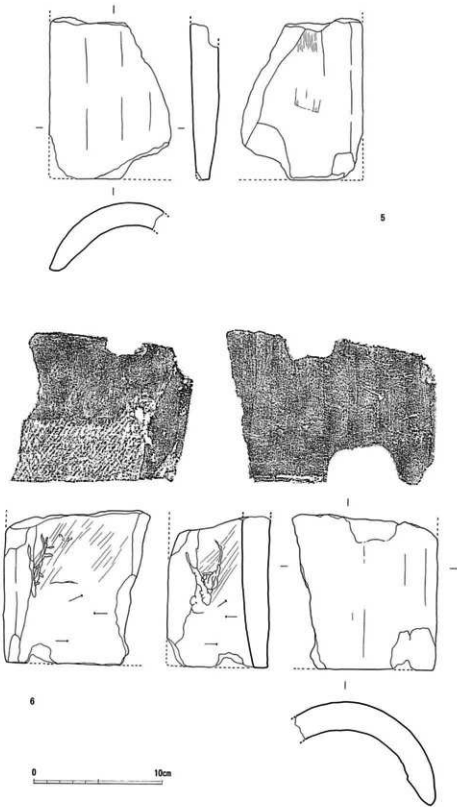
称名寺の廃
絶

SF001は名々小路部分にあたり、道路面は瓦の破片を敷き詰めて造られている。「府内古図」によれば、このSF001の北側に称名寺が存在することが窺われる。このSF001の直下にあるSF011が、前述のように島津侵攻後に形成された道路であるという年代観に基づけば、称名寺の廃絶に伴い廃棄された瓦が使用されている可能性が高い。ところで、このSF001とSF011との関係であるが、SF011の直上に瓦が敷き詰められていることを考えると、両者は一連のものとして捉えるのが妥当であろう。

また、SF001・SF011とSF017・大友氏館跡北側道路との関係は、第163図土層断面図から見る限り一連の層をなしており、さらに第2南北街路の石組側溝を完全に覆っている。したがって、後に詳述するが、島津侵攻後の道路の復興は、他の調査区で得られる所見と相応して複数回存在しており、大きく石組側溝が形成される段階と、その石組側溝が埋められて、街路面上に瓦を敷き詰める段階が存在したことを示している。

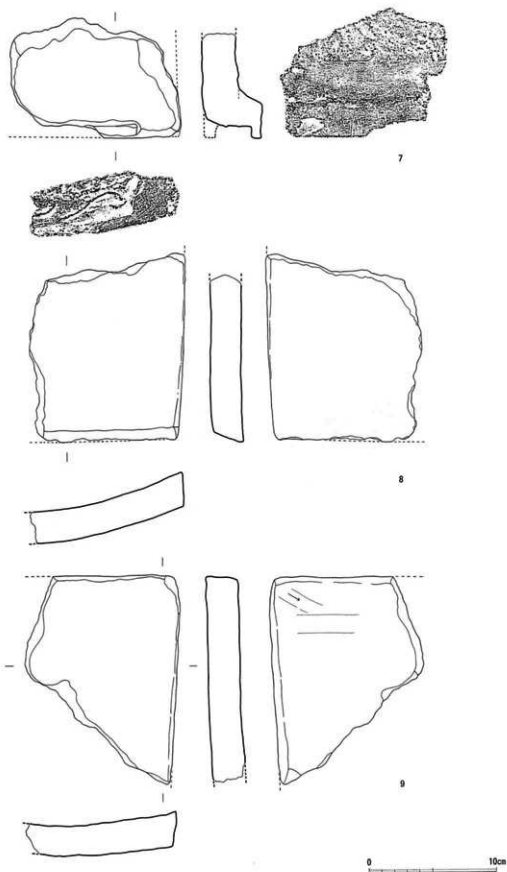


第164図 SF001 出土遺物実測図① (1/3)



第165図 SF001 出土遺物実測図② (1/3)

第2節 遺構と遺物



第166図 SF001 出土遺物実測図③ (1/3)

SF001 出土遺物 (第164～167図)

ナナメスリメ
1は備前系陶器の揺鉢である。内面はナナメスリメを有し、見込みまでスリメを入れる。2・3は京都系土師器である。3期の段階と考えられ、16世紀後葉に位置づけられる。

4～6は丸瓦、7～9は平瓦である。この内6は、内面に布目痕が顕著に残る。また7は、軒平瓦で瓦当部分が一部残っており、唐草文の一部が認められる。いずれも称名寺に関連する遺物と考えられる。

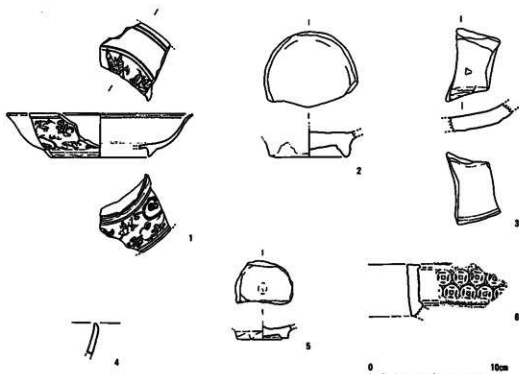
10は皇宋通寶で、北宋時代1038年の鋳造である。行書で書かれている。



第167図 SF001 出土遺物実測図④ (1/1)

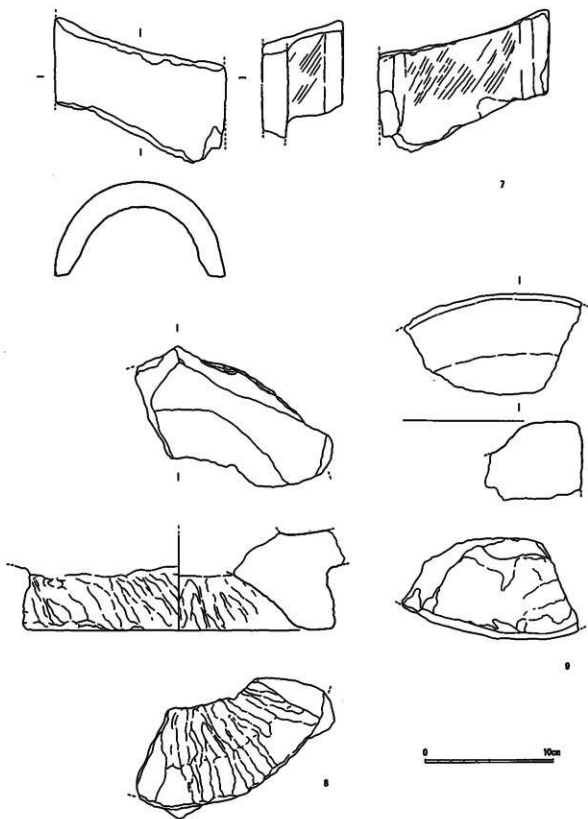
SF011 出土遺物 (第168・169図)

肥前系陶器
1は中国景德鎮高産の皿で、口縁部内外面に2条の界線が認められ、外面胴部及び見込みにも文様が施される。口縁端部が端反っており、小野正敏編年のB群に該当する。2・3は龍泉系青磁である。2は碗の高台、3は皿もしくは盤の胴部と考えられる。4は肥前系陶器皿もしくは碗の口縁部である。16世紀末に位置づけられる。5は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で削り出し輪高台である。高台部のみ出土で時期の認定は困難であるが、4の肥前系陶器等と共存する可能性もある。6は瓦質土器で火鉢の口縁部である。7は丸瓦の一部である。8は石臼の底部、9は茶臼である。石材は8が砂岩で、9が安山岩である。



第168図 SF011 出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物



第169図 SF011 出土遺物実測図② (1/3)

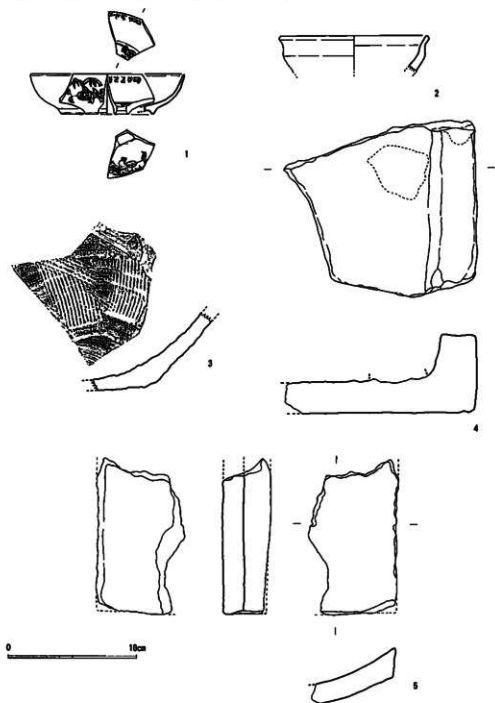
SF017 出土遺物 (第170図)

瀬戸美濃系
陶器天目

1は景徳鎮窯系青花の皿で、口縁部内面、胴部外面、見込みに文様が施される。2は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗の口縁部である。3は備前系陶器播鉢の底部付近の破片である。内面に施されるスリメはナナメスリメである。

4は鬼瓦の周囲部の一部と考えられ、瓦頭の裝飾部分は剝離している。5は平瓦の一部である。いずれも称名寺に関連する遺物と考えられる。

これらの遺物の内2～5については、いずれも焼土層から出土している。前述のようにこの焼土層が鳥津侵攻後の火災処理に伴うものであるとすれば、その時期を反映している遺物であり、遺物自体も時代観として価値のない物が出土している。



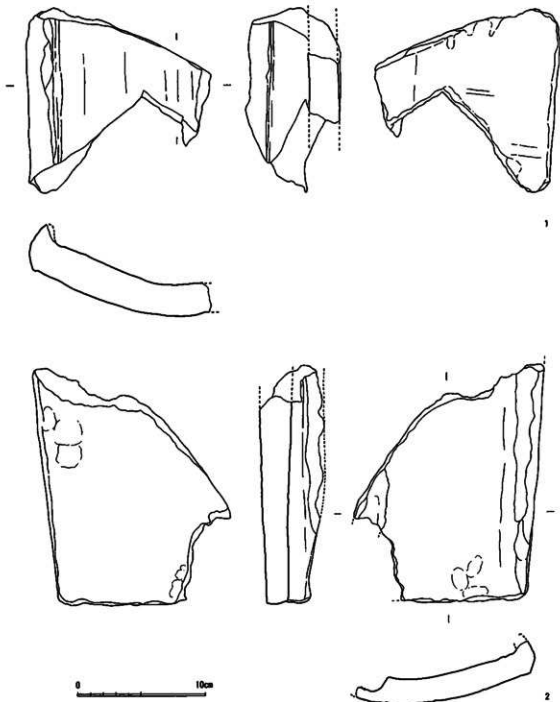
第170図 SF017 出土遺物実測図 (1/3)

第3段階：島津侵攻後復興期（1段階）

SF016・SF017・大友氏館跡北側道路（第162回）

厚い焼土の
堆積

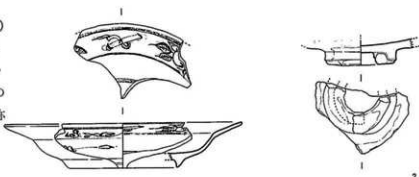
SF016は名々小路を形成する層である。層内からは大量の瓦の出土が認められ、さらに層の直下では焼土の散布もみられることから、島津侵攻後に形成されたものと考えられる。また第2南北街路の①～⑥層及び大友氏館跡北側道路4・5層が、層位的にみてSF016に対応すると考えられる。特に大友氏館跡北側道路では最下層に厚い焼土の堆積が認められ、島津侵攻後の道路形成を物語っている。さらに大友氏館跡北側道路、第2南北街路両者共に瓦の出土が見られており、これも傍証となる。後述するが、この段階に石組側溝が造られたと考えられる。なお、SF017及び大友氏館跡北側道路については、復興後第1段階と第2段階の差異を平面的に押さえられなかったため、遺物は一括して取り上げた。



第171図 SF016出土遺物実測図（1/3）

SF016 出土遺物(第171図)

出土遺物はさほどないが、瓦の出土が認められる。1・2ともに平瓦で、当該遺構の北側に存在したと思われる称名寺の関連が考えられる。

大友氏館跡北側焼土層内
出土遺物 (第172図)

1は景德鎮窯系青花皿である。小野正敏編年のF群である。2は瀬戸美濃系陶器の碗の高台部である。



第172図 大友氏館跡北側焼土層内出土遺物実測図 (1/3)

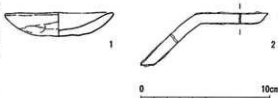
第2段階：第2南北街路・名ヶ小路修復期～島津侵攻期

SF005・SF010・SF020 (第162図)

SF020は名ヶ小路を形成する道路遺構である。SF020の上面はSF016の埋土ということになるが、大量の瓦の出土と焼土の散布が認められる。この面は西側の大友氏館跡北側で見られた厚い焼土の堆積層に対応するものと思われる。出土した大量の瓦片は北側の称名寺廃絶に伴うものと考えられ、島津氏が侵攻してきたときには、このSF020の道路面が使用されていたと考えられる。さらに道路面は砂利敷きが施されており、南接する第12次調査区の見聞に依れば、当該調査区で検出された名ヶ小路南側側溝が機能していた面に対応すると考えられる。

SF005は第2南北街路を形成する道路遺構である。東側のSF020の各段階に対応する面があると考えられるが、明瞭な硬化面を押さえることができなかった。ただSF005の上面では、大量の瓦片の出土と焼土の散布が認められており、SF020の上面と同様に島津侵攻時まで機能していたものと考えられる。さらにSF020に対応するレベルでは、土囊のようなものを積み重ねて一気に道路を高上げた痕跡が認められており、やはり第2南北街路においても名ヶ小路側と対応した道路形成の段階が存在したものとみなされる。

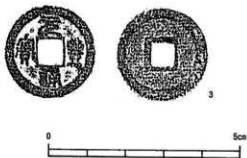
大友氏館跡北側にあたるSF010も第2南北街路と名ヶ小路に対応した段階が存在するものと考えられる。



SF005 出土遺物 (第173図)

1は京都系土師器皿で2期の段階のものと思われる。2は青銅製のく字に屈曲した板状製品である。

3は元豊通寶で初鋳造年は北宋期1078年である。

第173図 SF005 出土遺物実測図
(1・2は1/3、3は1/1)景德鎮窯系
青花皿F群

称名寺廃絶

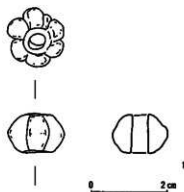
土囊状のもの
による高上げ

第2節 遺構と遺物

SF010 出土遺物 (第174図)

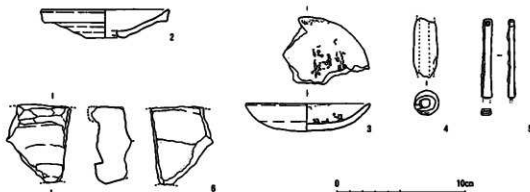
鉛ガラス製

1はガラス玉で、鉛ガラスを素材とする(成分の詳細は第3分冊第9章の蛍光エックス線分析データ参照)。キリタン遺物である「コンタ」の可能性が高い。扁平球体の周囲に7カ所の抉りを入れ、上から見ると花卉状を呈す。6つの花卉はほぼ均一に造られているが、1つが非常に小さい。製作上の誤算があったものと考えられ、コンタとすれば技術面から見る限り西洋のオリジナルとは考えにくい。また中央には紐かチェーンを通すための穿孔が施される。



カボチャ形の形態

長崎県の興善町遺跡で出土しているいわゆるカボチャ形の形態をなす。⁽³⁾



第174図 SF010 出土遺物実測図 (1は1/1、2～6は1/3)

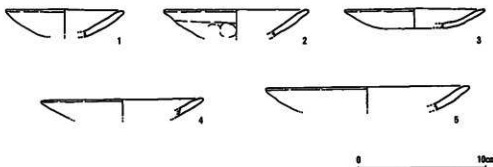
黒釉陶器

2は中国産黒釉陶器の蓋もしくは皿である。3は京都系土師器皿で器壁はさほど厚くなく、口唇部のナデも明瞭ではない。2期以前の位置づけが可能であろう。また、内面に銅と思われる金属付着が顕著に認められ、取瓶としての機能が考えられる。4は土鍾、5は鏝である。5の鏝は青銅製である。6は軒平瓦の瓦頭部分であるが、瓦頭文様は不明である。

取瓶

SF020 出土遺物 (第175図)

1～5まですべて京都系土師器皿である。いずれも器壁が薄く、口唇部下のナデも明瞭ではない。したがって1期の範疇に入るものと思われる。ただ後述するように、この道路遺構の下層から出土する京都系土師器は明らかに2期の特徴を示しており、これら1期の京都系土師器が当該遺構(SF020)の時期を規定するものではない。



第175図 SF020 出土遺物実測図 (1/3)

註(3) 長崎市教育委員会『興善町遺跡—日本団体生命保険株式会社長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』1998年

第1段階：第2南北街路・名々小路出現期

SF019・SF021・SF022・SF023 (第162図)

盛土

これらの道路遺構の直下はすべて地山であるが、その地山に硬化面が認められないことから、これらの道路遺構が初段階のものと考えられる。地山は不定形であり、その上に盛土を行って平坦化している。SF023の道路形成層の中からは、口唇部下に明瞭なナデを施す京都系土師器2期の皿が出土しており、第2南北街路及び名々小路の出現期をこの時期に当てることが可能であろう。

さらに下のSF005（下層）として層位的に区別した部分は、名々小路のSF021に対応するものとみなされる。この面でもやはり浅い土坑状の掘込みが認められ、この段階の道路形成に伴う土木事業の痕跡であろう。

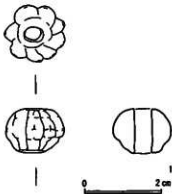
SF019 出土遺物 (第176図)

鉛ガラス製
カボチャ形

1はガラス玉でコンタと考えられる製品である。鉛ガラスを素材とする（成分の詳細は第3分冊第9章の蛍光エックス線分析データ参照）。SF010出土のものと同様カボチャ型の形態で、扁平球体の周囲に8カ所の抉りを入れ、上から見ると花卉状を呈す。花卉はやはり均一ではなく、技術的に見て西洋からの舶来品とは考えにくい。鉛ガラスの成分組成、鉛同位対比から得られる生産地の近似等から考えて、SF010のものと同じ製作工程にのるものであろう。

2は備前系陶器の埴鉢である。口縁部の形態等が不明で時期の認定は困難であるが、16世紀代の所産と考えられる。

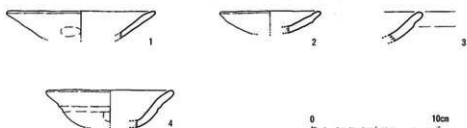
3・4は京都系土師器の皿である。器壁がさほど厚くなく、口縁部下のナデも明瞭でないことから、1期もしくは2期の古い段階に属するであろう。



第176図 SF019 出土遺物実測図 (1は1/1、2～4は1/3)

SF021 出土遺物 (第177図)

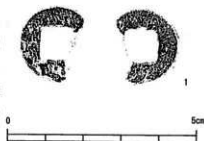
1～4まですべて京都系土師器である。1は皿で、器壁が薄く口唇部下のナデも明瞭ではなく1期ものと考えられる。2・3も皿であるが、1に比べると器壁も厚く、口唇部下のナデも明瞭である。したがって1よりも後出的要素を持っており、2期の範疇に入れうる。4は、胴部が比較的立ち上がっており、坏に近い形態をなす。器壁も厚くナデもしっかりしていることから、やはり2期ものと考えられる。



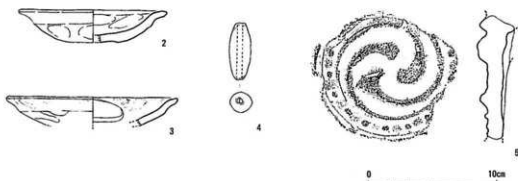
第177図 SF021 出土遺物実測図 (1/3)

SF023 出土遺物 (第178図)

1は無文銭である。2・3は、京都系土師器の皿である。2・3共に口縁部下のナデがしっかりと施されており、2期の位置づけが可能である。これらの遺物は名ヶ小路及び第2南北街路の出現期を示すものであると考えられる。4は土鍾である。5は、軒丸瓦の瓦当部分で中央に巴文、周囲部に朱文を施す。



巴文軒丸瓦



第178図 SF023 出土遺物実測図 (1は1/1、2～5は1/3)

溝状遺構 (道路側溝)

SD002・SD003・SD006・SD007 (第179図)

両側側溝

第2南北街路の両側側溝である。SD006・SD007とSD002・SD003の2段階に掘り分けて調査を実施した。それぞれの規模は、SD006が幅1.04m、深さ0.27m、SD007が幅1.18m、深さ0.34mである。石組部分のSD002は石組間の幅0.38m、石組上部からの深さ0.45m、溝基底部の標高は3.780mである。SD003は石組間の幅0.38m、石組上部からの深さ0.49mで溝基底部の標高は3.700mである。石組を構成する石については、SD002については直方体に加工された凝灰岩が並べられており、確認された石4つについて大きさを見てみると、それぞれ1辺59cm大、厚さ11cm、1辺57cm大、厚さ15cm、1辺55cm大、厚さ15cm、1辺49cm大、厚さ16cmであった。一方SD003については、石の素材、形状等はSD002とは全く異なり、径0.45m大～0.25m大の川原石が主体となって組まれている。したがって、両者の側溝は明らかに構造上差異があると認めざるを得ず、それが時期差にもとづくものなのかどうかを次に考察することにする。

加工された凝灰岩

まず、掘り分けたSD006・SD007とSD002・SD003の関係についてみると、そもそもこれらを掘り分けたのは、南接する第12次調査区で石組部分とその上部では、明らかに分層が可能であるという所見が得られていたことによる。ところが、石組部分SD006・SD007の位置とSD002・SD003の掘形の位置がほとんど一致している点を考えると、石組部分SD006・SD007が一旦埋まった後に、また同じ場所を正確にSD002・SD003が掘り返されたというのは考えにくい。また各々から出土する遺物についても、大半が16世紀末葉に位置づけられるが、明確に遺構間に時間差が存在することを示す資料は確認できない。したがって石組SD002とSD006及び石組SD003とSD007はそれぞれ一連の遺構であって、層位の違いは堆積の状況によるものであると考えられる。

次に、これらの側溝はどの道路の段階に存在したのであろうか。第163図の土層断面図で見ると、この側溝の上には明らかに2層以上の層位が確認され、その内直上の第3層は名々小路で確認された互敷道路SF001・SF011を構成する。したがって、互敷道路が形成されたときには、この石組側溝SD002・SD003・SD006・SD007は埋まってしまっている。しかしながら、SD003の石組の下には焼土が散見でき、層位的に見ても島津侵攻に伴う焼土層を切って形成されている。以上よりSD002・SD006及びSD003・SD007については、島津が侵攻してきた際には存在していたとは考えにくく、島津侵攻後復興に伴い構築され、互敷道路が造られる段階には埋め戻されたと考えられる。

ではSD002・SD006とSD003・SD007の存在関係についてはどうであろうか。この石組側溝は3つの道路（第2南北街路・名々小路・大友氏館跡北側道路）の交差点に存在しており、石組側溝を挟んで東西に存在する道路は、各々独自の堆積状況を示している。したがって石組側溝の両側に堆積する層位を完全に対応させるのは非常に困難を伴うため、焼土層の層位、堆積中の瓦の有無、両側溝の上に通じて存在する互敷道路等に着目して、両側溝の存在時期を確定していかざるをえない。

そうすると、前述のようにSD002・SD006とSD003・SD007の両側溝は、島津侵攻後の復興事業に伴って構築され、互敷道路SF001・SF011形成時には埋められている訳で、両側溝は極めて限られた時期に存在していたことが判る。この両側溝の構造上の差異が時期差によるものとする、復興がごく短期間の間頻繁に行われたことが前提となるが、中世大友城下町跡の各調査区の所見では、大きな復興事業がそう何度も行われたということはない。したがって、この両側溝は併存していたと考えるのが無難であり、構造上の差異はむしろその側溝が面していた施設の差異等に基づくと考えるのが自然であろう。

SD002・SD003出土遺物（第180図1・2）

1は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗の高台部である。高台は削り出し輪高台である。2は京都系土師器皿である。器壁はさほど厚くなく、口唇部下のナデもさほど明瞭ではない。1期もしくは2期の古い段階に位置づけられよう。当該遺構の時期を示す遺物ではなく混入であろう。また2の口唇部にはススの付着が認められることから、灯明皿として使用されている。

SD006・SD007出土遺物（第180図3～9）

3は炊飯施軸陶器の碗である。内面に黒軸、外面に透明軸と緑軸を施す。4は備前系陶器の播鉢である。スリメはナメスリメが施され、見込み部分にまでスリメが施される。5は京都系土師器皿で、器壁の厚さから2期以降のものと考えられる。6は白磁の碗の底部である。7は備前系陶器の播鉢である。スリメについては不明であるが、口縁端部のつまみあがった形態から、ナメスリメの段階のものと考えられる。

8・9は平瓦である。8は軒平瓦の瓦頭部分であるが、瓦頭部の文様については不明である。これらの瓦もやはり、「府内古園」に記される称名寺に関係するものであろう。

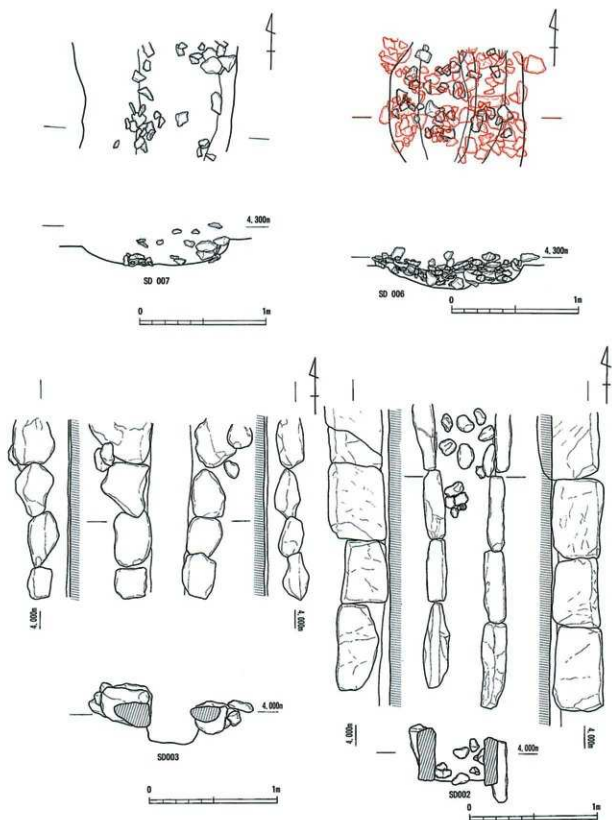
復興に伴う構築

焼土層位
互敷道路

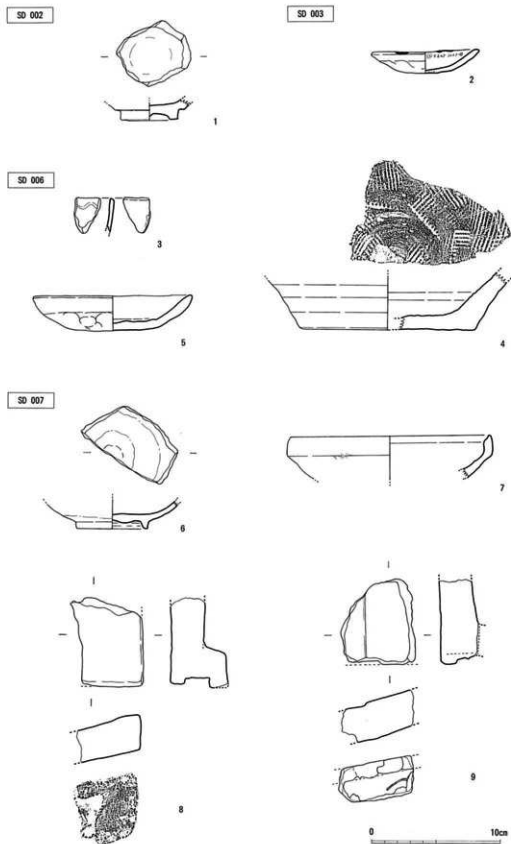
両側側溝の併存

灯明皿

炊飯施軸陶器
碗



第179図 SD002・SD003・SD006・SD007実測図(1/30)



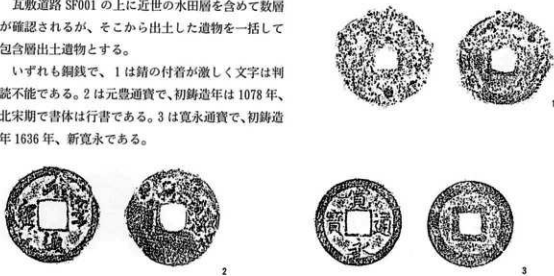
第180図 SD002・SD003・SD006・SD007 出土遺物実測図 (1/3)

包含層出土遺物（第181図）

瓦敷道路 SF001 の上に近世の水田層を含めて数層が確認されるが、そこから出土した遺物を一括して包含層出土遺物とする。

いずれも銅銭で、1は鑄の付着が激しく文字は判読不能である。2は元豊通寶で、初鑄造年は1078年、北宋期で書体は行書である。3は寛永通寶で、初鑄造年1636年、新寛永である。

新寛永



第181図 包含層出土遺物実測図 (1/1)



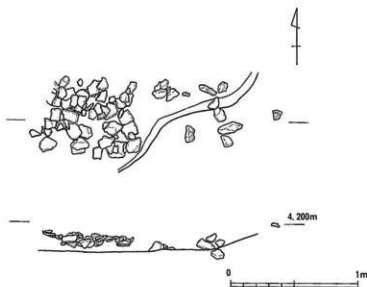
土坑

SK008（第182図）

調査区の西側隅で検出された土坑で、土坑の大部分が調査区外にかかるため、土坑の形状、規模については正確に把握できなかった。確認できた範囲での規模については、長径1.88m、短径0.9m、深さは0.2mほどであった。

土層の切り合い関係から見る限り、瓦敷の道路面SF001に対応する面を切って掘削されている。ただ出土する遺物には極端に時期が異なって新しい物もなく、遺物からみてSF001段階と大きな隔たりは感じない。さらに出土遺物には大量の瓦が含まれており、SF001に使用された瓦との関係が推測される。こうした点から、SK008はSF001に近い時期の形成であって、下っても近世初頭段階の所産であろう。

近世初頭

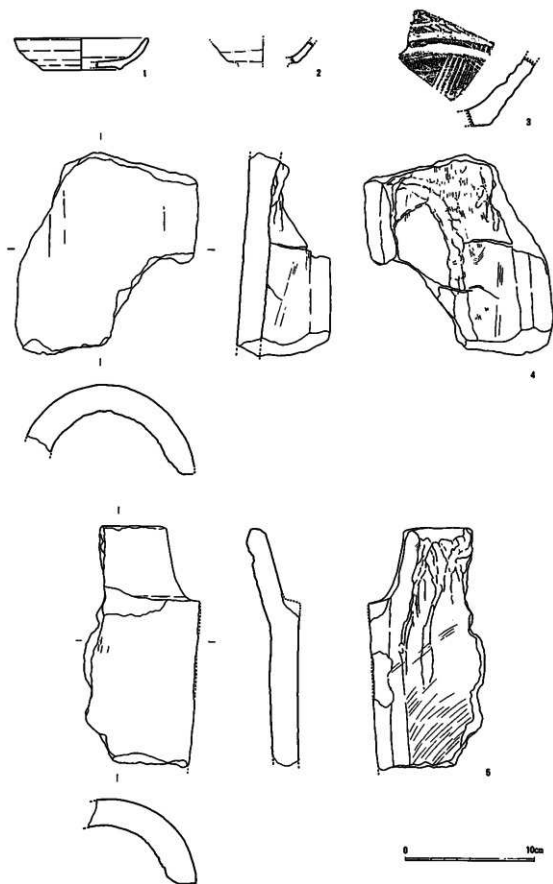


第182図 SK008 実測図 (1/30)

SK008 出土遺物（第183図）

瀬戸美濃系陶器

1・2は瀬戸美濃系陶器で、1は皿、2は天目茶碗である。3は備前系陶器の描鉢でナナメスリメを施す。4・5は丸瓦で、瓦敷道路SF001に使用された瓦と関係が深いと考えられ、「府内古園」に描かれた称名寺に関連するものであろう。



第183图 SK008 出土遺物実測图 (1/3)

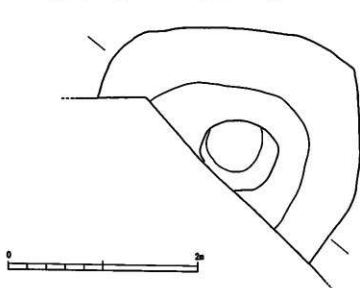
第2節 遺構と遺物

井戸

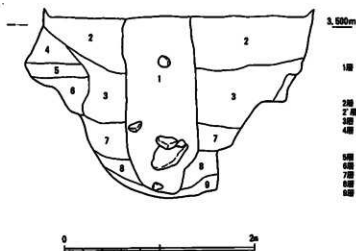
SE032 (第184・185図)

井側は径0.79m、直径約2.88mの円形状（もしくは隅丸方形）に掘り込まれている。標高1.75mほどで細砂層（第185図第9層）に到達し、井側の痕跡（第185図第1層）もそのあたりで終わっていることから、このあたりが当時の湧水点であったと推測できる。現在は全く水が湧かないため有機質の残存状況も良くなく、井側の構造物、特に井筒等は確認できなかった。ただ、井戸検出時に掘形中央で井側と思われる円形の掘込を確認しており、さらに土層断面図で確認する限り中世大友府内町跡で14世紀代に頻繁に見られるような方形の組板構造の痕跡も認められない。したがって16世紀の中世大友府内町跡で顕著に見られる桶積みの構造であった可能性が高い。ところが、出土する遺物には16世紀代ものは全く見られず、15世紀代ものが主体となる。そこで本遺構もその時期の所産と考えておくのが妥当であろう。

桶積み

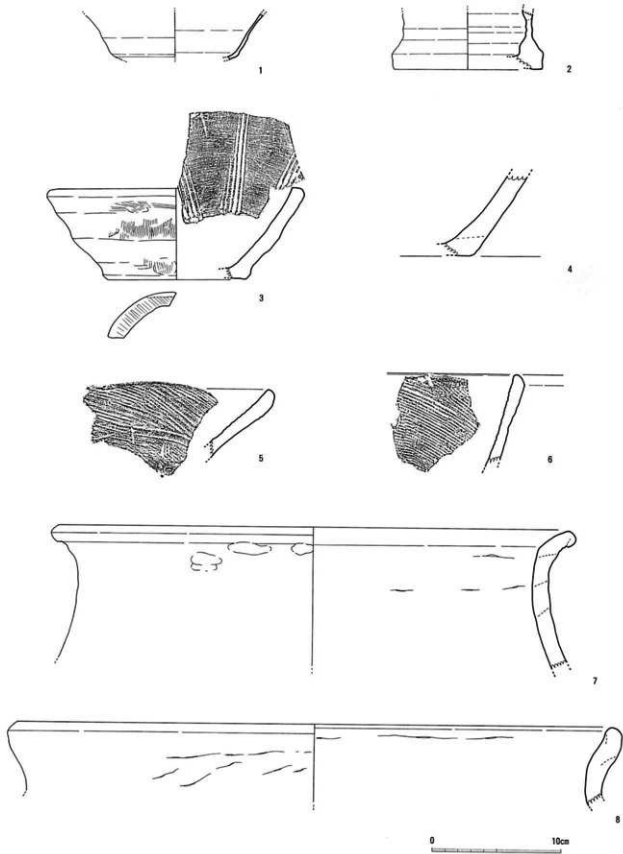


第184図 SE032実測図 (1/40)

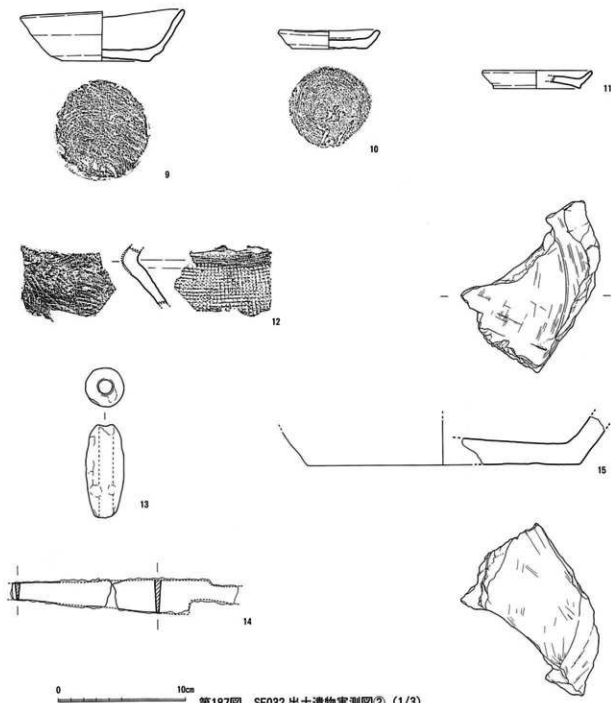


1層	10196/1	黄褐色	粘質土	灰・粘土質を含む。また、大量の礫を含む。特にL=2.500m以下には、大きな礫が投げ込まれている。地土中の大量の礫は、井戸掘りの行為を伴うものと考えられる。
2層	10196/1	黄褐色	粘質土	多量の灰・粘土質を含む。両者は同層の層と考えられる。
3層	10196/2	灰黄褐色		
4層	10196/4	にがい黄褐色	粘質土	灰・粘土質を含む。灰を多量含む。地山の土と区別される黄褐色の粘土ブロックが多く見られる。上層は2層・3層と似ている。
	514/1	灰色	弱粘質土	
5層	515/1	灰色	弱粘質土	地山の砂に似ている。黄褐色の粘質土と砂が混在する。比較的粒が大きく粗い。比較的粒が大きく粗い。細砂粒。混ざらしきものが層下部に沈積し、黄褐色を呈している。
6層	515/4	オリーブ灰色	砂層	
7層	2.515/2	暗灰紫色	砂層	
8層	103/1	暗灰色	砂層	
9層	2.515/3	黄褐色	砂層	

第185図 SE032土層断面図 (1/40)



第186図 SE032 出土遺物実測図① (1/3)



第187図 SE032 出土遺物実測図② (1/3)

SE032 出土遺物 (第186・187図)

枢府磁

1は中国産白磁で口縁部に向かって外反し、胴部下で腰折れして屈曲する。器形は坏と考えられる。森田勉編年のB群に属するもので、いわゆる「枢府磁」と呼ばれる一群であろう。2は古瀬戸で瓶子の底部の破片である。3～8は瓦質土器である。3は擂鉢、4は甕等の底部片、5・6は鉢、7・8は甕である。この内5・8は井戸の埋土中から、その他は井筒から出土した。9は在地系土師質土器の坏で、胴部が口縁部に向かってやや外反ぎみに立ち上がる。10・11は在地系土師質土器の小皿である。坏・小皿ともに本報告書編年から15世紀前半の位置づけが可能である。12は須恵質土器の甕の破片で、亀山式土器等の可能性も考えておく必要がある。13は土錘、14は刀子である。15

滑石製石鍋

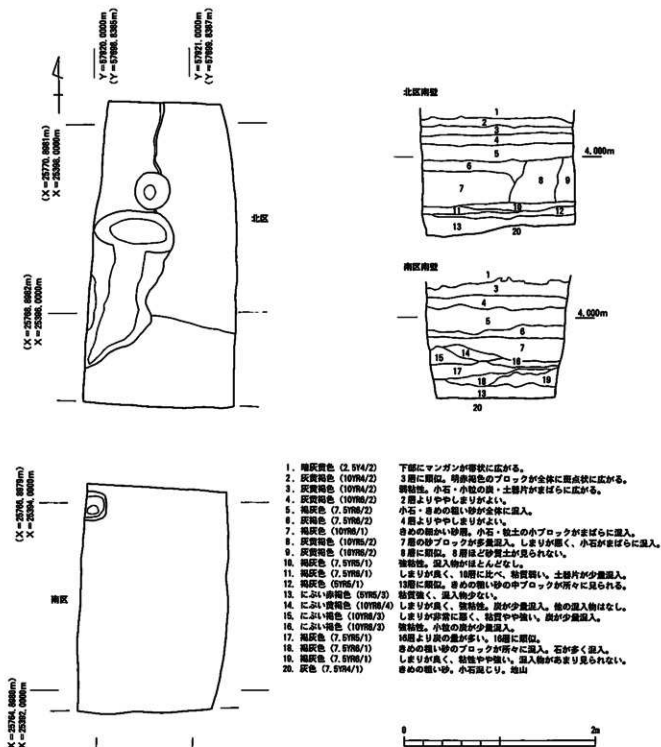
は滑石製の石鍋の底部である。

II. 第48次-2調査区の調査

1. 遺構

第12次調査区の南側隣接地に相当する。東西約2m×南北約6mの幅をトレンチ状に掘り下げた。中央を東西に水道管が通っているためそこで調査区が分断され、水道管を挟んで北側を北区、南側を南区として遺物を分けて取り上げた。その結果、標高約3.80mのレベルにおいて遺構面が検出された。

この標高は第48次-1調査区で検出された第2南北街路及び名ヶ小路の出現期のレベルに相当す



第188図 第48次-2調査区遺構分布図・土層断面図 (1/40)

る。

検出された遺構はピットと土坑であるが、まずピットについては調査範囲が狭小のため、その性格付けは困難である。恐らく建物を構成する柱穴か、区画をなす杭列の一部であろうが、道路からの距離からみて町屋の裏手に位置しそうであり、建物を構成するとは考えにくい。次に、土坑については、形状は不定形をなし深さは30cmほどである。遺物の出土もさほど多くはなく、その位置づけは困難であるが、前述のように本調査区が町屋の裏手にあたるという前提で考えると、廃棄土坑等の性格が考えられる。

ところで、これらの遺構は実は地山を掘り込んで形成されているのではないことが、掘り下げていく過程で判明した。実際の地山はこれから約60cmも下の標高約3.15～3.20mで検出され、これらの遺構は分厚い整地層の上に形成されていることが分かった。そこでこの巨大な整地事業がなされた背景について、次にみていくことにする。

まず、地山が遺構検出面から60cmも下って検出されるという、いわゆる大きな落ち込みがあることについては、他の調査区（第12・18・22・28次調査区等）でも既に確認されていたことであった。その落ち込みは桜町や御所小路町の裏手付近で検出され、調査区でいうと第12・18・22・28次調査区の東端部分に見られる。ところがこの落ち込みは名ヶ小路の下には潜らず、道路を意識して落ち込みが始まっている。したがってこの落ち込みは、もともと旧地形が大きく窪んでいた訳ではないようで、人為的な大規模掘削事業に伴うものである可能性が高い。この大規模掘削事業の性格については、本調査区のみでは言及できないので別項にゆずるとして、ただこの掘削事業によって生じた落ち込みは、再び埋戻されて、それを整地して町屋を造成していったことが本調査区の所見から推測される。そしてその町屋の造成期はいつかという点になるが、まず前述の第2南北街路及び名ヶ小路の初現期と、整地して形成された町屋がほぼ同じ標高で確認されていること、次にこの落ち込みの埋土中から出土する遺物が、京都系土師器2期段階（16世紀中葉～後葉）のものが含まれていること、他の調査区の所見でもこの京都系土師器2期段階に第2南北街路を中心として大きな都市計画事業がなされているなどの点から、京都系土師器2期段階（16世紀中葉～後葉）の時期設定が可能であろう。

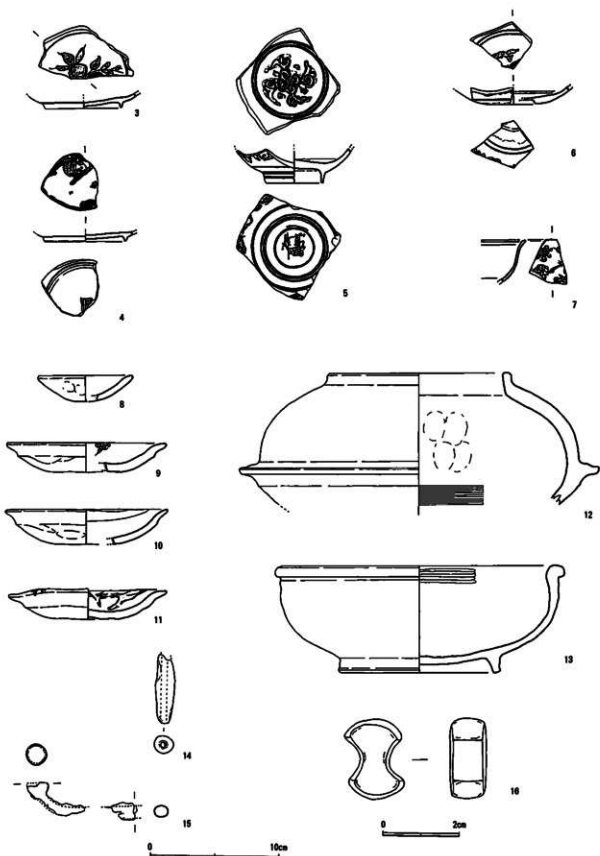
2. 出土遺物（第189・190図）

1・2は銅銭で1は標高4.1m～4.2mの包含層中から出土し、元豊通寶である。初鋳造年は1078年、書体は行書である。2は標高4.0m～4.1mの包含層中から出土し、「熙寧」の文字が判読できることから、「熙寧元寶」と思われる。3～7は景德鎮窯系青花で3・4は皿、5は饅頭心を呈するE群の碗、6は碁筒底を呈するC群の皿、7は碗の口縁部である。8～11は京都系土師器の皿である。器壁はさほど厚くないが、口縁部下のナデはしっかりと施されており、京都系土師器2期段階の形態を示している。12・13は瓦質土器で、12は羽釜、13は鉢である。14は土鍾、15・16は青銅製品で、15は煙管である。16は分銅で、齒形を呈する。重さは13.0gである。

齒形分銅



第189図 第4次-2調査区出土遺物実測図①(1/1)



第190图 第48次-2調査区出土遺物実測図② (3~15は1/3、16は1/1)

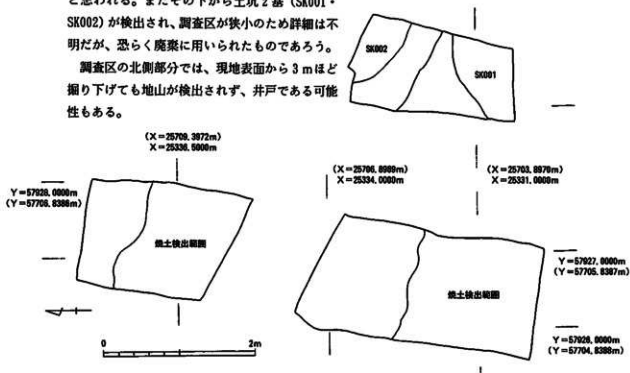
第2節 遺構と遺物

III. 第48次-3調査区の調査

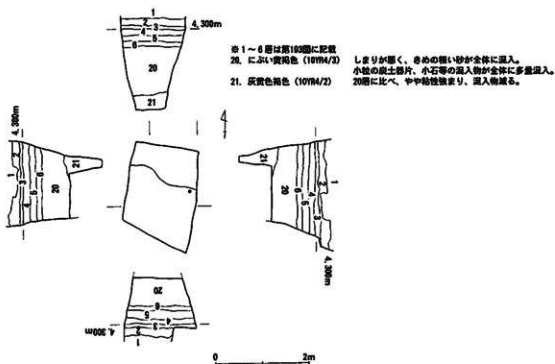
1. 遺構

桜町南側部分に該当する。標高約4.3m付近で焼土の広がり確認され、島津侵攻に関係するものと思われる。またその下から土坑2基 (SK001・SK002) が検出され、調査区が狭小のため詳細は不明だが、恐らく廃棄に用いられたものであろう。

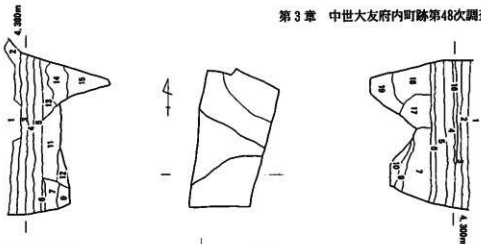
調査区の北側部分では、現地表面から3mほど掘り下げても地山が検出されず、井戸である可能性もある。



第191図 第48次-3調査区遺構分布図 (1/50)



第192図 第48次-3調査区(北)土層断面図 (1/80)



1. 褐色色 (7. 979A/1) 凝結性。小石がまばらに混入。黄土。
2. 灰褐色 (7. 979B/2) 凝結性。褐色の小ブロックが垂直状に広がる。
3. 褐色色 (1079B/1) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
4. 褐色色 (1079B/1) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
5. 褐色色 (7. 979A/2) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
6. 褐色色 (979A/2) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
7. 灰褐色 (1079B/2) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
8. 明褐色色 (1079B/3) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
9. 褐色色 (7. 979B/2) 凝結性。暗褐色の小ブロックが垂直状に広がる。少量の黄土と炭が混入。
10. 灰褐色 (7. 979B/2) 色の濃い以外は9層に近い。
11. 暗褐色 (1079B/2) 凝結性。しまりがよく、地山の土に近い。
12. 褐色色 (1079B/1) 地山。
13. 褐色色 (1079B/1) 凝結性。しまりがよく、地山の土に近い。
14. におい黄褐色 (1079B/4) 凝結性。しまりがよく、小石の混入。土層片が少量混入。
15. 褐色 (1079B/4) 凝結性。しまりがよく、小石の混入。土層片が少量混入。
16. におい黄褐色 (1079A/3) 凝結性。しまりがよく、小石の混入。土層片が少量混入。
17. 褐色 (7. 979A/4) 凝結性。地山の土に近い。少量の炭。色の濃い以外は17層に近しい。
18. 褐色 (1079A/4) 凝結性。しまりがよく、小石の混入。土層片が少量混入。
19. におい黄褐色 (1079B/4) 凝結性。しまりがよく、小石の混入。土層片が少量混入。

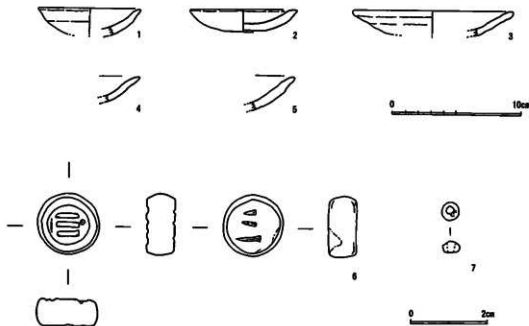
第193図 第48次-3調査区(南)土層断面図(1/60)

2. 出土遺物 (第194図)

1～5は京都系土師器類である。器壁が厚く、口縁部下のナデもしっかりとしているものがみられるので、2期～3期にかけての位置づけが可能であろう。

三木紋

6は太鼓形分銅で表に定紋である三木紋が施され、裏には3本の掻き跡が認められる。重さは9.1gである。7はガラスの小玉で中央には穿孔が施され、紐等に通して使用された物であろう。他の調査区でもこうしたガラス玉が集中して出土した例があり、コンタの可能性もある。



第194図 第48次-3調査区出土遺物実測図(1～5は1/3、6・7は1/1)

第3節 小結

第48次調査区の調査によって得られた所見についてまとめたい。

〔道路の変遷について〕

道路遺構としては、第48次-1調査区において第2南北街路と名ヶ小路及び大友氏館跡北側を通る道路の3つが交差して検出されているが、ちょうどその交差点部分に石組側溝が掘られているために土層が分断されている。さらに各道路がそれぞれ独自の堆積状況を示しており、道路の各段階がどう併行関係をもつか認定するのは非常に困難である。ただ、年代確定の一つの要素となりうる島津侵攻に伴う焼土層、あるいはそれによって付随して発生したと考えられる瓦の散乱、さらには第2南北街路を造成する一つの方法として、土囊のようなものを積み上げていった痕跡など、道路造成に伴う画期に注目してその併行関係を押さえていくと、大きく4つの段階が存在したことが明らかになった。その4つの段階は、古い順に、

第1段階：第2南北街路・名ヶ小路出現期 [SF005下層・S010下層・SF019・SF021・SF022・SF023]

第2段階：第2南北街路・名ヶ小路修復期～島津侵攻期 [SF005・SF010・SF020]

第3段階：島津侵攻後復興期（1段階） [SF016・SF017・大友氏館跡北側道路]

第4段階：島津侵攻後復興期（2段階） [SF001・SF011・SF017・大友氏館跡北側道路]

となる。そしてそれぞれの段階の具体的な時期としては、第1段階については道路形成層の最下層から京都系土師器2期の皿が出土していることから、この時期（16世紀中葉～後葉）が上限となる。次に第2段階については、この道路面の直上に焼土層あるいは瓦の散布等が認められることから、この道路面が使用されている段階に島津襲撃があったものと考えられる。したがって、この道路の使用段階は天正14年が下限となる。次に第3段階は島津侵攻の後始末（火災処理に伴うと思われる焼土層が厚く堆積している）、あるいは道路の修復（この層の中には瓦の出土が顕著に認められる）、さらには石組側溝が造られる段階で、天正14年以降の形成である。第4段階は瓦敷の道路が造られる段階で、この道路形成層から肥前系陶器が出土していることから1590年以降の形成と考えられる。

〔町屋の形成と道路の関係について〕

第48次-2調査区において、人為的な掘削による大きな落ち込みが確認された。この落ち込みの掘削時期は不明であるが、埋められた時期については京都系土師器2期段階のものが含まれていることから、16世紀中葉～後葉が上限となる。さらに埋土中の遺物にさほど時期の差が認められないため、この埋め戻しの行為は比較的短期間になされたものと考えられる。そしてこの埋め戻された面からは建築物の痕跡が認められることなどから、町屋を造成していった可能性が高い。こうした所見にもとづいて、前述の第48次-1調査区における道路の変遷状況を照らし合わせてみると、第2南北街路と名ヶ小路出現期の時期と、この落ち込みの埋め戻し時期の関連性が非常に強いことが分かる。具体的にはその出土する遺物の時期が近い点、あるいは道路を形成する標高と、埋め戻された後そこに建築物が建設されている標高に近い点などから推察される。以上より、第2南北街路と名ヶ小路の形成と、この落ち込みの埋め戻しは一連の事業の可能性が高く、道路の整備と町屋（ここでは桜町）の造成が併行して行われていったことが看取される。そして、第2南北街路該当部分の造成においてのみ、土囊のようなもので道路形成の痕跡が認められる点などを勘案すると、この町屋の造成が第2南北街路を中心とした都市計画プランにもとづいていたことが推測される。さらに、この町造りの時期が、16世紀中葉～後葉に位置づけられることは、その主体者が1573年に家督を継いだ大友義統であったことを示唆するものであり、府内古図に描かれた府内の町はここに出現した可能性がある。

道路形成の
4段階

天正14年

肥前系陶器

町屋造成

第2南北街路
・名ヶ小路

大友義統

遺物觀察表

第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

探洞No.	器 種	生 産 地	流 径 (單位cm)			遺 物 名	備 考	図 録 No.
			口 徑	底 径	唇 高			
第9期	土師青土器	瓠	在地	5.5	-	2.0		
第14期1	青花	瓠	中国(京徳系)	(12.8)	-	-	SB01	周辺
第14期2	青花	瓠	中国(京徳系)	(12.6)	-	-	SB01	周辺
第14期3	青花	瓠	中国(京徳系)	12.6	-	-	SB01	周辺
第14期4	青花	瓠	中国(京徳系)	12.0	4.8	6.2	SB01	周辺
第14期5	青花	瓠	中国(京徳系)	(12.4)	5.0	6.2	SB01	周辺
第14期6	青花	瓠	中国(京徳系)	10.4	4.9	4.8	SB01	周辺
第14期7	青花	瓠	中国(京徳系)	(13.0)	-	-	SB01	周辺
第14期8	青花	瓠	中国(京徳系)	-	(4.8)	-	SB01	周辺
第14期9	青花	瓠	中国(京徳系)	-	(5.4)	-	SB01	周辺
第15期10	青花	皿	中国(京徳系)	(14.4)	-	-	SB01	周辺
第15期11	青花	皿	中国(京徳系)	(13.6)	(7.4)	2.8	SB01	周辺
第15期12	青花	皿	中国(京徳系)	(14.4)	(8.0)	3.2	SB01	周辺
第15期13	青花	皿	中国(京徳系)	9.9	2.3	2.4	SB01	周辺
第15期14	青花	皿	中国(京徳系)	10.0	5.2	2.2	SB01	周辺
第15期15	青花	皿	中国(京徳系)	(10.0)	5.8	2.6	SB01	周辺
第15期16	青花	皿	中国(京徳系)	13.0	7.2	3.1	SB01	周辺
第15期17	青花	皿	中国(京徳系)	13.2	7.3	3.1	SB01	周辺
第16期18	青花	皿	中国(京徳系)	(15.0)	-	-	SB01	周辺
第16期19	青花	甗	中国(京徳系)	-	3.8	-	SB01	周辺
第16期20	五彩	大皿(盤)	中国(京徳系)	(34.2)	(18.8)	5.6	SB01	周辺
第16期21	青花	瓠	中国(涪州系)	(12.4)	4.4	5.8	SB01	周辺
第16期22	青花	皿	中国(涪州系)	(12.0)	-	-	SB01	周辺
第16期23	青磁	瓠	中国(龍泉系)	12.4	5.6	5.4	SB01	周辺
第17期24	青磁	香炉	中国(龍泉系)	-	-	-	SB01	周辺
第17期25	白磁	甗	中国	-	8.0	-	SB01	周辺
第17期26	白磁	皿	中国	(9.4)	(7.0)	2.0	SB01	周辺
第17期27	陶器	大目	中国	10.6	4.4	5.6	SB01	周辺
第17期28	陶器	煮	中国	-	-	-	SB01	周辺
第17期29	陶器	瓠	朝鮮王朝	(15.3)	5.9	5.0	SB01	周辺
第17期30	陶器	瓠	朝鮮王朝	(14.6)	-	-	SB01	周辺
第18期31	陶器	甗 or 埴利	甗前	-	-	-	SB01	周辺
第18期32	陶器	埴鉢	甗前	(22.6)	(10.4)	9.8	SB01	周辺
第18期33	陶器	甗	甗前	-	(7.6)	-	SB01	周辺
第18期34	陶器	甗	甗前	(11.2)	-	-	SB01	周辺
第18期35	陶器	甗	甗前	-	9.0	-	SB01	周辺
第18期36	陶器	甗	甗前	8.8	13.0	23.0	SB01	周辺
第18期37	陶器	甗	甗前	9.2	11.2	23.4	SB01	周辺
第19期38	京部系土師器	皿	在地	8.8	-	1.8	SB01	周辺
第19期39	京部系土師器	皿	在地	8.4	-	2.0	SB01	周辺
第19期40	京部系土師器	皿	在地	8.0	-	1.9	SB01	周辺
第19期41	京部系土師器	皿	在地	9.1	-	2.3	SB01	周辺
第19期42	京部系土師器	皿	在地	(11.8)	-	-	SB01	周辺
第19期43	京部系土師器	皿	在地	11.4	-	2.1	SB01	周辺
第19期44	京部系土師器	皿	在地	11.8	-	2.0	SB01	周辺
第19期45	京部系土師器	皿	在地	(11.9)	-	(2.2)	SB01	周辺
第19期46	京部系土師器	皿	在地	12.2	-	2.2	SB01	周辺
第19期47	京部系土師器	皿	在地	12.6	-	2.7	SB01	周辺
第19期48	京部系土師器	皿	在地	12.6	-	2.8	SB01	周辺
第19期49	京部系土師器	皿	在地	10.4	-	3.2	SB01	周辺
第19期50	土師青土器	耳皿	在地	2.4	3.0	1.4	SB01	周辺
第19期51	瓦質土器	埴鉢	在地	-	-	-	SB01	周辺
第19期52	瓦質土器	埴鉢	在地	(29.6)	(21.4)	8.8	SB01	周辺
第19期53	瓦質土器	埴鉢	在地	(34.0)	(19.4)	7.4	SB01	周辺
第20期1	青花	瓠	中国(京徳系)	(12.4)	-	-	SB02	周辺
第20期2	青花	瓠	中国(京徳系)	-	4.6	-	SB02	周辺
第20期3	青花	皿	中国(京徳系)	(13.6)	-	-	SB02	周辺
第20期4	青花	皿	中国(京徳系)	10.0	2.4	2.6	SB02	周辺
第20期5	青花	皿	中国(京徳系)	11.5	6.4	2.8	SB02	周辺
第20期6	青花	皿	中国(京徳系)	(10.8)	(7.0)	2.6	SB02	周辺
第20期7	青花	皿	中国(京徳系)	(13.0)	7.8	3.0	SB02	周辺
第20期8	青花	皿	中国(涪州系)	(8.6)	(3.5)	1.8	SB02	周辺
第20期9	青花	皿	中国(涪州系)	(9.9)	(4.9)	2.6	SB02	周辺
第20期10	青磁	甗	中国	(5.6)	-	-	SB02	周辺
第20期11	青磁	合子	中国	(9.0)	-	-	SB02	周辺
第21期12	陶器	甗	中国	10.8	10.2	20.4	SB02	周辺
第21期13	陶器	甗	中国	4.4	6.0	11.0	SB02	周辺
第21期14	陶器	長脚甗	ベトナム	(13.0)	-	-	SB02	周辺
第21期15	陶器	長脚甗	ベトナム	-	-	-	SB02	周辺
第21期16	陶器	長脚甗	ベトナム	-	-	-	SB02	周辺
第21期17	陶器	甗	ベトナム	-	-	-	SB02	周辺
第21期18	陶器	瓠	朝鮮王朝	(13.6)	-	-	SB02	周辺
第21期19	陶器	瓠	朝鮮王朝	13.4	6.2	6.0	SB02	周辺
第22期20	陶器	甗 or 埴利	甗前	-	(10.2)	-	SB02	周辺
第22期21	陶器	埴鉢	甗前	(30.2)	12.0	12.2	SB02	周辺

14~17は同一個体

遺物観察表 2 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器②)

神田No.	器種	生産地	法尺(単位cm)			遺物名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第22図22	陶器	甕	—	—	—	—	—	—
第22図23	陶器	甕	—	—	—	—	—	—
第22図24	京都系土師器	甕	在池	8.6	—	1.8	—	SB02周辺
第22図25	京都系土師器	甕	在池	8.6	—	2.0	—	SB02周辺
第22図26	京都系土師器	甕	在池	8.7	—	1.9	—	SB02周辺
第22図27	京都系土師器	甕	在池	9.0	—	1.9	—	SB02周辺
第22図28	京都系土師器	甕	在池	8.0	—	2.2	—	SB02周辺
第22図29	京都系土師器	甕	在池	8.0	—	2.0	—	SB02周辺
第22図30	京都系土師器	甕	在池	9.2	—	1.8	—	SB02周辺
第22図31	京都系土師器	甕	在池	8.2	—	2.2	—	SB02周辺
第22図32	京都系土師器	甕	在池	9.8	—	2.0	—	SB02周辺
第22図33	京都系土師器	甕	在池	(11.9)	—	(2.4)	—	SB02周辺
第22図34	京都系土師器	甕	在池	(12.0)	—	—	—	SB02周辺
第22図35	京都系土師器	甕	在池	13.0	—	2.4	—	SB02周辺
第22図36	京都系土師器	甕	在池	12.2	—	2.2	—	SB02周辺
第22図37	京都系土師器	甕	在池	11.2	—	3.0	—	SB02周辺
第22図38	京都系土師器	甕	在池	(10.2)	—	(3.2)	—	SB02周辺
第22図39	京都系土師器	甕	在池	10.6	—	3.2	—	SB02周辺
第23図40	京都系土師器	甕	在池	(10.4)	—	(3.0)	—	SB02周辺
第23図41	京都系土師器	甕	在池	(11.8)	—	(3.2)	—	SB02周辺
第23図42	京都系土師器	甕	在池	(11.8)	—	(3.2)	—	SB02周辺
第23図43	土師質土器	香炉	在池	8.6	7.8	5.4	—	SB02周辺
第23図44	土師質土器	鉢	在池	(29.4)	(18.6)	10.4	—	SB02周辺
第23図45	土師質土器	鉢	在池	29.2	29.0	11.0	—	SB02周辺
第23図46	瓦質土器	漆鉢	在池	—	—	—	—	SB02周辺
第23図47	瓦質土器	漆鉢	在池	(36.0)	—	—	—	SB02周辺
第27図1	青花	甕	中国(景德鎮系)	11.9	4.8	5.6	—	焼土器
第27図2	青花	甕	中国(景德鎮系)	12.0	—	—	—	焼土器
第27図3	青花	甕	中国(景德鎮系)	12.4	4.8	4.0	—	焼土器
第27図4	青花	甕	中国(景德鎮系)	(14.0)	—	—	—	焼土器
第27図5	青花	甕	中国(景德鎮系)	—	4.8	—	—	焼土器
第27図6	青花	甕	中国(景德鎮系)	—	4.4	—	—	焼土器
第27図7	青花	甕	中国(景德鎮系)	(11.8)	(7.0)	2.8	—	焼土器
第27図8	青花	甕	中国(景德鎮系)	(12.8)	(7.9)	3.0	—	焼土器
第27図9	青花	甕	中国(景德鎮系)	(13.2)	(7.9)	2.8	—	焼土器
第28図10	青花	甕	中国(景德鎮系)	(10.4)	(6.8)	2.4	—	焼土器
第28図11	青花	甕	中国(景德鎮系)	(11.0)	(6.5)	2.2	—	焼土器
第28図12	青花	甕	中国(景德鎮系)	10.6	5.8	2.4	—	焼土器
第28図13	青花	甕	中国(景德鎮系)	10.0	5.4	2.4	—	焼土器
第28図14	青花	香炉	中国(景德鎮系)	—	—	—	—	焼土器
第28図15	青花	再加工品	中国(景德鎮系)	—	—	—	—	焼土器
第28図16	青花	甕	中国(涇州系)	12.0	4.8	5.2	—	焼土器
第28図17	青花	甕	中国(涇州系)	12.0	4.6	5.0	—	焼土器
第28図18	青花	甕	中国(涇州系)	(13.2)	—	—	—	焼土器
第28図19	青花	甕	中国(涇州系)	(13.0)	—	—	—	焼土器
第28図20	青花	甕	中国(涇州系)	—	5.4	—	—	焼土器
第28図21	青花	甕	中国(涇州系)	(12.8)	—	—	—	焼土器
第29図22	青花	甕	中国(涇州系)	10.2	4.4	2.6	—	焼土器
第29図23	青花	甕	中国(涇州系)	10.7	4.0	2.8	—	焼土器
第29図24	青花	甕	中国(涇州系)	(10.2)	(5.2)	2.6	—	焼土器
第29図25	青花	甕	中国(涇州系)	9.2	4.0	2.6	—	焼土器
第29図26	青花	甕	中国(涇州系)	10.0	5.2	3.0	—	焼土器
第29図27	青花	甕	中国(涇州系)	12.0	5.4	3.0	—	焼土器
第29図28	青花	甕	中国(涇州系)	13.2	6.0	3.6	—	焼土器
第29図29	青花	大皿(藍)	中国(涇州系)	(24.6)	(10.4)	6.2	—	焼土器
第29図30	青花	大皿(藍)	中国(涇州系)	(16.4)	9.2	2.7	—	焼土器
第29図31	陶器	甕	中国	(8.0)	—	—	—	焼土器
第29図32	五彩	甕	中国(景德鎮系)	(14.6)	—	—	—	焼土器
第30図33	青南三彩	水注	中国	—	—	—	—	焼土器
第30図34	青南三彩	馬彫水注	中国	—	—	—	—	焼土器
第30図35	青南三彩	甕	中国	—	—	1.0	—	焼土器
第30図36	青南三彩	甕	中国	—	—	—	—	焼土器
第30図37	青南三彩	甕	中国	—	(3.6)	—	—	焼土器
第30図38	甕	不明	中国	—	—	—	—	焼土器
第30図39	青磁	甕	中国	13.0	5.6	5.4	—	焼土器
第30図40	青磁	甕	中国	(13.2)	(6.6)	5.4	—	焼土器
第30図41	青磁	甕	中国	10.6	(6.0)	3.0	—	焼土器
第30図42	青磁	甕	中国(景德鎮系)	12.6	6.9	3.6	—	焼土器
第30図43	青磁	甕	中国	(11.6)	—	—	—	焼土器
第30図44	青磁	甕	中国(龍泉系)	—	(9.6)	—	—	焼土器
第30図45	青磁	甕	中国(龍泉系)	—	—	—	—	焼土器
第30図46	青磁	甕	中国(龍泉系)	—	—	—	—	焼土器
第30図47	白磁	甕	中国	(12.2)	—	—	—	焼土器
第30図48	白磁	甕	中国	(15.4)	(8.2)	3.8	—	焼土器
第30図49	白磁	甕	中国	—	(10.5)	—	—	焼土器

第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)

種別No.	器 種	生産地	法尺(単位cm)			遺物名	備 考	図版No.
			口径	底径	器高			
第31回50	白磁	皿	中国	(10.0)	(6.2)	2.2	焼土器	木瓜形
第31回51	白磁	皿	中国	-	-	-	焼土器	木瓜形
第31回52	白磁	皿	中国	-	-	-	焼土器	
第31回53	白磁	皿	中国	-	5.0	-	焼土器	
第31回54	白磁	皿	中国	12.8	5.0	3.2	焼土器	
第31回55	陶器	碗	朝鮮王朝	15.0	5.9	7.2	焼土器	
第31回56	陶器	碗	朝鮮王朝	14.2	5.0	7.4	焼土器	
第31回57	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(5.4)	-	焼土器	
第31回58	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(5.6)	-	焼土器	
第31回59	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(5.6)	-	焼土器	
第31回60	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(6.0)	-	焼土器	
第31回61	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(5.0)	-	焼土器	
第32回62	陶器	碗	朝鮮王朝	(13.7)	(5.6)	4.6	焼土器	
第32回63	陶器	碗	朝鮮王朝	14.4	5.2	5.4	焼土器	
第32回64	陶器	碗	朝鮮王朝	16.9	13.5	9.0	焼土器	
第32回65	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(13.4)	-	焼土器	
第32回66	陶器	碗	朝鮮王朝	-	13.2	-	焼土器	
第32回67	陶器	大目	瀬戸美濃	(11.0)	-	-	焼土器	
第32回68	陶器	大目	瀬戸美濃	(12.2)	-	-	焼土器	
第32回69	陶器	大目	瀬戸美濃	11.2	(4.2)	6.2	焼土器	
第33回70	陶器	大目	瀬戸美濃	(12.5)	-	-	焼土器	
第33回71	陶器	大目	瀬戸美濃	(6.2)	1.9	3.4	焼土器	
第33回72	陶器	皿	瀬戸美濃	(11.0)	(5.8)	2.2	焼土器	
第33回73	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.0)	(6.1)	2.6	焼土器	
第33回74	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.0)	(5.6)	2.4	焼土器	
第33回75	陶器	皿	瀬戸美濃	(11.0)	6.6	2.4	焼土器	
第33回76	陶器	香炉	瀬戸美濃	6.6	-	-	焼土器	
第33回77	陶器	鉢	備前	-	(5.2)	-	焼土器	
第33回78	陶器	鉢	備前	(9.0)	(5.4)	8.2	焼土器	
第33回79	陶器	鉢	備前	16.8	10.4	6.2	焼土器	
第33回80	陶器	鉢	備前	(22.5)	(11.2)	11.2	焼土器	
第33回81	陶器	鉢	備前	(24.6)	(11.0)	9.4	焼土器	
第34回82	陶器	鉢	備前	(29.0)	-	-	焼土器	
第34回83	陶器	鉢	備前	(30.6)	(13.0)	13.8	焼土器	
第34回84	陶器	鉢	備前	(31.6)	(13.2)	14.4	焼土器	
第34回85	陶器	鉢	備前	(10.2)	-	-	焼土器	
第34回86	土師質土器	皿	在壇	3.0	5.0	1.9	焼土器	
第34回87	京部系土師器	皿	在壇	3.4	-	1.8	焼土器	
第34回88	京部系土師器	皿	在壇	3.4	-	2.0	焼土器	
第34回89	京部系土師器	皿	在壇	3.5	-	2.2	焼土器	
第34回90	京部系土師器	皿	在壇	3.0	-	2.2	焼土器	
第34回91	京部系土師器	皿	在壇	3.4	-	2.0	焼土器	
第34回92	京部系土師器	皿	在壇	3.0	-	2.0	焼土器	
第34回93	京部系土師器	皿	在壇	12.0	-	2.4	焼土器	
第34回94	京部系土師器	皿	在壇	(11.7)	-	2.6	焼土器	
第34回95	京部系土師器	皿	在壇	12.2	-	2.6	焼土器	
第34回96	京部系土師器	皿	在壇	12.0	-	2.6	焼土器	
第34回97	京部系土師器	皿	在壇	12.6	-	2.2	焼土器	
第34回98	京部系土師器	皿	在壇	13.0	-	2.6	焼土器	
第34回99	京部系土師器	皿	在壇	11.0	-	3.0	焼土器	
第34回100	土師質土器	燗台	在壇	-	5.8	-	焼土器	
第35回101	土師質土器	香炉	在壇	-	7.0	-	焼土器	
第35回102	土師質土器	鉢	在壇	(23.4)	(9.6)	8.4	焼土器	
第35回103	土師質土器	鉢	在壇	(30.2)	-	-	焼土器	
第35回104	土師質土器	鉢	在壇	(29.2)	(21.6)	10.0	焼土器	
第35回105	土師質土器	鉢	在壇	31.5	(22.0)	10.1	焼土器	
第35回106	土師質土器	鉢	在壇	(33.0)	-	-	焼土器	
第35回107	土師質土器	鉢	在壇	(41.8)	-	11.4	焼土器	
第36回108	瓦質土器	陶鉢	在壇	-	-	-	焼土器	
第36回109	瓦質土器	陶鉢	在壇	(22.0)	-	-	焼土器	
第36回110	瓦質土器	陶鉢	在壇	(35.0)	-	-	焼土器	
第36回111	瓦質土器	陶鉢	在壇	(31.2)	28.4	8.6	焼土器	
第42回1	青花	碗	中国(京師類系)	12.0	(4.2)	6.4	SX01	
第42回2	青花	碗	中国(京師類系)	(12.4)	(4.2)	6.0	SX01	
第42回3	青花	碗	中国(京師類系)	-	6.2	-	SX01	
第42回4	青花	碗	中国(京師類系)	(12.4)	5.6	6.0	SX01	
第42回5	青花	碗	中国(京師類系)	-	4.8	-	SX01	
第42回6	青花	碗	中国(京師類系)	-	5.0	-	SX01	
第42回7	青花	碗	中国(京師類系)	-	5.0	-	SX01	
第42回8	青花	小杯	中国(京師類系)	(8.0)	-	-	SX01	
第42回9	青花	小杯	中国(京師類系)	-	3.0	-	SX01	
第42回10	青花	小杯	中国(京師類系)	-	2.6	-	SX01	
第43回11	青花	皿	中国(京師類系)	12.0	(7.0)	2.8	SX01	
第43回12	青花	皿	中国(京師類系)	(12.0)	6.3	2.4	SX01	
第43回13	青花	皿	中国(京師類系)	(16.0)	(8.6)	3.4	SX01	

遺物観察表 4 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)

標図No.	器種	生産地	法位(単位cm)			遺物名	備考	図版No.
			口徑	底徑	器高			
第43回14	青花	皿	中国(景德鎮系)	10.0	8.0	2.2	SK01	木瓜形
第43回15	青花	皿	中国(景德鎮系)	(11.8)	(6.6)	2.2	SK01	木瓜形
第43回16	青花	皿	中国(景德鎮系)	(12.1)	(7.0)	2.4	SK01	
第43回17	青花	皿	中国(景德鎮系)	—	(5.9)	—	SK01	
第43回18	青花	皿	中国(景德鎮系)	(10.1)	5.5	2.6	SK01	
第43回19	青花	皿	中国(景德鎮系)	—	(7.0)	—	SK01	
第43回20	青花	皿	中国(景德鎮系)	10.4	5.8	2.2	SK01	
第43回21	青花	大皿(鉢)	中国(景德鎮系)	—	(15.4)	—	SK01	
第44回22	磁器	瓶	中国(景德鎮系)	—	(8.6)	—	SK01	
第44回23	陶器	碗	中国	12.8	7.0	7.7	SK01	
第44回24	青花	皿	中国(洛州系)	10.0	4.2	3.2	SK01	
第44回25	青花	皿	中国(洛州系)	(12.8)	—	—	SK01	
第44回26	青花	皿	中国(洛州系)	(12.0)	—	—	SK01	
第44回27	白磁	皿	中国	(13.8)	—	—	SK01	
第44回28	白磁	皿	中国	(13.4)	—	—	SK01	
第44回29	白磁	瓶	中国	—	(6.8)	—	SK01	
第44回30	摩南三彩	皿	中国	—	(7.2)	—	SK01	
第44回31	青磁	合子	中国	—	—	—	SK01	
第45回32	白磁	碗	ベトナム	—	—	—	SK01	漆器系
第45回33	白磁	碗	ベトナム	(13.8)	—	—	SK01	漆器系
第45回34	白磁	碗	ベトナム	(14.6)	(8.8)	5.4	SK01	
第45回35	白磁	碗	ベトナム	—	(6.4)	—	SK01	
第45回36	陶器	鉢	タイ(マナムイ系)	(17.4)	—	—	SK01	
第45回37	陶器	碗	朝鮮王朝	—	5.4	—	SK01	
第45回38	陶器	碗	朝鮮王朝	(14.2)	—	—	SK01	
第45回39	陶器	碗	朝鮮王朝	(14.0)	—	—	SK01	
第45回40	陶器	碗	朝鮮王朝	—	5.2	—	SK01	
第45回41	陶器	皿	瀬戸英濃	11.0	—	—	SK01	
第45回42	陶器	碗	京都・大坂	(10.8)	5.2	7.2	SK01	軟質釉陶器(黒系)
第45回43	陶器	釜	不明	(4.4)	—	—	SK01	
第45回44	陶器	皿	備前	(5.3)	—	—	SK01	
第45回45	陶器	皿	備前	(9.0)	—	—	SK01	
第45回46	陶器	鉢	備前	(12.5)	(8.0)	4.4	SK01	
第45回47	陶器?	碗	備前	(15.2)	7.0	5.2	SK01	
第45回48	陶器	鉢	備前	(10.6)	—	—	SK01	
第45回49	陶器	鉢	備前	(10.8)	—	—	SK01	
第45回50	陶器	鉢	備前	—	—	—	SK01	
第45回51	陶器	鉢	備前	(25.0)	11.8	10.4	SK01	
第45回52	陶器	鉢	備前	(21.0)	10.6	10.4	SK01	
第45回53	陶器	鉢	備前	(29.0)	(13.0)	13.6	SK01	
第45回54	陶器	鉢	備前	(29.6)	(12.0)	9.6	SK01	
第45回55	陶器	鉢	備前	(26.2)	—	—	SK01	
第45回56	陶器	鉢	備前	(36.2)	18.5	13.2	SK01	
第45回57	陶器	大鉢	備前	(57.0)	—	—	SK01	
第45回58	陶器	大鉢	備前	(56.0)	—	—	SK01	
第45回59	陶器	大鉢	備前	(55.0)	—	—	SK01	
第45回60	陶器	大鉢	備前	(55.0)	—	—	SK01	
第50回61	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.1	SK01	
第50回62	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	1.9	SK01	
第50回63	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK01	
第50回64	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	2.1	SK01	
第50回65	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.1	SK01	
第50回66	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.3	SK01	
第50回67	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.1	SK01	
第50回68	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	—	SK01	
第50回69	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	2.0	SK01	
第50回70	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	1.8	SK01	
第50回71	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.2	SK01	
第50回72	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	(2.1)	SK01	
第50回73	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.0	SK01	
第50回74	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.1	SK01	
第50回75	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	(2.0)	SK01	
第50回76	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	(2.4)	SK01	
第50回77	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.2	SK01	
第50回78	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SK01	
第50回79	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	(3.0)	SK01	
第50回80	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	(3.4)	SK01	
第50回81	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	SK01	
第50回82	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SK01	
第50回83	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	(2.6)	SK01	
第50回84	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SK01	
第50回85	京都系土師器	皿	在地	13.1	—	2.5	SK01	
第50回86	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	(2.2)	SK01	
第50回87	京都系土師器	坏	在地	10.6	—	3.4	SK01	
第50回88	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.2	SK01	

第12次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑤)

神原No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.
			口径	底径	高さ			
第50回89	京都系土師器	環	在地	11.4	—	—	SX01	木瓜彫
第50回90	京都系土師器	環	在地	11.9	—	(3.4)	SX01	木瓜彫
第50回91	京都系土師器	環	在地	12.0	—	3.2	SX01	
第50回92	京都系土師器	環	在地	12.3	—	4.8	SX01	
第50回93	土師管土器	皿	在地	4.4	3.2	1.2	SX01	
第50回94	土師管土器	皿	在地	—	—	—	SX01	
第50回95	土師管土器	皿	在地	8.2	5.2	1.6	SX01	
第50回96	土師管土器	皿	在地	9.0	6.0	1.9	SX01	
第50回97	土師管土器	皿	在地	10.0	5.9	2.1	SX01	
第50回98	土師管土器	皿	在地	12.0	6.3	2.4	SX01	
第51回99	土師管土器	香炉	在地	—	6.8	—	SX01	
第51回100	土師管土器	香炉	在地	—	6.0	—	SX01	
第51回101	土師管土器	鉢	在地	(31.5)	(19.8)	11.2	SX01	
第51回102	土師管土器	鉢	在地	33.2	19.4	11.9	SX01	
第51回103	土師管土器	鉢	在地	30.2	13.2	10.0	SX01	
第51回104	土師管土器	鉢	在地	35.4	16.2	12.7	SX01	
第51回105	土師管土器	皿	在地	(32.6)	(25.0)	5.0	SX01	
第51回106	瓦質土器	皿	在地	37.4	31.2	6.6	SX01	
第52回107	瓦質土器	鉢	在地	(39.4)	(31.0)	7.2	SX01	漆黒色
第52回108	瓦質土器	鉢	在地	(44.4)	—	9.6	SX01	漆黒色
第52回109	瓦質土器	鉢	在地	(36.0)	—	—	SX01	
第52回110	瓦質土器	鉢	在地	(43.0)	—	—	SX01	
第52回111	瓦質土器	鉢	在地	(46.4)	—	—	SX01	
第53回112	土師管土器	井筒	在地	(60.0)	—	—	SX01	
第53回113	瓦質土器	風炉	在地	(36.4)	(33.0)	15.6	SX01	
第54回114	瓦質土器	鉢	在地	(30.0)	—	—	SX01	
第54回115	瓦質土器	鉢	在地	(33.0)	23.0	10.0	SX01	
第54回116	瓦質土器	火鉢	在地	(23.0)	—	—	SX01	
第54回117	瓦質土器	火鉢	在地	—	(23.0)	—	SX01	
第54回118	瓦質土器	火鉢	在地	—	(20.2)	—	SX01	軟質施輪陶器(黒垂系)
第54回119	瓦質土器	火鉢	在地	—	(32.2)	—	SX01	
第55回120	瓦質土器	風炉 or 火鉢	在地	—	—	—	SX01	
第55回121	瓦質土器	火鉢	在地	(37.0)	(26.0)	33.2	SX01	
第55回122	瓦質土器	火鉢	在地	(43.8)	41.2	10.0	SX01	
第55回123	瓦質土器	火鉢	在地	(47.0)	(43.4)	10.7	SX01	
第59回1	陶器	壺	在地	10.6	—	—	SE01	
第59回2	瓦質土器	火鉢	在地	(23.4)	—	—	SE01	
第59回3	陶文土器	漆鉢	在地	—	—	—	SE01	
第59回4	陶文土器	漆鉢	在地	—	—	—	SE01	
第61回	瓦質土器	火鉢	在地	—	(28.4)	—	SE03	
第64回1	青花	碗	中国(景德鎮系)	—	4.8	—	第2南北新街路	
第64回2	青花	皿	中国(漳州系)	(13.0)	(5.2)	4.1	第2南北新街路	
第64回3	青花	皿	中国(漳州系)	(12.4)	(5.4)	3.2	第2南北新街路	
第64回4	五彩	皿	中国	—	—	—	第2南北新街路	
第64回5	白磁	小杯	中国	—	2.2	—	第2南北新街路	
第64回6	白磁	小杯	中国	—	2.3	—	第2南北新街路	
第64回7	青磁	皿	中国	(9.0)	(3.8)	2.6	第2南北新街路	
第64回8	陶器	碗	朝鮮王朝	—	(5.2)	—	第2南北新街路	
第64回9	陶器	皿	瀬戸英属	(11.0)	6.4	1.9	第2南北新街路	
第64回10	陶器	碗	肥前(唐津)	11.4	—	—	第2南北新街路	
第65回11	陶器	漆鉢	備前	(25.4)	—	—	第2南北新街路	
第65回12	陶器	漆	備前	—	(7.4)	—	第2南北新街路	
第65回13	陶器	備前	備前	—	7.9	—	第2南北新街路	
第65回14	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	第2南北新街路	
第65回15	土師管土器	皿	在地	—	5.8	—	第2南北新街路	
第65回16	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	第2南北新街路	
第65回17	瓦質土器	陶加工品	在地	—	—	—	第2南北新街路	
第65回18	瓦質土器	壺	在地	(13.2)	—	—	第2南北新街路	
第65回19	瓦質土器	漆鉢	在地	(27.2)	(10.8)	14.0	第2南北新街路	
第65回20	瓦質土器	皿	在地	(33.4)	(26.0)	5.6	第2南北新街路	
第65回21	瓦質土器	火鉢	在地	(42.6)	(38.4)	9.6	第2南北新街路	
第68回1	京都系土師器	皿	在地	8.9	—	(2.0)	第2南北新街路	
第68回2	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.0	第2南北新街路	
第68回3	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.2	第2南北新街路	
第68回4	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	(2.1)	第2南北新街路	
第68回5	瓦質土器	漆鉢	在地	(32.8)	—	—	第2南北新街路	
第77回1	青花	大皿(唐)	中国(景德鎮系)	—	(14.2)	—	SD01	
第77回2	白磁	皿	中国	(16.2)	—	—	SD01	
第77回3	白磁	碗	中国	—	(5.6)	—	SD01	
第77回4	白磁	碗	中国	—	—	—	SD01	
第77回5	陶器	碗	朝鮮王朝	(16.4)	—	—	SD01	
第77回6	陶器	碗	肥前(唐津)	(12.0)	4.9	6.2	SD01	
第77回7	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.9	SD01	
第77回8	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	—	(2.1)	SD01	
第77回9	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	—	(2.2)	SD01	

遺物観察表 6 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑥)

押付No.	器 種	生 産 地	法量(単位cm)			遺 構 名	備 考	図取No.
			口径	底径	高さ			
第77図10	京都系土師器	環	在地	(10.4)	—	(3.4)		SD01
第77図11	瓦質土器	楕鉢	在地	(29.4)	(12.4)	9.9		SD01
第79図1	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	(10.5)	(4.4)	5.0		SD02
第79図2	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	—	4.8	—		SD02
第79図3	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	—	—	—		SD02
第79図4	陶磁器	盃	朝鮮・土師	(16.0)	—	—		SD02
第79図5	陶磁器	盃	中国	8.2	10.2	17.6		SD02
第80図6	陶磁器	皿	瀬戸・美濃	(11.0)	—	—		SD02
第80図7	陶磁器	天目	瀬戸・美濃	(11.6)	—	—		SD02
第80図8	陶磁器	碗	瀬戸・美濃	—	4.6	—		SD02
第80図9	陶磁器	碗	京都・大阪	—	—	—		SD02
第80図10	陶磁器	鉢	備前	(15.4)	(9.2)	6.2		SD02
第80図11	陶磁器	楕鉢	備前	(29.4)	13.5	13.2		SD02
第80図12	土師質土器	取籠	在地	(6.8)	—	—		SD02
第80図13	土師質土器	取籠	在地	(10.0)	—	—		SD02
第80図14	京都系土師器	皿	在地	(9.4)	—	—		SD02
第80図15	京都系土師器	皿	在地	9.8	—	2.2		SD02
第80図16	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	—	(3.2)		SD02
第80図17	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	3.2		SD02
第80図18	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—		SD02
第80図19	瓦質土器	盆	在地	(41.6)	—	—		SD02
第82図1	青花	碗	中国(漳州窯)	12.9	5.1	4.9		SD03
第82図2	青花	碗	中国(漳州窯)	12.2	5.0	5.6		SD03
第82図3	陶磁器	天目	瀬戸・美濃	(10.8)	—	—		SD03
第82図4	陶磁器	皿	瀬戸・美濃	(11.0)	6.8	2.0		SD03
第82図5	陶磁器	鉢	備前	(20.6)	—	—		SD03
第82図6	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	1.6		SD03
第82図7	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	1.9		SD03
第82図8	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.8		SD03
第82図9	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.2		SD03
第82図10	土師質土器	皿	在地	4.4	3.0	1.2		SD03
第82図11	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—		SD03
第82図12	織文土器	深鉢	在地	—	—	—		SD03
第84図1	陶器	鉢	備前	(16.6)	—	—		SD04
第84図4	陶器	楕鉢	備前	(23.2)	(12.0)	11.2		SD06
第84図5	陶器	楕鉢	備前	(25.4)	—	—		SD06
第85図1	陶器	楕鉢	備前	(24.2)	—	—		SD07
第86図1	青花	皿	中国(漳州窯)	10.6	3.6	3.2		SD09
第86図2	白磁	皿	中国	12.0	6.4	3.0		SD09
第86図3	白磁	皿	中国	12.0	6.6	3.0		SD09
第87図1	白磁	皿	中国	(11.8)	—	—	(木戸)	
第87図2	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	—	(2.2)		
第91図1	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0		SD08
第91図2	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.1		SD08
第91図3	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2		SD08
第91図4	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.4		SD08
第91図5	京都系土師器	皿	在地	11.1	—	2.4		SD08
第91図6	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2		SD08
第91図7	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.2		SD08
第91図8	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	(1.9)		SD08
第91図9	京都系土師器	皿	在地	12.7	—	2.1		SD08
第91図10	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	1.9		SD08
第91図11	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	1.9		SD08
第91図12	京都系土師器	皿	在地	15.4	—	2.2		SD08
第91図13	京都系土師器	皿	在地	16.2	—	—		SD08
第91図14	京都系土師器	皿	在地	16.4	—	2.3		SD08
第91図15	京都系土師器	皿	在地	16.8	—	—		SD08
第91図16	土師質土器	小皿	在地	5.0	—	1.2		SD08
第91図17	土師質土器	小皿	在地	5.0	—	1.6		SD08
第91図18	土師質土器	小皿	在地	6.0	—	1.6		SD08
第91図19	土師質土器	皿	在地	7.4	5.4	1.2		SD08
第91図20	土師質土器	皿	在地	10.4	6.0	1.6		SD08
第91図21	土師質土器	小皿	在地	(6.0)	(4.6)	2.2		SD08
第91図22	土師質土器	小皿	在地	(6.6)	(5.4)	2.4		SD08
第91図23	土師質土器	小皿	在地	(7.0)	5.8	1.9		SD08
第91図24	土師質土器	小皿	在地	(7.2)	6.0	1.9		SD08
第91図25	土師質土器	小皿	在地	(6.0)	6.0	2.4		SD08
第91図26	土師質土器	小皿	在地	8.4	6.6	1.8		SD08
第91図27	土師質土器	小皿	在地	(6.0)	6.9	1.1		SD08
第91図28	土師質土器	環	在地	(11.0)	(8.0)	3.4		SD08
第91図29	土師質土器	環	在地	11.0	(8.0)	3.6		SD08
第91図30	土師質土器	環	在地	(11.2)	(8.8)	3.4		SD08
第91図31	土師質土器	環	在地	(11.0)	(6.4)	3.4		SD08
第91図32	土師質土器	環	在地	—	5.4	—		SD08
第91図33	土師質土器	環	在地	(12.6)	7.8	2.8		SD08

秋吉産地陶器

第12次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑦)

押印No.	器 種	生 産 地	注 記 (単位cm)			遺 物 名	備 考	図版 No.
			口 径	底 径	高 さ			
第 92 図 36	縄文土器	深鉢	在地	-	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 37	縄文土器	深鉢	在地	(12.0)	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 38	縄文土器	深鉢	在地	-	(10.8)	SD08	下皿野式	
第 92 図 39	縄文土器	深鉢	在地	-	(8.4)	SD08	下皿野式	
第 92 図 40	縄文土器	深鉢	在地	-	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 41	縄文土器	深鉢	在地	-	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 42	縄文土器	深鉢	在地	-	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 43	縄文土器	深鉢	在地	-	-	SD08	下皿野式	
第 92 図 44	弥生土器	甕	在地	-	-	SD08	下皿式	
第 92 図 45	弥生土器	甕	在地	-	-	SD08	下皿式	
第 100 図 1	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.4	SP398	
第 100 図 2	京都系土師器	皿	在地	10.6	-	2.6	SP351	
第 100 図 3	京都系土師器	皿	在地	11.8	-	2.4	SP078	
第 100 図 4	京都系土師器	皿	在地	11.8	-	2.2	SP012・032・037	
第 100 図 5	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.2	SP298	
第 100 図 6	京都系土師器	皿	在地	13.6	-	2.4	SP024	
第 100 図 7	京都系土師器	坏	在地	11.0	-	3.6	SP010	
第 100 図 8	土師貫土器	皿	在地	12.0	-	2.4	SP134	京都系土師器を模倣
第 100 図 9	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SP062	
第 100 図 10	瓦質土器	羽釜	在地	(17.4)	-	-	SP346	
第 100 図 11	瓦質土器	鉢	在地	(29.0)	-	-	SP016・094	
第 101 図 12	土師貫土器	皿	在地	9.0	5.0	2.2	SP378	
第 101 図 13	土師貫土器	皿	在地	9.6	4.9	1.8	SP006	
第 101 図 14	土師貫土器	皿	在地	8.0	4.9	2.0	SP006	
第 101 図 15	土師貫土器	皿	在地	-	(8.0)	-	SP006	
第 101 図 16	土師貫土器	皿	在地	(15.4)	(8.0)	2.9	SP115	
第 101 図 17	陶器	扇 or 便利	備前	-	(5.0)	-	SP017	
第 101 図 18	陶器	鉢	備前	-	-	-	SP003	把手
第 101 図 19	陶器	鉢	備前	(28.5)	(12.6)	6.4	SP028	
第 101 図 20	陶器	深鉢	備前	(29.0)	(12.4)	13.6	SP089	
第 101 図 21	陶器	深鉢	備前	22.2	(10.8)	7.9	SP295・096	
第 101 図 22	陶器	深鉢	備前	(27.0)	(10.0)	13.9	SP276・366	
第 102 図 23	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(12.2)	4.3	6.0	SP036・147	
第 102 図 24	青銅	皿	中国 (景德鎮窯)	(12.0)	6.2	3.0	SP037	
第 102 図 25	青花	碗	中国 (漳州窯)	13.0	4.8	4.8	SP039	
第 102 図 26	青花	碗	中国 (漳州窯)	13.0	-	-	SP039	
第 102 図 27	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	(7.8)	-	SP039	
第 102 図 28	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	-	(10.6)	-	SP039	
第 102 図 29	白磁	皿	中国	(21.6)	-	-	SP039	
第 102 図 30	白磁	皿	中国	(21.0)	12.4	4.0	SP039	
第 102 図 31	青磁	皿	中国	(7.4)	(3.2)	2.1	SP039	
第 102 図 32	白磁	碗	中国	(10.8)	-	-	SP039	
第 103 図 34	青花	皿	中国 (漳州窯)	11.2	(4.4)	2.8	SP047	
第 103 図 35	青花	碗	中国 (漳州窯)	(13.4)	-	-	SP049・091	
第 103 図 36	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	(14.4)	5.4	7.7	SP086・089	
第 103 図 37	青花	碗	中国 (漳州窯)	(12.2)	-	-	SP124	
第 103 図 38	青花	碗	中国 (漳州窯)	(13.8)	4.8	6.1	SP142	
第 103 図 39	白磁	置物	中国	-	-	-	SP125	獅子形置物
第 103 図 40	青花	香炉	中国 (漳州窯)	-	5.1	-	SP186	
第 103 図 41	京都系土師器	皿	瀬戸美濃	-	6.1	-	SP140	
第 103 図 42	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.0	SP142	
第 103 図 43	京都系土師器	皿	在地	13.5	-	4.3	SP186	
第 103 図 44	瓦質土器	火鉢	在地	-	(19.0)	-	SP186	
第 104 図 45	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(14.6)	(8.4)	3.6	SP227	
第 104 図 46	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	10.2	6.0	2.6	SP279	
第 104 図 47	青花	碗	中国 (漳州窯)	(13.0)	-	-	SP332	
第 104 図 48	青花	碗	中国 (景德鎮窯)	-	6.2	-	SP377	
第 104 図 49	青花	碗	中国 (漳州窯)	-	5.0	-	SP226・339	
第 104 図 50	陶器	深	備前	(6.0)	(8.6)	8.2	SP266	
第 104 図 51	陶器	大目	瀬戸美濃	(11.2)	(4.0)	5.8	SP393	
第 104 図 52	陶器	碗	朝鮮王朝	15.4	(5.8)	6.6	SP014	
第 104 図 53	陶器	碗	朝鮮王朝	(13.6)	6.6	5.8	SP014	
第 107 図 1	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.1	SK01	
第 107 図 2	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	2.0	SK01	
第 107 図 3	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.2	SK01	
第 107 図 4	京都系土師器	皿	在地	11.2	-	2.2	SK01	
第 107 図 5	京都系土師器	皿	在地	11.4	-	2.0	SK01	
第 107 図 6	京都系土師器	皿	在地	11.6	-	2.7	SK01	
第 107 図 7	京都系土師器	坏	在地	11.4	-	2.2	SK01	
第 107 図 8	瓦質土器	火鉢	在地?	-	-	-	SK01	
第 107 図 9	陶器	鉢	備前	(30.6)	(18.4)	6.0	SK01	
第 109 図 1	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(13.0)	(8.0)	2.9	SK02	
第 109 図 2	陶器	碗	朝鮮王朝	(14.2)	5.0	6.2	SK02	
第 109 図 3	陶器	長脚盃	ベトナム	-	-	-	SK02	
第 109 図 4	陶器	長脚盃	ベトナム	-	-	-	SK02	

遺物観察表 8 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑧)

押印No	器種	生産地	法量(単位cm)			追拵名	備考	図版No
			口径	底径	器高			
第111器1	卑南三彩	小皿	中国(景徳鎮窯)	-	(3.6)	-	SK03	背輪小皿
第111器2	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	1.8	SK03	
第111器3	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.9	SK03	
第111器4	京都系土師器	皿	在地	13.0	-	2.1	SK03	
第113器1	陶器	蓋	備前	(13.0)	-	-	SK04	
第113器2	陶器	蓋	備前	-	(11.4)	-	SK04	
第113器3	土師質土器	皿	在地	(41.0)	(31.2)	6.0	SK04	
第114器1	青花	小鉢	中国(景徳鎮窯)	(8.3)	3.0	4.1	SK05	
第114器2	土師質土器	皿	在地	7.5	4.6	1.5	SK05	
第114器3	土師質土器	皿	在地	-	(8.0)	-	SK05	
第119器1	陶器	揉鉢	備前	-	-	-	SK13	
第119器2	陶器	揉鉢	備前	-	-	-	SK13	
第124器1	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	(11.4)	(6.4)	2.8	SK16	
第124器2	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	-	5.3	-	SK16	
第124器3	陶器	揉鉢	備前	-	-	-	SK16	
第124器4	土師質土器	小皿	在地	5.4	3.2	1.4	SK16	
第124器5	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	2.0	SK16	
第124器6	京都系土師器	皿	在地	14.8	-	2.3	SK16	
第124器7	土師質土器	鉢	在地	32.5	18.2	11.2	SK16	
第124器8	土師質土器	鉢	在地	(44.0)	-	(10.4)	SK16	
第127器1	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	4.4	-	SK02	
第127器2	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	(10.0)	3.2	3.1	SK02	
第127器3	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	(10.5)	6.2	2.4	SK02	
第127器4	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SK02	
第127器5	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	(14.8)	7.8	3.2	SK02	
第127器6	青花	皿	中国(景徳鎮窯)	(15.0)	(6.4)	2.9	SK02	
第127器7	青花	小鉢	中国(景徳鎮窯)	5.6	2.3	3.2	SK02	
第127器8	青花	小鉢	中国(景徳鎮窯)	(5.4)	-	-	SK02	
第127器9	卑南三彩	小皿	中国	-	-	-	SK02	背輪小皿
第127器10	青花	皿	中国(漳州窯)	(12.1)	5.3	2.1	SK02	
第127器11	白磁	蓋	中国	-	(8.6)	-	SK02	
第127器12	白磁	皿	中国	-	(8.6)	-	SK02	
第128器13	陶器	蓋	中国	7.0	-	-	SK02	
第128器14	陶器	碗	朝鮮王朝	-	4.6	-	SK02	
第128器15	陶器	碗	朝鮮王朝	-	5.3	-	SK02	
第128器16	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(5.2)	-	SK02	
第128器17	陶器	碗	朝鮮王朝	-	(6.2)	-	SK02	
第129器18	陶器	蓋	タイ(メナムノイ窯)	-	-	-	SK02	
第129器19	陶器	蓋	タイ(メナムノイ窯)	-	-	-	SK02	
第129器20	陶器	蓋	タイ(メナムノイ窯)	(20.4)	-	-	SK02	
第130器21	陶器	皿	瀬戸窯	(10.6)	(6.0)	1.8	SK02	
第130器22	陶器	皿	瀬戸窯	(12.0)	5.8	2.2	SK02	
第130器23	陶器	天目	瀬戸窯	(12.0)	4.2	6.4	SK02	
第130器24	陶器	天目	瀬戸窯	-	4.4	-	SK02	
第130器25	陶器	蓋	肥前(銚津)	(11.8)	5.8	7.5	SK02	
第130器26	陶器	蓋	中国	(5.2)	-	-	SK02	
第130器27	陶器	蓋	中国	(10.6)	-	-	SK02	
第131器28	陶器	鉢	備前	(25.0)	14.8	4.2	SK02	
第131器29	陶器	鉢	備前	(25.0)	(18.0)	3.9	SK02	
第131器30	陶器	鉢	備前	(31.0)	(18.8)	7.0	SK02	
第131器31	陶器	蓋	備前	(12.6)	-	-	SK02	
第131器32	陶器	揉鉢	備前	(26.2)	(13.2)	8.7	SK02	
第131器33	陶器	揉鉢	備前	(22.0)	11.2	11.1	SK02	
第131器34	陶器	揉鉢	備前	(30.4)	-	-	SK02	
第131器35	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	1.9	SK02	
第131器36	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	1.9	SK02	
第131器37	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	1.8	SK02	
第131器38	京都系土師器	皿	在地	11.4	-	2.8	SK02	
第131器39	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.6	SK02	
第131器40	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	2.1	SK02	
第131器41	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	-	2.2	SK02	
第131器42	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	-	2.0	SK02	
第132器43	瓦質土器	鉢	在地	29.4	21.8	8.6	SK02	
第132器44	瓦質土器	火鉢	在地	(38.0)	-	-	SK02	
第132器45	瓦質土器	火鉢	在地	(47.8)	-	-	SK02	
第132器46	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK02	
第138器1	土師質土器	小皿	在地	5.4	-	1.7	竹付 混聚地皿	
第138器2	土師質土器	小皿	在地	5.4	-	1.9	竹付 混聚地皿	
第138器3	土師質土器	小皿	在地	(5.4)	-	1.6	竹付 混聚地皿	
第138器4	土師質土器	小皿	在地	(5.4)	-	1.2	竹付 混聚地皿	
第138器5	京都系土師器	皿	在地	10.0	-	2.2	竹付 混聚地皿	
第138器6	京都系土師器	皿	在地	10.2	-	2.0	竹付 混聚地皿	
第138器7	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.2	竹付 混聚地皿	
第138器8	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	2.4	竹付 混聚地皿	

第12次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器⑨)

押印No.	器種	生産地	法位(単位cm)			造柄名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第138回9	京阪系土師器	皿	在埋	11.0	—	2.0	初什混整地陶	背輪小皿
第138回10	京阪系土師器	皿	在埋	(13.0)	—	2.3	初什混整地陶	
第138回11	土師系土師	小皿	在埋	4.4	4.0	1.0	初什混整地陶	
第138回12	土師系土師	小皿	在埋	4.4	4.0	1.0	初什混整地陶	
第138回13	土師系土師	小皿	在埋	5.1	4.0	1.2	初什混整地陶	
第138回14	土師系土師	小皿	在埋	4.5	3.4	1.2	初什混整地陶	
第138回15	土師系土師	小皿	在埋	7.2	4.4	1.6	初什混整地陶	
第138回16	土師系土師	皿	在埋	9.2	5.6	2.2	初什混整地陶	
第138回17	土師系土師	皿	在埋	9.2	4.9	2.2	初什混整地陶	
第138回18	土師系土師	皿	在埋	9.4	5.0	2.2	初什混整地陶	
第138回19	土師系土師	皿	在埋	9.6	5.6	2.5	初什混整地陶	
第138回20	土師系土師	皿	在埋	(9.0)	5.4	2.0	初什混整地陶	
第138回21	土師系土師	皿	在埋	9.0	5.2	2.2	初什混整地陶	
第138回22	土師系土師	皿	在埋	9.4	5.2	1.8	初什混整地陶	
第138回23	土師系土師	皿	在埋	9.5	5.4	2.0	初什混整地陶	
第138回24	土師系土師	皿	在埋	10.0	5.4	2.2	初什混整地陶	
第138回25	土師系土師	皿	在埋	10.0	5.8	1.8	初什混整地陶	
第138回26	土師系土師	皿	在埋	10.8	6.2	4.2	初什混整地陶	
第138回27	土師系土師	皿	在埋	11.6	6.0	2.6	初什混整地陶	
第138回28	土師系土師	皿	在埋	(12.2)	(6.6)	3.0	初什混整地陶	
第138回29	土師系土師	皿	在埋	(12.0)	6.6	2.2	初什混整地陶	
第138回30	土師系土師	皿	在埋	12.6	(7.4)	2.9	初什混整地陶	
第138回31	土師系土師	皿	在埋	14.2	7.4	3.1	初什混整地陶	
第139回32	華南三彩	皿	中国	—	—	—	初什混整地陶	縁輪小皿
第139回33	陶器	蓋	備前	(4.1)	—	—	初什混整地陶	
第139回34	陶器	蓋	備前	—	(5.2)	—	初什混整地陶	
第139回35	陶器	瓶 or 德利	備前	—	(5.4)	—	初什混整地陶	
第139回36	陶器	鉢	備前	—	6.9	—	初什混整地陶	
第139回37	土師系土師	鉢	在埋	—	(15.4)	—	初什混整地陶	
第139回38	瓦質土器	風炉 or 火鉢	在埋	—	—	—	初什混整地陶	
第139回39	瓦質土器	火鉢	在埋	(34.8)	—	—	初什混整地陶	
第139回40	瓦質土器	火鉢	在埋	(37.6)	—	—	初什混整地陶	
第140回1	青花	皿	中国(京畿類窯)	—	(4.3)	—	包含砂・整地陶	
第140回2	青花	皿	中国(京畿類窯)	(10.0)	2.8	3.6	包含砂・整地陶	
第140回3	青花	皿	中国(京畿類窯)	10.2	2.8	3.0	包含砂・整地陶	
第140回4	青花	皿	中国(京畿類窯)	10.2	6.0	2.6	包含砂・整地陶	
第140回5	青花	皿	中国(京畿類窯)	(13.2)	(7.2)	2.9	包含砂・整地陶	
第140回6	青花	皿	中国(京畿類窯)	(13.4)	(7.8)	3.0	包含砂・整地陶	
第140回7	青花	小鉢	中国(京畿類窯)	(7.0)	—	—	包含砂・整地陶	
第140回8	青花	小鉢	中国(京畿類窯)	(6.2)	—	—	包含砂・整地陶	
第140回9	青花	小鉢	中国(京畿類窯)	(6.0)	2.4	3.6	包含砂・整地陶	
第140回10	青花	皿?	中国(京畿類窯)	—	—	—	包含砂・整地陶	把手
第140回11	青花	再加工品	中国(京畿類窯)	—	—	—	包含砂・整地陶	
第140回12	磁器	瓶	中国(京畿類窯)	—	—	—	包含砂・整地陶	縁彩
第140回13	青花	皿	中国(涇州窯)	—	5.4	—	包含砂・整地陶	
第140回14	青花	皿	中国(涇州窯)	—	5.0	—	包含砂・整地陶	
第140回15	青花	皿	中国(涇州窯)	—	5.0	—	包含砂・整地陶	
第140回16	青花	皿	中国(涇州窯)	(10.4)	4.4	3.0	包含砂・整地陶	
第140回17	青花	再加工品	中国(涇州窯)	—	—	—	包含砂・整地陶	
第140回18	陶器	不明	中国?	—	—	—	包含砂・整地陶	把手
第140回19	陶器	蓋	中国	(12.2)	—	—	包含砂・整地陶	
第140回20	華南三彩	小皿	中国	—	—	0.9	包含砂・整地陶	背輪小皿
第140回21	華南三彩	小皿	中国	—	—	0.8	包含砂・整地陶	背輪小皿
第141回22	華南三彩	蓋	中国	—	—	—	包含砂・整地陶	
第141回23	華南三彩	蓋	中国	3.6	1.6	2.1	包含砂・整地陶	
第141回24	華南三彩	皿	中国	(9.8)	(4.9)	2.8	包含砂・整地陶	
第141回25	青磁	大皿(飯)	中国(龍泉窯)	(25.8)	—	—	包含砂・整地陶	
第141回26	青磁	大皿(飯)	中国(龍泉窯)	—	(7.4)	—	包含砂・整地陶	
第141回27	青磁	大皿(飯)	中国(龍泉窯)	—	(10.0)	—	包含砂・整地陶	
第141回28	青磁	皿	中国(龍泉窯)	—	—	—	包含砂・整地陶	
第141回29	白磁	皿	中国	(12.6)	(7.0)	2.2	包含砂・整地陶	
第141回30	白磁	皿	中国	(10.8)	4.6	3.0	包含砂・整地陶	
第141回31	白磁	皿	中国	(8.0)	—	—	包含砂・整地陶	
第141回32	白磁	小鉢	中国	—	2.6	—	包含砂・整地陶	
第141回33	白磁	皿	中国	(16.2)	—	—	包含砂・整地陶	
第142回34	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	(5.2)	—	包含砂・整地陶	
第142回35	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	(6.2)	—	包含砂・整地陶	
第142回36	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	(5.6)	—	包含砂・整地陶	
第142回37	陶器	瓶	朝鮮王朝	(14.6)	—	—	包含砂・整地陶	
第142回38	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	(6.0)	—	包含砂・整地陶	
第142回39	陶器	瓶 (舟德利)	朝鮮王朝	—	—	—	包含砂・整地陶	
第142回40	陶器	瓶 (舟德利)	朝鮮王朝	5.8	—	—	包含砂・整地陶	
第142回41	陶器	天目	瀬戸英治	(5.8)	2.4	3.0	包含砂・整地陶	
第142回42	陶器	茶入	瀬戸英治	(3.0)	—	—	包含砂・整地陶	小型天目
第142回43	陶器	皿	瀬戸英治	(7.5)	4.4	1.7	包含砂・整地陶	

遺物観察表 10 (第12次調査区)

第 12 次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑩)

押印No.	器 種	生産地	注量(単位cm)			造形名	備 考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第142回44	陶器	瀬戸美濃	10.0	5.2	2.0	包含筒・壺地脚		
第142回45	陶器	瀬戸美濃	(5.4)	—	—	包含筒・壺地脚		
第142回46	陶器	肥前(唐津)	—	(4.8)	—	包含筒・壺地脚		
第143回47	陶器	中国?	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回48	陶器	中国?	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回49	陶器	中国?	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回50	陶器	中国	4.2	3.9	2.4	包含筒・壺地脚		
第143回51	陶器	中国	(14.0)	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回52	陶器	長門蓋	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回53	陶器	長門蓋	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回54	陶器	鉢	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回55	陶器	鉢	(27.2)	(20.6)	3.4	包含筒・壺地脚		
第143回56	陶器	鉢	(24.4)	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回57	陶器	瓢 or 椀	—	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回58	陶器	蓋	(4.0)	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回59	陶器	鉢	(12.4)	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回60	陶器	漆鉢	(24.0)	—	—	包含筒・壺地脚		
第143回61	陶器	漆鉢	—	9.4	—	包含筒・壺地脚		
第143回62	陶器	漆鉢	(33.2)	—	—	包含筒・壺地脚		
第144回82	京都系土師器	皿	在壇	8.0	—	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回83	京都系土師器	皿	在壇	8.4	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回84	京都系土師器	皿	在壇	8.6	—	1.6	包含筒・壺地脚	
第144回85	京都系土師器	皿	在壇	8.8	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回86	京都系土師器	皿	在壇	8.8	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回87	京都系土師器	皿	在壇	9.0	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回88	京都系土師器	皿	在壇	9.0	—	1.9	包含筒・壺地脚	
第144回89	京都系土師器	皿	在壇	9.0	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回90	京都系土師器	皿	在壇	9.0	—	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回91	京都系土師器	皿	在壇	9.2	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回92	京都系土師器	皿	在壇	9.1	—	2.2	包含筒・壺地脚	
第144回93	京都系土師器	皿	在壇	9.2	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回94	京都系土師器	皿	在壇	9.4	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回95	京都系土師器	皿	在壇	9.2	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回96	京都系土師器	皿	在壇	9.4	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回97	京都系土師器	皿	在壇	11.2	—	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回98	京都系土師器	皿	在壇	11.4	—	3.0	包含筒・壺地脚	
第144回99	京都系土師器	皿	在壇	12.0	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回100	京都系土師器	皿	在壇	12.0	—	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回101	京都系土師器	皿	在壇	12.4	—	2.6	包含筒・壺地脚	
第144回102	京都系土師器	皿	在壇	12.0	—	2.6	包含筒・壺地脚	
第144回103	京都系土師器	皿	在壇	12.2	—	2.3	包含筒・壺地脚	
第144回104	京都系土師器	皿	在壇	(12.0)	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回105	京都系土師器	皿	在壇	(12.2)	—	2.3	包含筒・壺地脚	
第144回106	京都系土師器	皿	在壇	12.5	—	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回107	京都系土師器	皿	在壇	12.4	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回108	京都系土師器	皿	在壇	12.0	—	2.0	包含筒・壺地脚	
第144回109	京都系土師器	皿	在壇	(12.4)	—	—	包含筒・壺地脚	
第144回110	京都系土師器	皿	在壇	12.6	—	2.9	包含筒・壺地脚	
第144回111	京都系土師器	皿	在壇	(13.0)	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回112	京都系土師器	皿	在壇	(13.0)	—	2.3	包含筒・壺地脚	
第144回113	京都系土師器	皿	在壇	13.8	—	2.1	包含筒・壺地脚	
第144回114	京都系土師器	皿	在壇	21.1	—	3.0	包含筒・壺地脚	
第144回115	京都系土師器	皿	在壇	5.5	—	1.6	包含筒・壺地脚	
第144回116	京都系土師器	皿	在壇	8.4	—	3.2	包含筒・壺地脚	
第144回117	京都系土師器	皿	在壇	11.2	—	3.0	包含筒・壺地脚	
第144回118	京都系土師器	皿	在壇	3.4	—	2.2	包含筒・壺地脚	
第144回119	京都系土師器	皿	在壇	12.0	7.0	2.4	包含筒・壺地脚	京都系土師器を模倣
第144回120	京都系土師器	皿	在壇	7.2	3.2	2.4	包含筒・壺地脚	
第144回121	京都系土師器	壺	在壇	—	6.2	—	包含筒・壺地脚	
第144回122	京都系土師器	皿	在壇	8.2	5.0	1.6	包含筒・壺地脚	
第144回123	京都系土師器	皿	在壇	8.6	5.8	1.9	包含筒・壺地脚	
第144回124	京都系土師器	皿	在壇	7.8	5.4	1.6	包含筒・壺地脚	
第144回125	京都系土師器	皿	在壇	9.0	5.2	2.2	包含筒・壺地脚	
第144回126	京都系土師器	皿	在壇	13.2	6.8	2.8	包含筒・壺地脚	
第145回107	瓦質土器	再加工品	在壇	—	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回108	瓦質土器	再加工品	在壇	—	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回109	瓦質土器	漆鉢	在壇	(33.8)	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回110	瓦質土器	漆鉢	在壇	—	15.8	—	包含筒・壺地脚	
第145回111	瓦質土器	蓋	在壇	(12.8)	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回112	瓦質土器	鉢	在壇	(12.4)	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回113	瓦質土器	奇形	在壇	(14.4)	—	—	包含筒・壺地脚	
第145回114	瓦質土器	火鉢	在壇	—	(38.8)	—	包含筒・壺地脚	
第145回115	瓦質土器	蓋	在壇	(40.4)	—	—	包含筒・壺地脚	

第12次調査区道物観察表(土製品①)

標本No	品 種	材 質	部位	寸法(単位cm)			重量 (g)	造形名	備 考	図版 No
				長さ	幅	孔径				
第19回54	土器	土師質	-	長さ 3.3	幅 1.0	孔径 0.2	3.1	SB01		
第19回55	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.0	孔径 0.2	4.3	SB01		
第19回56	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 0.9	孔径 0.2	4.4	SB01		
第19回57	土器	土師質	-	長さ 4.8	幅 1.0	孔径 0.2	4.5	SB01		
第19回58	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.0	孔径 0.2	4.5	SB01		
第19回59	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.1	孔径 0.2	4.5	SB01		
第19回60	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.0	孔径 0.2	4.8	SB01		
第19回61	土器	土師質	-	長さ 5.1	幅 1.0	孔径 0.2	5.0	SB01		
第19回62	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.2	5.1	SB01		
第19回63	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.2	SB01		
第19回64	土器	土師質	-	長さ 5.1	幅 1.1	孔径 0.2	5.2	SB01		
第19回65	土器	土師質	-	長さ 4.9	幅 1.0	孔径 0.2	5.3	SB01		
第19回66	土器	土師質	-	長さ 5.5	幅 1.1	孔径 0.2	5.3	SB01		
第19回67	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	5.5	SB01		
第19回68	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.5	SB01		
第19回69	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	5.7	SB01		
第19回70	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.1	孔径 0.2	5.7	SB01		
第19回71	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.7	SB01		
第19回72	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.2	孔径 0.2	5.7	SB01		
第19回73	土器	土師質	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	5.8	SB01		
第19回74	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.8	SB01		
第19回75	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	5.8	SB01		
第19回76	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.9	SB01		
第19回77	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.2	孔径 0.2	6.0	SB01		
第19回78	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.1	孔径 0.2	6.0	SB01		
第19回79	土器	土師質	-	長さ 5.1	幅 1.1	孔径 0.2	6.0	SB01		
第19回80	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	6.4	SB01		
第19回81	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	6.5	SB01		
第19回82	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.2	孔径 0.2	7.3	SB01		
第19回83	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.2	孔径 0.2	7.3	SB01		
第19回84	土器	土師質	-	長さ 4.3	幅 1.5	孔径 0.2	7.7	SB01		
第19回85	土器	土師質	-	長さ 6.1	幅 1.4	孔径 0.2	8.4	SB01		
第24回1	土器	土師質	-	長さ 3.4	幅 1.1	孔径 0.2	3.3	SB02		
第24回2	土器	土師質	-	長さ 4.2	幅 1.0	孔径 0.2	3.3	SB02		
第24回3	土器	土師質	-	長さ 3.2	幅 1.0	孔径 0.2	3.6	SB02		
第24回4	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.0	孔径 0.2	4.1	SB02		
第24回5	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	4.2	SB02		
第24回6	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 0.2	4.8	SB02		
第24回7	土器	土師質	-	長さ 4.4	幅 1.1	孔径 0.2	4.8	SB02		
第24回8	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	4.9	SB02		
第24回9	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 0.2	4.9	SB02		
第24回10	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 0.2	5.0	SB02		
第24回11	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.0	孔径 0.2	5.1	SB02		
第24回12	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.0	孔径 0.2	5.5	SB02		
第24回13	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.1	孔径 0.2	5.6	SB02		
第24回14	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.0	孔径 0.2	5.8	SB02		
第24回15	土器	土師質	-	長さ 4.8	幅 1.1	孔径 0.2	5.8	SB02		
第24回16	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	5.9	SB02		
第24回17	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.1	孔径 0.2	5.9	SB02		
第24回18	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.3	孔径 0.2	6.0	SB02		
第24回19	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.1	孔径 0.2	6.0	SB02		
第24回20	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.1	孔径 0.2	6.3	SB02		
第24回21	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.2	6.5	SB02		
第36回112	土器	土師質	-	長さ 2.6	幅 1.0	孔径 0.2	2.5	焼土器		
第36回113	土器	土師質	-	長さ 3.3	幅 1.0	孔径 0.2	3.2	焼土器		
第36回114	土器	土師質	-	長さ 3.2	幅 1.0	孔径 0.2	3.3	焼土器		
第36回115	土器	土師質	-	長さ 3.4	幅 1.1	孔径 0.2	3.4	焼土器		
第36回116	土器	土師質	-	長さ 4.4	幅 1.1	孔径 0.2	3.5	焼土器		
第36回117	土器	土師質	-	長さ 3.0	幅 1.1	孔径 0.2	3.6	焼土器		
第36回118	土器	土師質	-	長さ 3.4	幅 1.2	孔径 0.2	3.9	焼土器		
第36回119	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.2	孔径 0.2	4.0	焼土器		
第36回120	土器	土師質	-	長さ 4.5	幅 1.0	孔径 0.2	4.5	焼土器		
第36回121	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 0.2	4.6	焼土器		
第36回122	土器	土師質	-	長さ 4.6	幅 1.0	孔径 0.2	4.6	焼土器		
第36回123	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.0	孔径 0.2	4.7	焼土器		
第36回124	土器	土師質	-	長さ 5.3	幅 1.0	孔径 0.2	4.7	焼土器		
第36回125	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.2	孔径 0.2	4.8	焼土器		
第36回126	土器	土師質	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.2	4.9	焼土器		
第36回127	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.2	孔径 0.2	4.9	焼土器		
第36回128	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.0	孔径 0.2	4.9	焼土器		
第36回129	土器	土師質	-	長さ 5.2	幅 1.1	孔径 0.2	4.9	焼土器		
第36回130	土器	土師質	-	長さ 4.6	幅 1.1	孔径 0.2	5.0	焼土器		
第36回131	土器	土師質	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	5.0	焼土器		
第36回132	土器	土師質	-	長さ 4.8	幅 1.0	孔径 0.2	5.1	焼土器		
第36回133	土器	土師質	-	長さ 5.0	幅 1.1	孔径 0.2	5.1	焼土器		

遺物観察表 12 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表 (土製品②)

標記No.	品 種	材 質	寸法 (単位cm)			重量 (g)	遺 構 名	備 考	図版 No.
			高	幅	厚				
第36 80 134	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.1	口徑 0.2	5.1	焼土層		
第36 80 135	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.2	口徑 0.2	5.2	焼土層		
第36 80 136	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.1	口徑 0.2	5.2	焼土層		
第36 80 137	土罐	土師質	底径 4.9	幅 1.1	口徑 0.2	5.4	焼土層		
第36 80 138	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.0	口徑 0.2	5.6	焼土層		
第36 80 139	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.2	口徑 0.2	5.6	焼土層		
第36 80 140	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.2	口徑 0.2	5.6	焼土層		
第36 80 141	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.0	口徑 0.2	5.7	焼土層		
第36 80 142	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.2	口徑 0.2	5.7	焼土層		
第36 80 143	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.0	口徑 0.2	5.7	焼土層		
第36 80 144	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.0	口徑 0.2	5.8	焼土層		
第36 80 145	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.1	口徑 0.2	5.9	焼土層		
第36 80 146	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.1	口徑 0.2	5.9	焼土層		
第36 80 147	土罐	土師質	底径 4.9	幅 1.2	口徑 0.2	6.0	焼土層		
第36 80 148	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.3	口徑 0.2	6.1	焼土層		
第36 80 149	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.0	口徑 0.2	6.3	焼土層		
第36 80 150	土罐	土師質	底径 5.1	幅 1.3	口徑 0.2	6.4	焼土層		
第36 80 151	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.1	口徑 0.2	6.8	焼土層		
第36 80 152	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.3	口徑 0.2	7.4	焼土層		
第36 80 153	土罐	土師質	底径 4.3	幅 1.4	口徑 0.2	7.7	焼土層		
第36 80 154	土罐	土師質	底径 4.9	幅 1.4	口徑 0.2	8.5	焼土層		
第36 80 155	土罐	土師質	底径 4.0	幅 1.8	口徑 0.2	9.7	焼土層		
第56 80 1	土罐	土師質	底径 4.0	幅 1.1	口徑 0.2	5.2	SX01		
第65 80 16	土罐	土師質	底径 3.0	幅 1.0	口徑 0.2	3.1	第2南北新 路		
第65 80 17	土罐	土師質	底径 4.8	幅 2.3	口徑 0.2	27.5	第2南北新 路		
第69 80 6	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.1	口徑 0.2	6.3	名ヶ小路		
第80 80 21	土罐	土師質	底径 4.9	幅 1.1	口徑 0.2	4.7	SD02		
第83 80 3	土罐	土師質	底径 3.7	幅 1.1	口徑 0.2	3.6	SD03		
第83 80 4	土罐	土師質	底径 3.7	幅 1.3	口徑 0.2	4.8	SD03		
第83 80 5	土罐	土師質	底径 4.0	幅 1.2	口徑 0.2	4.8	SD03		
第83 80 6	土罐	土師質	底径 3.7	幅 1.2	口徑 0.2	5.1	SD03		
第83 80 7	土罐	土師質	底径 5.2	幅 2.0	口徑 0.2	10.3	SD03		
第84 80 2	土罐	土師質	底径 4.8	幅 1.1	口徑 0.2	5.5	SD06		
第84 80 3	土罐	土師質	底径 3.8	幅 1.4	口徑 0.2	6.3	SD06		
第87 80 1	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.1	口徑 0.2	6.3	SD10		
第87 80 2	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.4	口徑 0.2	8.6	SD14		
第93 80 46	土罐	土師質	底径 3.6	幅 1.0	口徑 0.2	1.6	SD08		
第93 80 47	土罐	土師質	底径 3.3	幅 1.1	口徑 0.2	2.9	SD08		
第93 80 48	土罐	土師質	底径 4.0	幅 1.2	口徑 0.2	3.6	SD08		
第105 80 1	土罐	土師質	底径 4.9	幅 1.1	口徑 0.2	4.4	SP298		
第105 80 2	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.0	口徑 0.2	4.5	SP298		
第105 80 3	土罐	土師質	底径 4.8	幅 0.9	口徑 0.2	4.5	SP298		
第105 80 4	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.0	口徑 0.2	4.9	SP298		
第105 80 5	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.1	口徑 0.2	5.0	SP298		
第105 80 6	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.0	口徑 0.2	5.0	SP298		
第105 80 7	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.0	口徑 0.2	5.1	SP298		
第105 80 8	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.0	口徑 0.2	5.2	SP298		
第105 80 9	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.0	口徑 0.2	5.3	SP298		
第105 80 10	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.1	口徑 0.2	5.5	SP298		
第105 80 11	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.2	口徑 0.2	5.6	SP298		
第105 80 12	土罐	土師質	底径 5.1	幅 1.2	口徑 0.2	6.6	SP298		
第105 80 13	土罐	土師質	底径 4.8	幅 1.1	口徑 0.2	4.0	SP077		
第105 80 14	土罐	土師質	底径 5.6	幅 1.0	口徑 0.2	5.1	SP077		
第105 80 15	土罐	土師質	底径 5.2	幅 1.1	口徑 0.2	5.2	SP077		
第105 80 16	土罐	土師質	底径 5.4	幅 1.2	口徑 0.2	5.6	SP077		
第105 80 17	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.2	口徑 0.2	5.9	SP077		
第105 80 18	土罐	土師質	底径 5.8	幅 1.0	口徑 0.2	6.9	SP077		
第105 80 19	土罐	土師質	底径 5.6	幅 1.2	口徑 0.2	7.3	SP077		
第105 80 20	土罐	土師質	底径 2.0	幅 1.1	口徑 0.2	1.9	SP010		
第105 80 21	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.2	口徑 0.2	5.5	SP123		
第105 80 22	土罐	土師質	底径 6.2	幅 1.2	口徑 0.2	7.4	SP198		
第111 80 5	土罐	土師質	底径 5.6	幅 1.7	口徑 0.2	15.1	SK03		
第132 80 47	土罐	土師質	底径 2.3	幅 1.1	口徑 0.2	2.8	SX02		
第132 80 48	土罐	土師質	底径 3.0	幅 1.0	口徑 0.2	3.2	SX02		
第132 80 49	土罐	土師質	底径 3.6	幅 1.0	口徑 0.2	4.2	SX02		
第132 80 50	土罐	土師質	底径 5.3	幅 1.0	口徑 0.2	5.3	SX02		
第132 80 51	土罐	土師質	底径 5.0	幅 1.3	口徑 0.2	5.4	SX02		
第132 80 52	土罐	土師質	底径 4.6	幅 1.2	口徑 0.2	6.0	SX02		
第132 80 53	土罐	土師質	底径 6.0	幅 1.2	口徑 0.2	7.6	SX02		
第132 80 54	土罐	土師質	底径 5.6	幅 1.2	口徑 0.2	8.2	SX02		
第132 80 55	土罐	土師質	底径 6.2	幅 1.2	口徑 0.2	8.2	SX02		
第132 80 56	土罐	土師質	底径 6.0	幅 1.2	口徑 0.2	8.5	SX02		
第132 80 57	土罐	土師質	底径 5.6	幅 1.2	口徑 0.2	8.7	SX02		
第132 80 58	土罐	土師質	底径 6.0	幅 1.3	口徑 0.2	8.7	SX02		
第132 80 59	土罐	土師質	底径 6.4	幅 1.3	口徑 0.2	8.7	SX02		

第12次調査区遺物観察表 (土製品③)

神田No.	品 種	材 質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺 物 名	備 考	図版 No.
				長さ	幅	厚	孔径				
第132回60	土器	土師貫	-	5.6	幅	1.3	孔径	0.2	8.8	SK02	
第132回61	土器	土師貫	-	5.8	幅	1.2	孔径	0.2	8.9	SK02	
第132回62	土器	土師貫	-	6.0	幅	1.3	孔径	0.2	9.3	SK02	
第146回1	土器	土師貫	-	1.6	幅	1.1	孔径	0.2	1.3	包含物・整地層	
第146回2	土器	土師貫	-	2.0	幅	1.3	孔径	0.2	1.5	包含物・整地層	
第146回3	土器	土師貫	-	1.6	幅	1.2	孔径	0.2	1.7	包含物・整地層	
第146回4	土器	土師貫	-	2.6	幅	1.0	孔径	0.2	2.0	包含物・整地層	
第146回5	土器	土師貫	-	2.0	幅	1.1	孔径	0.2	2.0	包含物・整地層	
第146回6	土器	土師貫	-	2.5	幅	1.0	孔径	0.2	2.3	包含物・整地層	
第146回7	土器	土師貫	-	2.5	幅	1.0	孔径	0.2	2.3	包含物・整地層	
第146回8	土器	土師貫	-	2.8	幅	1.1	孔径	0.2	2.5	包含物・整地層	
第146回9	土器	土師貫	-	2.5	幅	1.2	孔径	0.2	2.7	包含物・整地層	
第146回10	土器	土師貫	-	2.8	幅	1.2	孔径	0.2	2.9	包含物・整地層	
第146回11	土器	土師貫	-	2.6	幅	1.0	孔径	0.2	2.9	包含物・整地層	
第146回12	土器	土師貫	-	2.8	幅	1.2	孔径	0.2	2.9	包含物・整地層	
第146回13	土器	土師貫	-	3.2	幅	1.1	孔径	0.2	3.0	包含物・整地層	
第146回14	土器	土師貫	-	2.2	幅	1.3	孔径	0.2	3.1	包含物・整地層	
第146回15	土器	土師貫	-	4.0	幅	1.0	孔径	0.2	3.1	包含物・整地層	
第146回16	土器	土師貫	-	2.4	幅	1.1	孔径	0.2	3.1	包含物・整地層	
第146回17	土器	土師貫	-	3.4	幅	1.0	孔径	0.2	3.2	包含物・整地層	
第146回18	土器	土師貫	-	3.0	幅	1.2	孔径	0.2	3.2	包含物・整地層	
第146回19	土器	土師貫	-	3.3	幅	1.1	孔径	0.2	3.4	包含物・整地層	
第146回20	土器	土師貫	-	3.0	幅	1.1	孔径	0.2	3.8	包含物・整地層	
第146回21	土器	土師貫	-	3.3	幅	1.0	孔径	0.2	3.8	包含物・整地層	
第146回22	土器	土師貫	-	3.5	幅	1.2	孔径	0.2	3.9	包含物・整地層	
第146回23	土器	土師貫	-	3.6	幅	1.0	孔径	0.2	3.9	包含物・整地層	
第146回24	土器	土師貫	-	6.0	幅	1.0	孔径	0.2	4.1	包含物・整地層	
第146回25	土器	土師貫	-	3.3	幅	1.0	孔径	0.2	4.1	包含物・整地層	
第146回26	土器	土師貫	-	4.0	幅	1.1	孔径	0.2	4.3	包含物・整地層	
第146回27	土器	土師貫	-	4.0	幅	1.1	孔径	0.2	4.4	包含物・整地層	
第146回28	土器	土師貫	-	3.8	幅	1.0	孔径	0.2	4.5	包含物・整地層	
第146回29	土器	土師貫	-	3.6	幅	1.2	孔径	0.2	4.5	包含物・整地層	
第146回30	土器	土師貫	-	4.0	幅	1.2	孔径	0.2	4.7	包含物・整地層	
第146回31	土器	土師貫	-	3.4	幅	1.2	孔径	0.2	4.7	包含物・整地層	
第146回32	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.1	孔径	0.2	4.7	包含物・整地層	
第146回33	土器	土師貫	-	5.4	幅	1.1	孔径	0.2	4.8	包含物・整地層	
第146回34	土器	土師貫	-	3.5	幅	1.2	孔径	0.2	4.9	包含物・整地層	
第146回35	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.0	孔径	0.2	4.9	包含物・整地層	
第146回36	土器	土師貫	-	4.4	幅	1.0	孔径	0.2	5.0	包含物・整地層	
第146回37	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.1	孔径	0.2	5.0	包含物・整地層	
第146回38	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.1	孔径	0.2	5.0	包含物・整地層	
第146回39	土器	土師貫	-	5.3	幅	1.1	孔径	0.2	5.0	包含物・整地層	
第146回40	土器	土師貫	-	3.6	幅	1.2	孔径	0.2	5.1	包含物・整地層	
第146回41	土器	土師貫	-	4.4	幅	1.0	孔径	0.2	5.1	包含物・整地層	
第146回42	土器	土師貫	-	4.2	幅	1.0	孔径	0.2	5.1	包含物・整地層	
第146回43	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.2	孔径	0.2	5.1	包含物・整地層	
第146回44	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.2	孔径	0.2	5.1	包含物・整地層	
第146回45	土器	土師貫	-	5.2	幅	1.0	孔径	0.2	5.4	包含物・整地層	
第146回46	土器	土師貫	-	4.2	幅	1.0	孔径	0.2	5.4	包含物・整地層	
第146回47	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.2	孔径	0.2	5.4	包含物・整地層	
第146回48	土器	土師貫	-	5.6	幅	1.1	孔径	0.2	5.5	包含物・整地層	
第146回49	土器	土師貫	-	4.4	幅	1.2	孔径	0.2	5.6	包含物・整地層	
第146回50	土器	土師貫	-	4.8	幅	1.0	孔径	0.2	5.6	包含物・整地層	
第146回51	土器	土師貫	-	5.4	幅	1.0	孔径	0.2	5.6	包含物・整地層	
第146回52	土器	土師貫	-	3.6	幅	1.1	孔径	0.2	5.6	包含物・整地層	
第146回53	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.0	孔径	0.2	5.6	包含物・整地層	
第146回54	土器	土師貫	-	3.9	幅	1.2	孔径	0.2	5.7	包含物・整地層	
第146回55	土器	土師貫	-	4.0	幅	1.3	孔径	0.2	5.7	包含物・整地層	
第146回56	土器	土師貫	-	5.2	幅	1.1	孔径	0.2	5.8	包含物・整地層	
第146回57	土器	土師貫	-	5.4	幅	1.0	孔径	0.2	6.0	包含物・整地層	
第146回58	土器	土師貫	-	5.2	幅	1.1	孔径	0.2	6.0	包含物・整地層	
第146回59	土器	土師貫	-	6.0	幅	1.1	孔径	0.2	6.0	包含物・整地層	
第146回60	土器	土師貫	-	6.2	幅	1.1	孔径	0.2	6.1	包含物・整地層	
第146回61	土器	土師貫	-	6.2	幅	1.1	孔径	0.2	6.1	包含物・整地層	
第146回62	土器	土師貫	-	5.2	幅	1.1	孔径	0.2	6.2	包含物・整地層	
第146回63	土器	土師貫	-	5.5	幅	1.0	孔径	0.2	6.2	包含物・整地層	
第146回64	土器	土師貫	-	4.2	幅	1.1	孔径	0.2	6.4	包含物・整地層	
第146回65	土器	土師貫	-	5.1	幅	1.0	孔径	0.2	6.4	包含物・整地層	
第146回66	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.1	孔径	0.2	6.5	包含物・整地層	
第146回67	土器	土師貫	-	5.0	幅	1.1	孔径	0.2	6.5	包含物・整地層	
第146回68	土器	土師貫	-	5.7	幅	1.0	孔径	0.2	6.6	包含物・整地層	
第146回69	土器	土師貫	-	5.2	幅	1.3	孔径	0.2	6.7	包含物・整地層	
第146回70	土器	土師貫	-	6.2	幅	1.0	孔径	0.2	6.7	包含物・整地層	
第146回71	土器	土師貫	-	5.4	幅	1.1	孔径	0.2	6.8	包含物・整地層	
第146回72	土器	土師貫	-	5.4	幅	1.1	孔径	0.2	6.8	包含物・整地層	

遺物観察表 14 (第12次調査区)

第 12 次調査区遺物観察表 (土製品④)

押印No	品種	材質	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	図版No
			幅	高さ	径	孔径				
第 146 80 73	土罐	土師貫	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.2	6.8	包含層・竪地層		
第 146 80 74	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	6.8	包含層・竪地層		
第 146 80 75	土罐	土師貫	-	長さ 5.7	幅 1.0	孔径 0.2	6.9	包含層・竪地層		
第 146 80 76	土罐	土師貫	-	長さ 5.9	幅 1.1	孔径 0.2	6.9	包含層・竪地層		
第 146 80 77	土罐	土師貫	-	長さ 5.5	幅 1.0	孔径 0.2	6.9	包含層・竪地層		
第 146 80 78	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	7.0	包含層・竪地層		
第 146 80 79	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.0	孔径 0.2	7.0	包含層・竪地層		
第 146 80 80	土罐	土師貫	-	長さ 5.3	幅 1.2	孔径 0.2	7.0	包含層・竪地層		
第 146 80 81	土罐	土師貫	-	長さ 5.4	幅 1.1	孔径 0.2	7.0	包含層・竪地層		
第 146 80 82	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	7.1	包含層・竪地層		
第 146 80 83	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.3	孔径 0.2	7.1	包含層・竪地層		
第 146 80 84	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	7.2	包含層・竪地層		
第 146 80 85	土罐	土師貫	-	長さ 5.5	幅 1.0	孔径 0.2	7.3	包含層・竪地層		
第 146 80 86	土罐	土師貫	-	長さ 5.9	幅 1.0	孔径 0.2	7.3	包含層・竪地層		
第 146 80 87	土罐	土師貫	-	長さ 5.9	幅 1.1	孔径 0.2	7.3	包含層・竪地層		
第 146 80 88	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	7.4	包含層・竪地層		
第 146 80 89	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.0	孔径 0.2	7.4	包含層・竪地層		
第 146 80 90	土罐	土師貫	-	長さ 5.5	幅 1.3	孔径 0.2	7.4	包含層・竪地層		
第 146 80 91	土罐	土師貫	-	長さ 5.9	幅 1.2	孔径 0.2	7.4	包含層・竪地層		
第 146 80 92	土罐	土師貫	-	長さ 5.7	幅 1.2	孔径 0.2	7.5	包含層・竪地層		
第 146 80 93	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	7.5	包含層・竪地層		
第 146 80 94	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.1	孔径 0.2	7.6	包含層・竪地層		
第 146 80 95	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.2	孔径 0.2	7.6	包含層・竪地層		
第 146 80 96	土罐	土師貫	-	長さ 5.4	幅 1.2	孔径 0.2	7.6	包含層・竪地層		
第 146 80 97	土罐	土師貫	-	長さ 4.2	幅 1.2	孔径 0.2	7.6	包含層・竪地層		
第 147 80 98	土罐	土師貫	-	長さ 5.7	幅 1.2	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 99	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.2	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 100	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 101	土罐	土師貫	-	長さ 5.8	幅 1.2	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 102	土罐	土師貫	-	長さ 5.5	幅 1.2	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 103	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.1	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 104	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.1	孔径 0.2	7.7	包含層・竪地層		
第 147 80 105	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.2	孔径 0.2	7.8	包含層・竪地層		
第 147 80 106	土罐	土師貫	-	長さ 5.8	幅 1.2	孔径 0.2	7.8	包含層・竪地層		
第 147 80 107	土罐	土師貫	-	長さ 5.7	幅 1.2	孔径 0.2	7.8	包含層・竪地層		
第 147 80 108	土罐	土師貫	-	長さ 5.8	幅 1.1	孔径 0.2	7.8	包含層・竪地層		
第 147 80 109	土罐	土師貫	-	長さ 6.2	幅 1.1	孔径 0.2	7.9	包含層・竪地層		
第 147 80 110	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	7.9	包含層・竪地層		
第 147 80 111	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.2	孔径 0.2	7.9	包含層・竪地層		
第 147 80 112	土罐	土師貫	-	長さ 5.2	幅 1.1	孔径 0.2	7.9	包含層・竪地層		
第 147 80 113	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.2	孔径 0.2	8.0	包含層・竪地層		
第 147 80 114	土罐	土師貫	-	長さ 5.6	幅 1.1	孔径 0.2	8.0	包含層・竪地層		
第 147 80 115	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	8.2	包含層・竪地層		
第 147 80 116	土罐	土師貫	-	長さ 6.2	幅 1.0	孔径 0.2	8.2	包含層・竪地層		
第 147 80 117	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.1	孔径 0.2	8.3	包含層・竪地層		
第 147 80 118	土罐	土師貫	-	長さ 6.3	幅 1.1	孔径 0.2	8.5	包含層・竪地層		
第 147 80 119	土罐	土師貫	-	長さ 6.2	幅 1.2	孔径 0.2	8.5	包含層・竪地層		
第 147 80 120	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.1	孔径 0.2	8.5	包含層・竪地層		
第 147 80 121	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.1	孔径 0.2	8.5	包含層・竪地層		
第 147 80 122	土罐	土師貫	-	長さ 6.4	幅 1.1	孔径 0.2	8.5	包含層・竪地層		
第 147 80 123	土罐	土師貫	-	長さ 6.4	幅 1.1	孔径 0.2	8.6	包含層・竪地層		
第 147 80 124	土罐	土師貫	-	長さ 6.2	幅 1.1	孔径 0.2	8.7	包含層・竪地層		
第 147 80 125	土罐	土師貫	-	長さ 6.3	幅 1.1	孔径 0.2	9.0	包含層・竪地層		
第 147 80 126	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.1	孔径 0.2	9.0	包含層・竪地層		
第 147 80 127	土罐	土師貫	-	長さ 5.0	幅 1.2	孔径 0.2	9.1	包含層・竪地層		
第 147 80 128	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	9.1	包含層・竪地層		
第 147 80 129	土罐	土師貫	-	長さ 6.6	幅 1.2	孔径 0.2	9.1	包含層・竪地層		
第 147 80 130	土罐	土師貫	-	長さ 6.2	幅 1.2	孔径 0.2	9.2	包含層・竪地層		
第 147 80 131	土罐	土師貫	-	長さ 6.3	幅 1.0	孔径 0.2	9.3	包含層・竪地層		
第 147 80 132	土罐	土師貫	-	長さ 2.8	幅 1.2	孔径 0.2	9.3	包含層・竪地層		
第 147 80 133	土罐	土師貫	-	長さ 6.0	幅 1.2	孔径 0.2	9.3	包含層・竪地層		
第 147 80 134	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.3	孔径 0.2	9.4	包含層・竪地層		
第 147 80 135	土罐	土師貫	-	長さ 6.1	幅 1.2	孔径 0.2	9.6	包含層・竪地層		
第 147 80 136	土罐	土師貫	-	長さ 6.3	幅 1.4	孔径 0.2	10.4	包含層・竪地層		
第 147 80 137	土罐	土師貫	-	長さ 5.0	幅 2.0	孔径 0.3	13.9	包含層・竪地層		
第 147 80 138	土罐	土師貫	-	長さ 5.0	幅 1.9	孔径 0.2	14.5	包含層・竪地層		
第 147 80 139	土罐	土師貫	-	長さ 5.4	幅 2.2	孔径 0.2	18.5	包含層・竪地層		
第 150 80 1	犬形土製品	土師貫	-	長さ 3.3	幅 2.2	孔径 4.0	-	包含層・竪地層		7
第 150 80 2	犬形土製品	土師貫	-	長さ 3.9	幅 2.4	孔径 3.9	-	包含層・竪地層		7
第 150 80 3	犬形土製品	土師貫	-	長さ 3.8	幅 2.2	孔径 3.8	-	包含層・竪地層		7
第 150 80 4	犬形土製品	土師貫	-	長さ 3.1	幅 2.4	孔径 3.8	-	包含層・竪地層		7
第 150 80 5	犬形土製品	土師貫	-	長さ 3.1	幅 2.3	孔径 4.0	-	包含層・竪地層		7

第12次調査区遺物観察表 (瓦)

神田No.	品 種	寸法 (単位cm)				遺 構 名	備 考	図版 No.
		真当	横	幅	厚さ			
第37回1	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	2.0	
第37回2	軒平瓦	真当	長さ	5.4	幅	5.2	厚さ	2.6
第37回3	平瓦	—	長さ	13.8	幅	8.4	厚さ	2.3
第37回4	平瓦	—	長さ	15.4	幅	21.2	厚さ	1.7
第56回1	軒平瓦	真当	長さ	3.7	幅	3.2	厚さ	2.8
第56回2	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.5	
第56回3	軒平瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.6	
第56回4	軒平瓦	真当	長さ	12.7	幅	4.2	厚さ	1.9
第56回5	軒平瓦	真当	長さ	4.4	幅	4.2	厚さ	2.1
第56回6	軒平瓦	真当	長さ	9.4	幅	5.4	厚さ	3.8
第56回7	軒平瓦	真当	長さ	6.8	幅	5.0	厚さ	2.6
第56回8	丸瓦	—	長さ	14.2	幅	13.0	厚さ	1.7
第59回1	軒平瓦	真当	長さ	11.0	幅	5.4	厚さ	1.4
第59回2	軒平瓦	真当	長さ	12.6	幅	5.0	厚さ	2.2
第59回3	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.7	
第59回4	須呂瓦	—	長さ	9.4	幅	6.6	厚さ	2.3
第59回5	丸瓦	—	長さ	22.0	幅	15.0	厚さ	2.2
第78回13	平瓦	—	長さ	15.2	幅	16.6	厚さ	2.0
第78回14	軒平瓦	真当	長さ	10.0	幅	5.4	厚さ	2.4
第78回15	丸瓦	—	長さ	15.0	幅	13.2	厚さ	2.3
第80回20	軒丸瓦	真当	横	13.4	—	厚さ	1.8	
第83回1	軒平瓦	真当	長さ	12.2	幅	5.6	厚さ	2.6
第83回2	軒平瓦	真当	長さ	3.0	幅	5.6	厚さ	2.6
第105回23	軒平瓦	真当	長さ	8.4	幅	4.0	厚さ	2.0
第105回24	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	2.2	
第105回25	軒平瓦	真当	長さ	7.5	幅	4.2	厚さ	1.5
第133回1	軒平瓦	真当	長さ	8.0	幅	2.8	厚さ	1.4
第133回2	軒平瓦	真当	長さ	7.4	幅	4.8	厚さ	2.2
第133回3	軒平瓦	真当	長さ	4.6	幅	4.2	厚さ	2.6
第133回4	軒平瓦	真当	長さ	5.7	幅	5.2	厚さ	2.7
第133回5	軒平瓦	真当	長さ	9.4	幅	5.4	厚さ	3.0
第133回6	軒平瓦	真当	長さ	6.0	幅	2.9	厚さ	2.0
第133回7	軒平瓦	真当	長さ	10.2	幅	4.1	厚さ	2.6
第133回8	軒平瓦	真当	長さ	12.0	幅	3.8	厚さ	2.2
第133回9	軒平瓦	真当	長さ	4.8	幅	4.0	厚さ	2.2
第133回10	軒平瓦	真当	長さ	3.3	幅	3.6	厚さ	2.4
第133回11	軒平瓦	真当	長さ	13.0	幅	5.0	厚さ	2.6
第133回12	軒平瓦	真当	長さ	7.6	幅	5.0	厚さ	2.4
第133回13	軒平瓦	真当	長さ	4.0	幅	3.6	厚さ	2.4
第134回14	軒丸瓦	真当	横	14.7	—	厚さ	2.0	
第134回15	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.9	
第134回16	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.8	
第134回17	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	2.0	
第134回18	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	2.1	
第134回19	鬼瓦	—	長さ	8.0	幅	8.0	厚さ	5.0
第134回20	鬼瓦	—	長さ	12.0	幅	11.3	厚さ	2.4
第135回8	丸瓦	—	長さ	27.0	幅	12.0	厚さ	1.7
第135回22	丸瓦	—	長さ	14.0	幅	9.4	厚さ	2.1
第135回23	面平瓦	—	長さ	10.0	幅	10.0	厚さ	1.9
第135回24	面平瓦	—	長さ	10.1	幅	17.8	厚さ	2.6
第148回1	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.5	
第148回2	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.6	
第148回3	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	1.8	
第148回4	軒丸瓦	真当	横	—	—	厚さ	2.1	
第148回5	軒平瓦	真当	長さ	12.0	幅	3.2	厚さ	2.6
第148回6	軒平瓦	真当	長さ	8.8	幅	4.0	厚さ	2.2
第148回7	軒平瓦	真当	長さ	5.4	幅	5.0	厚さ	2.4
第149回8	平瓦	—	長さ	21.8	幅	8.2	厚さ	1.6
第149回9	丸瓦	—	長さ	23.3	幅	14.4	厚さ	2.1

12次調査区遺物観察表 (木製品・骨製品)

神田No.	品 種	部位	寸法 (単位cm)			部位	遺 構 名	備 考	図版 No.		
			長さ	幅	厚さ						
第56回9	下駄	—	長さ	16.0	幅	8.0	厚さ	1.2	—	SK01	6
第56回9	下駄	—	長さ	5.0	幅	9.0	厚さ	2.1	—	SK02	6
第150回8	煮子	骨	長さ	0.8	幅	0.7	厚さ	0.8	—	包含屑・煮地屑	6

遺物観察表 16 (第12次調査区)

第 12 次調査区遺物観察表 (石製品)

押印No	品 種	材 質	部位	寸法 (単位cm)			重量 (g)	遺 構 名	備 考	図版 No
第 25 図 2	群石?	-	-	径	2.1	-	厚さ	0.4	-	-
第 25 図 3	礫石	-	-	長さ	7.8	幅	6.4	厚さ	5.8	-
第 25 図 4	礫石	-	-	長さ	5.8	幅	1.6	厚さ	1.4	-
第 38 図 1	礫石	輝緑凝灰岩	-	長さ	3.4	幅	3.6	厚さ	1.8	-
第 56 図 3	水晶玉	水晶	-	長さ	2.2	幅	2.3	厚さ	1.2	-
第 56 図 5	礫石	-	-	長さ	6.5	幅	4.9	厚さ	2.1	-
第 56 図 6	茶臼	-	刃部	長さ	14.8	幅	4.4	厚さ	3.3	264.1
第 56 図 7	石臼	-	上臼	長さ	20.0	幅	10.4	厚さ	11.0	2500.0
第 68 図 6	礫	輝緑凝灰岩	-	長さ	5.2	幅	3.6	厚さ	0.8	-
第 80 図 22	礫石	-	-	長さ	5.6	幅	1.3	厚さ	1.2	-
第 91 図 35	玉砂利?	-	-	長さ	4.2	幅	4.7	厚さ	1.2	42.2
第 105 図 26	茶臼	-	柄部	長さ	19.2	幅	5.4	厚さ	3.8	448.5
第 105 図 27	茶臼	-	上臼	長さ	6.4	幅	5.8	厚さ	6.4	173.7
第 113 図 24	茶臼	-	柄部	長さ	5.4	幅	4.7	厚さ	2.8	-
第 122 図	群石	凝灰岩	-	長さ	10.8	幅	10.2	厚さ	15.6	-
第 136 図 25	礫石?	-	-	長さ	17.4	幅	11.8	厚さ	3.0	-
第 136 図 26	礫石	-	-	長さ	9.1	幅	5.5	厚さ	4.0	-
第 136 図 27	石臼	-	-	長さ	6.4	幅	8.4	厚さ	4.6	-
第 136 図 28	石臼	-	-	長さ	9.4	幅	5.0	厚さ	5.2	-
第 136 図 29	礫石	輝緑凝灰岩	-	長さ	9.0	幅	4.7	厚さ	1.4	-
第 150 図 7	礫石	-	-	長さ	37.2	幅	4.4	厚さ	2.5	-
第 150 図 8	礫	輝緑凝灰岩	-	長さ	12.9	幅	6.7	厚さ	1.0	-
第 150 図 9	礫	輝緑凝灰岩	-	長さ	10.8	幅	5.2	厚さ	0.5	-

第 12 次調査区遺物観察表 (金属製品)

押印No	品 種	材 質	部位	寸法 (単位cm)			重量 (g)	遺 構 名	備 考	図版 No
第 25 図 1	骨	銅	-	長さ	18.6	幅	1.6	厚さ	0.4	-
第 38 図 2	環行金具	銅	-	長さ	5.0	幅	6.2	厚さ	0.5	-
第 38 図 3	環	銅	-	長さ	8.4	幅	1.0	厚さ	1.0	-
第 56 図 4	群	銅	-	長さ	7.0	幅	2.4	厚さ	0.4	-
第 63 図 8	銅鈴	銅	-	径	3.0	-	-	厚さ	3.7	-
第 63 図 9	銅製金具	銅	-	径	2.4	-	-	厚さ	0.4	-
第 105 図 28	銅鈴	銅	-	長さ	2.3	幅	1.7	厚さ	0.7	-
第 105 図 29	銅鈴	銅	-	長さ	4.1	幅	2.7	厚さ	0.7	-
第 136 図 30	刀子	鉄	-	長さ	8.2	幅	10.8	厚さ	0.8	-
第 144 図 41	群玉?	銅	-	径	0.8	-	-	厚さ	0.8	0.7
第 144 図 42	群玉?	鉄	-	長さ	28.4	幅	3.0	厚さ	1.4	-
第 144 図 43	不明	鉄	-	長さ	7.6	幅	0.8	厚さ	0.8	-
第 144 図 44	銅製金具	銅	-	長さ	4.6	幅	1.9	厚さ	0.3	-
第 144 図 45	銅製金具	銅	-	長さ	3.0	幅	1.8	厚さ	0.7	-
第 144 図 46	銅鈴	銅	-	長さ	5.0	幅	3.6	厚さ	1.4	-
第 144 図 47	銅鈴	銅	-	長さ	10.0	幅	0.8	厚さ	0.4	-
第 144 図 48	銅鈴	銅	-	長さ	9.0	幅	0.8	厚さ	0.4	-
第 144 図 49	銅鈴	銅	-	長さ	13.6	幅	0.6	厚さ	0.5	-
第 144 図 50	銅鈴	銅	-	長さ	11.6	幅	1.0	厚さ	0.9	-
第 144 図 51	小柄	銅	-	長さ	10.0	幅	10.6	厚さ	0.5	-
第 144 図 52	小柄	銅	-	長さ	12.7	幅	1.6	厚さ	0.4	-
第 155 図 1	分銅	銅	-	長さ	3.2	幅	2.7	厚さ	0.1	-
第 155 図 2	分銅	銅	-	長さ	3.3	幅	2.6	厚さ	0.7	-
第 155 図 3	分銅	銅	-	長さ	3.0	幅	2.1	厚さ	1.2	32.8
第 155 図 4	分銅	銅	-	長さ	2.3	幅	1.4	厚さ	0.8	10.9
第 155 図 5	分銅	銅	-	長さ	2.6	幅	2.0	厚さ	1.3	29.1
第 155 図 6	分銅	銅	-	長さ	2.8	幅	2.0	厚さ	1.3	24.2
第 155 図 7	分銅	銅	-	長さ	1.9	幅	1.3	厚さ	0.8	9.9
第 155 図 8	分銅	銅	-	長さ	2.2	幅	0.8	厚さ	0.4	1.6
第 155 図 9	分銅	銅	-	長さ	1.2	幅	0.8	厚さ	0.4	1.3
第 155 図 10	分銅	銅	-	長さ	0.8	厚さ	0.2	-	-	0.1
第 155 図 11	分銅	銅	-	長さ	1.0	厚さ	0.3	-	-	1.1
第 155 図 12	分銅	銅	-	長さ	1.0	厚さ	0.3	-	-	1.1
第 155 図 13	分銅	銅	-	長さ	1.0	厚さ	0.3	-	-	1.1
第 155 図 14	分銅	銅	-	長さ	1.2	厚さ	0.5	-	-	2.7
第 155 図 15	分銅	銅	-	長さ	1.4	厚さ	0.5	-	-	6.1
第 155 図 16	分銅	銅	-	長さ	1.5	厚さ	0.7	-	-	6.2
第 155 図 17	分銅	銅	-	長さ	1.5	厚さ	0.6	-	-	6.5
第 155 図 18	分銅	銅	-	長さ	1.5	厚さ	0.8	-	-	1.0
第 155 図 19	分銅	銅	-	長さ	1.7	厚さ	0.8	-	-	13.9
第 155 図 20	分銅	銅	-	長さ	1.9	厚さ	0.6	-	-	16.0
第 155 図 21	分銅	銅	-	長さ	2.0	厚さ	1.7	-	-	17.1
第 155 図 22	分銅	銅	-	長さ	2.1	厚さ	1.0	-	-	30.2
第 155 図 23	分銅	銅	-	長さ	1.0	厚さ	0.4	-	-	1.4
第 155 図 24	分銅	銅	-	長さ	1.7	厚さ	0.9	-	-	16.5
第 155 図 25	分銅	銅	-	長さ	1.8	厚さ	1.0	-	-	13.4
第 155 図 26	鉛玉	鉛	-	長さ	1.1	厚さ	1.0	-	-	6.4
第 155 図 27	鉛玉	鉛	-	長さ	1.1	厚さ	0.9	-	-	8.8
第 156 図 1	フタ	銅	-	長さ	1.5	幅	1.2	厚さ	0.3	4.0
第 156 図 2	フタ	銅	-	長さ	2.0	幅	1.6	厚さ	0.4	9.0
第 156 図 3	フタ	銅	-	長さ	1.7	幅	1.5	厚さ	0.4	3.4
第 156 図 4	フタ	銅	-	長さ	2.0	幅	1.8	厚さ	0.3	7.9
第 156 図 5	フタ	銅	-	長さ	2.5	幅	1.6	厚さ	0.2	4.7
第 156 図 6	フタ	銅	-	長さ	2.2	幅	2.0	厚さ	0.3	9.6
第 156 図 7	フタ	銅	-	長さ	2.4	幅	2.2	厚さ	0.3	9.7

第12次調査区遺物観察表 (ガラス製品)

神図No.	品種	材質	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
			幅	径	高さ	厚さ				
第154図5	不明	ガラス	--	径 2.3	--	高さ 0.6	5.5	S802周辺		6
第154図5	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	SK04		
第154図1	小玉	ガラス	--	径 0.5	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図2	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図3	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図4	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図5	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図6	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図7	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図8	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図9	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図10	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図11	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図12	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図13	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図14	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図15	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図16	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図17	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図18	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図19	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図20	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図21	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図22	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図23	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図24	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図25	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図26	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図27	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図28	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図29	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図30	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図31	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図32	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図33	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図34	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図35	小玉	ガラス	--	径 0.3	--	厚さ 0.3	0.1	包含層・整地層		
第154図36	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図37	小玉	ガラス	--	径 0.3	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図38	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.4	0.1	包含層・整地層		
第154図39	小玉	ガラス	--	径 0.4	--	厚さ 0.2	0.1	包含層・整地層		
第154図40	小玉	ガラス	--	径 0.8	--	厚さ 0.5	0.1	包含層・整地層		

第12次調査区遺物観察表 (銅銭①)

神図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第26図2	嘉祐元背	1056	北宋	2.7	25	篆書	S802周辺		
第26図3	元祐通背	1078	北宋	1.9	26	一	S802周辺		
第26図4	元祐通背	1086	北宋	2.7	21	行書	S802周辺		
第26図5	元祐通背	1086	北宋	2.7	26	行書	S802周辺		
第26図6	元祐通背	1086	北宋	2.7	25	行書	S802周辺		
第26図7	紹聖元背	1094	北宋	2.2	24	一	S802周辺		
第26図8	元符元背	1098	北宋	2.0	25	篆書	S802周辺		
第39図1	開元通背	621	唐	1.4	26	一	焼土層		
第39図2	至道元背	995	北宋	1.2	24	行書	焼土層		
第39図3	天聖元背	1023	北宋	1.6	24	篆書	焼土層		
第39図4	皇宋通背	1038	北宋	1.9	24	真書	焼土層		
第39図5	嘉祐通背	1056	北宋	2.1	25	篆書	焼土層		
第39図6	嘉祐元背	1068	北宋	1.5	24	真書	焼土層		
第39図7	嘉祐元背	1068	北宋	2.7	24	篆書	焼土層		
第39図8	嘉祐元背	1068	北宋	1.1	24	篆書	焼土層		
第39図9	元祐通背	1078	北宋	2.9	23	行書	焼土層		
第39図10	元祐通背	1078	北宋	1.6	23	行書	焼土層		
第39図11	元祐通背	1078	北宋	2.6	24	篆書	焼土層		
第39図12	元祐通背	1078	北宋	3.1	25	篆書	焼土層		
第39図13	元祐通背	1078	北宋	1.3	23	篆書	焼土層		
第39図14	元祐通背	1086	北宋	1.6	24	篆書	焼土層		
第39図15	聖宋元背	1101	北宋	1.9	24	行書	焼土層		
第39図16	元祐通背	1086	北宋	2.4	24	行書	焼土層		
第39図17	不明	-	-	0.4	-	-	焼土層		
第39図18	不明	-	-	1.0	-	-	焼土層		
第39図19	不明	-	-	0.8	-	-	焼土層		

遺物観察表 18 (第12次調査区)

第12次調査区遺物観察表 (銅銭②)

神座No	銭貨名	初铸物年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書体	造 柄 名	備 考	図版
第39回20	不明	-	-	1.0	-	-	裏土層		
第39回21	不明	-	-	1.3	25	-	裏土層		
第40回22	不明	-	-	1.1	24	-	裏土層		
第40回23	不明	-	-	2.5	22	-	裏土層		
第40回24	不明	-	-	0.6	-	-	裏土層		
第40回25	不明	-	-	0.8	-	-	裏土層		
第57回1	不明	-	-	3.5	26	-	SK01		
第60回1	不明	-	-	2.2	24	-	SE01		
第67回1	大観通寶	1107	北宋	2.0	24	真書	第2南北街路	街上屋	
第68回2	不明	-	-	2.8	24	-	第2南北街路		
第68回3	不明	-	-	2.1	25	-	第2南北街路		
第81回1	元皇通寶	1078	北宋	3.0	24	行書	SD02		
第81回2	元皇通寶	1078	北宋	2.5	24	篆書	SD02		
第83回1	元皇通寶	1068	北宋	0.9	-	-	SD03		
第83回2	不明	-	-	2.2	25	-	SD03		
第83回3	不明	-	-	1.2	-	-	SD03		
第83回4	不明	-	-	1.2	-	-	SD03		
第85回2	元皇通寶	1078	北宋	2.1	27	行書	SD07		
第109回5	不明	-	-	1.2	-	-	SK02		
第137回1	元祐通寶	1086	北宋	2.8	24	行書	SK02		
第137回2	不明	-	-	2.9	25	-	SK02		
第137回3	不明	-	-	1.9	25	-	SK02		
第137回4	洪福通寶	-	後魏	3.3	25	篆書	SK02	安南銭(ヴェトナム銭)	
第151回1	崇寧通寶	959	南宋	1.6	22	篆書	包含層・聖地層		
第151回2	淳化元寶	990	北宋	2.2	24	真書	包含層・聖地層		
第151回3	咸平元寶	998	北宋	1.8	25	真書	包含層・聖地層		
第151回4	天祐通寶	1017	北宋	2.1	24	真書	包含層・聖地層		
第151回5	天祐通寶	1017	北宋	1.6	24	真書	包含層・聖地層		
第151回6	皇宋通寶	1038	北宋	2.2	24	真書	包含層・聖地層	黒孔銭	
第151回7	皇宋通寶	1038	北宋	2.9	24	真書	包含層・聖地層		
第151回8	皇宋通寶	1038	北宋	1.7	24	真書	包含層・聖地層		
第151回9	順寧元寶	1068	北宋	2.3	24	真書	包含層・聖地層		
第151回10	順寧通寶	1068	北宋	2.7	24	真書	包含層・聖地層		
第151回11	順寧通寶	1068	北宋	2.7	24	真書	包含層・聖地層		
第151回12	順寧元寶	1068	北宋	2.1	24	篆書	包含層・聖地層		
第151回13	元皇通寶	1078	北宋	1.7	24	行書	包含層・聖地層		
第151回14	元皇通寶	1078	北宋	1.4	24	行書	包含層・聖地層		
第151回15	元皇通寶	1078	北宋	1.6	24	行書	包含層・聖地層		
第151回16	元皇通寶	1078	北宋	4.8	24	行書	包含層・聖地層		
第151回17	皇宋通寶	1038	北宋	4.8	24	真書	包含層・聖地層		
第151回18	元皇通寶	1078	北宋	2.0	24	篆書	包含層・聖地層		
第151回19	元皇通寶	1078	北宋	2.2	24	篆書	包含層・聖地層		
第151回20	元皇通寶	1078	北宋	1.2	-	-	包含層・聖地層		
第151回21	元祐通寶	1086	北宋	1.9	24	行書	包含層・聖地層		
第152回22	元祐通寶	1086	北宋	2.9	24	行書	包含層・聖地層		
第152回23	元祐通寶	1086	北宋	2.1	24	篆書	包含層・聖地層		
第152回24	元祐通寶	1086	北宋	2.2	23	篆書	包含層・聖地層		
第152回25	紹聖元寶	1094	北宋	3.0	25	真書	包含層・聖地層		
第152回26	元符通寶	1098	北宋	2.3	24	行書	包含層・聖地層		
第152回27	聖宋元寶	1101	北宋	2.6	25	真書	包含層・聖地層		
第152回28	大観通寶	1107	北宋	2.4	24	行書	包含層・聖地層		
第152回29	洪武通寶	1368	明	2.0	23	真書	包含層・聖地層		
第152回30	不明	-	-	2.0	23	-	包含層・聖地層		
第152回31	不明	-	-	2.8	25	-	包含層・聖地層		
第152回32	不明	-	-	2.8	23	-	包含層・聖地層		
第152回33	不明	-	-	3.1	24	-	包含層・聖地層		
第152回34	不明	-	-	1.7	24	-	包含層・聖地層		
第152回35	不明	-	-	2.7	24	-	包含層・聖地層	黒孔銭	
第152回36	不明	-	-	2.2	23	-	包含層・聖地層		
第152回37	不明	-	-	3.1	24	-	包含層・聖地層		
第152回38	不明	-	-	0.8	19	-	包含層・聖地層		
第152回39	不明	-	-	2.1	22	-	包含層・聖地層		
第152回40	不明	-	-	7.0	24	-	包含層・聖地層		
第152回41	不明	-	-	3.6	24	-	包含層・聖地層		
第153回42	不明	-	-	0.6	17	-	包含層・聖地層		
第153回43	不明	-	-	0.7	18	-	包含層・聖地層		
第153回44	不明	-	-	1.1	19	-	包含層・聖地層		
第153回45	不明	-	-	1.4	-	-	包含層・聖地層		
第153回46	不明	-	-	1.5	-	-	包含層・聖地層		
第153回47	不明	-	-	1.2	-	-	包含層・聖地層		
第153回48	不明	-	-	0.6	-	-	包含層・聖地層		
第153回49	不明	-	-	26.5	-	-	包含層・聖地層	12枚綴り	
第153回50	張家元寶	1103-	北宋	-	(36)	-	包含層・聖地層		

第48次-1調査区道物観察表(土器・陶磁器)

押印No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第164号-1	陶器 鉢鉢	備前	-	-	-	SF001	ナナメスリ	11
第164号-2	京都系土師器 皿	在池	10.4	-	2.65	SF001		11
第164号-3	京都系土師器 皿	在池	-	-	-	SF001		11
第168号-1	荷花 皿	中国(景德鎮窯)	(14.5)	(7.7)	(3.4)	SF011		11
第168号-2	竹葉 皿	中国(龍泉窯)	-	6.3	-	SF011		11
第168号-3	竹葉 皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SF011		11
第168号-4	陶器 天目	肥前	-	-	-	SF011		11
第168号-5	瓦質土器 天目	瀬戸美濃	-	4.0	-	SF011		11
第168号-6	瓦質土器 天目	在池	-	-	-	SF011		11
第170号-1	荷花 皿	中国(景德鎮窯)	(12.0)	(7.0)	(3.1)	SF017		11
第170号-2	陶器 天目	瀬戸美濃	(11.6)	-	-	SF017		11
第170号-3	陶器 鉢鉢	備前	-	-	-	SF017	ナナメスリ	11
第172号-1	荷花 皿	中国(景德鎮窯)	18.6	8.4	3.5	焼土跡		12
第172号-2	陶器 鉢鉢	瀬戸美濃	-	5.6	-	焼土跡		12
第173号-1	京都系土師器 皿	在池	8.4	-	1.8	SF005		12
第174号-1	陶器 蓋	中国	(10.0)	(3.1)	(2.2)	SF010	黒釉陶器	12
第174号-2	京都系土師器 皿	在池	(9.8)	-	(2.2)	SF010	灯明皿	12
第175号-1	京都系土師器 皿	在池	(9.2)	-	-	SF020		12
第175号-2	京都系土師器 皿	在池	(11.4)	-	-	SF020		12
第175号-3	京都系土師器 皿	在池	(11.0)	-	(1.5)	SF020		12
第175号-4	京都系土師器 皿	在池	(12.6)	-	-	SF020		12
第175号-5	京都系土師器 皿	在池	(16.0)	-	-	SF020		12
第176号-1	陶器 鉢鉢	備前	-	-	-	SF019		12
第176号-2	京都系土師器 皿	在池	(12.4)	-	-	SF019		12
第176号-3	京都系土師器 皿	在池	-	-	-	SF019		12
第176号-4	京都系土師器 皿	在池	-	-	-	SF019		12
第177号-1	京都系土師器 皿	在池	(11.6)	-	-	SF021		12
第177号-2	京都系土師器 皿	在池	(8.0)	-	-	SF021		12
第177号-3	京都系土師器 皿	在池	-	-	-	SF021		12
第177号-4	京都系土師器 皿	在池	-	-	-	SF021		12
第177号-5	京都系土師器 皿	在池	(10.0)	-	-	SF021		12
第178号-1	京都系土師器 皿	在池	(11.6)	-	(2.5)	SF023		12
第178号-2	京都系土師器 皿	在池	(13.4)	-	-	SF023	灯明皿	12
第180号-1	陶器 天目	瀬戸美濃	-	4.4	-	SD002		12
第180号-2	京都系土師器 皿	在池	8.4	-	1.7	SD003		12
第180号-3	陶器 鉢鉢	関西?	-	-	-	SD006	軟質施釉陶器	12
第180号-4	陶器 鉢鉢	備前	-	(13.6)	-	SD006	ナナメスリ	12
第180号-5	京都系土師器 皿	在池	(12.3)	-	(2.7)	SD006		12
第180号-6	白磁 鉢鉢	中国	-	(5.6)	-	SD007		12
第180号-7	陶器 鉢鉢	備前	(16.0)	-	-	SD007		12
第183号-1	陶器 天目	瀬戸美濃	10.4	6.0	2.5	SK008		13
第183号-2	陶器 天目	瀬戸美濃	-	-	-	SK008	ナナメスリ	13
第183号-3	陶器 鉢鉢	備前	-	-	-	SK008		13
第186号-1	白磁 鉢鉢	中国	-	-	-	SE032		13
第186号-2	陶器 鉢鉢	瀬戸	-	(11.6)	-	SE032		13
第186号-3	瓦質土器 鉢鉢	在池	(20.0)	(10.8)	(7.1)	SE032		13
第186号-4	瓦質土器(赤) 鉢鉢	在池	-	-	-	SE032		13
第186号-5	瓦質土器 鉢鉢	在池	-	-	-	SE032		13
第186号-6	瓦質土器 鉢鉢	在池	-	-	-	SE032		13
第186号-7	瓦質土器(赤) 鉢鉢	在池	(41.0)	-	-	SE032		13
第186号-8	瓦質土器 鉢鉢	在池	(48.0)	-	-	SE032		13
第187号-1	土師質土器 鉢鉢	在池	13.0	3.9	7.7	SE032		13
第187号-10	土師質土器 小皿	在池	8.2	1.4	6.6	SE032		13
第187号-11	土師質土器 小皿	在池	(8.6)	(6.8)	(1.4)	SE032		13
第187号-12	須重質土器 皿	国産	-	-	-	SE032		13

第48次-1調査区道物観察表(土製品・金属製品・ガラス製品)

押印No.	品名	材質	厚さ	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				下口	幅	高さ	厚さ				
第169号-8	石臼	砂岩	-	-	-	-	-	-	SF011	11	
第169号-9	茶臼	安山岩	-	-	-	-	-	-	SF011	11	
第173号-2	扁平銅製品	銅製	-	全長 10.7	幅 0.9	厚さ 0.08	6.2	SF005		12	
第174号-1	ガラス小玉	鉛ガラス	-	高さ 1.0	幅 1.5	孔径 0.45	3.6	SF010		12	
第174号-4	土製 土製	土製	-	高さ -	幅 1.9	孔径 0.7	14.7	SF010		12	
第174号-5	土製 土製	土製	-	高さ -	幅 0.8	厚さ 0.5	12.3	SF010		12	
第176号-1	ガラス小玉	鉛ガラス	-	高さ 1.2	幅 1.5	孔径 0.45	4.3	SF019		14	
第178号-4	土製 土製	土製	-	高さ 4.4	幅 1.7	孔径 0.45	10.5	SF023		12	
第180号-13	土製 土製	土製	-	高さ 7.2	幅 30	孔径 1.1	56.9	SE032		13	
第180号-14	刀子	鉄製	-	全長 17.9	幅 1.3~2.7	厚さ 0.2~0.4	-	SE032		13	
第180号-15	石磨	滑石	-	底面(21.3)	-	-	-	SE032		13	

遺物観察表 20 (第48次調査区)

第48次-1調査区遺物観察表(瓦)

押印No	品 種	部 位	寸法(単位cm)				遺 構 名	備 考	図版No	
			長さ	幅	厚さ	取付				
第164図-4	丸瓦	瓦当	長さ	幅	10.4	厚さ	3.2	SF001		11
第165図-5	丸瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	1.8	SF001		11
第165図-6	丸瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.1	SF001		11
第166図-7	軒平瓦	-	長さ	幅	-	厚さ	2.7	SF001		11
第166図-8	半瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.5	SF001		11
第166図-9	半瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.6	SF001		11
第168図-7	丸瓦	瓦当	長さ	幅	13.3	厚さ	-	SF011		11
第170図-4	丸瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.5	SF017		11
第170図-5	半瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	1.7	SF017		
第171図-1	半瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.5	SF016		
第171図-2	半瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.0	SF016		
第174図-6	軒平瓦	-	長さ	幅	-	厚さ	-	SF010		12
第178図-5	軒丸瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	-	SF023		12
第180図-8	軒平瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.9	SF007		12
第180図-9	軒平瓦	瓦当	長さ	幅	-	厚さ	2.9	SF007		12
第182図-4	丸瓦	-	長さ	幅	14.0	厚さ	2.0	SF008		13
第182図-5	丸瓦	-	長さ	幅	-	厚さ	2.0	SF008		13

第48次-1調査区遺物観察表(銅銭)

押印No	銭 貨 名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書 体	遺 構 名	備 考	図版No
第176図-10	皇宋通寶	1038	北宋	2.9	25.0	行書	SF001		
第178図-3	元祐通寶	1078	北宋	3.6	24.0	篆書	SF005		
第178図-1	無文銭	-	-	0.6	19.0	-	SF023	1/3が欠損	
第181図-1	不明	-	-	2.7	24.0	-	包含物	錆の付着のため読めず	
第181図-2	元祐通寶	1078	北宋	2.5	25.0	行書	包含物		
第181図-3	寛永通寶	1636	江戸	2.3	23.0	-	包含物	新収水	

第48次-2調査区遺物観察表(土器・陶磁器)

押印No	器 種	生 産 地	法 尺(単位cm)			遺 構 名	備 考	図版No
			口径	底径	器高			
第190図-3	雪花	皿	中国(景徳窯系)	-	(5.8)	-	包含物	
第190図-4	雪花	皿	中国(景徳窯系)	-	(6.4)	-	包含物	
第190図-5	雪花	碗	中国(景徳窯系)	-	5.0	-	包含物	E群 高台内緒「萬福紋同」
第190図-6	雪花	皿	中国(景徳窯系)	-	(3.4)	-	包含物	C群
第190図-7	雪花	碗	中国(景徳窯系)	-	-	-	包含物	
第190図-8	京都系土師器	皿	在地	(7.4)	-	(2.1)	包含物	
第190図-9	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	(2.3)	包含物	
第190図-10	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	-	(2.8)	包含物	
第190図-11	京都系土師器	皿	在地	12.3	-	2.4	包含物	
第190図-12	瓦質土器	羽釜	在地	14.1	-	-	包含物	
第190図-13	瓦質土器	鉢	在地	22.8	12.6	8.4	包含物	

第48次-2調査区遺物観察表(土製品・金属製品・ガラス製品)

押印No	品 種	材 質	部 位	寸法(単位cm)				重 量(g)	遺 構 名	備 考	図版No	
				長さ	幅	孔径	厚さ					
第190図-14	土簡	土製	-	長さ	5.3	幅	1.5	孔径	0.5	10.1	包含物	14
第190図-15	漆器	銅製	-	長さ	-	幅	1.2	-	-	6.5	包含物	14
第190図-16	分銅	銅製	-	長さ	2.1	幅	1.5	厚さ	0.9	13.0	包含物	14

第48次-2調査区遺物観察表(銅銭)

押印No	銭 貨 名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書 体	遺 構 名	備 考	図版No
第189図-1	元豊通寶	1078	北宋	2.5	24.0	行書	包含物	一部欠損	
第189図-2	不明	-	-	1.1	24.9	行書	包含物	半分欠損「龍」「寧」のみ	

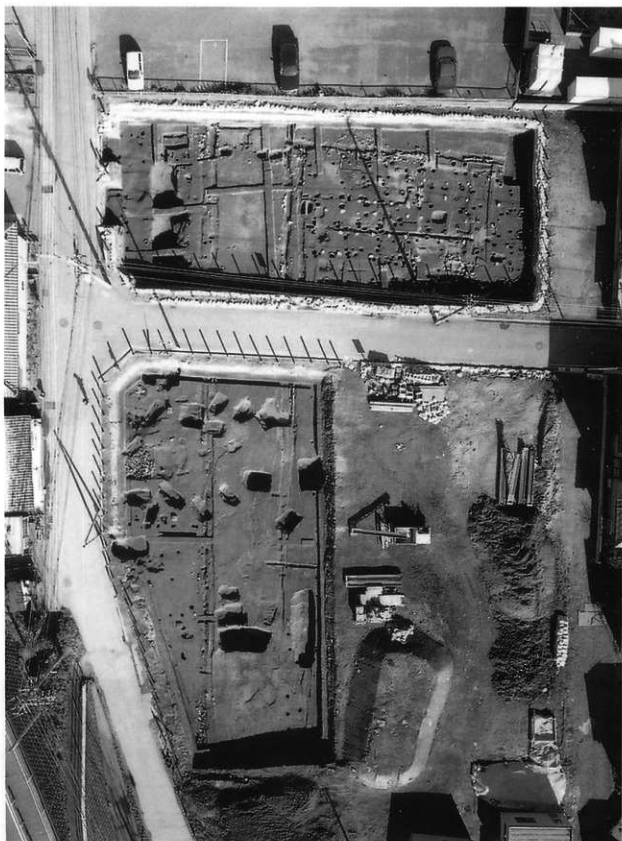
第48次-3調査区遺物観察表(土器・陶磁器)

押印No	器 種	生 産 地	法 尺(単位cm)			遺 構 名	備 考	図版No
			口径	底径	器高			
第194図-1	京都系土師器	皿	在地	(8.1)	-	-	包含物	
第194図-2	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	(1.8)	包含物	
第194図-3	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	-	包含物	
第194図-4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	包含物	
第194図-5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	包含物	

第48次-3調査区遺物観察表(土製品・金属製品・ガラス製品)

押印No	品 種	材 質	部 位	寸法(単位cm)				重 量(g)	遺 構 名	備 考	図版No		
				長さ	幅	孔径	厚さ						
第194図-6	分銅	銅製	-	長さ	1.1	幅	1.6	厚さ	0.7	9.1	包含物	太鼓形	14
第194図-7	ガラス小次	鉛ガラス	-	長さ	0.45	幅	0.45	孔径	0.2	0.1	包含物		14

写 真 图 版



中世大友府内町跡第12次・18次西調査区全景



第12次調査全景 (東から)



S801 近景



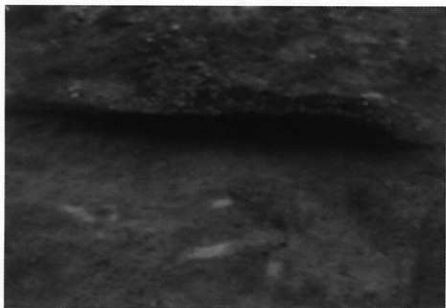
SX01 近景



SD01 縁石状石組 (礎石建物入口?)



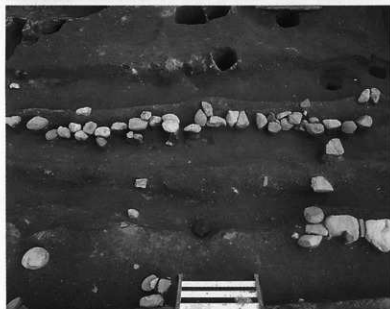
SX03 青銅製品鑄造関連遺構①



SX03 青銅製品鑄造関連遺構②



第2南北街路 (中央上の1対のピットは木戸)



SD14の緑石状石組



SX02 検出状況



SD05・SD15 (木戸付帯施設)

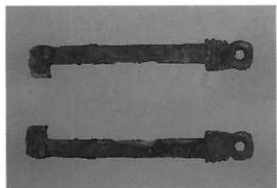


SE08 (井戸) と S008

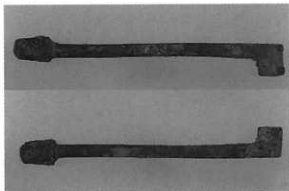


SK16





154-47



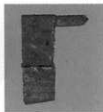
154-49



154-48



154-50



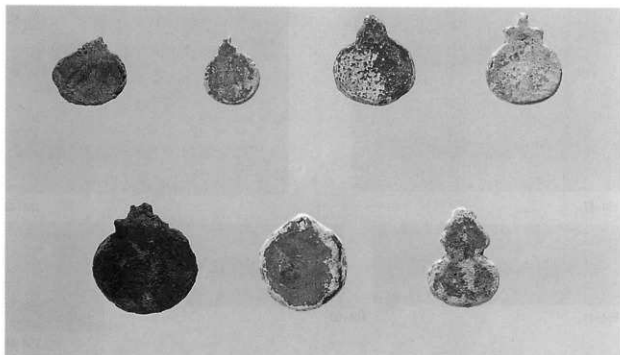
154-46



150-1 ~ 5



包含層・整地層出土遺物 (第150・154図参照)



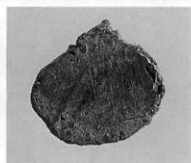
第12次調査出土メダイ様金属製品



1-1



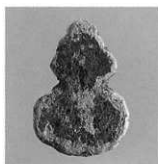
1-2



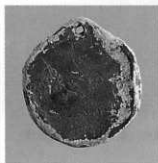
1-3



1-4



1-5



1-6



1-7

第48次 - 1 調査区



互敷道路 (SF001) 検出状況 (北から) ※合成写真



SF011 瓦出土状況 (南から)



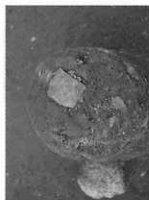
SF011 瓦出土状況 (南から)



石組側溝 (SD006・SD007) 検出状況 (北から) ※合成写真



SF011 砂利面検出状況



SF011 肥前系陶器出土状況



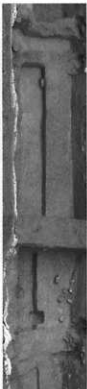
大友氏遺跡北側焼土層 遺物出土状況



大友氏遺跡北側焼土層 焼土層検出状況



名ヶ小路 (SF020) 検出状況 (北から) ※合成写真



第2南北新路 SF022 検出状況 (北から) ※合成写真

第48次 - 1 調査区



SE032 井筒検出状況 (北から)



SE032 井筒完掘状況 (北から)

第48次 - 2 調査区



整地層上面 遺構検出状況 (南から)



整地層上面 遺物出土状況 (東から)

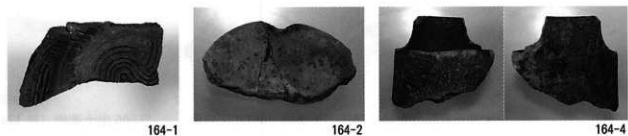
第48次 - 3 調査区



北区 遺構検出状況 (南から)



南区 SK001・SK002 遺構検出状況 (南から)



164-1

164-2

164-4



165-5

165-6

166-7

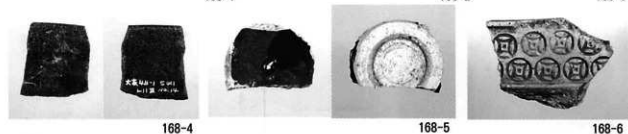
SF001 出土遺物 (第 164 ~ 166 図参照)



168-1

168-2

168-3



168-4

168-5

168-6



169-7

169-8

169-9

SF011 出土遺物 (第 168 ~ 169 図参照)



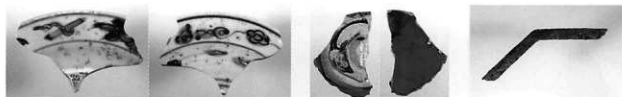
170-1

170-2

170-3

170-4

SF017 出土遺物 (第 170 図参照)



172-1

172-2

173-2

大友氏館跡北側焼土層内出土遺物 (第172図参照)

SF005 出土遺物 (第173 図参照)



174-2

174-3

174-4

174-5

174-6

SF010 出土遺物 (第174図参照)



175-1 ~ 5

176-2

177-1 ~ 4

178-4

178-5

SF020・SF019・SF021・SF023 出土遺物 (第175 ~ 178 図参照)



180-1

180-2

180-3



180-4

180-5

180-6

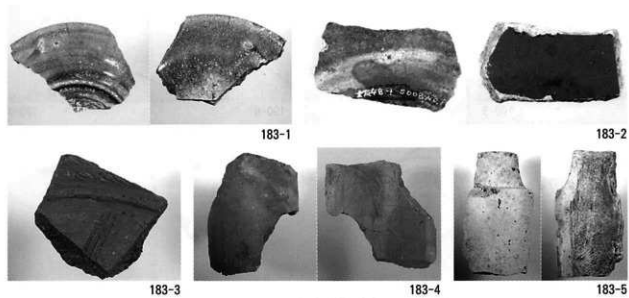


180-7

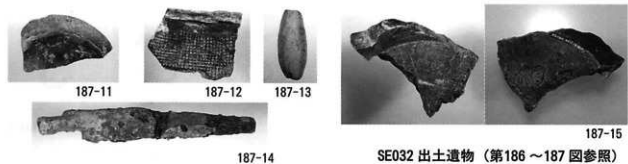
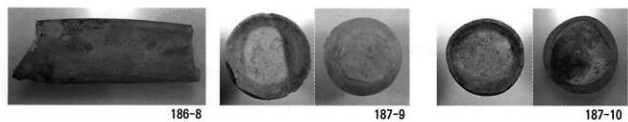
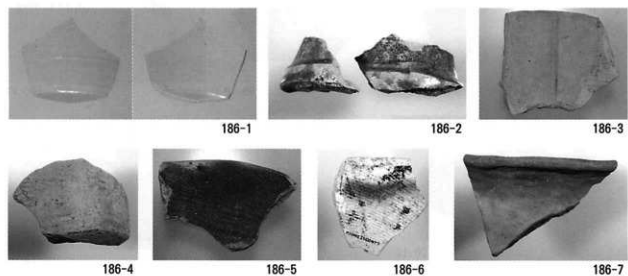
180-8

180-9

SD002・SD003・SD006・SD007 出土遺物 (第180 図参照)



SK008 出土遺物 (第183 図参照)

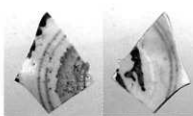


SE032 出土遺物 (第186 ~187 図参照)

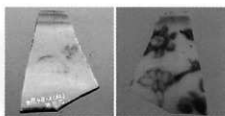
写真図版14 (第48次調査区)



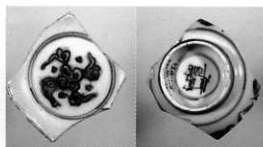
190-3



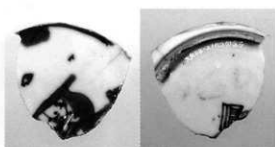
190-6



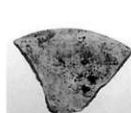
190-7



190-5



190-4



190-8



190-9



190-10



190-11



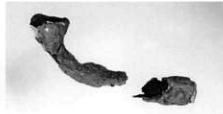
190-12



190-13



190-14



190-15



190-16

第48次-2調査区出土遺物 (第190図参照)



194-6



174-1

176-1

194-7

第48次-3調査区出土遺物 (第194図参照)

ガラス小玉 (第174・176・194図参照)

豊後府内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区
一般国道10号古国府拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第1分冊)

平成18年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113

大分市大字中判田1977番地

TEL(097)597-5675

編集・発行 株式会社 得丸デザイン印刷

〒870-0122

大分市大字丸亀258番地の1

TEL(097)521-0700
